

新 免 遺 跡

第11次発掘調査報告書

—阪急宝塚線豊中市内連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—



1987年3月

阪急宝塚線豊中市内連続立体交差遺跡調査団
豊中市教育委員会

新 免 遺 跡

第11次発掘調査報告書

— 阪急宝塚線豊中市内連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

1987年 3 月

阪急宝塚線豊中市内連続立体交差遺跡調査団
豊中市教育委員会



A地区 竪穴式住居跡群 (西北より)



人面付土製品

例 言

1. 本報告書は、阪急宝塚線豊中市内連続立体交差事業に先立って行われた新免遺跡第11次発掘調査報告書である。
2. 調査は、阪急電鉄株式会社の依頼を受けて、阪急宝塚線豊中市内連続立体交差遺跡調査団を組織し、豊中市教育委員会社会教育課内に事務局を置いて実施したものである。
3. 現地調査は服部聡志（調査担当）、岡村勝行、祭本教士（調査員）がこれにあたり、昭和60年度、61年度の2期に亘り実施した。
4. 調査地点は、豊中市下井町1丁目、2丁目他に所在し、調査対象総面積は約1870㎡である。
5. 整理作業および報告書作成は、現地調査終了後、豊中市立郷土資料室において実施した。整理作業にあたっては、柳本照男（豊中市教育委員会社会教育課文化財担当）の指導のもと、現地担当者の他、酒井泰子（豊中市教育委員会社会教育課嘱託）、今井直美（大手前女子大学）、奥野豊子（関西大学）、内藤万里栄（京都外国語大学）、伊谷志乃（堺女子短期大学）、小林千津子（園田学園女子大学）、竹田朋子（帝塚山短期大学）、松尾かおり（金蘭短期大学）、森本育子（相愛女子短期大学）らが従事した。
6. 本報告書の執筆は主として服部（A、B地区）、岡村（C、D地区）が分担して行い、遺物の観察については石器を松木武彦（大阪大学）、鉄斧形土製品を祭本教士（現川西市教育委員会）、遺物観察表の作成を岡林孝作（筑波大学）、酒井、奥野らが分担した。また第1表は山元建（豊中市教育委員会社会教育課嘱託）の作成によるものである。各文責については本文の末尾に明らかにした。
7. 遺構の写真撮影は調査員が各自行い、遺物については山元、岡林が担当した。図版のレイアウトは福永伸也（大阪大学文学部助手）の協力によるものである。
8. 本報告書では、従前の遺構番号を大幅に変更しているが、本報告書の記載番号をもって公式番号とする。
9. 調査の実施にあたっては、堀江門也（大阪教育委員会）、都出比呂志（大阪大学）の各氏より御指導と御助言をいただいた。また井藤暁子（大阪府埋蔵文化財協会）、橋本久和（高槻市埋蔵文化財センター）、尾上実（大阪府教育委員会）の各氏には遺物についての御教示を得た。上記各位に対し、記して謝意を表したい。
10. 発掘調査にあたっては、石井義規、大西博和、川端寅、山下高史、富田利男、岡健吾、鬼崎資久、平田洋二、藤原伸彦らの協力を得た。記して感謝したい。
11. 本報告書の編集には、服部、岡村があたった。なお本書の刊行は5、6、7に記す各氏の共同作業の成果であることを、ここにあらためて明記しておきたい。

本文目次

第1章 序 説

第1節 調査の契機

- (1) 調査の契機……………1
- (2) 調査組織……………3

第2節 遺跡の位置と環境

- (1) 地理的環境……………4
- (2) 歴史的環境……………4
- (3) 既往の調査の概要……………9

第3節 調査の方法とその経過

- (1) 調査の方法……………11
- (2) 調査の経過(付・調査日誌抄)……………11

第2章 調査の成果

第1節 調査地点の微地形と基本層序

- (1) 調査地点の微地形……………15
- (2) 基本層序……………16
- (3) 遺構の分布……………18

第2節 弥生時代の遺構・遺物

- (1) 遺構の概要……………19
- (2) 竪穴式住居跡群……………19
- (3) 竪穴状遺構……………31
- (4) 土坑……………33
- (5) 溝状遺構……………37
- (6) ビット(小穴)……………37

第3節 古墳時代の遺構・遺物

- (1) 遺構の概要……………41
- (2) 孤立柱建物跡……………41
- (3) 土坑……………44
- (4) 溝状遺構……………51
- (5) ビット(小穴)……………56

第4節 奈良・平安時代の遺構・遺物

- (1) 遺構の概要……………57

(2) 掘立柱建物跡	57
(3) 井戸	58
(4) 土坑	59
(5) 土壇墓	59
第5節 その他の遺構・遺物	
(1) SX01、SX02	61
(2) 井戸	62
(3) 包含層出土遺物	63
第3章 総括と課題	
第1節 第11次調査のまとめ	84
第2節 弥生集落としての新免遺跡	88
土器観察表	

挿 図 目 次

第1図 調査地点からの遠景	1
第2図 調査地点位置図	2
第3図 新免遺跡の位置	5
第4図 勝部遺跡	6
第5図 新免遺跡の周辺	7
第6図 新免上佃古墳出土の蹴形石	8
第7図 桜井谷2-19号竪跡	8
第8図 金寺山麿寺跡礎石	9
第9図 調査地区割図	折り込み
第10図 調査風景	14
第11図 調査地点周辺の地形	15
第12図 谷状地形東端部 上層断面図	16
第13図 遺構全体図(A、B地区)	折り込み
第14図 遺構全体図(C、D地区)	折り込み
第15図 竪穴式住居跡2 炉土層断面	20
第16図 竪穴式住居跡2 ビット検出状況	20
第17図 竪穴式住居跡1、2 平面・断面図(1:60)	折り込み
第18図 竪穴式住居跡3 細部	21

第19図	竪穴式住居跡 3	炉	21
第20図	竪穴式住居跡 3	平面・断面図 (1:60)	22
第21図	竪穴式住居跡 3	P 9 平面・断面図 (1:15)	23
第22図	竪穴式住居跡 4	平面・断面図 (1:60)	24
第23図	P 7、S P 214	平面・断面図 (1:15)	24
第24図	竪穴式住居跡 4	炉	25
第25図	竪穴式住居跡 5	平面・断面図 (1:60)	26
第26図	竪穴式住居跡 6	平面・断面図 (1:60)	27
第27図	竪穴式住居跡 7	平面・断面図 (1:60)	28
第28図	竪穴式住居跡 8	平面・断面図 (1:60)	29
第29図	竪穴式住居跡 9	平面・断面図 (1:60)	30
第30図	竪穴式住居跡10	平面・断面図 (1:60)	31
第31図	竪穴状遺構	平面・断面図 (1:60)	32
第32図	竪穴状遺構	P 11	32
第33図	人面付土製品	(1:1)	33
第34図	磨製石斧出土状況		34
第35図	土坑40	遺物出土状況	35
第36図	土坑41、42	遺物出土状況 (1:20)	36
第37図	土坑46	遺物出土状況 (1:20)	37
第38図	遺構平面図(1)		折り込み
第39図	遺構平面図(2)		折り込み
第40図	遺構平面図(3)		折り込み
第41図	S P 835	遺物出土状況 (1:10)	40
第42図	掘立柱建物跡 1	平面・断面図 (1:60)	41
第43図	掘立柱建物跡 2	平面・断面図 (1:60)	42
第44図	掘立柱建物跡 4	平面・断面図 (1:60)	43
第45図	土坑 3	遺物出土状況 (1:20)	44
第46図	土坑22	平面・断面図 (1:60)	46
第47図	土坑22	遺物出土状況 (1:20)	47
第48図	土坑33	検出状況	48
第49図	土坑33	遺物出土状況	48
第50図	土坑41、42、43	平面・断面図 (1:60)	49
第51図	土坑49	平面・断面図 (1:60)	49
第52図	土坑54	平面・断面図 (1:40)	50

第53图	溝14 遺物出土狀況	52
第54图	溝17 出土遺物 (1:4)	53
第55图	溝21 平面・断面図 (1:60)	54
第56图	溝21 土層断面	54
第57图	S P 483 遺物出土狀況	56
第58图	S P 934 平面・断面図 (1:15)	56
第59图	S P 934 遺物出土狀況	56
第60图	掘立柱建物跡 5 平面・断面図 (1:60)	57
第61图	井戸 3 平面・断面図 (1:40)	58
第62图	井戸 3 遺物出土狀況	59
第63图	土坑51、52 平面・断面図 (1:60)	59
第64图	土坑51 遺物出土狀況	60
第65图	土坑13 平面・断面図 (1:15)	60
第66图	S X 01 土層断面	61
第67图	S X 02 土層断面図 (1:30)	62
第68图	井戸 1 平面・断面図 (1:40)	62
第69图	井戸 2 溝27 溝28 平面・断面図 (1:40)	63
第70图	竪穴式住居跡 1 出土遺物	66
第71图	竪穴式住居跡 2 出土遺物	66
第72图	竪穴式住居跡 2 炉、土坑 4 出土遺物	67
第73图	竪穴式住居跡 3、4 出土遺物	67
第74图	竪穴式住居跡 6 出土遺物	67
第75图	竪穴式住居跡 8、9、10 出土遺物	68
第76图	竪穴式遺構出土遺物	68
第77图	土坑18、23出土遺物	68
第78图	土坑10、34、35出土遺物	69
第79图	土坑40、42、46出土遺物	69
第80图	土坑 3 出土遺物	70
第81图	土坑22出土遺物	71
第82图	土坑 5、12、33出土遺物	71
第83图	土坑41出土遺物	72
第84图	土坑43、44、49、51、54、55出土遺物	72
第85图	溝 2、3 出土遺物	73
第86图	溝11出土遺物	73

第87図	溝12、14出土遺物	73
第88図	溝16出土遺物	74
第89図	溝17出土遺物	74
第90図	溝19、21、22、25出土遺物	74
第91図	各ピット出土遺物	75
第92図	井戸3出土遺物	76
第93図	土坑13(土城墓)出土遺物	76
第94図	S X 01他出土遺物	76
第95図	S X 02出土遺物	77
第96図	井戸1出土遺物	78
第97図	竪穴式住居跡2上層、6上層出土遺物	78
第98図	包含層出土遺物1)	79
第99図	包含層出土遺物2)	80
第100図	包含層出土遺物3)	81
第101図	包含層出土遺物4)	82
第102図	S P 835 出土遺物	82
第103図	土製品、石器 他	83
第104図	掘立柱建物と溝の方位	86
第105図	各調査地点と遺跡の範囲	88

表 目 次

第1表	各調査地点の概要	10
第2表	竪穴式住居跡一覧表	25

図 版 目 次

図版挿	航空写真(1)
図版1	a. 航空写真(2)(東南より) b. 航空写真(3)(南西より)
図版2	A地区西側全景(西北より)
図版3	a. 竪穴式住居跡3、4付近(西北より) b. 竪穴式遺構、竪穴式住居跡5付近(東南より)

- 図版4 a. 竪穴状遺構、竪穴式住居跡6付近(西北より) b. 同(東南より)
- 図版5 a. B地区西側全景(P25以西、東南より) b. B地区東側全景(P20以東、西北より)
- 図版6 a. B地区東側全景(P27以東、西北より) b. 同(P32以東、西北より)
- 図版7 a. 谷状地形断面(P41付近、西北より) b. 同 細部(北より)
- 図版8 a. C地区全景(東南より) b. C地区西側全景(P50以西、東南より)
- 図版9 a. C地区全景(西北より) b. C地区東側全景(P53以東、西北より)
- 図版10 a. 井戸3付近(東南より) b. D地区全景(西北より)
- 図版11 a. 竪穴式住居跡1(西北より) b. 竪穴式住居跡2(東南より)
- 図版12 a. 竪穴式住居跡2 炉(北東より) b. 同 土層断面(南西より) c. 同 細部(南より) d. 同 細部(北東より)
- 図版13 a. 竪穴式住居跡3(南より) b. 竪穴式住居跡3、4(西北より)
- 図版14 a. 竪穴式住居跡3 ビット7(南より) b. 同(西より) c. 同 断面(東より)
- 図版15 a. 竪穴式住居跡4(西より) b. 同 SP214(西より)
- 図版16 a. 竪穴式住居跡5(西北より) b. 竪穴式住居跡6(北東より)
- 図版17 a. 竪穴式住居跡6(東より) b. 同 炉断面(東南より)
- 図版18 a. 竪穴式住居跡8(南西より) b. 同 細部(東南より) c. 同 遺物出土状況(南西より)
- 図版19 a. 竪穴式住居跡9(東より) b. 同(西北より)
- 図版20 a. 竪穴式住居跡10(東より) b. 同(東南より) c. 同 土坑35遺物出土状況
- 図版21 a. 竪穴状遺構(東南より) b. 同 土層断面(南西より) c. 同 遺物出土状況(南西より)
- 図版22 a. 土坑4(東南より) b. 土坑10(南西より)
- 図版23 a. 土坑40 遺物出土状況(北東より) b. 土坑42(南西より)
- 図版24 a. 土坑46(北より) b. 同 遺物出土状況(西北より)
- 図版25 a. SP835(北東より) b. 同 遺物出土状況(北東より)
- 図版26 a. 土坑3(北より) b. 土坑5(南西より)
- 図版27 a. 土坑22(東南より) b. 同 遺物出土状況(東より)
- 図版28 a. 土坑41、42、43(西北より) b. 同(東南より)
- 図版29 a. 土坑49(西北より) b. 土坑54(西北より)
- 図版30 a. 溝17 遺物出土状況(東南より) b. 溝21(西より)
- 図版31 a. 土坑38(北より) b. 土坑51、52(北より)

- 図版32 a. 井戸3 (東南より) b. 同 土層断面 (東南より)
- 図版33 a. 土坑13 (土塚墓、南より) b. 同 遺物出土状況 (東より)
- 図版34 a. S X01、S X02全景 (西北より) b. S X02 土層断面 (北より)
- 図版35 a. 土坑27、28 (東南より) b. 土坑53 (南より) c. 土坑45 (西より)
- 図版36 竪穴式住居跡1、2 出土遺物
- 図版37 a. 竪穴式住居跡2 炉、3、土坑4 出土遺物 b. 竪穴式住居跡4 出土遺物
- 図版38 a. 竪穴式住居跡6 出土遺物 b. 竪穴式住居跡8 出土遺物
- 図版39 a. 竪穴式住居跡9、10 出土遺物 b. 竪穴状遺構 人面付土製品 c. 竪穴状遺構
出土遺物
- 図版40 土坑10、23、34、42、溝17 出土遺物
- 図版41 a. 土坑40、46 出土遺物 b. S P835 出土遺物
- 図版42 土坑3 出土遺物
- 図版43 土坑22 出土遺物
- 図版44 a. 土坑5、12、33 出土遺物 b. 土坑51、54出土遺物
- 図版45 a. 土坑55 出土遺物 b. 溝2、11 出土遺物
- 図版46 溝12、14、16、17、19、25 出土遺物
- 図版47 a. 溝22 出土遺物 b. 井戸3 出土遺物 c. 土坑13 (土塚墓) 出土遺物
- 図版48 S X02 出土遺物
- 図版49 包含層出土遺物(1)
- 図版50 包含層出土遺物(2)
- 図版51 包含層出土遺物(3)、(4)
- 図版52 土製品、石器 他

第1章 序 説

第1節 調査の契機

(1) 調査の契機

大阪市北方の近郊衛星都市の1つに数えられる豊中市は、現在人口約41.7万人をかかえもつ府下第4番目の人口稠密都市である。

この豊中市の発展、急成長を命運づけた要素の1つとして、明治43年の箕面有馬電気軌道の開通があげられる。阪急宝塚線の前身ともいえるこの鉄道は、当初単車運転の観光電車としてはじめられたが、以後、宝塚少女歌劇、豊中グラウンドの開設など、沿線への乗客誘致の努力に加えて、現在の岡町・玉井町を中心とした住宅地開発の結果、のどかな田園風景もやがて新興のベッドタウンとして変貌を余儀なくされてきた。

ここ数10年においては、市内丘陵部の急速な開発の結果、阪急宝塚線の利用人口ならびに運転車両数の一層の増大をもたらし、朝夕の通勤時間における沿線主要道路の渋滞など、交通面での問題が沿線住民あるいは行政内部において大きくとりあげられるに至っている。

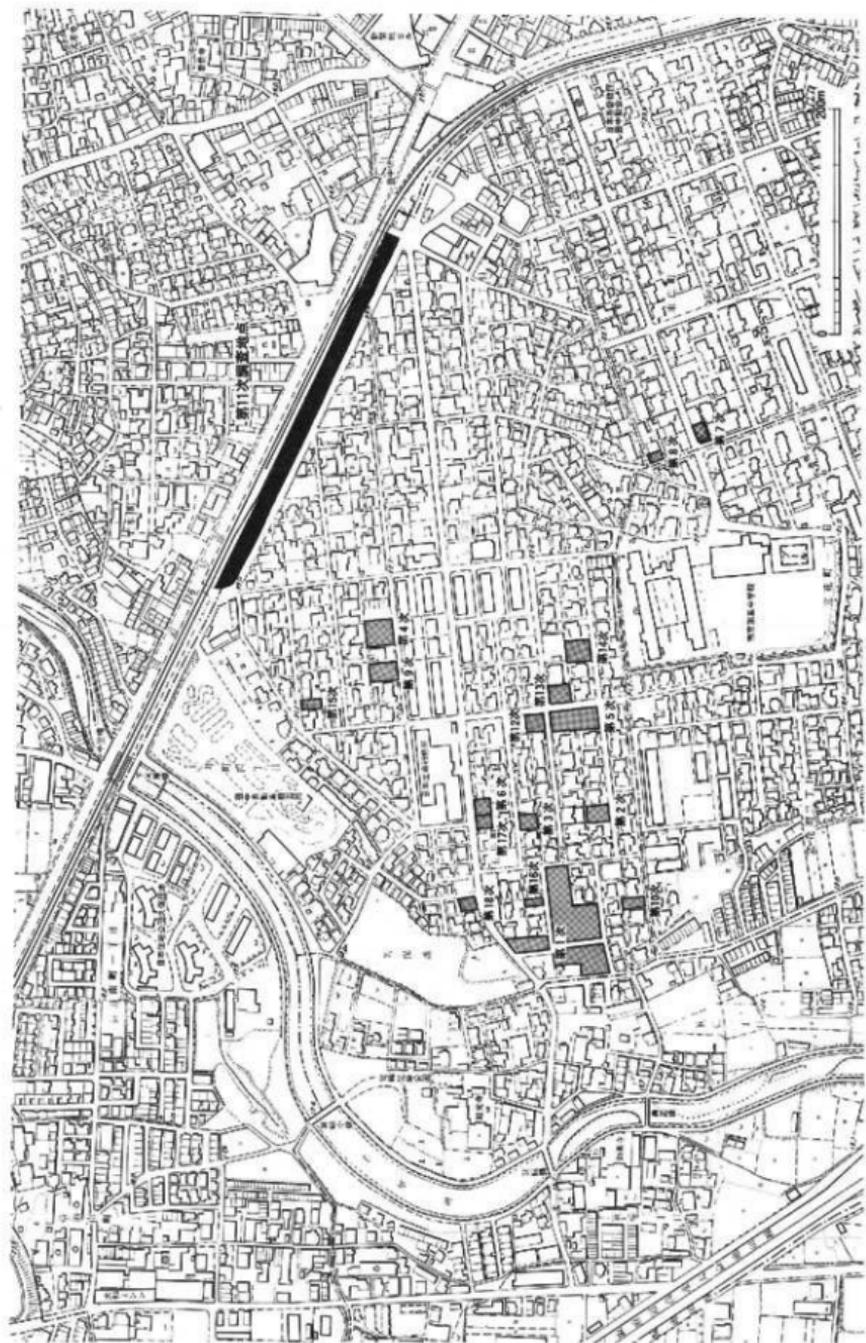
かかる情勢に対処すべく、現在豊中市では、阪急電鉄株式会社、大阪府、豊中市の三者による国庫補助事業として、阪急連続立体交差工事を進めている。この計画の中で、豊中・蛍池間については現営業線路南側に仮線の設置が予定されるところとなり、その予定地の一部が新免遺跡の推定範囲内に含まれることが判明した。そこで市教委は、遺跡の推定範囲内および一部周辺地域について試掘調査を実施したところ、予想通り豊中駅西方約350mの範囲に亘って遺構、遺物包含層の存在を確認するところとなった。

以上のような経緯にもとづき、遺跡範囲内に相当する仮線予定地全域を対象として、新免遺跡第11次発掘調査を実施するはこびとなったのである。

(服部)



第1図 調査地点からの遠景



第 2 區 調查地點位置圖

(2) 調査組織

発掘調査は、阪急電鉄株式会社の委託を受け、豊中市教育委員会が同社会教育課内に事務局を置いて、阪急宝塚線豊中市内連続立体交差道路調査団を組織し、実施したものである。

調査の進行にあたっては、下記の調査委員の方々、事務局、ならびに調査員、調査補助員の諸氏に多大な御援助、御協力を賜った。ここに厚く謝意を述べさせていただく次第である。

また、阪急電鉄株式会社取締役社長柴谷貞雄氏をはじめ、第1工事課第1工事係長馬場重一、同係奥山陽一の両氏には、現地が営業線路に近接するという安全管理面での困難さ、ならびに団の再三の不手際にもかかわらず、事情を了承の上、調査の遂行に協力を惜しまれなかったことに対し、あらためて深謝の意を述べさせていただきたい。

調 査 組 織

調 査 委 員	郡出比呂志	大阪大学文学部助教授、豊中市文化財保護委員
	堀江門也	大阪府教育委員会文化財保護課記念物第1係長
	榎原正宣	豊中市教育委員会社会教育課長
事 務 局	豊中市教育委員会社会教育課	
調 査 担 当	服部聡志	豊中市教育委員会社会教育課文化財専門嘱託
調 査 員	岡村勝行	豊中市文化財専門調査員
	祭本敦士	現、川西市教育委員会社会教育課
	松木武彦	大阪大学大学院文学研究科
調 査 補 助 員	岡林孝作	筑波大学大学院
	竹谷俊彦	

(服部)

第2節 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

新免遺跡は、現在の阪急豊中駅西方の東西約600m、南北300mの範囲を占める縄文時代から現代に至る複合遺跡である。行政区画上は大阪府豊中市玉井町のほぼ全域と、立花町、末広町の一部に及んでいる。

豊中市は、古くは豊嶋郡と称され、昭和11年の市制施行以後、すでに半世紀を迎えた大阪市北郊のベッドタウンの1つである。市域は、西に一部猪名川を界して兵庫県と境を接し、北は池田市、箕面市、東は千里山丘陵を二分するように吹田市と境を分かち、

この豊中市は地形上、大きく丘陵部と沖積平野に区分することができる。市域の北部を占める丘陵部は、万葉集にも謳われた景勝の地である烏熊山丘陵をはじめ、その南西部に派生する通称豊中台地、それに千里川を挟んで北方に広がる待兼山丘陵から構成される。これらはいずれも第四紀の大阪層群ならびに段丘層から形成され、段丘特有の礫層と粘土層とを主たる構成要素とする。一方、丘陵の南西、南側一帯は、猪名川をはじめ、千里川、天竺川の各河川の沖積作用にもとづく広大な平野が広がり、原始、古代以来の経済基盤を提供している。

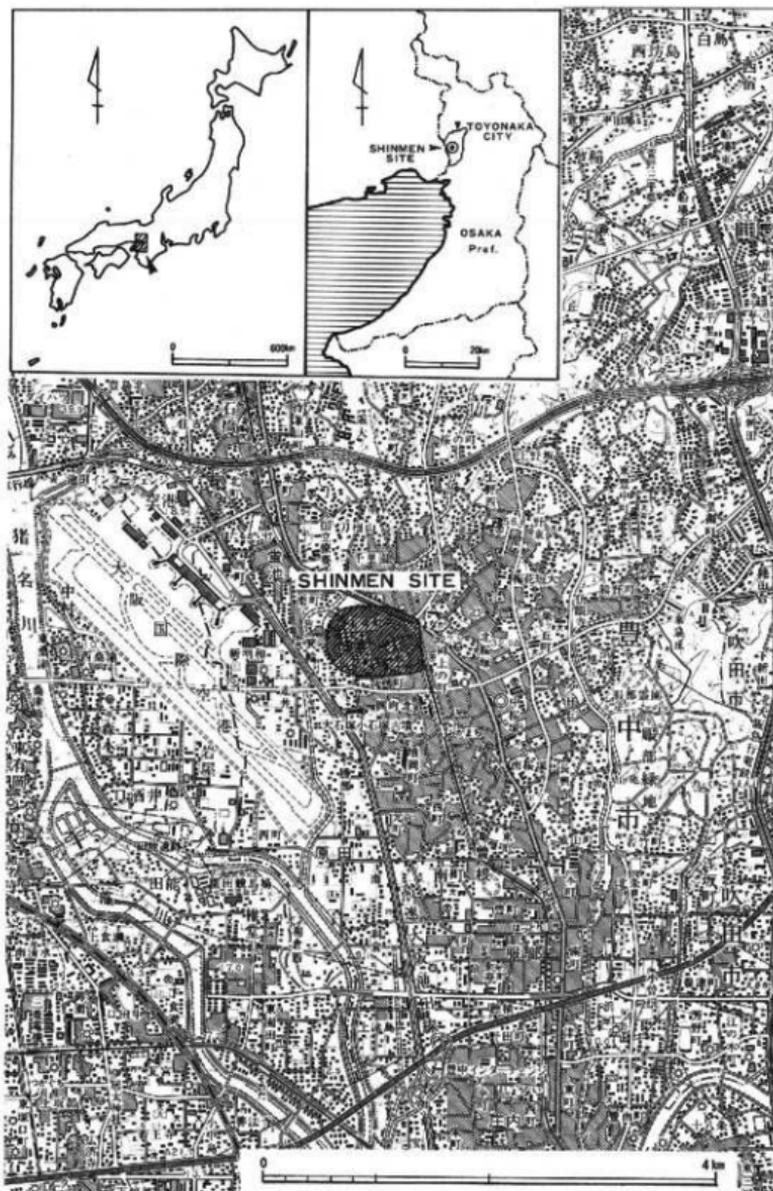
新免遺跡の所在する通称豊中台地は、標高15～30mの比較的傾斜の緩慢な低丘陵部をなしている。この丘陵の西、南端は、伊丹海進後の隆起による段丘崖が延々と続き、地形上、直下に広がる沖積平野との隔絶は明瞭である。新免遺跡は、このまとまりある丘陵地形の西北部に位置し、千里川を直下に臨む起伏の乏しい良好な生活環境を占めている。

ところで、現在市域では、商都大阪を控える地理的条件から、各種道路、鉄道が発達し、一大交通網の要衝となっている。しかし古くは豊中台地を縦走る能勢街道が、大阪に通じる主要な貫線道路であり、その他、箕面街道、吹田街道などが発達し、中近世以後の村落の多くは、これら街道筋に沿って繁栄したものである。こうした村落ののどかな景観は、明治43年の箕面有馬電気軌道の開通まで保たれてきたが、昨今では、交通網の整備に伴う交通量の増加と各種公害の発生、丘陵部の住宅開発による自然景観の破壊が、市民、行政にとつての直面する大きな課題となっている。

(2) 歴史的環境

豊中市域に所在する遺跡群は、その分布より、箕面川水系、千里川水系、天竺川水系および猪名川水系に区分される。これは主として水田経営に基盤を置く弥生時代以降、とくに顕著に認められるが、狩猟採集を主たる生業活動とする縄文時代においても、水系が各集団領域(小地域)を決定づける上で、大きな要因となっていたことが、近年補足されつつある遺跡分布より明らかである。

今回報告する新免遺跡は勝部遺跡と並び、千里川水系を代表する遺跡の1つである。ここでは当水系に所在する遺跡群を中心に叙述を進めたい。



第3図 新免遺跡の位置

(旧石器時代) 西日本の後期旧石器時代を特徴づける、所謂国府型ナイフ形石器が、これまで蛭池西、箕輪、柴原、大塚古墳墓塚の各遺跡から出土している。このうち蛭池西遺跡では各々別地点よりナイフ形石器2点、盤状剥片石核1点を検出しており、量的、内容的にやや集中する傾向を見せる。分布からみると豊中台地を形成する低位段丘面上、および段丘直下の低地部に所在し、千里川流域に分布の一つの中心が存在するかもみられる。いずれも明確な遺構、遺物に伴うものではなく、該期の遺跡についてはなお今後の調査に期されるところが大きい。

(縄文時代) 西日本各地の様相と等しく、豊中市域における縄文時代の遺跡もまた、弥生時以降に比べ極端に数が少ない。しかしこれまでに数ヶ所の遺跡で該期の遺物が確認されている。平野部に所在する空港A地点(勝坂式)、同B地点(元住吉山式)、原田西遺跡(船元Ⅱ式)などは、前期の海進以降、沖積化の進む中で平野部に進出した縄文ムラの存在を想定させる。一方丘陵部では千里川上流域に所在する野畑遺跡が注目される。2次に亘る調査の結果、中期末から後期中葉に比定される各型式の土器群、サスカイト原石を含む豊富な石器群とともに、土坑、礫群を主体とした各種遺構が検出された。また最近では近在する野畑春日町遺跡より中期(船元Ⅰ式)に属する土器類とともに、数基の土坑(土壇墓?)が確認されている。この他、晩期の土器片が出土した柴原遺跡、新免遺跡などを含め、今後千里川流域では、周知の遺跡外においても一層の注意を喚起する必要がある。なお上野遺跡、石岬出土地(上新田3丁目)等は、天竺川水系に分布する該期の遺跡群として重要である。

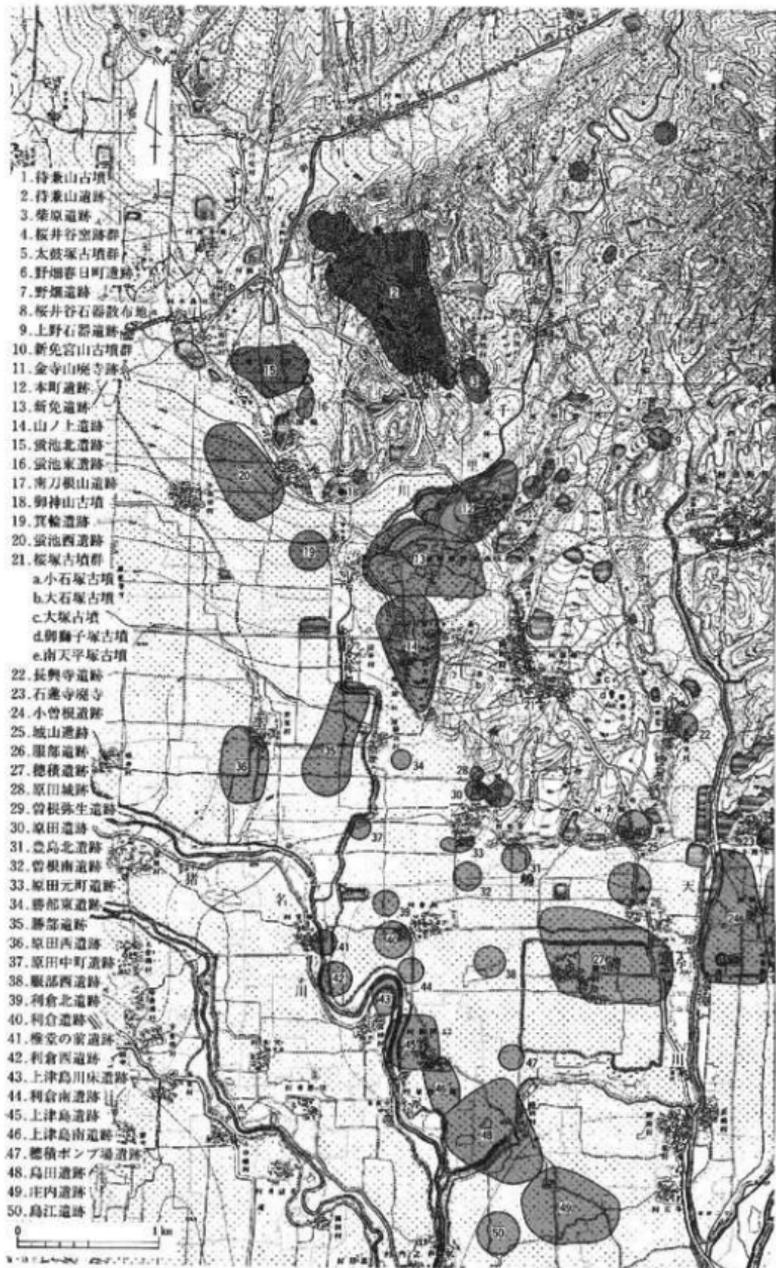
(弥生時代) 前期に始まり、後期に至るまで断絶することなく集落の形成をみる拠点集落として、市域では勝部遺跡と小曾根遺跡をあげることができる。両者は千里川、天竺川の二大水系を代表し、水田経営を紐帯とする各集落群の結合の中核に位置づけうると考えられる。このうち小曾根遺跡では弥生前期の包含層中に縄文晩期の土器を伴し、在来の縄文文化の担い手たちと全く無関係に成立したものでなかったことを示している。また勝部遺跡の背後丘陵上に所在する山ノ上遺跡でも、近年あらたに前期(中段階)と晩期(長原式?)との共伴例が

確認されており、勝部遺跡生成前後における両文化の接触の様相が次第に明らかとなりつつある。

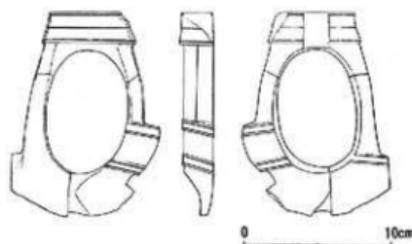
中期以後、他地域におけるのと同様に、母村からの分村というかたちで、遺跡の数的、面的な拡大が進行する。千里川水系では中期に成立をみる集落遺跡として新免遺跡、箕輪遺跡がある。新免遺跡は次項でふれるように中期中葉(第Ⅱ様式)に始まり、後期以降に至



第4図 勝部遺跡



第5図 新免遺跡の周辺



第6図 新免上佃古墳出土の鉄形石

あげられる。本町遺跡、曾根西遺跡では、竪穴式住居跡を主体とするややまとまった遺構遺物が確認されている。南刀根山遺跡はかつて壺棺が出土した遺跡として知られるところである。柴原、山ノ上では後期に属する土器の出土をみているものの、調査面積が限られ、具体的な遺構、遺物の検出は今後に委ねられよう。

なお、千里川と天竺川に挟まれた豊中台地のほぼ中央部、すなわち現在の原田神社境内地より、銅鐸二口が出土している。うち一は外縁付紐Ⅱ式に属するものである。出土地がいずれの水系にも偏せず、かつ二口の出土である点、極めて興味深い。

(古墳時代) 新免遺跡の所在する玉井町付近は、かつて豊中グラウンドの敷地であったが、大正3年の建設の際に出土したと伝えられる鉄形石がある。新免上佃古墳とも称されるように前期古墳の存在も推定されようが、遺跡には古墳時代前・中期の住居跡等も含んでおり、これからの出土である可能性も考えられる。この新免遺跡と千里川を挟んで、南西に延びる細長い丘陵端部には、かつて三角縁三神三獣鏡、碧玉製車輪石の出土した御神山古墳が所在する。また同じ前期古墳として著名な待兼山古墳が、阪大キャンパスの北方、西国街道を見下す丘陵上に立地している。

中期には、千里川水系に顕著な古墳の存在は認められない。一方、豊中台地南部に畿内多数の古墳群として知られる桜塚古墳群が成立する。その形成は前期末に遡るものと推定され、鉄製の武器、武具類が多量埋納されることにより特徴づけられる古墳群である。



第7図 桜井谷2-19号竪跡

るまで存続する大集落である。箕輪遺跡ではⅡ様式の土器を伴う竪穴式住居跡、掘立柱建物跡が確認された。他に野畑春日町遺跡、柴原遺跡、山ノ上遺跡から第Ⅲ、Ⅳ様式に属する土器が出土している。

後期になると、新免遺跡が引き続き集落を維持する中、同じく丘陵上において柴原、南刀根山、本町、山ノ上、曾根西の各遺跡

後期になると、桜塚古墳群は終焉を迎え、中期古墳群の役割そのものが消滅する。かわって、千里川流域に三つの後期古墳群が営まれる。新免宮山古墳群、春日町古墳群、太鼓塚古墳群である。新免宮山古墳群は数基の横穴式石室墳で構成され、近在する金寺山廃寺との関連が問題となる。また太鼓塚古墳群はかつて30数基を数えたといわれるが、調査された

のは5基をあげるにすぎない。いずれも陶楯を納める点において、周辺に分布する桜井谷古窯跡群との密接な関係が窺われ興味深い。

永楽荘から上野東にかけて分布する桜井谷古窯跡群は、大阪南部の陶色古窯跡群と並び畿内須恵器生産の一翼を担うものとして著名である。また近年、須恵器窯の集中する千里川流域にて、新免遺跡、本町遺跡、柴原遺跡、内田遺跡等、古墳後期の集落遺跡の所在が確認されている。



第8図 金寺山廃寺跡礎石

(歴史時代) 飛鳥時代の創建と推定される金寺山廃寺は、山田寺式軒九瓦が出土することでつとに著名である。この寺院の塔心礎と推定される礎石が、近傍の香景寺に保存されている。なお、柴原遺跡で検出した奈良時代後半の建物群は、律令制以後の地域の動向を考える上で興味深い資料といえる。

(3) 既往の調査の概要

新免遺跡に関する調査・研究は、昭和10年代に民家庭園内に発見された弥生後期の土器片に端緒が求められる。その後昭和36年の市史編纂段階に、編纂委員の一人である藤沢一夫氏が、はじめてこの遺物に注目され、遺跡の存在を確認。新免遺跡と命名された。しかし資料の制約上、遺跡の規模や性格など、具体的な内容について論じられるまでには至らなかった。

新免遺跡に関する知見は、その後昭和50年代よりこの数年にかけて飛躍的に増加した。それは明治43年の箕面有馬電気軌道の開通以来、現在の玉井町周辺から岡町一帯にかけて多数建設された木造住宅が、ここ数年老朽化するに至り、その建て替え工事に先立つ事前発掘調査が増加した事実によるものである。その結果、これまでに18次に及ぶ発掘調査が実施されている(昭和62年3月現在)。

第1表をもとに遺跡の概要を記すと、まず18次調査で出土した縄文早期の異形石鏃が時代的に最も古く、ついで11次調査で出土した晩期破片1点があげられる。ただいずれも遺物だけが単独に出土したにすぎず、該期の明確な遺構はこれまで確認されていない。遺構、遺物の上で最も充実すると考えられるのが弥生時代と古墳時代後期である。14次調査で検出された第Ⅱ様式の土器を伴う方形溝溝溝が、弥生時代としては最も古く、集落の形成が早くも中期前葉に遡ることを示している。以後、後期から庄内、布留式期に至るまで連続と存続するものの、竪穴式住居跡をはじめとする各種遺構、遺物の内容から判断する限り、集落の動向が最頂点に達するのは、やはり中期後半から後期にかけてと推定される。一方、古墳後期の遺構は主として掘立柱建物群より構成されるものと推定されるが、いずれも調査面積が狭く、具体的な集落構造

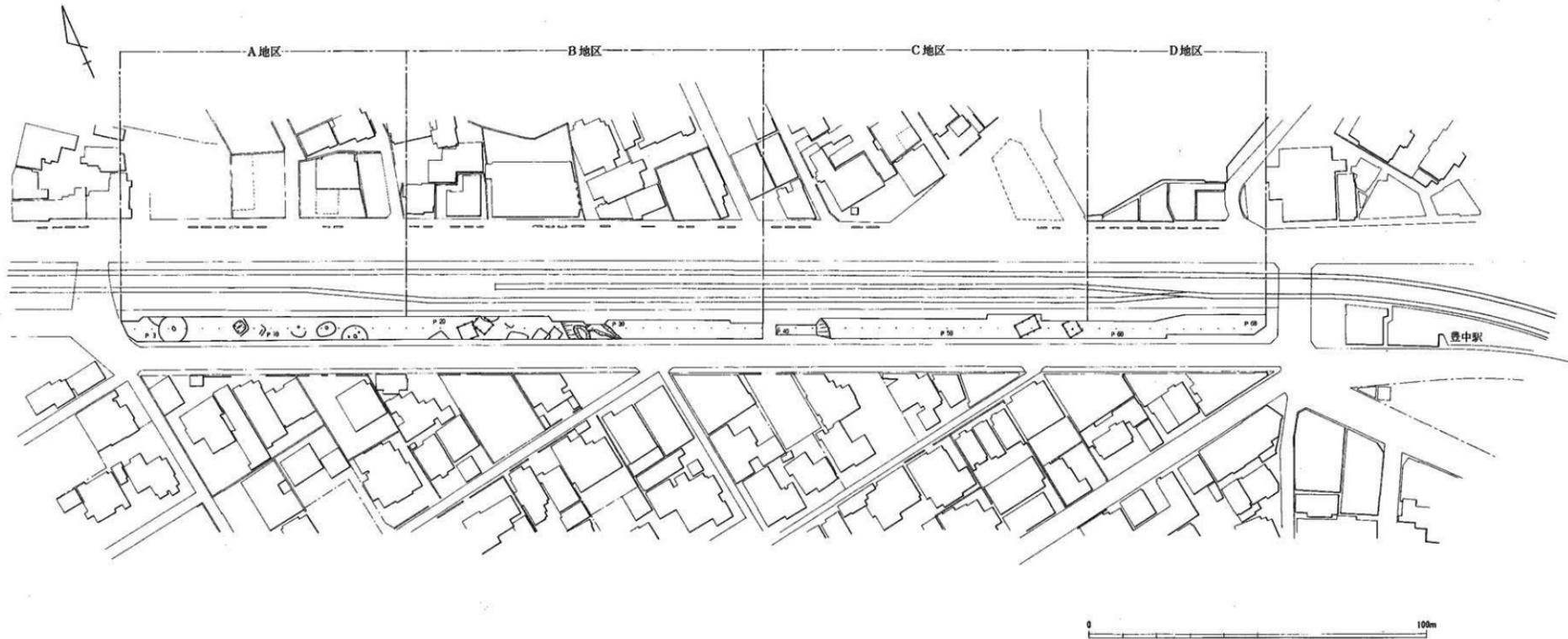
の解明は今後の調査に委ねられる。しかし須恵器や玉類を主体とするぼう大な出土遺物は、当遺跡の重要性を評価するに際して余りあるものがある。(服部)

次数	調査年月	面積	内容
1	昭和56年10月～11月	180㎡	掘立柱建物(古墳)、弥生土器(Ⅲ・Ⅳ)、土師器、須恵器
2	昭和57年7月	10㎡	ピット(弥生?)、弥生土器(Ⅱ～Ⅳ)、須恵器、太形蛤刃石斧、石鏃
3	昭和58年6月	1㎡	弥生土器(Ⅲ・Ⅳ)、須恵器
4	昭和58年6月～7月	20㎡	溝・土坑・ピット(古墳)、井戸(近世)、弥生土器(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ)、土師器、須恵器、円筒埴輪、陶磁器
5	昭和58年8月	60㎡	溝状遺構(古墳?)
6	昭和58年9月～10月	45㎡	溝・土坑・ピット(Ⅲ・Ⅳ、古墳)、弥生土器(Ⅲ・Ⅳ)、土師器、須恵器、製塩土器、石鏃
7	昭和58年10月	30㎡	溝(中・近世)、土師器、須恵器、瓦質土器、磁器
8	昭和59年2月	20㎡	溝状遺構(古墳)、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器
9	昭和59年1月	40㎡	土坑・ピット(古墳)、弥生土器、土師器、須恵器、石鏃
10	昭和59年12月	40㎡	掘立柱建物(弥生あるいは古墳)、溝、土師器、須恵器
12	昭和60年9月	200㎡	方形周溝墓(弥生中期?)
13	昭和60年9月	96㎡	方形周溝墓?(Ⅱ・Ⅳ)、弥生土器(Ⅲ・Ⅳ)、須恵器
14	昭和60年10月～11月	170㎡	方形周溝墓(Ⅱ)、溝(古墳)、弥生土器(Ⅱ)、土師器、須恵器
15	昭和61年5月～6月	63㎡	溝(Ⅴ、古墳)、掘立柱建物(古墳)、弥生土器(Ⅲ～Ⅴ)、土師器、須恵器
16	昭和61年7月～8月	75㎡	竪穴式住居(Ⅲ・Ⅳ)、溝(古墳)、ピット・土坑(Ⅲ・Ⅳ、古墳)、弥生土器(Ⅲ・Ⅳ)、土師器、須恵器、石鏃、石庖丁、玉類(滑勾・白、菊管、ガ小、土)
17	昭和61年9月	93㎡	竪穴式住居(弥生、古墳)、ピット・土坑(弥生、古墳)、石鏃、石庖丁、玉類(滑白、グ管)
18	昭和61年12月～62年1月	205㎡	竪穴式住居(Ⅲ・Ⅳ、他)、方形周溝墓(Ⅲ・Ⅳ)、土坑(Ⅴ)、ピット、弥生土器(Ⅲ～Ⅴ)、土師器、須恵器、局部磨製異形石器(縄文)、石鏃、石鏃、石庖丁、磨製石剣

第1表 各調査地点の概要

※()内ローマ数字は畿内弥生土器の様式名を示す。

(山元)



第9図 調査地区割図

第3節 調査の方法とその経過

(1) 調査の方法

発掘調査は、連立事業そのものが二次に亘ること、および狭い敷地内での排土処理の問題等から、全調査範囲を大きくA・B・C・Dの4地区に分けて実施せざるを得なかった(第9図)。これは主として連立事業計画との調整にもとづく、あくまでも便宜的なものにすぎず、各地区の調査面積については必ずしも一定したものではないことを断っておく。

小地区割り：調査地点は、幅約7m、長さ約340mの範囲を占める。調査の基準となるべき地区割りについては、本来磁北もしくは真北方向に基準ラインを設定すべきであるが、調査地点の方位が必ずしも東西・南北に一致しないため、今回は便宜上、調査地点の方位にもとづいて設定した。幅約7mの調査範囲の中央ラインを基準とし、西北方より5m間隔でポイントを設定し、各地区の名称は西側ポイントの名称によりP-1, 2, 3……区とした。なお基準ラインの方位はN-65°35'Wである。

掘削：本調査に先立って実施した立会確認調査での所見によれば、遺物包含層の遺存は薄く、遺構面(地山面)自体も相当の擾乱、削平を受けていることが予想された。そのため、表土の掘削には当初より重機を使用した。ただし、包含層の残る一部の地区については、手作業でこれを慎重に削除し、出土遺物の取り上げは、各地区を中央ラインで二分し、それぞれE-1, 2……区(東北区)、W-1, 2……区(西南区)として行った。

遺構の掘り下げ：竪穴式住居跡、土坑、溝等、大形のものについては、適宜土層観察用畦を残しながら排土した。小規模なピットや井戸等については、基本的に中央ラインに直行する方向で断面を残し、断面作成後全掘するという方法をとった。

実測図：遺構平面図、土層断面図は、 $\frac{1}{50}$ 、 $\frac{1}{20}$ を基本とし、規模、性格等にもとづいて適宜、 $\frac{1}{10}$ 、 $\frac{1}{25}$ などを併用した。標高は、標石番号109、豊中市立大池小学校所在の水準点(TP26,0556m)を採用した。

写真撮影：写真による記録は、全景、部分ともに67サイズ、35ミリサイズの白黒、カラーリバーサルによる。現在実測図等とともに共用に供されるべく市立郷土資料室に保管している。

(2) 調査の経過

新免遺跡にかかる豊中第1踏切-豊中第2踏切間での連立事業は、昭和60年、61年の二年度に亘り、実施された。この事業計画にもとづいて、発掘調査は事業区域内西北方(第2踏切)よりA・B・C・D区と順次行われたが、工期との関連から各地区終了後ただちに工事にかかるといった方法がとられた。各年度の調査区、ならびに期間、面積は次のごとくである。

昭和60年度 A・B地区 8月26日～11月30日 約1200㎡

昭和61年度 C・D地区 4月1日～6月5日 約640㎡

調査日誌抄

〔A地区〕 昭和60年8月26日～10月23日

8月26日(金) 本日より阪急通立事業に係る遺跡発掘調査を開始。まずはA地区の表土掘削を重機を用いて行う。調査区の大半は地山直上まで削平され、包含層の遺存状態は極めて悪い。

8月28日(日) 遺構面(地山面)の検出開始。随所に擾乱坑、旧家屋の基礎等が認められる。しかし、遺構の残りは予想外に良好。

8月30日(金) 調査区中央に基準ライン設定。5m間隔で木杭打つ。

9月4日(水) P-8・9区付近の包含層掘り下げ。P-15-17区の包含層上面の精査。

9月6日(金) 竪穴住居3の輪郭検出。土坑9の埋土より石斧1点出土。遺構検出状況の平板実測(P1-6区)

9月9日(月) ビット、土坑等の遺構掘り下げ開始。同時に断面図作成を併行して行う。以下主要遺構についてのみ記述を進める。

9月10日(火) 竪穴住居2の埋土掘り下げ開始。土層に須恵割多数包含。古墳後期の遺構と切り合い。P15-17区の包含層除去。遺構平板実測(P6-16区)

9月11日(水) P-15-17区の包含層より石鏃1点出土。竪穴住居6の輪郭検出。旧家屋の基礎により部分的に損壊を受けている。が大型機械の導入による昨今の建築技術に比べると、破壊の程度は微々たるもの。埋土の約半分は焼土。火災住居か。竪穴遺構確認。

9月12日(木) 竪穴住居1の埋土掘り下げ。ただし竪穴住居2との重複関係判明ならず。

9月13日(金) 竪穴遺構の調査開始。土層にはなお酒器を含む。周縁はなだらかに落ちる。

9月17日(火) 竪穴住居2の埋土下層掘り下げ。遺物の量は比較的多いが、いずれも破片のみ。

9月19日(木) 遺構平板実測(P17区)。溝、ビット等遺構掘り下げ続行。

9月25日(火) 竪穴住居6の調査開始。埋土の下層にいくほど焼土の範囲がやや広がる。床面直上は地山と暗茶褐色土が混じっ

た土で、遺構の輪郭がはっきりしない。

9月27日(金) 竪穴住居2、6の埋土掘り下げ続行。竪穴遺構の掘り下げ終了。周壁は傾斜をもち壁溝も認められない。ただし中央に大形ビットあり。

9月30日(月) 竪穴住居6の床面にて周壁溝、ビット、か等検出。竪穴住居2の最下層にて中央部の周部に地山の掘り残し検出。埋土中位に地山粘上含む土層を確認。貼床か。本日、阪急岡町事務所にて第1回中間報告。

10月1日(火) 土坑22土層の須恵器群写真撮影。竪穴住居2の西側垣壁。須恵器多数に出土(土坑2)。

10月3日(木) 竪穴住居5、7、竪穴遺構の埋土除去後の遺構検出状況撮影。P10区付近で灰陶陶器、黒色土器等一括出土(土坑墓)。

10月5日(土) 竪穴住居5、6、竪穴遺構の上層断面実測。土層等の遺物出土状況実測後、遺物取り上げ。

10月8日(火) 竪穴住居4の炉、ビット、溝等掘り下げ開始。SP214より弥生後期燧、鉢出土。なお調査と併行して進めている遺物洗浄中、人形付土製品を検出。竪穴遺構の埋土より出土のもの。

10月9日(水) 土坑2の須恵器出土状況実測、写真撮影。竪穴住居2貼床下層掘り下げ続行。炉周囲の床面直上より壺口縁部破片(IV様式)出土。

10月12日(土) 竪穴住居2の最終床面検出、精査。が周囲にて土手状の地山掘り残りあり。炉の上径0.7mとかなり大きい。

10月13日(日) 竪穴住居2の土層断面精査。掘り下げ段階では不明瞭であったが、貼床が明らかに認められる。土坑2の遺物取り上げ後さらに掘り下げ。

10月16日(水) 竪穴住居2の床面検出状況撮影。P11-17区の遺構全景撮影。

10月19日(土) A地区の最終仕上げにかかる。各住居跡ビット掘り上げと同時に断面図作成。調査区全体の遺構平面実測開始。本日はP14-17区を完了。

10月20日(日) 竪穴住居3の燧燧輪ビット(SP189)

- 掘り下げ。礫は上層にのみ。遺物少量。
前日に続いてP2～13区の平面実測。
- 10月21日(月) 全体平面図にレベル記入。各遺構実測図の補足。ビット丸掘り続行。本日よりB地区の重機掘削に入る。
- 10月23日(水) 竪穴住居2の最終写真撮影、A地区よりベルコン等器材徴収。本日をもってA地区の調査終了。B地区の表土除去作業を併行して進める。都出比呂志氏、現地指導のため来訪。
- 【B地区】 昭和60年10月24～11月30日
- 10月24日(木) B地区の重機掘削終了。P27区付近にて、地山が1m前後の落差で落ち込み谷状地形を呈す。便宜上、落ち上、落ち下と呼称。遺構面の残りは比較的良好が、包含層はほとんど皆無。表土の除去作業を続行。
- 10月25日(金) P27区の斜面表下の礫層を断ち割り。地山急に落ち、和礫層堆積。河川か？
- 10月28日(月) P27区以西、遺構検出につとめる。落ち下の遺構(小溝等)掘り下げ。調査区に基準杭設定。
- 10月29日(火) S P835掘り下げ。高杯出土。これによりP27区東の谷状地形は後世の開削等によるものではなく、弥生時代に遡ることが判明。土坑37掘り下げ。TK 209段階の杯身片出土。全体としてP27区東は遺構に乏しい。
- 11月1日(金) P27区以西、遺構検出続行。一部包含層掘り下げ。P27区以東、地山上面の包含層除去。弥生～近世の遺物が同一層にて出土。転磨の痕跡あり。
- 11月6日(水) 遺構の輪郭はぼ出し終える。
- 11月8日(金) P18～22区遺構検出状況平板実測。落ち表下のS X01、02残れし掘り下げ。後者は和礫層を主体とし、転磨の著しい須恵器片を多く含む。流水作用によるものか？
- 11月9日(土) P27区以西、遺構検出状況撮影。P23区より平板実測継続。P34～38区、遺構全体写真。本日よりビットを中心に遺構の掘り下げを開始する。
- 11月11日(月) ビット断面等、実測開始。P33～38区、平板実測継続。S X01、02掘り下げ完了。
- 11月13日(水) 竪穴住居7の周縁溝掘り下げ。

- 11月14日(木) 竪穴住居10の調査開始。まず埋土を十字に断ち割り、土層を観察。溝18検出。ただし当初、円形の竪穴住居と誤認する。
- 11月15日(金) 阪急岡町事務所にて第2回中間報告。
- 11月16日(土) 竪穴住居9検出。写真撮影のの高調査開始。床面近くで磨製石鏝出土。
- 11月21日(木) 竪穴住居8調査開始。断面にて台付録出土。窠内ではあまり見かけない彫形で、先の人面付土製品を透想する。
- 11月25日(月) P27区以西の地形測量開始。微地形を表すため5cmコンターとする。
- 11月26日(火) B地区全景撮影のため、遺構面清掃。午後より第1期調査(A・B地区)の成果について記者発表を行う。
- 11月28日(木) 終日、B地区の全景および部分写真撮影を行う。
- 11月29日(金) 溝、土坑等遺物取り上げ。断面図、平面図補足。
- 12月1日(日) A・B地区の成果について、現地説明会を行う。市民など約150名の参加を得た。本日をもって第1期調査の全行程を終了する。
- 【C地区】 昭和61年4月1日～5月17日
- 4月1日(火) 第Ⅱ期調査開始。本日よりC地区の重機掘削に入る。
- 4月3日(木) 重機掘削続行。同時にC地区東端より遺構面検出。A・B地区と同様、包含層の大半は消失するも、遺構の遺存状況は比較的良好。C地区西端にて地山の落ちあり。B地区検出の谷状地形の一方の肩部に相当するか。
- 4月5日(土) 重機掘削終了。遺構面検出続行。
- 4月8日(火) 調査区東端にて掘立建物5検出。午後より基準杭設定。
- 4月9日(水) 近世、近代のビット掘り下げ。
- 4月12日(土) 近世、近代のビット平板実測。
- 4月14日(月) 井戸突掘。近世の竪掘り井戸と思われるが、かなり深い。湧水のため底面までは掘れず。断面写真撮影、実測。
- 4月15日(火) 弥生～古墳時代の遺構検出状況スナップ撮影。平板実測開始。
- 4月17日(木) 調査区東側より遺構掘り下げ開始。
- 4月20日(金) ビットの他、溝、土坑等掘り下げ開始。併行して断面図等作成。
- 4月26日(土) 遺構掘り下げ続行。調査済の溝、上

坑等の断面図はぼ完了。

- 4月30日(水) 土坑、遺物出土状況実測。写真撮影。
5月7日(水) 遺構掘り下し終了段階。断面図等の補足、見直し。土坑の遺物取り上げ。
5月8日(木) 調査区削付け。全体平面図作成開始。
5月10日(土) 全体平面図にレベル記入。調査区北壁の土層断面図作成。遺構面清掃開始。
5月12日(月) 足場による全体写真撮影。
5月13日(火) 調査区西端の落ち部分写真。調査区北壁断面図終了。
5月14日(水) 午前10時頃よりクレーン車による空中写真撮影。あいにくの雨のため、写真の出来上りが不安。
5月15日(木) P55、56区付近の調査区周辺部平板測量。調査区西端の落ち部分平板測量(5cmコンター) 都出比呂志氏来訪。
5月16日(金) 土坑、井戸、ピット等、断面図および写真撮影。土坑40の底部より弥生中期の竈、ほぼ1個体がピットの中につぶれて出土。甕棺か。写真撮影のあと出土状況を図化。本日よりD地区の重機掘削に入る。
5月17日(土) 土坑40の遺物を取り上げ、C地区の全作業を完了する。
【D地区】 昭和61年5月19日～6月14日
5月19日(月) 重機掘削終了。遺構面清掃開始。C地区より基準ラインのばし、杭設定。

- 5月21日(水) 地山面検出。削平、擾乱による凹凸が著しい。遺構は調査区西端のごく一部に限られる。これにより当遺跡の範囲の一端が判明する。
5月23日(金) 調査区西端の大形土坑(井戸3)および土坑55の調査開始。
5月27日(火) 土坑55の埋土より石鏃1点出土。
5月28日(水) 井戸3の埋土中に確群あり。写真撮影。
5月30日(金) 井戸3より土師器杯2点出土。奈良時代の特徴を有することより当該期の遺構の存在が明らかとなる。
6月3日(火) 足場を組み、調査区全景撮影。井戸3、土坑55の土層断面図作成。
6月5日(木) 井戸3、土坑55の写真撮影。そのあと平面図作成。レベル記入。
6月6日(金) 午前10時30分よりクレーン車による空中写真撮影。
6月7日(土) 調査区北壁の土層断面撮影。地形測量開始。ただし擾乱が多く、原形が損なわれているため、10cmコンターとする。
6月13日(金) 図面関係をすべて終了し、C地区の調査を完了する。本日をもって仮設予定地域における発掘調査の全行程を終了する。
6月14日(土) 現場事務所より器材を撤収する。

(服部)



第10図 調査風景

第2章 調査の成果

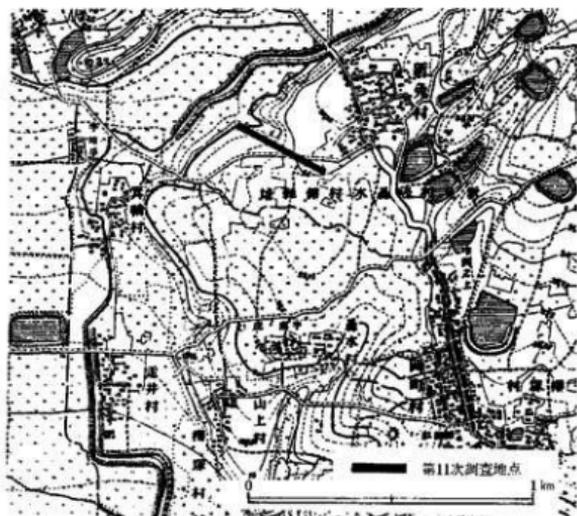
第1節 調査地点の微地形と基本層序

(1) 調査地点の微地形

現在の玉井町周辺は、豊中駅付近で標高23.5m、台地端部でおよそ21.0~21.7mをはかり、東北方より西南方に向けて、ややなだらかな傾斜を示している。この1~2mの標高差は、東西約500mの遺跡範囲からすると、視覚的にはほとんど意識されるものではなく、平坦な地形としかうつらないものである。このような地形の状況は、住宅地開発以前とも大きく異なるものでなく、明治18年初版の測量図を見ても、畿中台地上の他所と比べ、等高線の幅がかなり広く、起伏の少ないなだらかな地形を呈している。また調査地点は、この緩い傾斜面に対し、ほぼ直行する方向をとるために、調査区域全体を通して見ても、遺構面（地山面）の標高は約1.5m程度の高低差しか認められない。

ところが調査の結果、この平坦ともいふべき調査区域のほぼ中央部、すなわちB地区東側からC地区西北端において、地山が谷状（窪地状）に落ち込む地形を検出した。これは長さ（幅）約78m、深さ約0.6（西側）~1.0（東側）mのもので、谷状というにはやや浅いが、その規模から明らかに人工のものではなく、自然の作用によって形成された地形であろうと推定された。この点については、P-34区で検出したSP835が弥生中期末に遡るものであり、該期において

すでに当地形が存在したことが容易に窺われる。またP30~33区の地山直上層から出土した遺物の中に鎌倉~室町時代に属するものが相当含まれており、弥生時代から中世に至るまで、この地形にさほど大きな変化が加えられることはなかったものと思われる。なおこの谷状地形の底面は、全体として平坦面を形成するが、各所に流水作用によるかとも思われる段



第11図 調査地点周辺の地形

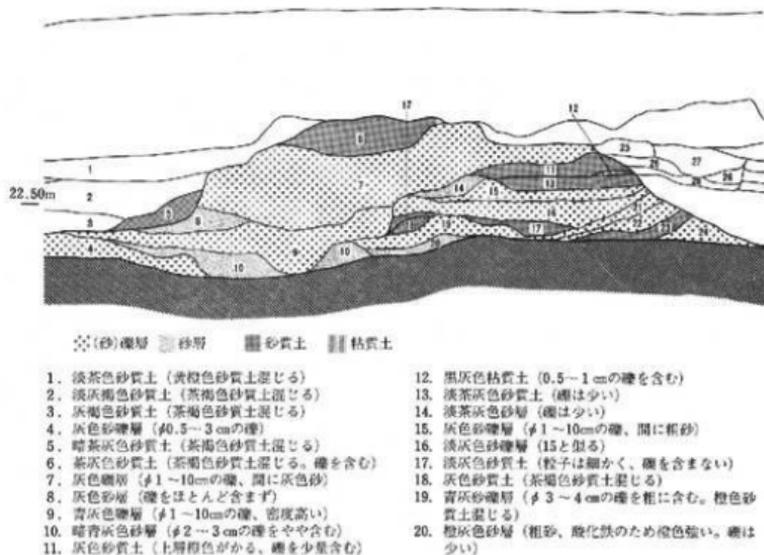
よび凹凸が認められる。

ところで、このような谷状地形の成因を考える上で、さきの地形図が参考となろう。それによると、当調査地点北方の段丘端部において、東南方向に大きくえぐれた地形が認められるが、これは段丘端部の浸食作用による小規模な開析谷と思われる。その方向、規模、当調査地点との位置関係などからみて、検出された谷状地形はあるいはこの開析谷の末端部に相当する可能性の高いものである。またかつてA地区西端の、線路と国道をはさんで位置するマンション建設予定地の立会調査でも、地山が大きく落ち込む地形を確認しており、実際の開析谷の範囲は地形図でみるよりも、より台地内部に入り込んでいたと考えざるを得ない。

以上のように、B、C地区において検出した谷状地形は、調査地点北方の小開析谷に連続する可能性があり、後にも述べるように、弥生時代の集落範囲を推定する上でも、重要なものといえる。

(2) 基本層序

調査地点の層序は、谷状地形に相当する部分と、それ以外とで大きく異なる。谷状地形以外の部分については、近世～近代における数度の削平、擾乱により、遺物包含層の遺存は極めて劣悪な状況を呈していた。したがって層序は基本的に、厚さ50～60cmの表土および盛土層と、一部の地区に遺存する遺物包含層（暗茶褐色粘質土層）とに分けられ、包含層の下は一律に、黄色粘土層、赤褐色砂礫層からなる地山である。



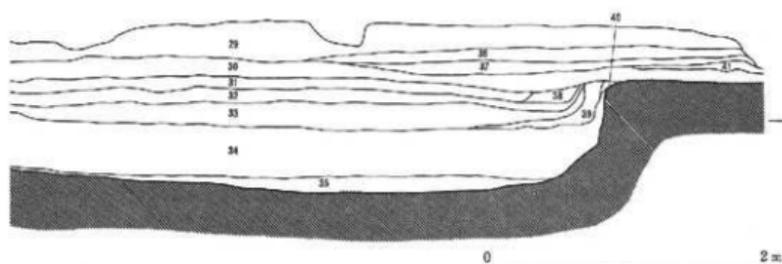
第12図 谷状地形東端部 土層断面図

包含層出土の遺物としては、多量の須恵器、土師器および弥生土器がある。また石器、石鏃などの石器類の他、少量の古式土師器等を除けば、新しい時期の遺物をほとんど含んでいない。以上のことから遺物包含層の形成時期は概ね古墳時代後期と捉えられる。ただ遺物総数に占める弥生土器の割合が相当に高く、それらが上、下を問わずあらゆるレベルから出土することから考えると、あるいは古墳後期の段階に、弥生時代の包含層や遺構埋土をも移動させるような整地作業なり、開発の行われた可能性が考えられる。むしろ該期における、居住地としての選定、拡大といった開発行為の存在については、重複する多数の古墳後期遺構の存在からも容易に窺うことができる。

以上のような包含層の状況は、第4次調査をはじめ、過去の調査においても数ヶ所で見出されており、当遺跡における純粋な弥生時代包含層の存在自体、比較的稀なことであるとしなければならぬ。ただ第1、16次調査地点などのように台地西端付近では弥生時代の包含層が比較的良好に遺存し、遺構、遺物の層位的な把握が可能な地域も存在する。

一方、谷状地形にあたる部分の層序は、上部に約50cmの厚さで盛土があり、その下に床土とみられる黄褐色粘土層、茶灰色砂質土層が3層前後認められ、地山直上にはマンガン粒を多量に含んだ茶灰色砂質土が薄く地積している。遺物は全体として少ないが、須恵器を中心としてほとんどが地山直上の最下層から出土している。

ところで、この谷状地形の東南端、すなわちC地区西端(P-41区)において、土堤状の盛



21. 灰褐色砂礫層 (φ2~5cmの礫)
22. 茶灰色砂礫層 (21より灰色強い)
23. 茶灰色砂層 (礫含まず。粗砂)
24. 灰色砂礫層 (φ0.5~1cmの礫、密度高い)
25. 橙灰色砂質土 (鉄分多く含む)
26. 暗青灰色砂質土 (橙色砂質土をやや含む。礫なし)
27. 灰色礫層 (φ1~10cmの礫、間に灰色砂)
28. 青灰色砂質土 (礫まれ)
29. 暗灰色砂質土 (φ0.5~5cmの礫をわずかに含む)
30. 茶灰色砂質土 (φ0.5~5cmの礫をわずかに含む)
31. 淡茶灰色砂質土 (φ0.5~3cmの礫をごくわずかに含む)

32. 明茶灰色砂質土 (礫含まず)
33. 暗青灰色粘質土 (粒子非常に細かく、礫含まず)
34. 暗灰褐色砂質土 (粒子細かい)
35. 暗灰褐色粘質土 (34より深い)
36. 暗灰色粘質土 (酸化鉄をやや含む)
37. 橙灰色粘質土 (酸化鉄を多く含む)
38. 黄白色粘土 (地山ブロック)
39. 暗灰褐色砂質土 (35より色濃い)
40. 黒褐色粘質土
41. 暗灰褐色粘質土 (濃茶褐色土を含む)

土ともみられるものを検出した。これは高さ約0.9m、幅約4mを測るもので、粗礫、細礫、砂、砂質土、粘質土等の盛土によるものである。担当者の全くの工事際から、重機掘削の際に地山まで掘り下げてしまい、細部については明らかにしえないが、断面視察からほぼ東西方向にのびていたものと推定される。盛土に際しては大きく2度の工程が窺われる。すなわち東部を幅約3m、高さ約0.7mの規模で盛り土を行って後、西側に拡張しながら、より高く盛り上げたものと思われ、工程間において層厚、手法に差異が認められる。また盛土以前において、地山に幅1.5m、深さ35cm程度の浅い溝を走らせているが、これは盛上の崩壊、流出を少なくするための工夫によるものと考えられる。

この土堤状の盛土の機能については、調査範囲が限定されていたこともあり、現在のところ全く不明とせざるを得ない。ただ盛土断面において検出した若干の遺物の中に、中世以降と思われる瓦片等を含むところから、中世以後に築成されたものであることは確かなようである。

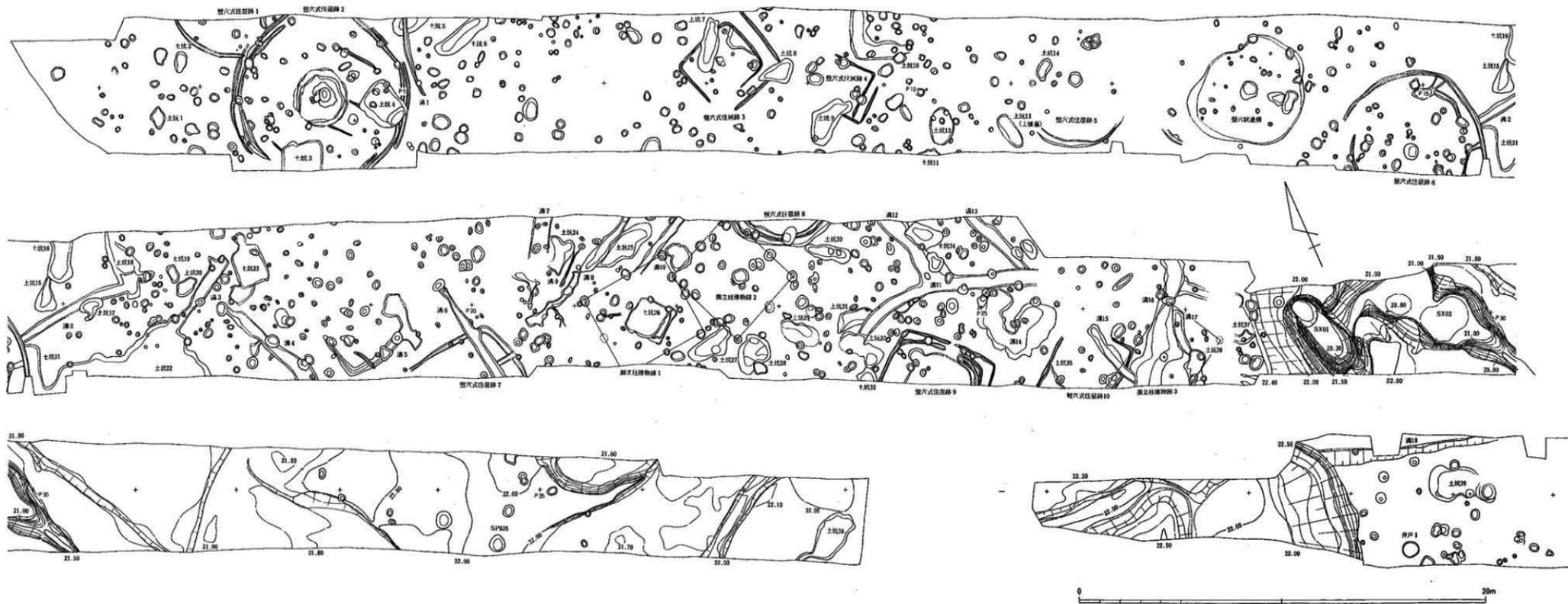
(3) 遺構の分布

調査地点は、先に述べた谷状地形によって大きく3つの空間に分けることが可能とみられる。すなわち、谷状地形より西側のA、B地区（P-1～27区）、それより東側のC、D地区（P-42～58区）、そしてB、C地区にかけて広がる谷状地形に相当する部分（P-28～41区）である。このうち谷状地形の西側部分においては、遺構の密集度が最も高く、台地端部ほど遺構の分布が顕著であるという他の調査地点（第4、8、15、16、17次調査）の所見とも矛盾しない。また竪穴式住居跡をはじめとする弥生時代の遺構のほとんどは、P-27区以西のA、B地区に集中し、谷状地形の存在が弥生集落の範囲を決定づける自然的な要因ともなっていたと考えられる。

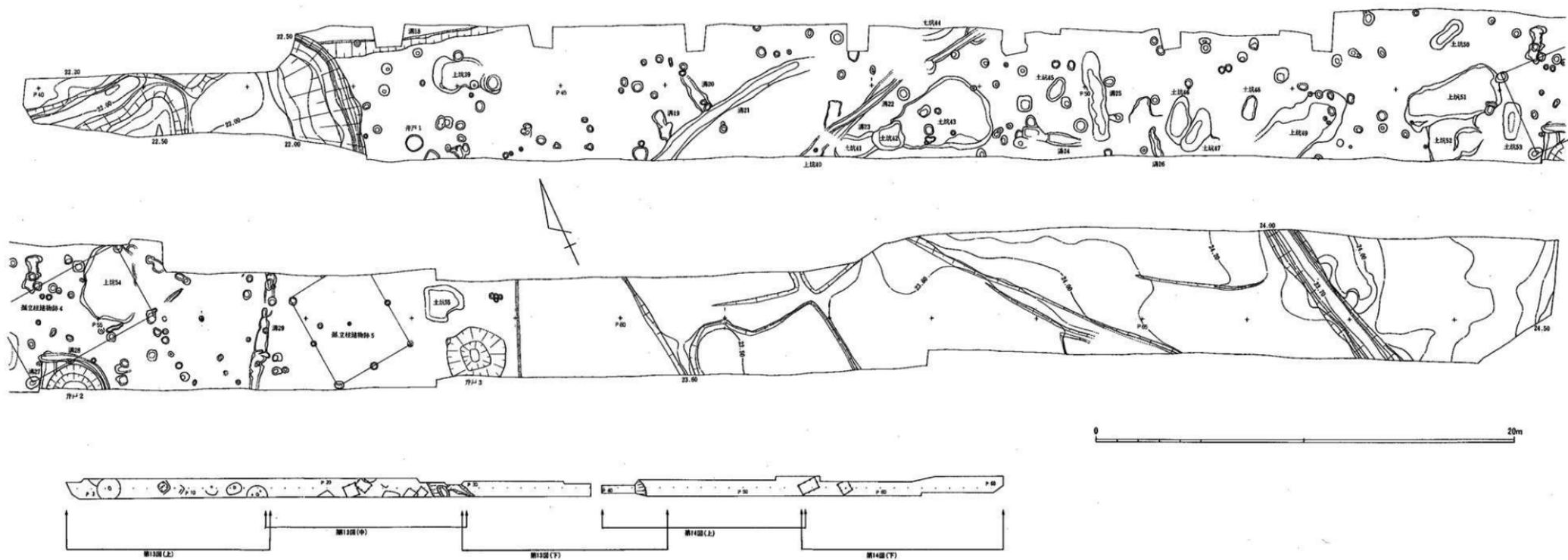
一方、P-42区以東のC、D地区では、明らかに弥生時代に営まれた遺構として、二基の土坑をあげるにすぎず、大半は古墳後期以降に属している。これは古墳時代後期以降において、谷状地形の存在に制約を受けることなく生活領域が拡大されたことを意味するものであろう。

ところで、遺構の分布はD地区西端の井戸3をもってとぎれ、D地区の大半には弥生一古墳時代に遡る遺構は全く検出されなかった。他の3地区に比べ、後世における擾乱が著しいとはいえ、地山面の高さはそれほど変化なく、むしろ東側に向かって若干標高を増している点からも、もともとD地区に遺構が営まれることはなかったとみるのが妥当であろう。したがって、新発遺跡の範囲の一端が、これによって窺われる。

以上のように、当調査地点において検出された遺構は、大半が弥生時代と古墳後期に属し、それに重複して飛鳥、奈良、平安時代の各種遺構が、さほど顕著ではないにせよ、連続と営まれたことがわかる。また生活域の範囲も、時代とともに変化したものとみられるが、谷状地形の部分については、終始積極的な活動の跡は認められず、弥生時代においても、高杯を埋納したSP835の存在など、やや特殊な空間として意識されていた可能性がある。（服部）



第13区 遺構全体図 (A、B地区)



第14图 遗構全体図 (C、D地区)

第2節 弥生時代の遺構、遺物

(1) 遺構の概要

弥生時代の遺構として竪穴式住居跡10、竪穴状遺構1の他、溝3、土坑11、大小のピット多数がある。これらの大半は谷状地形以西のA、B地区にとくに集中し、C、D地区では確実なものとして3基の土坑をあげるにすぎない。遺構検出面は全体に浅く、古墳後期以降の開発に伴う削平、擾乱により遺構の原形はほとんど留めていないものと思われる。

(2) 竪穴式住居跡群

竪穴式住居跡1 (A地区、P-3区) 円形プランを呈し、規模は推定径約6mを測る。周壁の遺存高は約5cmしかなく、大半が削平を受けている。壁溝は幅14~20cm、深さ約4cm。柱穴とみられるピットは2ヶ所で検出したが、うちP2は床面より68cmの深度をもち、土柱穴の1本である可能性が高い。埋土は一律に暗茶褐色粘質土が堆積していた。竪穴式住居跡2と重複するが、埋土に大差がみられず、北壁の断面観察からも、重複関係を明らかにすることはできなかった。

出土遺物として、住居跡埋土出土の弥生土器(第70図1~4)、ピット出土の石鏃(第103図8)がある。弥生土器として、口縁端部に凹線を施した甕(1)、甕(2、3)があり、中期後半の特徴を有するものである。石鏃はP1埋土から出土したもので、凹基式の打製石鏃である。片方の逆刺の先端をわずかに欠損する。基辺の抉りは小さいが深く、逆刺の先端は丸い。両面に大斜離面を残す。重量0.3g。肉眼観察によれば石材はサヌカイトと思われる。(松木、服部)

竪穴式住居跡2 (A地区、P-3、4区) 今回の調査で検出した住居跡の中で最大規模を有するものである。壁溝の本数、上層断面の状況から2回程度の拡張が行われたものと推定される。拡張前後の規模はつきのごとくである。

住居跡2-a (拡張前); 直径7.9m。周壁の遺存高なし。壁溝の幅15~20cm、深さ約3cm。

住居跡2-b; 直径8.15m。周壁の遺存高約8cm。壁溝の幅13~25cm、深さ約5~10cm。

住居跡2-c; 直径8.75m。周壁の遺存なし。壁溝の幅10~20cm、深さ2~10cm。

床面より40数個のピットを検出した。概して直径20~30cm、深さ20~30cmのものが多い。住居跡周辺のピットと比較した場合、住居内ピットは全体として深く、須恵器を含むものが少ない点からも、大半は当住居跡に伴う柱穴と考えてよからう。ただし、拡張前後の各住居跡に伴う柱穴の個数、配置については、さほど明確ではない。しいてあげるならばP5、9、15、23、30が、炉を中心に等距離に配置される程度である。

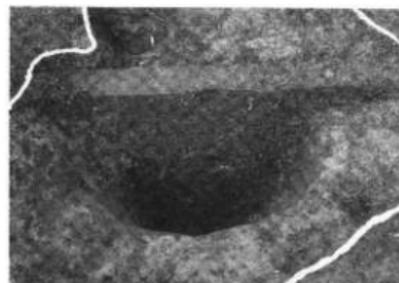
炉は、中心部分の長径70cm、短径60cm、深さ70cm、肩になだらかな段をつくる。埋土はおおよそ3層に大別でき、上層は淡茶褐色粘質土、中層は地山の粘土を含む黒褐色粘質土、下層は灰の変質した細かい黒褐色の粘土である。炉壁には熱を受けた痕跡が全く認められない。炉の周囲には、外径2.6~2.8mの土堤状の高まりが巡らされている。基底部の幅30~50cm、高さ4cmで、

住居掘削の際、地山を削り残したものである。ただし拡張後は貼床のため、土堤状の形態は失われたものとみられる。

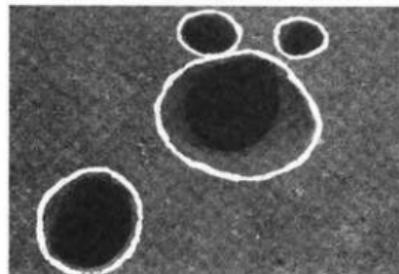
住居内埋土は、概ね3層に分かれる。住居跡2-aの床面を形成する地山上に、黒褐色土(15)が堆積した後、第1回目の拡張に伴う貼床が施されている。これは地山の黄色粘土を多量に含んだ黄褐色土(11)を基本とするもので、断面中位において他とは明確に区別しえたものである。この住居跡2-bの床面上にさらに茶褐色粘質土の堆積があり、住居跡2-cの床面は、壁溝との関係から、これより上部に存在したものと推定される。ただし古墳後期段階での開発に伴ない、埋土の大半は削除され、住居埋土最上層には、須恵器を多量に含んだ淡茶褐色土の堆積が認められた。この際に出土した須恵器は第97図1～14に図示したものである。

出土遺物の大半は、住居内埋土の各層からのものであるが、が最上層からも若干出土している。(第71図、第72図1～5)

住居跡2-aの床面直上より出土した遺物として壺口縁部破片2点(1、2)がある。大きさは異なるが、いずれも口縁端部を下方に拡張し、端面に凹線を施したものである。1の端面には径2cm程度の円形浮文の剝離痕が認められる。3～11は2-a床面直上の埋土(下層)出土のものである。凹線を施した直口壺とみられる破片(4)、円形浮文を貼付した壺口縁部(5～7)、垂下する口縁部を有する高杯(8)、底部(9～11)などがある。全体の遺物相からみて10などは上層からの遺構に伴う混入とみられる。



第15図 竪穴式住居跡2 炉土層断面

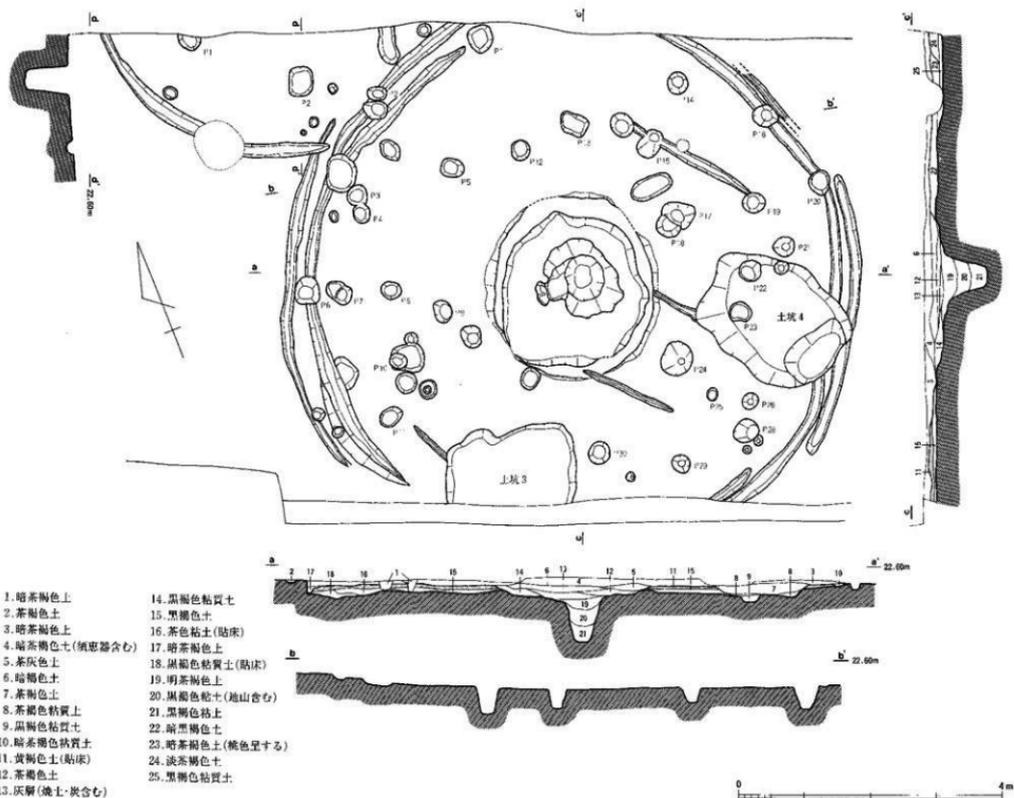


第16図 竪穴式住居跡2 ビット検出状況

12～22は住居跡2-b埋土下層および貼土(中層)出土のものである。下層と同様、凹線を施した壺口縁部(14)や器台脚部(21)など中期後半の特徴をとどめるものが大半を占める。ただし端部を肥厚しない壺口縁部(12)や底部の一部(15、18)などに、後期的な様相をみせるものがある。

住居跡2-b埋土の出土遺物は、同レベルに古墳後期の落ち込みに伴う堆積があり、純粋なかたちでは抽出できなかったものである。上層として一括して取り上げた遺物の中には、端部に刻目を施した壺口縁部(23)の他、壺口縁部(24)や底部(25)など後期に属するものを含む。

また以上の住居跡埋土の他、壁溝およ



第17図 竪穴式住居跡1、2 平面・断面図(1:60)

びピット出土のものがある(26~31)。30の壺底部などは床面検出のピットのうちに後期に下るものが存在することを示している。

がの中心部からはほとんど遺物は出土しなかった。図示した遺物(第72図1~5)は、いずれも土堤状の高まりと同レベルに堆積した埋土から出土したものである。壺口縁部(1、2)、高杯(4、5)の形態から、明らかに後期に属するものである。

なお、埋土下層より1点の石鏃が出土している(第103図5)。これは有基式の打製石鏃で、基部の先端を欠損する。基部の作り出しは比較的明瞭である。全面に粗い剝離を加え、大剝離面は残さない。重量3.1g。肉眼観察によれば石材はサヌカイトと思われる。

以上のように当住居跡からは、各住居床面に伴う良好な一括資料の出土はみられず、すべて住居跡埋土、壁溝、ピット、がから出土した破片に限られる。ただ埋土各層の遺物をみる限り、中期後半の特徴を有するものが大半を占める点において、当住居跡の営統年代のおおよそを知ることができる。とくに2-a床面出土の壺口縁部(1)は、当住居跡の初期の年代を推察させるものであろう。なお埋土上層あるいは炉上層出土の後期に属する遺物については、住居跡東側に重複する土坑4(弥生後期)の存在をも含めて考慮する必要があり、ここでは当住居跡の時期を一応、中期後半を中心とした時期に把えておきたい。(服部、松木)

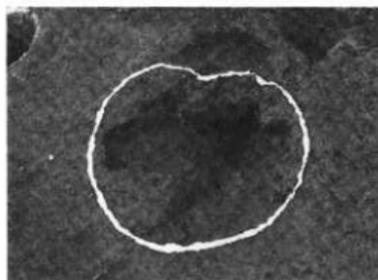
竪穴式住居跡3(A地区、P-7・8区) 平面形は方形プランを呈する。二重に溝がめぐり、規模は内側で東西3.45m、南北2.95m、外側で、東西約4.2m(復元)、南北約3.65m(復元)を測る。内側の溝で囲まれた部分は、1住居の占有面積としては小規模過ぎる点からみて、二重の溝は拡張に伴うものではなく、屋内高床部を形成したもののらしい。このことは柱穴との位置関係および、床面のレベル差(約5cm)からも裏付けることができる。

壁溝(外溝)は幅10~15cm、最大深度8cmで周壁は全く遺存しない。内溝は幅8~15cm、深さ5cm前後で、おそらく屋内高床部の崩壊を防ぐために設けられた板壁に関連するものであろう。機能的には壁溝と同様な性格をもつものと思われる。

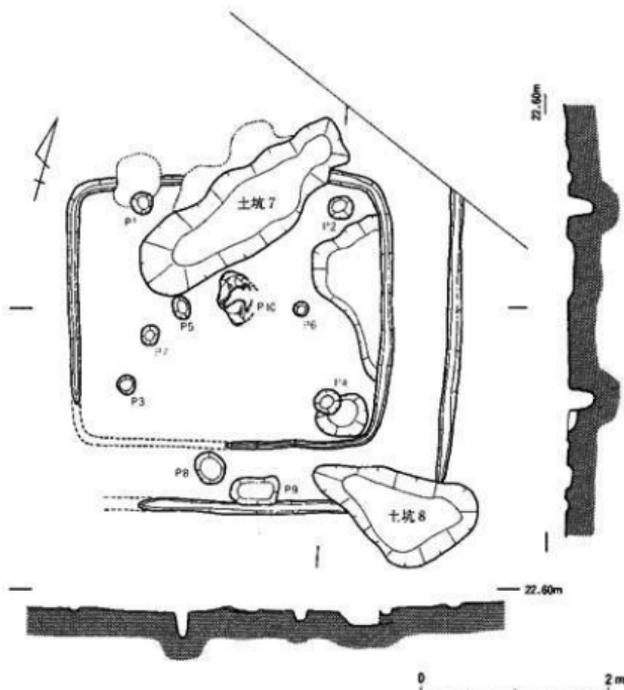
柱穴は、内溝各コーナー付近にて検出した。主柱穴とみられるものは4本あり(P1~4)、直径20~30cm、深さ20~40cm。またこれとは別に、炉の東西に直径15~25cm、深さ10~25cmの



第18図 竪穴式住居跡3 細部



第19図 竪穴式住居跡3 炉



第20図 竪穴式住居跡3 平面・断面図(1:60)

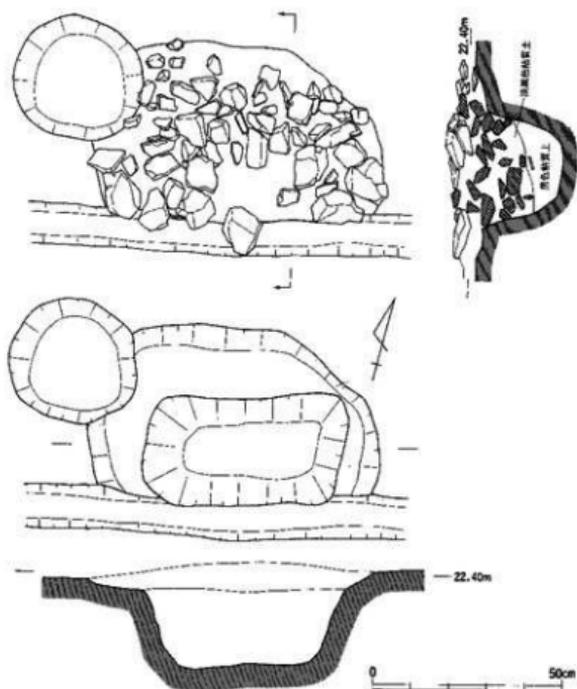
小ピット各1個があり(P5、6)炉に伴う構造物、もしくは上屋構造に伴う支柱かとも考えられる。

炉(P10)は長径約60cm、短径約40cmの地床炉で、深さ5cm程度の極めて浅いものである。周囲の地山は熱のため赤褐色に変化していた。

埋土は内溝に囲まれた部分にのみ、暗茶褐色の粘質土が薄く堆積していた。

なお、住居跡南側の壁溝に接して、東西78cm、南北56cmの範囲に礫の集積が認められた。丁度、住居跡南北中軸線上の屋内高床部に相当する部分である。礫は径5~10cmの角礫が大半を占め、周辺の地山から採取したものと思われる。厚さ約10cmの礫の堆積を除くと、その下に東西約51cm、南北30cm、深さ25cmの隅丸長方形のピットがあり、礫はピットの中位付近にまで堆積していた。断面の状態からみる限り、もともとピットの上を覆っていた礫が、時間の経過とともに落ち込んだものとみられ、ピット内部には有機質様のものが入っていた可能性が考えられる。埋土下層の暗茶褐色粘質土より少量の弥生土器片が出土している。住居跡内での位置等からも、特殊な性格の窺われる遺構である。

遺物のほとんどは埋土から出土したもので、いずれも破片である。このうち岡化できたものは3点にすぎず(第73図1~3)、1、3は埋土より、2はP6より出土したものである。良好

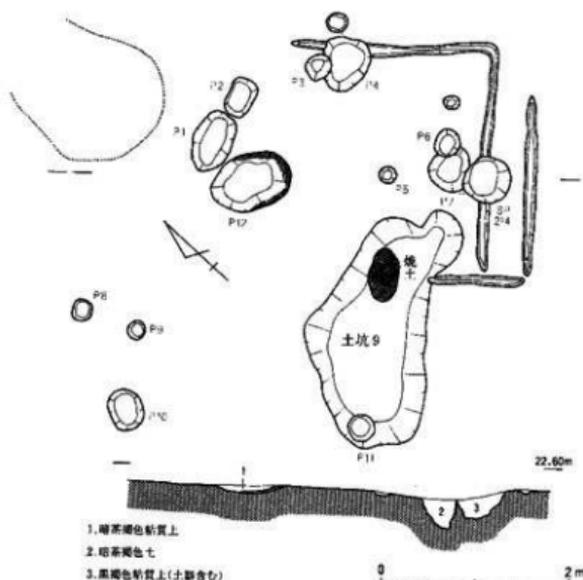


第21図 竪穴式住居跡3 P9平面・断面図(1:15)

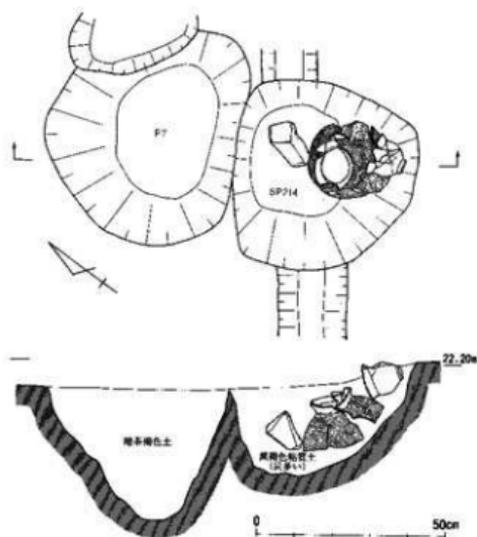
な資料とはいえないが、P6より出土した甕口縁部の特徴から、当住居跡の営造年代を後期中頃以降におさえることが可能とみられる。

竪穴式住居跡4 (A地区、P-9区) 平面形は方形プランを呈するとみられる。ただし削平により、住居跡の一部分しか遺存しないため、本来の規模は不明である。溝は二条あり、うち内側のものは直角に曲がる。平行する二条の溝にはさまれた幅約40cmの空間は、竪穴式住居跡3と同様、屋内高床部に相当するものであろうか。壁溝(外溝)の幅約12cm、深さ4cm、内溝の幅8~12cm、深さ5cm前後を測る。またこの二条の溝が途切れる付近にそれと直行する一条の小溝を検出したが、当住居跡に関連するものであれば、入口等の施設が存在が想定される。

住居跡に相当する範囲において、10数個のピットを検出した。規模、深度ともにばらつきが



第22図 竪穴式住居跡4 平面・断面図(1:60)



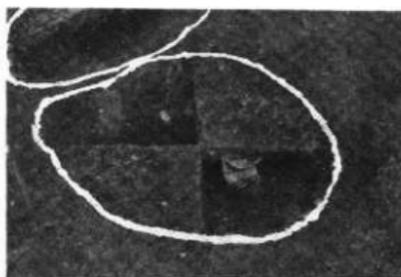
第23図 P7、SP214 平面・断面図(1:15)

みられ、いずれが主柱穴であるか判然としない。ただP10、11は、いずれも30~35cmの深度をもち、住居跡の方位ともほぼ一致していることをあげるにすぎない。また内溝の一部に重複するSP214は、直径50cm、深さ25cmの大形のビットで、埋土中位より壘上半部、上層より鉢の完形品が出土した。内溝との重複関係は明らかにし得ず、住居跡との関連も不明とせざるを得ない。

炉(P12)は、住居跡想定範囲からすると、やや東側に偏して設けられたもので、長径86cm、短径60cmの楕円形を呈する。深さ約8cmと極めて浅く、東側が熱のためとくに赤く変色していた。第73図9の壘は炉内埋土から出土したもので、ほぼ一個体の破片が出土している。

住居跡検出時において、すでに埋土の大半は失われていたので、顕著な出土遺物としては上の炉およびSP214の土器をあげるにすぎない。炉内出土の壘(第73図9)は、接合部が少なく復元にやや不安が残るが、推定口径16.7cm、同器高20.8cmを計る。外面全体にタタキが施され、体部中位に相当する破片には分割成形による接合痕が認められる。煤は体部中位より口縁部外面にかけて付着

する。第73図4、7はSP214出土のものである。7は甕の上半部で、口径13.4cm。外面は粗いタタキメ、内面は斜め方向のハケ目が施される。体部径に対する口径の比率が小さく、後期でもやや新しい傾向として扱えられる。4は屈曲して外反する口縁と、丸い体部をもち、底部は大きく安定している。全体のプロポーションは小形の甕に共通する点もあるが、むしろ後期終末時より



第24図 竪穴式住居跡4 炉

出現するとされる小形丸底形式に近い。他に床面直上出土の甕破片(第73図8)、高杯脚部(5)、

遺構番号	地区	平面形	規模	備考	時期
1	A地区 P-3区	円	約6m(推定) 深度5m	住居跡2と重複。	中期後半
2	A地区 P-3・4区	円	最大径8.75m 深度約10cm	住居跡1と重複。2回程度の拡張有り。貼床を認める。中央に灰穴炉(径70×60cm、深き70cm)。炉の周囲に土堤状の高まりを有す。	中期後半～
3	A地区 P-7・8区	方	約4.2m×約3.65m(推定) 深度約5cm	屋内高床部あり。中央に地床炉(径60×40cm、深き5cm)。南側に礫集積ピット(P9)。	後期中葉～
4	A地区 P-9区	方?	—	屋内高床部?。偏在する地床炉(径86×60cm)。	後期中葉～
5	A地区 P-11区	円?	約6.5cm(推定)	住居跡としてはやや問題あり。中央に大形ピット(炉?)。	—
6	A地区 P-14・15区	円	約7.4cm(推定) 深度6cm	1回の拡張。中央に灰穴炉(径72×82cm、深き60cm)。炉より生駒西葎産の胎土をもつ壺破片。	中期後半
7	B地区 P-19・20区	方	—	大平が調査区外にのびるため詳細は不明。	—
8	B地区 P-22・23区	円?	約5.6m(推定) 深度約20cm	1回程度の拡張。多角形の可能性あり。	中期後半～ 後期前半
9	B地区 P-24区	方	約5.2m 深度約7cm	拡張あり(数回?)。屋内高床部、貼床を認める。磨製石鏃出土。	後期
10	B地区 P-25・26区	方	約3.7m 深度約5cm	地床炉(径25×15cm)。	後期終末?

第2表 竪穴式住居跡一覧表

P7出土の底部(6)があり、5、6は明らかに混入によるものであろう。

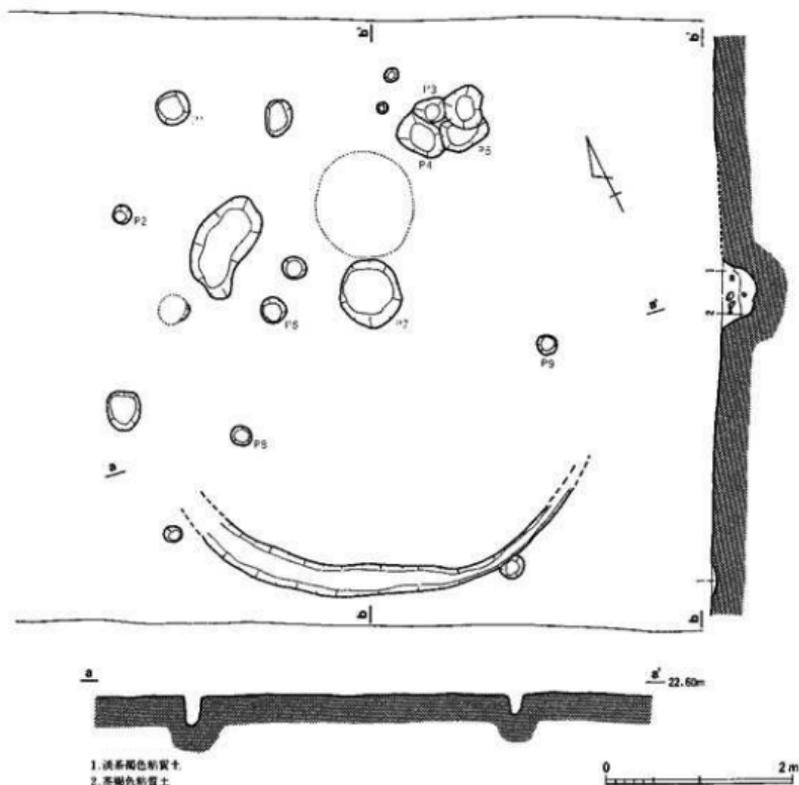
以上より当住居跡の時期については、とくに炉内出土の甕の特徴から、後期でも後半段階に位置づけておきたい。

竪穴式住居跡5 (A地区、P-11区) 竪穴式住居跡としては若干問題を残すが、一応ここでは住居跡として報告しておく。

南側に残る溝の形状から、円形プランが想定され、P7を炉跡として復元すると、直径約6.5mの規模が考えられる。壁溝とみられる溝は、住居跡南側にもみ遺存し、幅12~35cm、深さ3~7cm。

当遺構を住居跡とみなすにあたって問題となるのは、支柱穴が明確でないことをあげることができる。かろうじて候補があげられるものとしてP8、9があるが、これに対応する柱穴が明らかでないという懸点がある。

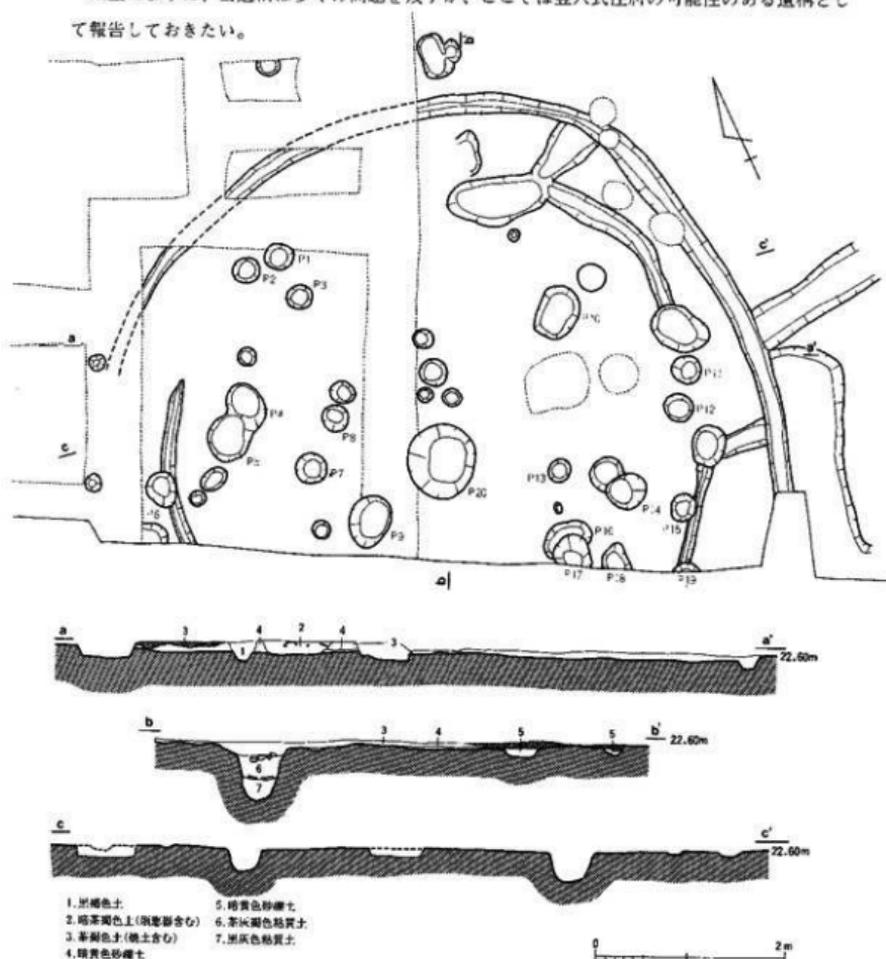
P7は直径65~70cm、深さ37cmのやや大形のピットで、上層に淡茶褐色粘質土、下層に茶褐



第25図 竪穴式住居跡5 平面・断面図(1:60)

色粘質土の堆積がある。通例の灰穴がとすればやや浅く、下部に明確な灰の堆積がみられないことから、炉跡としては問題の多いピットである。ただし出土遺物はすべて弥生土器に限られる。遺構を覆う埋土は、当初溝で囲まれた範囲にまるく遺存しており、遺構面自体P7を中心として、やや浅い凹所をなしていたらしい。この埋土下部には須恵器をほとんど含まない点から、弥生時代に属する可能性が高い。しかし、これを単に包含層の名残りとみるか、住居埋土とするかについては明確な判断材料に欠ける。

以上のように、当遺構は多くの問題を残すが、ここでは竪穴式住居の可能性のある遺構として報告しておきたい。



第26図 竪穴式住居跡6 平面・断面図(1:60)

竪穴式住居跡6（A地区、P-14、15区）平面形は、ややいびつな円形プランを呈する。規模は調査範囲の制約上、正確には測り得ないが、直径約7.4m程度のものであると思われる。

床面から大小のピット20数個を検出した。このうちP4、10は直径40～55cm、深さ30cm以上を測り、主柱穴とみてほぼ間違いがない。P17は位置的にやや問題はあつたものの40cm以上の深さをもつところから、主柱穴の可能性が高いものである。

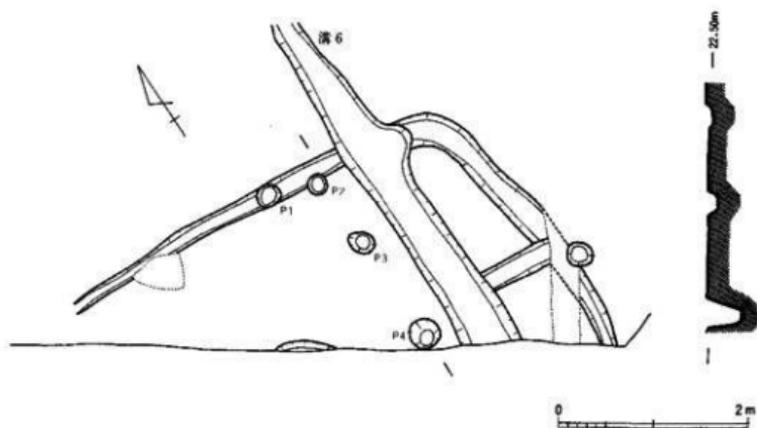
壁溝は二重に巡り、拡張によるものと考えられる。内側のものはかなり浅く、部分的に大きく途切れている。外側の壁溝は幅15～30cm、深さ約8cm前後、内側の溝は幅10～27cm、深さ3cm前後を測り、拡張前の直径は5.8mである。周壁は最も高いところで6cmしかなく、埋土上層に多数の須恵器が混入していたことと合わせ、上部はかなり大規模な削平を受けているものと思われる。

床面には、地山の明黄褐色と暗褐色土の混じった土が薄く堆積していた。貼床というよりも居住に伴う汚れとみた方がよからう。

炉（P20）は、長径80cm、短径72cm、深さ約60cmを測る。埋土は大きく二層に分かれ、上層には地山の礫および粘土を含む暗茶褐色粘質土、下層には粒子の細かい黒褐色の灰層が堆積し、二層の間に生駒西麓産の胎土をもつ壺口縁部および体部の破片を検出した。

住居跡埋土は、基本的に暗茶褐色粘質土の堆積が認められた。ただし住居北半部の上層に赤褐色の焼土層が5cm前後の厚さで堆積しており、火災住居の可能性も考えられる。

遺物は住居埋土および炉内から出上した(第74図1～9)。このうち炉出上の壺口縁部(1)は、垂下する口縁端部の外面を3～4条の浅い凹線、2～3個単位の川形浮文で飾るもので生駒西麓産の胎土をもつ。他に内外面にハケメ調整を施した小形の甕(3)、端部に円形の刺突をもつ壺口縁部破片(4)、高杯脚部(5)等がある。以上のうち、とくに炉出土の壺口縁部の特徴か



第27図 竪穴式住居跡7 平面・断面図（1：60）

ら、当住居跡の所属時期の1点を中期におさえることが可能とみられる。

竪穴式住居跡7（B地区、P-19、20区） 平面形は方形プランを呈すると思われる。大部分が調査区外へ延びるため、規模については不明。ただし検出長4.5mを測る。

壁溝は、幅10~30cm、深さ3~8cm。コーナーは直角をなさず、やや鈍角に曲がる。床面の4ヶ所にピットがあり、うちP4は深さ37cmを測る。おそらく主柱穴の一本に相当すると思われる。

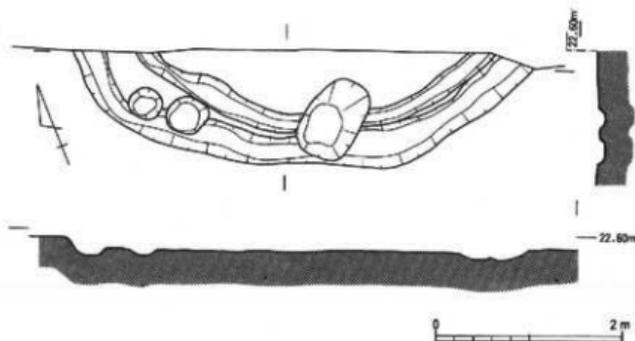
遺物は壁溝埋土より、若干の弥生土器片が出土したが、時期については不明。

竪穴式住居跡8（B地区、P-22、23区） 壁溝の一部を検出したものである。平面形は円形プランを呈すると思われるが、2ヶ所に鈍い稜を認めることから、多角形の可能性も考えられる。規模は復元で、およそ直径5.6m前後を測る。

二重に巡る壁溝は拡張に伴うものであろう。拡張前の壁溝（内溝）は幅17~25cm、深さ6cm、拡張後のもの（外溝）は幅28~45cm、深さ10~20cm。周壁は約45度の緩い傾斜をもつ。

遺物は住居内埋土床面直上および壁溝埋土上層より、比較的まとまって出土している（第75図1~7）。4は唯一床面直上より出土したもので、深い杯部を有する高杯である。斜め外方に広がる体部と、大きく内湾する幅広い口縁部からなり、内外面に丁寧なヘラミガキ調整を加える。屈曲部外面に二条の細い沈線を施す以外、全く装飾を施していない。杯底部は円板充填法による。

他はいずれも住居跡埋土から出土したものであるが、うち2、5、7は外壁溝埋土直上のものである。2は細頸壺の体部とみられる。大きく外傾する底部と丸い体部をもち、外面は細かいヘラミガキ、内面はナデによる。5は小形の高杯、もしくは器台かともみられる。短い脚台に、内湾ぎみに広がる杯部をともない、杯部下半に径6mmに穿孔を有する。成形は手づくねによるもので、調整も全体として粗い。7は円盤状の土製品で、径7.7cm、厚さ0.6cm。丁寧なナデ調整が施され、片面にやや膨らみをもつ。細頸壺等に伴う蓋であろうか。



第28図 竪穴式住居跡8 平面・断面図（1：60）

その他、端面に櫛形波状文の施された口縁部破片（1）、壺底部（3）、および上下に数条の沈線を加えた脚部破片（6）などがある。

以上の出土遺物のうち当住居跡の所属時期を考える上で最も良好な資料として、床面直上から出土した高杯があげられる。かかる形態をもつ高杯は、畿内では類例の乏しいものであるが、高槻市古曾部遺跡出土資料の中に、これと類似した形態をもつものが存在し、第Ⅳ様式のものとして記されている。これは他の遺物の年代観とも矛盾するものではなく、当住居跡の所属時期は中期後半を遡るものではないと考える。

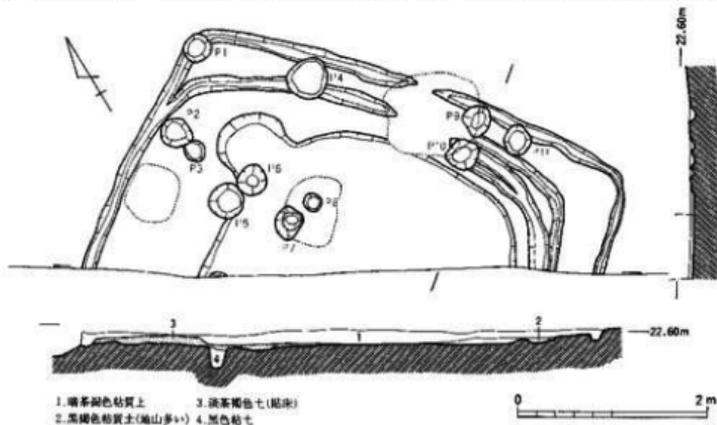
（服部）

壑穴式住居跡9（B地区、P-25、26区） 平面形は方形プランを呈する。検出し得た一辺の長さ5.2m。壁溝の本数は部分によって異なり、少ないところで1本、多いところで4本を確認できる。これらを住居の拡張に伴うものとすれば、北辺を基準として順次南側に拡張が行われたものと考えられる。

各辺より内側に約0.75～1.2mの幅をもって段が巡り、屋内高床部を形成している。この高床部は、東南部を地山削り出しにより、西北部を粘土によってつくられる。検出時点で約7cmの遺存高が認められた。高床部内側の埋土は暗茶褐色粘質土である。

住居範囲内において、計12個のピットを検出した。須恵器を含む古墳後期以降のものも多く、当住居跡に伴う可能性のあるものとしてはP8をあげるにすぎない。

遺物はすべて住居埋土より出土したものである。甕の底部破片（第75図8、9）、およびタケミを有する体部破片があり、いずれも後期段階のものと思われる。なお住居埋土下層より磨製石鎌が1点出土している（第103図4）。これは先端と側縁の一部を欠損し、両面に1本ないし2本の不明瞭な稜を持つが、全体的に扁平な作りである。研磨痕は基軸方向またはそれに近い斜方向に走るが、一部、横方向に走る箇所もみられる。先端から最大幅部付近までは側縁に



第29図 壑穴式住居跡9 平面・断面図（1：60）

鋭いエッジが形成されているが、基部の側縁は研磨によって刃つぶしが行なわれ、端面が作られている。重載2.0g。肉眼観察によれば石材は粘板岩と思われる。(服部、松木)

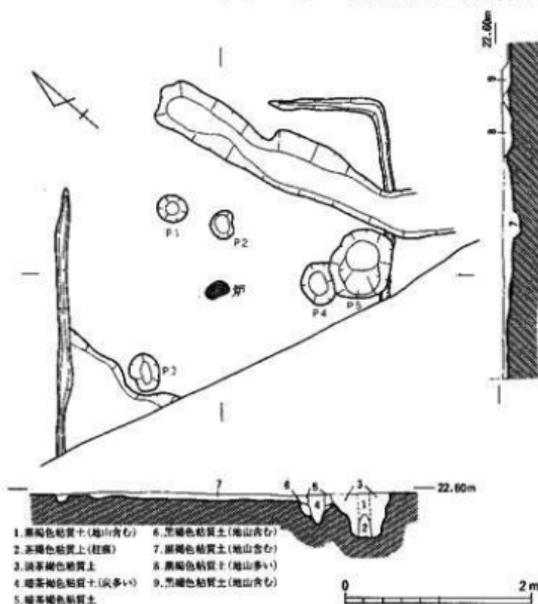
竪穴式住居跡10 (B地区、P25、26区) 平面形は方形プランを呈する。東西にやや長く、長軸3.7m以上、短軸3.6mの周壁は北側コーナー部分を除き、約2～5cmの遺存高をもつ。

壁溝は、上端幅7～12cmで下へいくほど狭く、平均10cm前後の深さで断面V字状に掘り込まれている。形状、深さから、板を直接打ち込んだとも考えられる。

床面に5ヶ所のピットを検出したが、このうちP2、4、5は埋土に須恵器を含み、古墳後期以降のものと思われる。

P1、3は直径30～40cm、深さ10cm前後で相似た規模を有するが、遺物を伴わず、配置からも当住居跡に伴うものかどうか明らかでない。なお住居跡中央に、長径25cm、短径15cmの範囲で小さく床面が焼けた痕跡が認められ、住居跡に伴う地床かと推定される。

出土遺物(第75図10～14)には図示した以外に、内面をヘラケズリした磚子の体部破片がみられ、当住居跡が後期終末以降に下る可能性を示している。

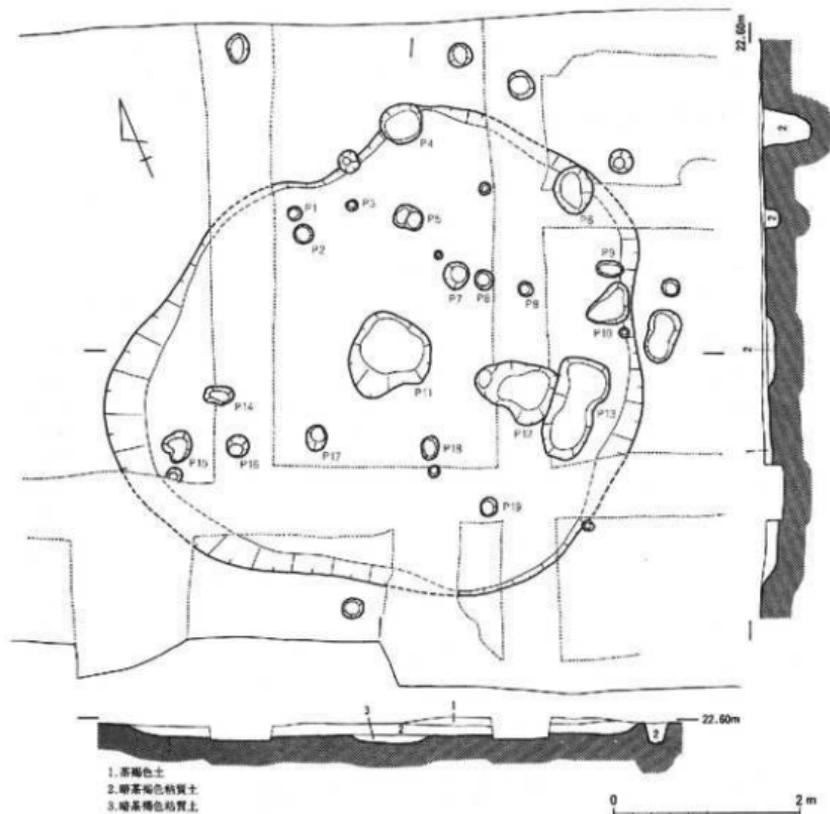


第30図 竪穴式住居跡10 平面・断面図(1:60)

(2) 竪穴状遺構

竪穴状遺構 (A地区、P-12、13区) 平面形はやや不定形な楕円形を呈し、長径約6m、短径5.3m、深さ10～15cmを測る。規模からみると竪穴式住居跡としても大過ないものであるが、肩部がなだらかに落ち込み、周壁をなさず、壁溝も認められない。また柱穴とみられる明確なピットは存在しないが、底面で検出した10数個の小ピットのうちP2、8、16、19などは20～30cmの深さを有するところから、簡素な上屋構造を想定することも可能である。

底部中央にあるやや大形のピット(P11)は、径90cmを測り、深さは10cm前後と比較的浅い。位置的には炉跡にも相当すべき位置に存在するが、埋土に炭や焼土を含まず、周囲に熱を受けた痕跡も認められないので、炉としての機能は考え難い。

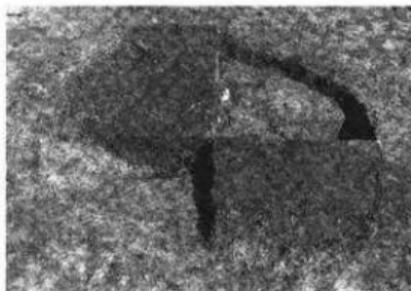


第31図 竪穴状遺構 平面・断面図 (1:60)

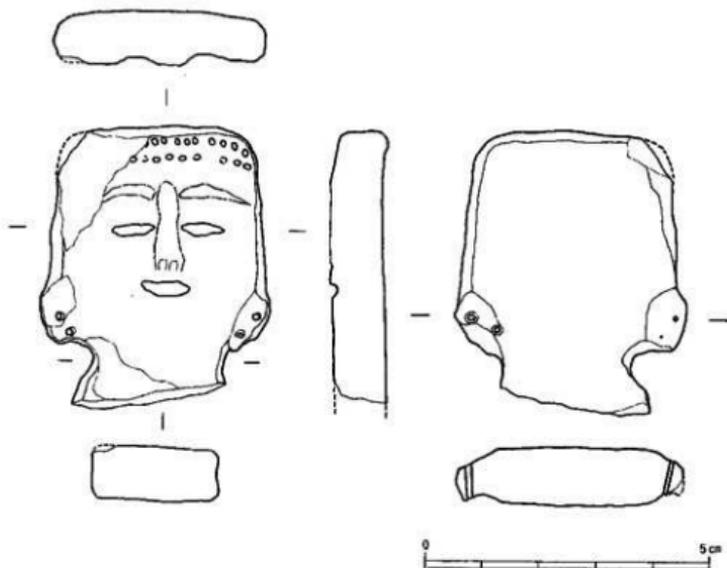
埋土は、上層に須恵器を多く含む茶褐色土、下層に暗茶褐色粘質土の堆積がみられた。図示した弥生土器の大半は、この下層より出土したものである(第76図1~20)。

出土物のうち、中期に属する17、20などは明らかに混入によるもので、大半は後期に属するものである。器種として壺口縁部(1、2、4)、壺底部(11、12)、甕口縁部(3)、甕底部(6~10、13~16)、鉢(5)、高杯脚部(18、19、20)等があり、このうち鉢は遺構底面のほぼ直上において出土したものである。

なお埋土下層より、1点の人面付土製品



第32図 竪穴状遺構 P11



第33図 人面付土製品 (1:1)

が出土している(第33図)。現存長4.8cm、頭部の幅3.6cm、耳部の幅4.1cm、厚さ約9mmを測り、板状を呈する。頭部の形状はやや縦長の長方形を呈し、耳の部分は斜め前方につまみ出されている。首は大きくくびれ、肩部に向かってハ字形に開くが、下部の形状については全く不明である。

顔面の表現は極めて写実的である。目と口は陰刻、眉と鼻は本来突出していたらしいが、現在欠失して遺存しない。また眉の上方には径1mmの細かい竹管状の刺突文が二列に施されている。左右に引きのばされた耳の部分には各々2個の穴があり、いずれも裏面に貫通している。この人面付土製品は、顔面や耳の表現、竹管文を施す点などにおいて、吉備地域を中心に分布する分銅形土製品と極めて類似するものである。

(3) 土坑

土坑4 (A地区、P-4区) 竪穴式住居跡2の埋没後、重複して掘り込まれた土坑である。平面形はやや不定形な楕円を呈し、長径2.4m、短径1.9m、深さ21cmを測る。埋土はおおよそ二層に分かれ、上層に茶褐色土、下層に茶褐色粘質土の堆積がみられる。竪穴式住居跡2の埋土とも大差はみられず、住居上面において検出することはできなかった。

出土遺物(第72図6-12)として、体部内面にヘラケズリのみられる鬘破片(7)、タタキメを有する同底部(10、11)、短く外反する口縁部をもつ高杯(6)、外面をハケ調整による同脚部(13)などがあり、7がやや新しい他は、いずれも後期に属するものである。

土坑8 (A地区、P-8区) 不定形土坑で、長径1.8m、短径1.0m、深さ20cm。埋土に暗茶褐色粘質土が堆積し、若干の弥生土器片が出土している。時期については不明。(服部)

土坑9 (A地区、P-9区) 不定形土坑で、長径2.7m、短径1.2m、深さ20cm。埋土は大きく2層に分かれる。上層は茶褐色粘質土、下層は暗茶褐色～黒褐色粘土で、上層より小形の磨製石斧が1点出土した。

磨製石斧(第103図6)は、整美な作りで断面は扁平な隅丸長方形、刃部は両刃である。刃部及び上端部に傷様の凹凸がみられる。刃部のものは使用による刃こぼれ、上端部のものは着柄に関する何らかの痕跡と思われる。形態からみて縄文時代の所産と考えられる。重量51.4g。



第34図 磨製石斧出土状況

なお、埋土上層には少量の弥生土器を含んでおり、石斧については混入の可能性の高いものである。また土坑北半の一部に、赤褐色の焼土塊が認められたが、当遺構との関連は明確でなく、竪穴式住居跡4との関連も考慮に入れる必要がある。(松木、服部)

土坑10 (A地区、P-9区) 楕円形を呈し、長径58cm、短径50cm、深さ8cmの小規模なものである。埋土には淡茶褐色土の堆積があり、この上層部分より壺口縁破片、および高杯杯部破片が出土した(第78図1、2)。

壺口縁部(1)は、径約10.5cmで、口縁部が真直にのびる形態から直口壺とみられる。高杯(2)は、脚接合部よりほぼ水平にひらき、口縁部が大きく屈曲して立ち上がる。杯部内外面は丁寧なヘラミガキ調整が加えられるが、とくに内底面は放射状の暗文状を呈する。

出土遺物の特徴より、後期末(庄内式段階)に営まれたものとする。

土坑17 (A地区、P-16区) 西半部を攪乱のため損失するが、検出長1.2m、幅0.9m、深さ約18cmの不定形なものである。埋土は一様に黒褐色粘質土の堆積がみられ、埋土より少量の弥生土器片が出土している。

土坑18 (A地区、P-16区) ほぼ南北方向に溝状にのびる。検出長3.4m、最大幅1.2mで深さ8cm前後を測り、古墳後期の溝2と重複している。出土遺物の大半は、後期の壺底部破片(第77図5)を含む弥生土器で占められている。

土坑23 (A地区、P-17区) 平面形はほぼ長方形を呈する。長さ2.0m、幅1.6m、深さ約10cm。埋土には茶褐色土が堆積する。出土遺物は多量にのびり、破片総数539点を数える。うち須恵器は36点で、いずれも埋土最上層からのものである。

出土遺物(第77図1～4)として、大型鉢(2)、壺口縁部(3)、同底部(4)などがあり、この他、器種不明のもの(1)がある。1は内面の調整、接合痕の状態から、器台もしくは高杯の脚部と思われる。屈曲部の形状は山陰あるいは北陸系の壺口縁部に類似し、外面のヘラに

よる浅い凹線は東海系の高杯に類似例が求められる。今後の資料の増加を待ちたい。なお、胴部に不明記号をもつ壺破片(第103図13)が出土している。外面は粗いハケ、内面はナデ調整を施す。

土坑34(B地区、P-24区) 長さ1.9m、幅1.1m、深さ25cm前後の不定形土坑である。埋土に暗茶褐色粘質土の堆積がみられた。

出土遺物はすべて弥生土器で占められる(第78図3~5)。体部外面に粗いタタキを施した甕の破片(3、4)、同じくタタキを有する甕底部(5)がある。竪穴式住居跡4のSP214出土遺物ともほぼ同時期とみてよからう。(服部)

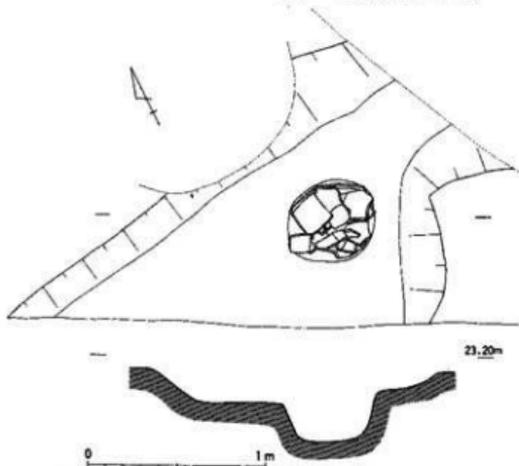
土坑40(C地区、P-47区) 古墳時代後期の溝22、23によって上部を削平された状態で検出した。削平を免れた南側の掘りかたから、径が60cm前後の円形土坑で、二段掘りとなっていたことがわかる。径35cm、深さ12cmの二段目の掘り込み部に密につまった甕形土器を検出した。甕形土器の検出レベルについては、口縁部が高く、底部が低いところで多く検出したが、若干の底部破片が口縁部近くで検出されている等、据え置かれたものとは考え難い検出状況であった。このことから甕棺の可能性は少ないものとする。

甕形土器(第79図1)は、倒鐘形の体部から外反する口縁をもつもので、復元口径29.3cm、最大胴部径37.4cm、器高45.8cmをはかる。口縁端部は下方へ若干拡張している。外面は、下半にはヘラズリがおこなわれ、上半にはハケ調整が認められる。

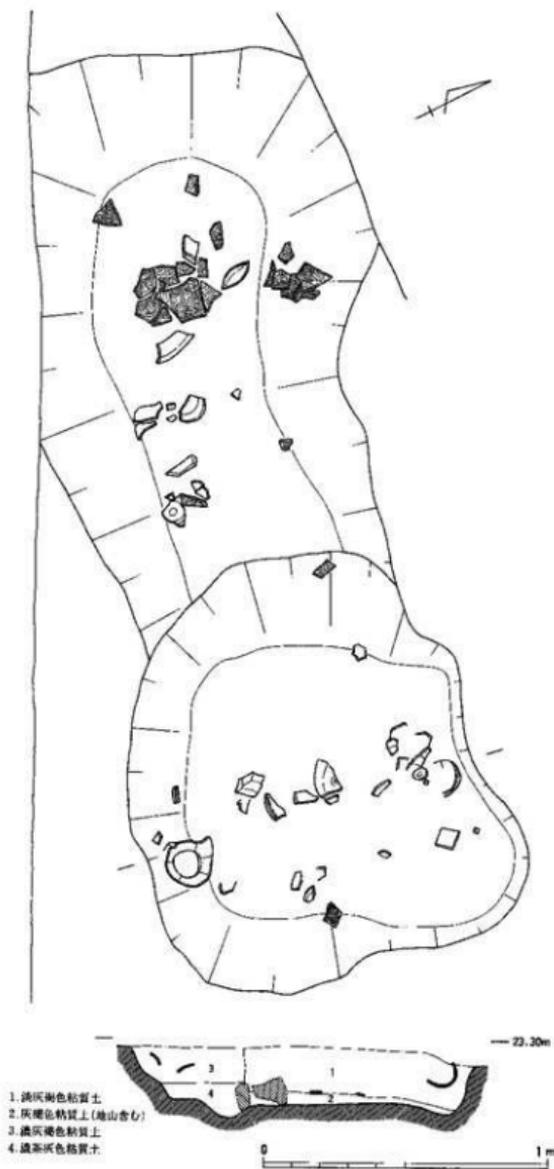
内面は上半部が板ハケ、下半部がナデ調整である。中期中葉・後葉に多いタイプであるが、甕一点のため時期の限定はできない。

土坑42(C地区、P-48区) 古墳時代後期の土坑41、43によって、中央部が破壊されている。長径1.5m、短径1.2m、最深部25cmの規模をもつ不定形土坑である。断面観察から土坑41、43の南側の掘り込み面を確認できたが、もう一方の掘り込み面は検出することができなかった。土坑内堆積土は上・下層に分かれ、遺物の多くは上層から出土した。

出土遺物(第79図2~5)は完形品に近い有孔鉢(2)の他、短頸壺(5)等、弥生時代後期の土器片で占められている。このうち2は平底の小型の有孔鉢である。口径14.1cm、器高9.1cmをはかる。外面は一面にタタキが施され、内面は板ナデ調整による。3は、鉢あるいは甕の



第35図 土坑40 遺物出土状況



第36図 土坑41、42 遺物出土状況(1:20)

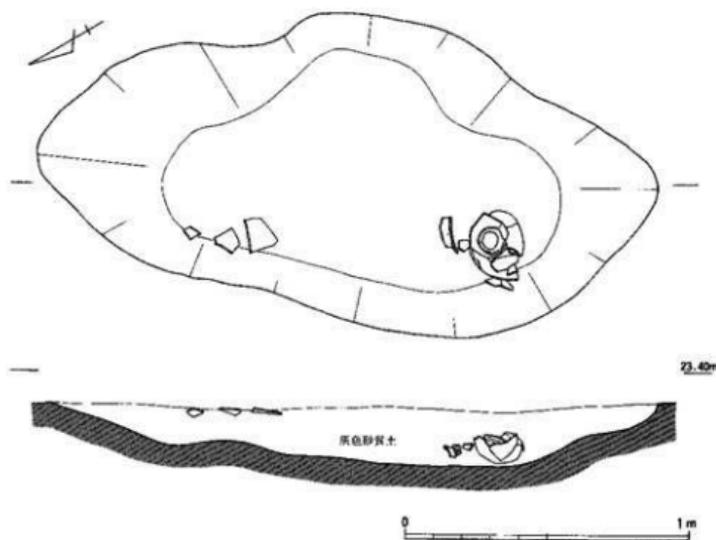
底部で、4は上げ底の
甕あるいは鉢の底部で
ある。5は口縁端部が
短かく外反する短頸壺
で、外面はタタキの後、
ヘラミガキをおこなっ
ている。以上の遺物か
ら土坑42は後期後半の
時期を与えることがで
きる。

土坑42から出土した
遺物は、いずれも破片
であり、これらは破棄
されたものと考えられ
ることができる。

土坑46(C地区、P-
50区) 土坑の規模は、
長径2.18m、短径1.1m、
最深度20cmで、平面形
は楕円形を呈する。土
坑内堆積土は、灰色砂
質土の単一土層であり、
この層から、ほぼ完形
品の壺形土器等、後期
の弥生土器数点を検出
した。

図示した遺物(第
79図6~9)には、甕
形土器(6~8)、壺形
土器(9)がある。6
は「く」字形口縁をも
つ甕で、端部は丸くお
さめている。7は丸み

をもつ体部から、くの字状に外反する口縁部をもつ甕で、口縁端部は凹面をなす。復元口径16.4



第37図 土坑46 遺物出土状況 (1:20)

cmをはかり、外面全体にタタキメを残す。口径が腹部最大径より小さいタイプである。8は平底の甕の底部である。9は壺で、やや扁平の上腹部の張った器体に、短かい頸部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。体部外面には「寧」にヘラミガキを施しているが、一部肩部にタタキメが残る。体部内面下半部にはハケ調整を施し、上半部には指頭瓦痕が顕著である。

以上の遺物から土坑46は後期後半の時期を与えることができる。 (岡村)

(4) 溝状遺構

溝1 (A地区、P-5区) 竪穴式住居跡2に近接した位置において、長さ約4mにわたり検出した。幅20~30cm、深さ3~5cmを測り、平面形は住居跡の壁溝とは逆向きの弧状を呈する。検出当初は竪穴式住居跡の壁溝かともみられたが、内部には住居を思わせる炉や柱穴の存在は認められなかった。なお淡茶褐色を基調とする埋土より少量の弥生土器片が出土している。

溝5 (B地区、P-18・19区) 幅20~40cmでコ字形に巡る溝である。深さ5cm前後でやや浅く、他遺構の重複によるかともみられる出張りが存在する。暗灰褐色土の埋土中より、やや多くの土器片が出土しているが、須恵器を含まず、弥生時代に属する可能性が高い。

溝10 (B地区、P-21区) 検出長3.4m、幅30~50cm、深さ約15cm。暗茶褐色粘質土を埋土とし、弥生土器片の出土をみる。溝8と併行に走ることを重視すれば古墳後期の可能性もある。

(5) ビット (小穴)

今回の調査で検出した総数1043個を数えるビットは、必ずしもそのすべてを建物跡等の遺構に伴うものとみなすべきではなかろう。しかし竪穴式住居跡以外の一部のビットにおいても柱

痕を確認している事実から、その何割かは明らかに建物遺構に関連するものと思われる。ただ柱痕を確認しえたピットも、全体の2%程度にとどまり、実際の建物遺構の位置や数については不明部分が多い。また調査範囲が幅6~7mと狭いことも、このことの一因をなしている。

一方、今回の調査地点に限らず、新免遺跡で検出されるピットの大半は、埋土に多少の明暗の差はあるものの、概ね茶褐色系統の色調を呈している。また質的には、各々が位置する地山の質に左右されるが、基本的にはマンガング粒を多く含む粘質土である。ピット埋土にみられるこのような特徴は、それらが所属する時代や性格に関わりなく一般的に認められる特徴であり、遺構の検索、所属時期の確定を著しく困難なものにしている。

以上のような種々の制約のなかで、個々のピットを資料的に位置づけようとした場合、各々がもつ属性の中で最も有効なものとしてピットの深度、および埋土からの出土遺物があげられる。前者は遺構の性格、とくに建物跡の想定に際して、その配列とともに考慮されるべきものであり、一建物の柱穴は概ね一定の深度を有するとの前提にもとづいている。

後者はいうまでもなく、ピットの所属時期を推定する根拠となるものである。当遺跡の場合、弥生時代中~後期と古墳時代後期の2時期において、とくに大きな動きが認められる点から、出土遺物の中でもとくに須恵器の混入の有無が問題となる。

以上の分析視座にもとづき、今回は一つの試みとして第38~40図を作成した。これは各小地区(P-O区)の平均的地山面の標高(図面下段の数字)から、各ピットの深度を10cm刻みで区分し、網の濃淡で表わしたものである。また須恵器を含むピットに星印を付すことにより、古墳後期以降に所属するものを明示した。

以下、ピットの深度から窺われる傾向と、出土遺物によるピット数の比率について簡単にふれておきたい。なお、ここでは時代とは無関係にすべてのピットを対象に検討を加える。

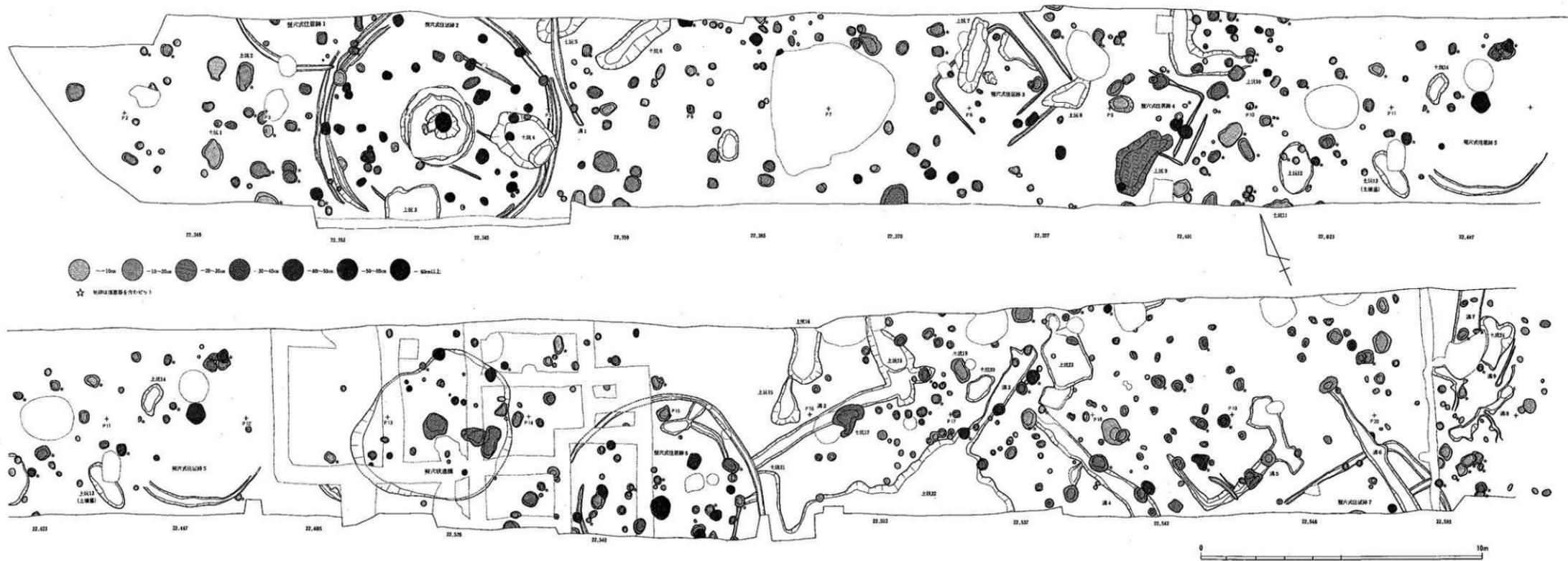
深度による分布傾向

今回検出した掘立柱建物跡5棟のうち、掘立柱建物跡5を除くと、すべて上の色別作業の結果、確認されたものである。とくに掘立柱建物跡2、3は各柱穴とも40~60cmの深度をもち、ピットの多くが30cm未満の深度をもつ中において、比較的識別が容易であったものである。

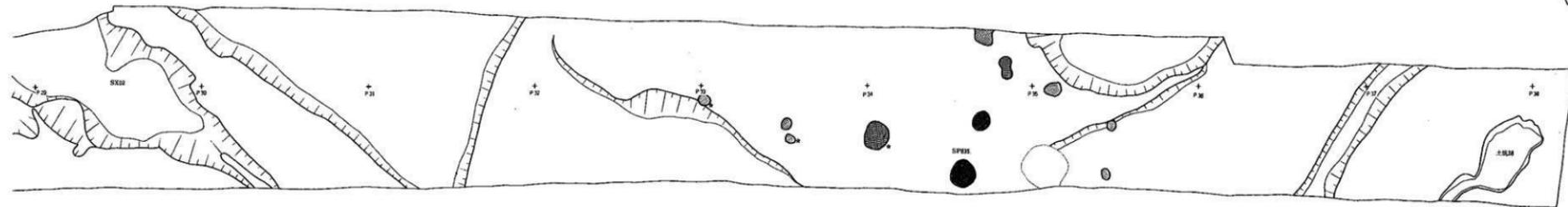
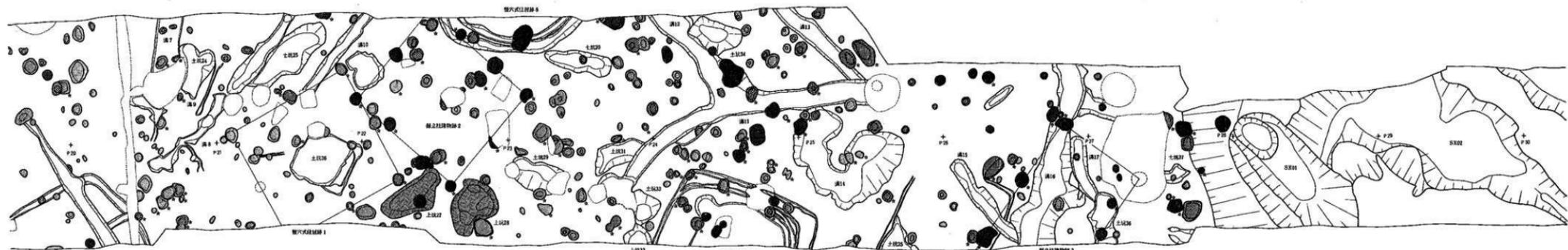
ところでピットの深度による分布には、それほど極端な偏在性といったものは認められない。ただ些細にみると、掘立柱建物跡1、2、3の位置するP-21~26区付近において、ピットの密集度がとくに高く、比較的深度の大きなものが多いという傾向が看取される。これは、古墳時代に属する溝や土坑の大半が、P-16区以西に集中するという傾向とも呼応するものであり、古墳後期集落の一端を明らかにしている。

なお、すでに述べたように、竪穴式住居跡2の床面より検出されたピットは、周囲のものとは比べ、比較的深いものが多く、このことは、それらの大半が住居跡2に伴う可能性が高いことを示すものといえる。

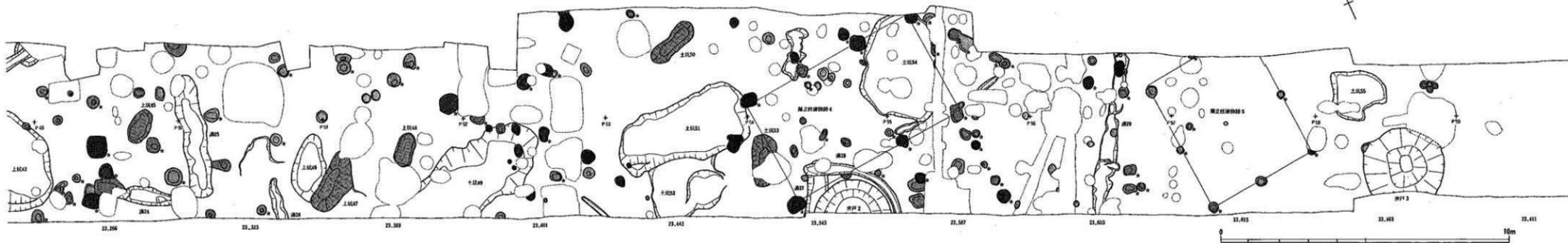
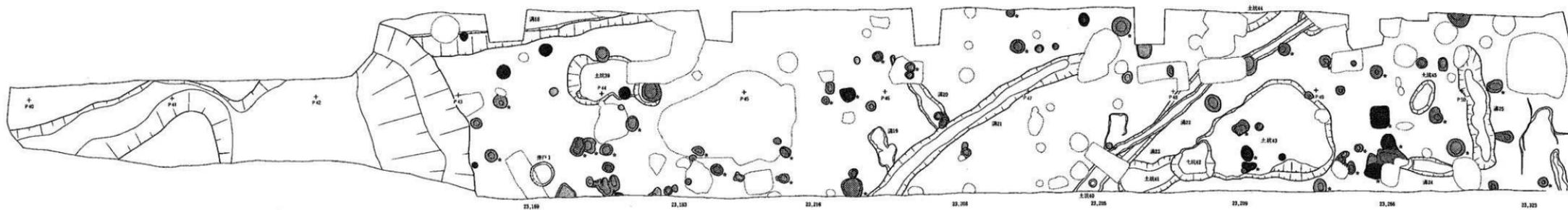
出土遺物による比率



第38図 遺構平面図(1)



第39圖 遺構平面図(2)



第40图 遺構平面図(3)

A、B地区で検出したピットは総数843個を数える。このうち遺物が出土したものは412個で、全体の約半数（49%）を占める。出土遺物の種類にもとづいてこれらの内訳をみると、須恵器を含むもの184個（44.7%）、土師器のみを含むもの2個（0.5%）、弥生土器のみを含むもの209個（50.7%）、その他17個（4.1%）となり、須恵器を含むものと弥生土器のみを含むものとの比率は全体の約半数づつを占め、後者が前者をやや上回るという傾向が認められる。ただこの場合、須恵器を含むものが、明らかに古墳時代後期以降に属することは認められたとしても、弥生土器のみを含むものに関しては、たとえ古墳後期のものであっても、須恵器を含むか否かという偶然性に左右される可能性があり、一概にそれらすべてを弥生時代のピットであると判断することはできない。ましてや遺物が小破片の場合、土師器と弥生土器の区別が明瞭でなく、弥生土器を含むものとしたピットの中に、土師器を含むものが算入されている可能性は高いといえる。

しかし、さきに遺構の分布について述べたように、竪穴式住居跡をはじめとする弥生時代の顕著な遺構がA・B地区に集中する事実からみても、A・B地区に弥生時代のピットが多数を占めることは、むしろ当然のこととも考えられるのであり、上に示した各時代のピットの比率については、多少の変動は予測されるものの、大勢としては動かないものと判断する。

一方、C、D地区において検出したピット（総数200個）のうち、何らかの遺物を含んでいたものは112個を数え、この中で須恵器、土師器を含むもの104個（92.9%）、弥生土器のみを含むもの1個（0.9%）、小片のため弥生土器か土師器か識別できないものが7個（6.2%）ある。すなわち、古墳時代後期以降と確定できるピットが、何らかの遺物を出土したピットに占める割合は実に93%の高率を示すことになる。以上のことと、弥生時代の他の遺構がC、D地区に少ないことを勘案すれば、無遺物であったピットもそのほとんどが古墳後期以降のものと考えられ、C・D地区における弥生時代のピットの分布は、極めて希薄なものであったと考えられるのである。

以上のように、各地区から検出したピットは、出土遺物の種類にもとづく比率からみる限り、谷状地形の東西において明らかに傾向を異にしている。すなわち、住居跡、土坑、溝など、弥生時代の遺構の大半がA、B地区にとくに集中し、古墳時代後期以降のものは、地区に関係なく広範に分布を拡大するといった事実がピットの分析を通じて、あらためて認識されるのである。

SP835（B地区、P-34区）谷状地形の底部にて検出したピットで、ほぼ円形を呈し、径65～70cm、深さ45cmのやや規模の大きなものである。埋土は概ね2層に分かれ、上層に明茶灰色粘質土、下層に茶灰色粘質土の堆積がみられた。

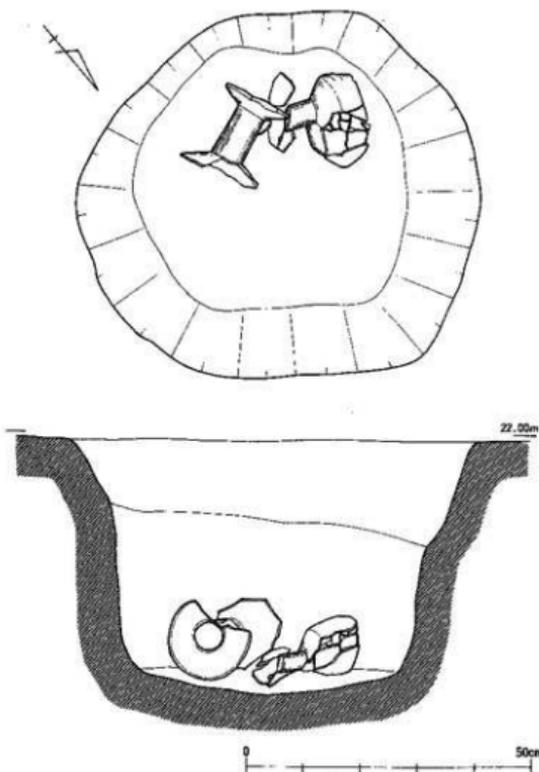
遺物は上層およびピット底部にて出土した。上層の遺物として、粗いタタキメを有する燧破片と高杯脚部破片があり、厚さ約20cmの下層の堆積後、混入もしくは廃棄されたものとみられる。底部より出土した遺物は2点の高杯で、いずれも完形品ではないが、上層のものに比べ残存の程度は良好である。出土状況からみて、これらは埋没時期、性格等にやや異なった様相が

窺われる。

底部より出土した高杯2点(第102図1、2)のうち、1は柱状の長い脚柱部より、脚端部がハ字形に大きく開く形態をもち、推定7ヶ所に円形の透し穴を有する。また外面全体に丁寧なミガキ調整、脚柱部内面はヘラケズリが施されている。2は1に比べやや小ぶりな短い柱状の脚柱部およびハ字形に広がる脚端部をもち、推定4ヶ所に円形の透し穴を有する。杯部は丸い碗状を呈する。一部ミガキの痕跡が認められる以外、調整については不明。

なお3は上層出土の高

杯脚部である。ハ字形に広がる形態をもち、1・2とは形式を異にする。1・2・3ともに杯部底部は円板充填法による。



第41図 SP835 遺物出土状況(1:10)

(服部)

第3節 古墳時代の遺構・遺物

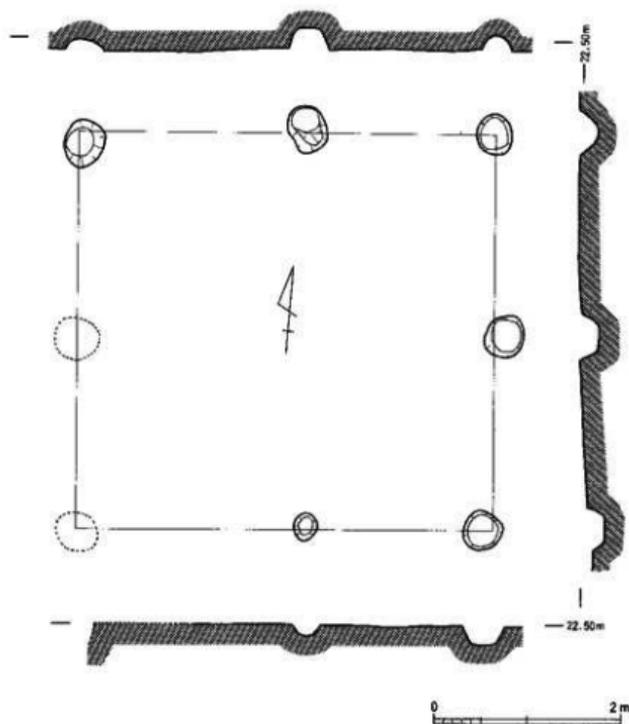
(1) 遺構の概要

古墳時代の遺構として、掘立柱建物跡4をはじめ、土坑28、溝状遺構23、ピット多数がある。このうちピットについては、幅6～7mという調査範囲の制約上、建物跡として認識されなかったものが相当数存在すると思われる。なおいずれの遺構も、比較的遺存状況は良好である。

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡1（B地区、P-21・22区）東西2間（約4.45m）、南北2間（約4.25m）の規模を有する。柱穴の規模は径40cm前後のものが多く、深さは15～20cmの間におさまる。柱痕をとどめたものはないが、柱間寸法は東西、南北とも概ね2～2.3mと一定している。西辺中央部の柱穴は削平により消失したものとみられる。なお建物の南北方位は $N-4^{\circ}30'-W$ である。

ほとんどの柱穴において弥生土器片、須恵器片の出土をみたが、このうち図化できたものと



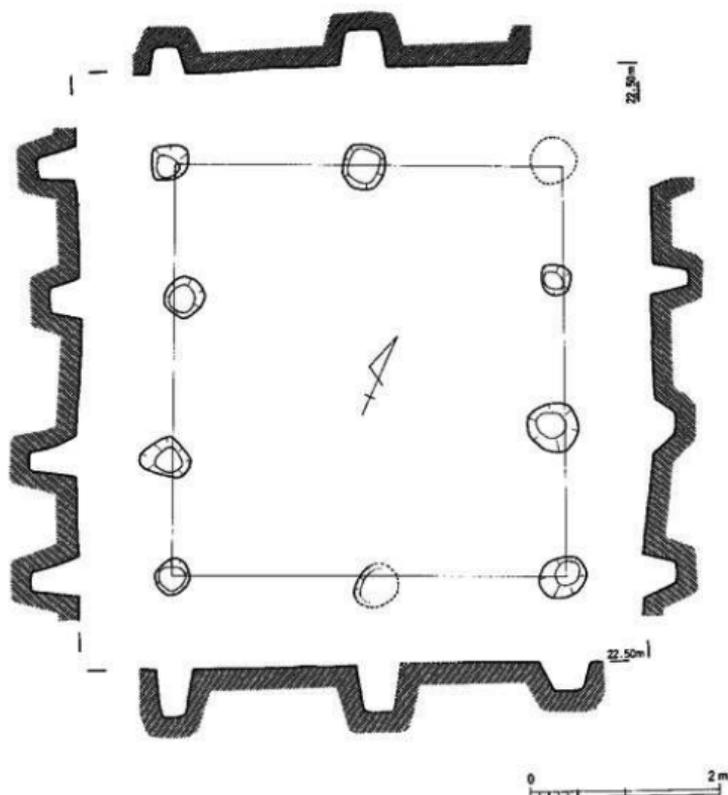
第42図 掘立柱建物跡1 平面・断面図（1：60）

して、東南コーナーの柱穴埋土より出土した壺口縁部破片（第91図32）がある。端部の形状から古墳後期でも前半代に位置付けうるものと考えられる。

掘立柱建物跡 2（B地区、P-22・23区）桁行3間（約4.4m）、梁行2間（約4.15m）の規模を有する。柱穴の直径は30～50cmで、深さは25～50cmとかなり深いものが多い。柱痕は検出できなかったが、柱間寸法はおおよそ桁行で1.2～1.7m、梁行で2.0～2.3mを測る。柱穴埋土はいずれも黒褐色粘質土あるいは暗茶褐色粘質土の堆積がみられた。

建物の主軸方位はN-24°-Wである。なお柱穴埋土出土の遺物として多数の須恵器片、弥生土器片がある。 （服部）

掘立柱建物跡 3（B地区、P-26・27区）桁行2間以上（4.7m以上）、梁行1間（約3.2m）の規模を有する。主軸方位はN-30°-Wで、方位とは無関係に建てられたものとみられる。柱穴

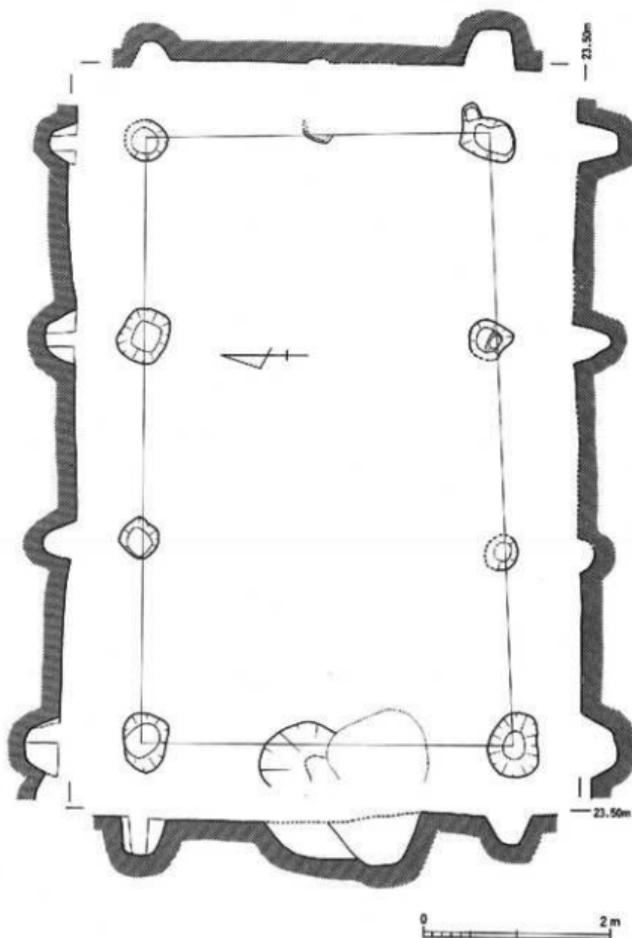


第43図 掘立柱建物跡 2 平面・断面図（1：60）

の規模は径40～70cm、深さ30～40cmで、いずれもかなり深いものである。東側コーナーの柱穴は、大形の擾乱域のため消失したものとみられる。竪穴式住居跡10に重複する1個の柱穴には明らかに柱痕が認められ、径15cm程度の柱が想定される。柱間寸法は、梁行で2.3～2.5mを測る。

なお、各柱穴より若干の須恵器片、弥生土器片が出土している。

掘立柱建物跡4（C地区、P-54・55区）桁行3間（6.6m）、梁行2間（3.7～4.0m）の規模をもつ。西辺中央の柱穴は削平のため検出できなかった。南北方向を主軸とした横長の建物を



第44図 掘立柱建物跡4 平面・断面図（1：60）

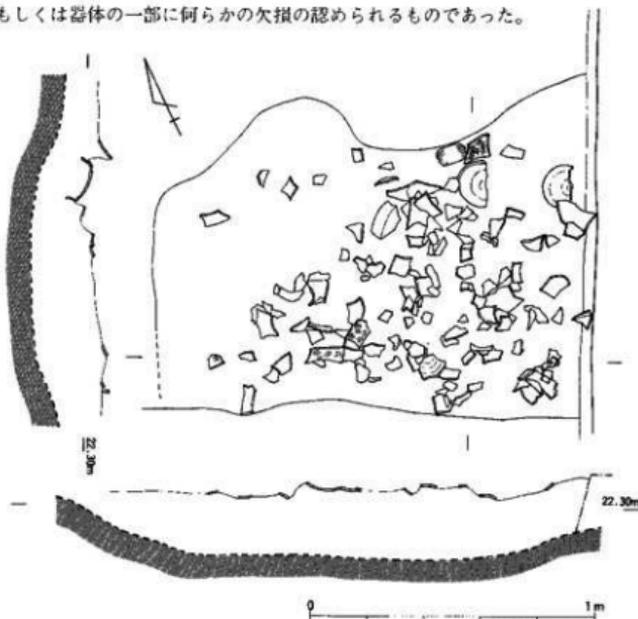
想定すると、建物の方向は、N-1°-Wで、ほぼ南北方向に建てられていることがわかる。柱間寸法は、桁行で2.0~2.2m、梁行で1.8mである。柱穴は、直径40~70cm、深さ25~45cmを測る。また、柱の痕跡からわかる柱の大きさは、15cm前後である。

出土物には須恵器、土師器が見られるが、いずれも細片のため図示しえない。(岡村)

(3) 土坑

土坑3 (A地区、P-3区) 竪穴式住居跡2に重複して営まれた土坑である。住居跡床面検出時の規模は、長径2.1m、短径1.3mで、本来の規模はさらに大きく、深さも20cm以上はあったものと推定される。埋土は淡茶褐色粘質土である。

埋土中には多量の須恵器が集積されていたが、とくに上層に集中し、下層へいくほど希薄になるという状況がみられた。器種も多種類におよび、一部完形に近いものを除くと、大半は破片かもしくは器体の一部に何らかの欠損の認められるものであった。



第45図 土坑3 遺物出土状況 (1:20)

出土物として、須恵器の蓋杯、杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、小形横瓶、甕等がある(第80図)。杯蓋(1~7)は、口径12.7~15.4cmでやや大小の差はあるものの、概ね口縁部が高く、稜も比較的明瞭に残る。口縁端部の段を残すものが大半を占め、凹縁に近いものも存在する。蓋杯(8~12)は、口径8.8~13.4cmとかなりばらつきがある。このうち10は、他に比べると古い要素を残すものの、他は立ち上がりの高さ、口縁端部の形状に共通点が多く、杯蓋と同様、いずれも時期的にさほど大きな隔たりはないものと考えられる。高杯には有蓋のもの(13)、無蓋の

もの(14、15、16、17)があり、同じ無蓋のものでも15と17では形式を異にする。また類例の少ないものでは小形横瓶(19)がある。両端の丸い樽状を呈し、外面はカキメ調整が施され、中央に細い口頸部をつくる。頸部(20、22、23)の形態も多岐にわたる。21は口頸部の大きさからみて提瓶とみられる。

土坑5(A地区、P-5区)北半部が調査範囲外へのびるため正確な規模は不明。長さ1.8m以上、深さ約20cm。暗茶褐色粘質土を埋土とし、杯の完形品1点を含む須恵器片がかなり多く出土した。

杯(第82図1)の形態から、土坑3とはほぼ併行する時期に営まれたものと推定される。

土坑11(A地区、P-10区)一部を検出したのみで平面形、規模は不明。深さ約10cm。暗茶褐色粘質土の堆積がみられ、須恵器および弥生土器の破片が若干出土している。

土坑12(A地区、P-10区)長径1.8m、短径1.2mの楕円形を呈する。深さ5cm未満の浅いものである。茶褐色土を埋土とし、擬宝珠形つまみを有する須恵器の蓋が出土している。

蓋(第82図4)は、深みのある形態を持ち、天井部は丸く、口縁端部に明瞭な段を有する。天井部には中央部の突出度の高い擬宝珠形つまみを付ける。有蓋高杯の蓋とみられるが、通常の形態とはやや異なる。

土坑14(A地区、P-11区)楕円形を呈し、長径1.1m、短径0.6m、深さ15cm。暗茶褐色粘質土を埋土とし、少量の弥生土器、須恵器片が出土している。

土坑15(A地区、P-15区)平面形は二等辺三角形に近く、長さ1.6m、最大幅約1m、深さ15cm。黒褐色粘質土を埋土とし、上層から弥生土器片と少量の須恵器片が出土している。埋土からみる限り、土坑6、7等に類似し、下層からの遺物の出土は皆無である。

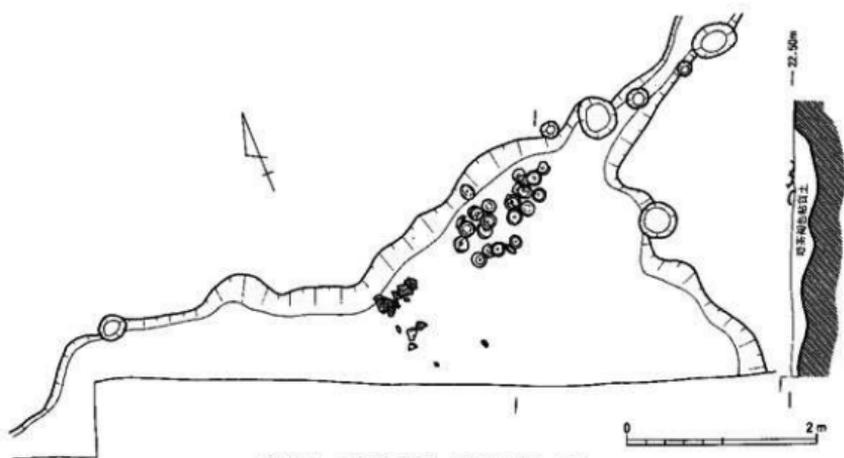
土坑16(A地区、P-15・16区)一部調査区外へのびるため正確にはわからないが、概ね楕円形を呈する。検出長2m、幅約1.2m、深さ20~30cm。暗茶褐色粘質土の様な堆積が認められた。遺物は少ないが、若干の弥生土器片、須恵器片が出土している。

土坑19(A地区、P-17区)楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.5m、深さ8cm。茶褐色粘質土を埋土とし、少量の須恵器片、弥生土器片が出土している。

土坑20(A地区、P-17区)不定形なもので長さ1.3m、幅0.7m、深さ8cm。茶褐色粘質土を埋土とする。出土遺物はなく、時期不明。

土坑21(A地区、P-15区)竪穴式住居跡6と重複し、本来の形態、規模は不明。住居跡と同様暗茶褐色粘質土を埋土とするが、住居跡埋土には焼土を含むため、切り合いは比較的明瞭に認められた。若干の弥生土器片、須恵器片が出土している。なお土坑22との重複関係は不明。

土坑22(A地区、P-16・17区)本来の平面形態、および規模については、遺構の大半がなお調査区外へのびるため不明。ただし検出長(東西)7.5m、幅(南北)2.7m、深さ5~20cmを測る。底のレベルは一定せず、かなりの凹凸がみられるため、複数の遺構が重複している可能性もある。ただ埋土には暗茶褐色粘質土の様な堆積が認められた。



第46図 土坑22 平面・断面図 (1:60)

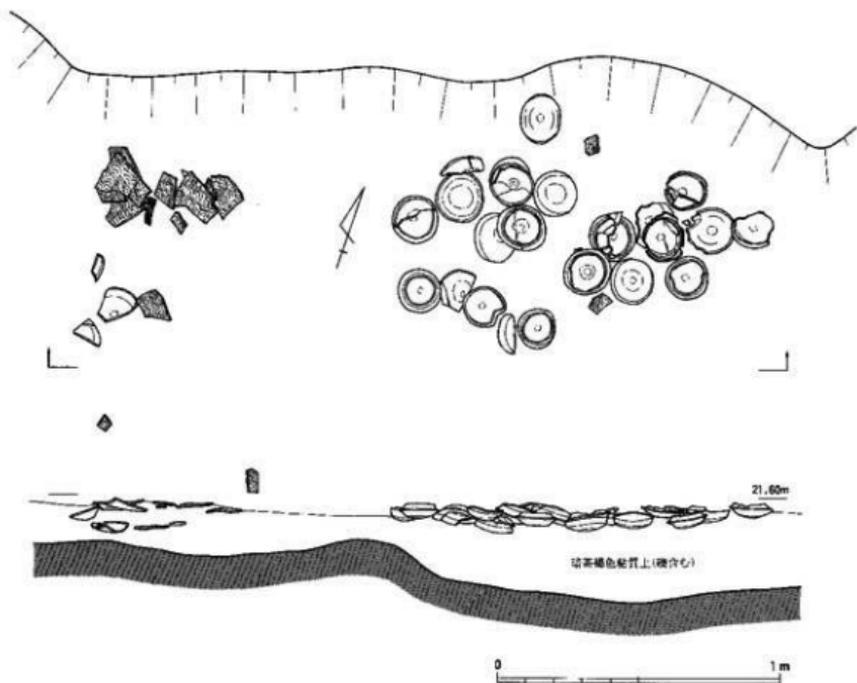
埋土上面において須恵器の多量集積が認められた。1点の高杯を除くと、ほとんどが蓋杯、杯蓋で構成される。破片化したものもあり正確にはわからないが、約26個体分を数える。うち6セット分は蓋杯と杯蓋が重ねられた状態で出土した。セットで出土したもののうち、杯蓋を上に乗せていたものは3セットで、残りは蓋杯を上に向けて、杯蓋の上に重ねていた。また、これらにやや離れて甕の体部破片がまとまって出土している。

これら須恵器群は、レベル差もほとんどなく、土坑埋没後に人為的に並べられたものとみられるところから、土坑22との直接的な関係はないものとみられる。また土坑22との重複関係は明らかでないが、溝3の延長上に位置するところより、溝3に伴う遺物かとも考えられる。上層からの全く別の遺構に伴う可能性もあり、その所属については必ずしも明確ではない。

須恵器群を構成する遺物(第81図1~21)についてみると、杯蓋(1~11)は口径13.2~16.8cm、器高4.4~5.5cmで、大きさに若干の変化がみられる。天井部と口縁部を界する稜は、明瞭なものもあるが、全体として鈍い傾向をもつ。口縁端部内面の段は、いずれも比較的明瞭である。それに対して杯身(12~20)は口径11.0~15.0cm、器高4.7~5.6cmで、大きさに顕著なばらつきがみられる。立ち上がりは比較的高いものの、内傾きみである。口縁端部内面の段は、明瞭なものもあるが、全く痕跡をとどめないものもある。

以上のように、当遺構から出土した須恵器は、細部の特徴においてやや新しい要素が窺われ、土坑3の出土遺物等と比べると若干後出のものとみられる。概ね後期前半でも中頃に近い時期に比定すべきと考えられる。

土坑24・25(B地区、P-20・21区) いずれも不定形な土坑である。土坑24は長さ1.9m、深さ約40cm、土坑25は検出長さ3.2m、幅1.2m、深さ約35cmを測る。埋土はいずれも暗茶褐色粘質土を基調とするが遺物の出土はなく時期は不明。



第47図 土坑22 遺物出土状況 (1:20)

土坑26 (B地区、P-21区) やや方形に近い平面形をもち、一辺1.6~1.8m、深さ5cm以下の浅いものである。茶褐色粘質土の堆積があり、埋土より弥生土器片、須恵器片がややまとまって出土している。掘立柱建物1とは方位を異にし、関連は薄いとみられる。

土坑29・30 (B地区、P-23区) いずれもやや不定形な長楕円形を呈する。土坑29は検出長1.7m、幅1m、深さ約8cm。土坑30は長さ2.3m、幅0.7m、深さ約15cm。茶褐色土を埋土とする浅い土坑である。弥生土器片、須恵器片が出土している。

土坑31 (B地区、P-23区) 不定形なもので検出長1.9m、幅0.8m、深さ約30cm。埋土は他の大半の土坑とは異なり、黒褐色粘土、暗茶褐色粘質土、茶褐色粘質土および、地山の白色粘土からなる。これらは層序的に堆積するのではなく、それぞれが径3~5cm程度の塊をなし、断面でみるとモザイク状を呈する。自然堆積によるものとみるよりも、人為的に埋め戻されたものらしい。これと同様な状況は土坑33においても認められる。出土遺物として弥生土器片、土師器片、須恵器片がある。なお重複関係からすると溝11より先行して営まれたものらしい。

土坑32 (B地区、P-23区) 南半部が調査区外にのびるため、平面形、規模は不明。暗茶褐色

粘質土の堆積があり、弥生土器片、須恵器片が出土している。

土坑33 (B地区、P-23区) 南北にやや長い不定形土坑である。長さ2.3m、幅1m、深さ20～30cmで、南半部がやや深い。埋土は土坑31とほとんど同じで、ほぼ同時に埋め戻されたものとみられる。

出土遺物として、土坑東南端の肩付付近より出土した須恵器の埴(第82図5)および埋土下層から出土した土師器甕上半部(6)がある。埴は口径9.2cmの小さなもので、丸い体部をもち、底部は手持ちによるヘラケズリを施す。土師器甕は「く」字形に外反する口縁部を有し、体部内面は斜め方向の粗いヘラケズリ、外面はナデにより仕上げられている。

土坑36 (B地区、P-27区) 溝状を呈し、検出長1.8m、幅0.9m、深さ約10～20cmの暗茶褐色粘質土の堆積がみられ、弥生土器片、須恵器片が出土している。重複関係より溝17より後に掘り込まれたものらしい。

土坑37 (B地区、P-27区) 検出長0.9m、幅0.6mの小規模な土坑にもかかわらず遺物が比較的まとまって出土している。ただし、すべて細片であり図化できるものはなかった。

弥生土器片、土師器片、須恵器片がある。

土坑39 (C地区、P-43・44区) 土坑の規模は、長径2.3m、短径1.7m、最深部23cmで、平面形は隅丸長方形を呈する。

細片のため図示しえなかったが、須恵器片が少量ながら検出されている。

土坑41 (C地区、P-47) 土坑の規模は、長径2.3m、短径1.7m、最深部5cmで長細い不定形な浅い落ち込みである。

土坑41は、弥生時代の土坑42の中央部を破壊しているが、同様に土坑42に東接する土坑43も、土坑42と重複しており、土坑41と土坑43とは元来一連の遺構であった可能性が高い。

当遺構からの遺物は、土坑上面検出時にすでに多く露見しており、いずれも土坑の床面より3～5cm浮いた状態で検出された。これらは、全て未焼成分を含む破片で、完形品はなく、破棄されたものと考えられる。

出土遺物(第83図1～5)は、全て須恵器であり、杯身(2、3)、杯蓋(1)、甕(4、5)等がある。このうち杯身(2、3)にみられる立ち上がり端部、受け部先端の丸みや、口径の増

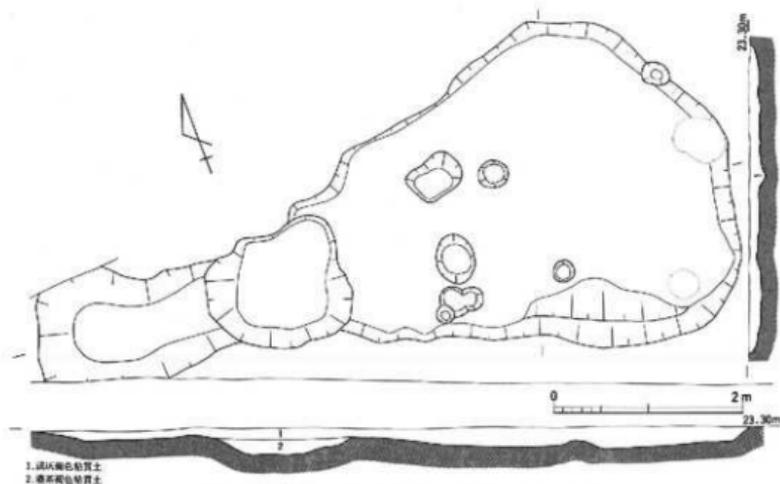


第48図 土坑33 検出状況



第49図 土坑33 遺物出土状況

(服部)

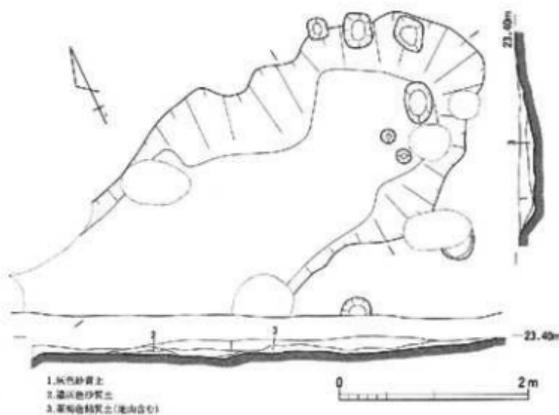


第50図 土坑41・42・43 平面・断面図 (1:60)

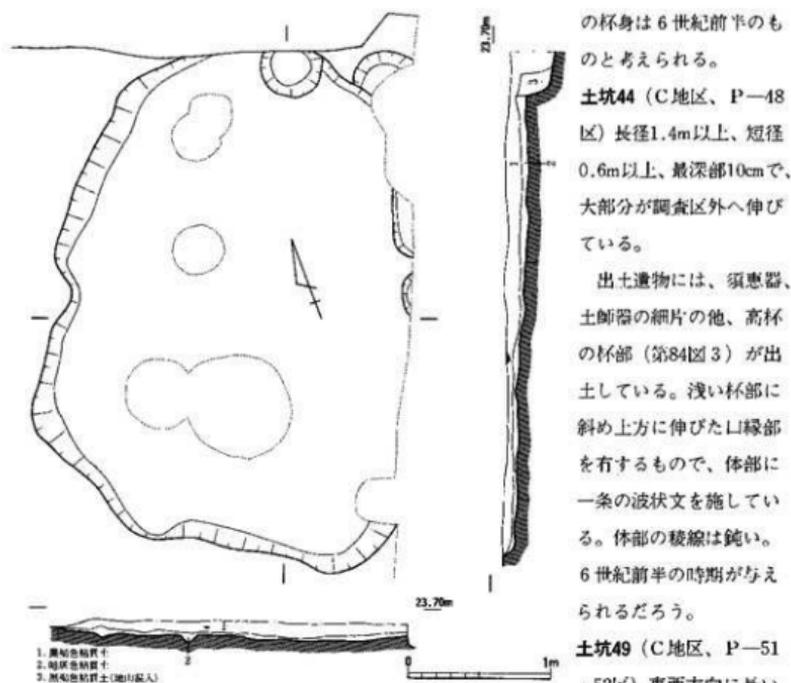
大化などの新しい特徴と杯蓋(1)の天井部のふくらみ、各部稜線にまだ鋭さを残している等の古い特徴を考え合わせると、これらの遺物は6世紀前半のものと考えられる。遺物の型式もほぼ一定していることから土坑41もこの時期のものとしてよいだろう。

土坑43(C地区、P-48・49区)土坑の規模は、長径4.7m、短径3.3m、最深度20cmと比較的大型の土坑である。床面に若干の起伏をもつ。土坑内のピットはいずれも埋土掘り上げ後に検出されたものである。弥生時代の土坑42に東接し、一部それを切っている。土坑41のところで説明したように、土坑41と一連の遺構である可能性が高い。土坑内堆積は暗茶褐色土の単一層である。

出土遺物(第84図1、2)には、須恵器、土師器の細片が多くみられるが、図示したのは、杯身(1、2)2点にすぎない。これらには、立ち上がり部が内傾する点、口縁端部や受け部端部が丸みをもつなどの新しい特徴と、明確な稜をもった口縁端部内面などの古い特徴が見られ、これら



第51図 土坑49 平面・断面図 (1:60)



第52図 土坑54 平面・断面図 (1:40)

径4.9m以上、短形2.3m以上、最深部20cmで、一部調査区外に伸びている。埋土は3層に分かれ、ほぼ水平に堆積している。土坑内にみられるピットは、埋土掘り上げ後に検出されたものである。

出土物には、須恵器、土師器の細片が多くみられる。須恵器には、蓋杯、甕、鉢等の器種がみられたが、このうち図示したものは3点にすぎない(第84図4~6)。4は大型の浅鉢で、口縁端部は凹面をなしている。5は杯蓋とみられる。扁平な形態をもち口縁端部は丸くおさめられている。6は杯身で、立ちあがりやや内傾し、端部は丸くおさめられている。5がこの土坑の埋設時期を示す資料と考えられ、6世紀末葉の時期が与えられる。

土坑54(C地区、P-54・55区)長径3.6m、短径2.5m以上、最深部12cmで、浅いが大型の土坑である。平面形は、いびつながら方形に近い形状を呈する。当初、住居跡ともみられたが土坑内には、上屋を想定させるようなピットは検出されなかった。埋土は、2層に分かれ、遺物の多くはこの上層から出土したものである。

出土遺物(第84図9~14)には、須恵器、土師器がみられ、須恵器には若干の生焼けを含んでいる。9は高杯の脚で、10は杯蓋である。天井部と口縁部を界する凹線や襷は認められない。

の杯身は6世紀前半のものと考えられる。

土坑44(C地区、P-18区)長径1.4m以上、短径0.6m以上、最深部10cmで、大部分が調査区外へ伸びている。

出土遺物には、須恵器、土師器の細片の他、高杯の杯部(第84図3)が出土している。浅い杯部に斜め上方に伸びた口縁部を有するもので、体部に一条の波状文を施している。体部の稜線は鈍い。6世紀前半の時期が与えられるだろう。

土坑49(C地区、P-51・52区)東西方向に長い不定形な土坑である。長

11は杯蓋である。12は、蓋杯反転前の立ち上がり部の短い杯身である。13は短頸甕である。14は、甕形土器の焚口部右側の鏝部の一部である。この土坑の埋没時期は15、17が示しており、6世紀末から7世紀初頭の時期が与えられる。

土坑55（C・D地区、P-58区）長径1.8m、短径1.6m、最深部30cmで、不定形を呈する。埋土は3層に分かれ、上層は黒褐色粘質土、中層は堅くしまった淡灰色土、下層は地山を含む黄白色粘質土である。上層の黒褐色粘質土は、当遺構の周辺を厚さ10cm内外で覆う包含層と同質で、ほとんどの遺物がこの層から出土した。

出土遺物（第84図15、16）には、須恵器、土師器が見られ、器種には、甕・琖がある。甕（16）は口縁端部を下方に拡張するタイプのものである。琖（15）は二条の凹線の中に櫛捺列点文をめぐらす。また下層からは、縄文時代の凹基式石鏝（第103図10）1点を検出した。混入遺物と思われる。

（岡村）

打裂石鏝は片方の逆刺を欠失する。基辺の抉りは大きく、逆刺の先端は尖る。両面に大剝離面をわずかに残す。重量0.4g。肉眼観察によれば石材はサヌカイトと思われる。

（松本）

（3）溝状遺構

溝2（A地区、P-15・16区）検出長7.6m、幅0.4～0.5m、深さ5～8cmを測る。竪穴式住居跡6に重複するが、本来は西側にさらにのびていたものと思われる。走行方位はほぼ東西である。埋土は暗茶褐色粘質土で、須恵器片がやや多く出土している。

溝底部より出土した把手付埴（第85図1）は、カップ形を呈する体部中央に、鍵状に曲がる把手をとり付けたものである。

溝3（A地区、P-17区）検出長4.3m、幅0.3～0.6m、深さ15cm前後を測る。土坑22と重複するが、埋土に大差なく、新旧関係は明らかでない。走行方位はN-60°-Eである。茶褐色粘質土を埋土としている。

出土遺物（第85図2、3）として、須恵器の無蓋高杯、土師器甕等がある。いずれも後期前半頃に比定されるものであるが、土師器甕については柴原遺跡出土資料の中に類似するものがある。

溝4（A・B地区、P-17・18区）検出長5.5m、幅0.5～0.9m、深さ約20cm。埋土に暗茶褐色粘質土、黒褐色粘質土の堆積がみられ、弥生土器片、須恵器片が出土している。走向方位はN-26°30'-W。

溝6（B地区、P-19・20区）竪穴式住居跡7に重複する溝で、検出長5.2m、幅0.2～0.6m、深さ3～15cm。暗茶褐色粘質土を埋土とし、やや多量の弥生土器片、須恵器片が出土している。溝の走向方位はN-9°-Wで、ほぼ南北に近い。

溝7（B地区、P-20区）検出長1.9m、幅80～90cm、深さ10cm前後を測る。検出長が短く、溝とするにはやや問題がある。暗茶褐色粘質土の堆積があり、弥生土器片、須恵器片が出土。

溝8（B地区、P-20・21区）削平のため一部が途切れているが、検出長7.2m、幅0.2～0.7m、

深さ7~10cm。暗茶褐色粘質土を埋土とする。多数の弥生土器片、須恵器片が出土。走向方位はN-63°-E。

溝11 (B地区、P-23~27区) 大きく弯曲しながらのびる溝で、検出長約18m、幅0.5~0.8m、深さ10~30cm。底のレベルは東側に向かって徐々に落ちる。溝12、13と重複するが、埋土の違いから溝13よりは後に掘り込まれたものらしい。溝12との関係は明らかにできなかった。また溝13との交点付近で一旦途切れるが、それより東側約6mの範囲で地山自体が大きく落ち込んでおり、のちの掘削に伴い消失したものとみられる。暗茶褐色粘質土を埋土とする。

埋土中より多量の遺物が出土した(第86図1~8)。立ち上がりが高く、口縁端部に明瞭な段を有する杯身(1、2)、やや深い体部をもつ無蓋高杯(3)、甗の把手(4)、および底部(5)、壺口縁部(6)、甕口縁部(7、8)、などがあり、いずれも6世紀前半代のものとして大過ないものとみられる。

溝12 (B地区、P-24区) 検出長3.7m、幅0.8~1.4m、深さ10~15cm。溝11と合流、あるいは重複する。溝11以南に続かないことを重視すれば、溝11と併存、合流していた可能性の方が高い。埋土として暗茶褐色粘質土の堆積があり、多量の弥生土器片、須恵器片が出土している。走向方位はN-13°-W。

出土した杯身(第87図1、2)は、溝11出土のものの特徴に大差はみられず、出土遺物の上



第53図 溝14 遺物出土状況

からも両溝の同時期性が窺われる。

溝13 (B地区、P-24・25区) 検出長3.8m、幅0.4~0.7m、深さ約10cm。溝11と重複し、切られている。埋土には茶褐色粘質土の堆積がみられ、弥生土器片、須恵器片が出土している。走向方位はN-24°-W。なお溝

11以南には続かず途切れているが、P-26区付近の落ち込みのため削平されたものとみられる。走向方位からすると、あるいは溝15と同一の溝である可能性もある。出土遺物の年代観もこれと矛盾するものではない。

溝14 (B地区、P-25区) 平面形は大きくU字状を呈し、溝というよりもむしろ不定形な土坑とすべきかも知れない。幅0.9~1.8m、最大径3.7m、深さ10~20cm。埋土には暗茶褐色粘質土の堆積がみられ、土師器片、須恵器片を主体とする遺物がかなりまとまって出土した。

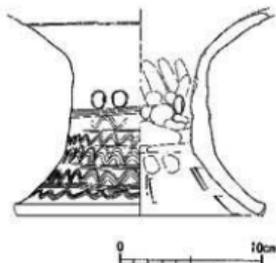
出土遺物として杯蓋、杯身、有蓋高杯の蓋、甗、甕等がある(第87図3~9)。杯蓋は天井部と口縁部を界する稜、および口縁端部内面の段が明瞭なもの(3)と、いずれも不明瞭で高い

口縁部をもつもの(4)がある。杯身(5、6)は立ち上がりが高く、傾斜も強いもので、口縁端部の段も明瞭である。また体部外面の3分の2以上に回転ヘラケズリを施し、比較的古い要素をとどめる。有蓋高杯の蓋(7)や甕口縁部(9)にみられる特徴も、蓋杯と同様にやや古い様相が窺われ、土坑3と併行、土坑22よりも若干先行して営まれたものと思われる。

溝15(B地区、P-26区) 竪穴式住居跡10に重複して掘り込まれた溝である。検出長3.5m、幅0.4-0.6m、深さ10cm前後を測る。北端部は落ち込みのため徐々に浅くなって途切れている。また南端は溝16に切られている。暗茶褐色粘質土を埋土とし、出土遺物として弥生土器片および須恵器片がある。走向方位はN-12°-W。

溝16(B地区、P-26区) 調査区を横断するように走る溝で、幅0.7-1.5m、深さ10-20cm。溝11に重複して掘り込まれている。茶褐色粘質土を埋土とし、弥生土器片、土師器片、須恵器片等が出土している。走向方位はN-36°-E。

出土遺物として、杯蓋、有蓋高杯、甕等の須恵器の他、1点の埴輪片を含む(第88図1-4)。杯蓋(1)は破片であるが、全体の形状、稜および口縁端部内面の段が明瞭なことなど、古い要素をもつ。埴輪片(4)は突帯部分の破片で、内外向ともに磨滅のため調整は不明。ただし突帯の突出度は高く、前期的な特徴が窺われる。



第54図 溝17 出土遺物(1:4)

溝17(B地区、P-26・27区) 弧状を呈する溝で、検出長約2.3m、幅0.3-0.5m、深さ10cm前後を測る。暗茶褐色粘質土の堆積があり、埋土中にやや多くの炭化物が認められた。溝16との重複関係は明らかでない。

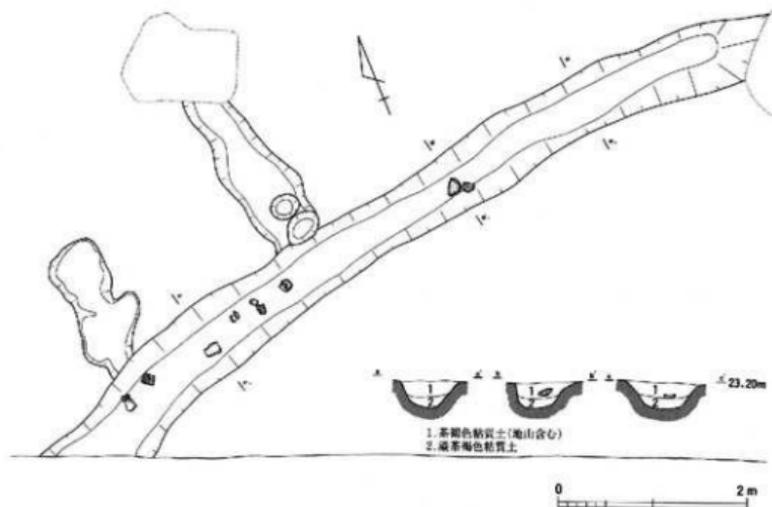
出土遺物として、ややまとまった量の弥生土器片、土師器片、須恵器片がある(第89図1-5)。杯身(1)は口径がやや小さいもので、立ち上がりが高く、口縁端部内面の凹線も明瞭に認められる。この他、高杯脚部(2)、甕口縁部(3、4)、器台脚部(5)等があり、うち器台脚部は杯身に比べやや年代的に下降するものである。ほぼ6世紀中頃から後半にかけて営まれたものとみられる。

また、ほぼ完形を保って出土した器台(第54図)は、弥生中期末から後期前半の特徴を有するもので、外面を柳掻きによる直線文および波状文で飾る。同一層位において須恵器、土師器と共存し、明らかに混入によるものとみられる。

(服部)

溝19(C地区、P-45・46区) 長さ1.4m、幅0.7m、深さ5cmの浅い落ち込みである。溝内堆積土は、地山を多く含んだ茶灰褐色粘質土の単一土層である。

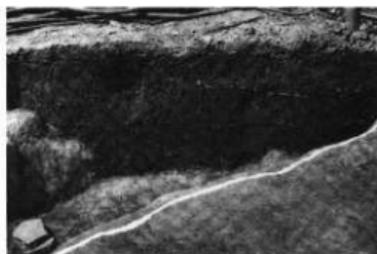
出土遺物には、須恵器、土師器が少量みられる。須恵器には杯身、杯蓋、甕がみられる。このうち図示可能であった杯蓋(第90図1)は、内面のかえりが内傾し、口縁部より下方に突出



第55図 溝21 平面・断面図 (1:60)

するものである。宝珠つまみの有無は判別不能である。7世紀前半の時期が与えられるが、一点だけのため溝の埋没時期を示すものかは明らかでない。

溝20 (C地区、P-46区) 長さ1.8m、幅0.6m、最深部10cmの浅い落ち込みで、溝21によって切られている。溝内検出のピットは、埋土掘り上げ後に確認されたものである。溝内堆積土は、茶褐色粘質土の単一土層である。



第56図 溝21 土層断面

遺物は、須恵器、土師器を少量検出したが細片のため図示しえない。

溝21 (C地区、P-45~47区) 長さ8.6m以上、幅0.6~0.8m、深さ30cmの規模を有し、ほぼ東西方向に若干の弧を描いて走る溝で、一端は調査区外に伸びている。C・D地区の溝の中では最も大きく、かつ比較的多くの遺物を検出した。溝内堆積土は2層に分かれ、遺物の多くは上層から検出されている。また、溝の床面レベルはほぼ一定で、若干東側の方が低い程度である。

出土遺物は、須恵器、土師器からなり、須恵器には杯身、杯蓋、甕、器台が確認できる。これらのほとんどが、溝の床面から浮いた状態で検出されており、溝がある程度埋まってから破壊されたものと考えられる。

図示した出土遺物は、須恵器の杯身、甕、器台である(第90図2~5)。杯身(3、4)は、立ち上がり部、受け部の端部は丸く、鈍い。甕(2)は、口縁部端部が下方へ拡張するタイプ

のものである。5は、器台の脚部である。杯身(3、4)はその特徴から6世紀前半のものと考えられ、他の遺物も、ほぼ同様であることから、これらの遺物は溝4の埋没時期を示すものと考えられる。

溝22(C地区、P-47・49区)長さ10m以上、幅0.4mの規模で、ほぼ東西方向に走り、調査区外へ伸びている。同方向に走る溝23とともに、弥生時代の土坑40を切っている。深さが10cm前後と浅く、溝の底面レベルは東に行くにつれて低くなっている。溝内堆積土は、茶灰色粘質土の単一土層である。

出土遺物には、土師器の細片と須恵器の高杯脚部がある。高杯脚部(第90図6)は、杯部と脚端部を欠いているが、定形化以前の謂ゆる初期須恵器に属する。八の字形に広がった脚部には一条の鋭い突帯、および明瞭な段を有する。また脚部に刀子状の工具による刺突を3方に配し縦方向のヘラミガキがみられる。このタイプのもは近接する桜井谷古窯跡群には今まで見られなかったものである。他の遺物は細片のため、この資料が溝22の埋没時期を示すものかは明らかでない。

溝23(C地区、P-47・48区)長さ3.8m以上、幅0.5mの規模で、溝22と同じ方向に伸び、かつ溝22によって切られている。両端は攪乱によって破壊されているが、溝22同様、西側弥生時代の土坑40を切り、調査区外に伸びている。深さは20cm程度であり、溝の床面レベルは、東へ行くにつれて低くなっている。溝内堆積土は淡茶灰色粘質土で、溝22の堆積土と類似する。溝が走る方向と堆積土から、溝23と溝22とは継起して掘削されたと思われる。

遺物は、須恵器、土師器が少量出土している。いずれも、小片のため図示しえないが、須恵器は古墳時代後期のものである。また、これらには生焼けや不良品を若干含んでいる。

溝24(C地区、P-49区)幅0.6m、長さ1.6m以上、深さ16cmの浅い落ち込みである。溝内堆積土は茶褐色粘質土の単一土層である。須恵器、土師器片が少量出土している。

溝25(C地区、P-50区)長さ4.3m、幅0.8m、最深部25cmの比較的大型の溝である。溝内堆積土は、淡茶褐色粘質土の単一土層である。堆積土中から検出されたものには、須恵器、土師器がある。その中で図示したものは、2点(第90図7、8)にすぎない。8は高杯の脚部で、端部は内側で接地する。7は壺で、「く」字形の口縁に片口状の袈りをもつものである。

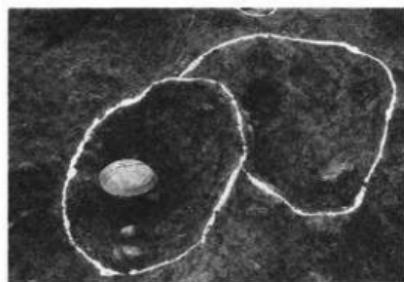
溝26(C地区、P-50区)長さ1.4m以上、幅0.4m、深さ10cmの浅い溝である。溝の一端は調査区外に伸びている。溝内堆積土は、淡茶褐色粘質土の単一土層である。

出土遺物は、須恵器、土師器の細片を検出している。

溝27(C地区、P-54区)長さ1.8m以上、幅0.7m、深さ15cmの溝で、調査区外へ伸びている。近世の井戸2とそれに付随すると考えられる溝28によって切られている。溝内堆積土は、暗茶灰褐色粘質土の単一土層である。

出土遺物には、須恵器、土師器の細片がみられる。

溝29(C地区、P-56区)長さ5.5cm以上、幅0.4~0.6m、深さ5~10cmの浅い溝である。ほぼ



第57図 SP483 遺物出土状況

調査区に直交して走り、溝両端とも調査区外に伸びている。溝の底面レベルは、ほぼ一定で、若干北東側が深い程度である。溝内堆積土は、茶褐色粘質土の単一土層である。

出土遺物には、須恵器、土師器の細片がみられる。(岡村)

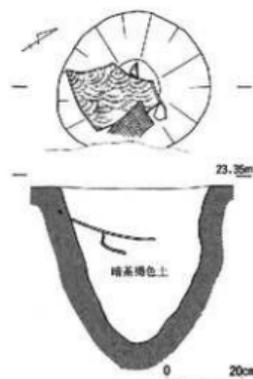
(5) ビット (小穴)

調査区域より検出したビットについては、すでに第2節(6)の中で、弥生時代に属するものも含め詳述したところである。よって、ここではとくに、C・D地区で検出した2、3の特殊なビットについてのみ報告することとした。

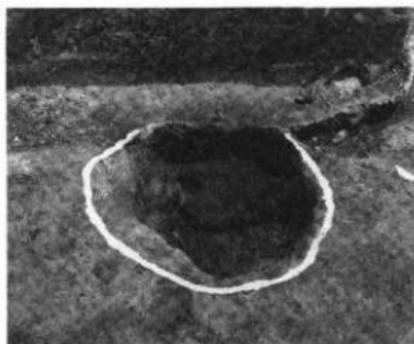
先に、弥生時代のビットの項で述べたように、C・D地区で検出されたビットの大部分

は、古墳時代後期以降のものである。この中には、奈良時代以降のビットも含まれているが、他の土坑、溝との比率からすれば、その多くは古墳時代後期に属するものと考えられる。このうち、SP934からは、大型の甕の胴部を含む須恵器を多量に検出した。甕の胴部の内面を上にして、ビットの底から約27cmの高さに据えられていた。恐らく、柱の高さ調整のために、根石として用いられたものと思われる。これと同様のビットは、他にも、もう一ヶ所で確認されている。

出土遺物には、甕の胴部破片の他に、杯蓋(第91図24、25)がある。いずれも縁は鋭く、口縁端部は外反し、内面に弱い凹線を巡らしている。この遺物から、このビットの埋没時期は6世紀前半と考えられるが、残念ながら対応するビットは確認できなかった。(岡村)



第58図 SP934 平面・断面図 (1:15)



第59図 SP934 遺物出土状況

第4節 奈良・平安時代の遺構・遺物

(1) 遺構の概要

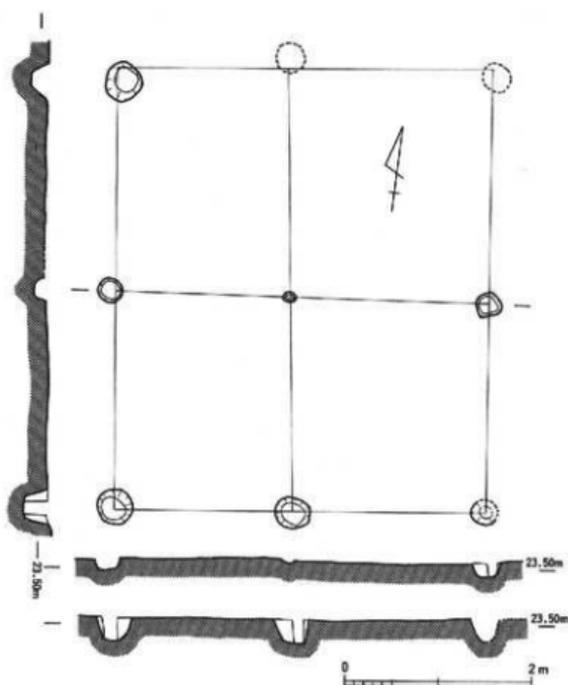
奈良・平安時代に属する遺構として、掘立柱建物跡1、井戸1、土坑2、土壇墓1がある。今回の調査で検出した遺構総数に比すると、数量的にはかなり少ないが、これはたまたま該期の遺物が埋土中に混入するかもしれないという、偶然性にもとづく可能性が高い。すなわち、元来存在したと思われる古墳後期の遺物包含層上部より、奈良時代以降の遺構が掘り込まれた場合、埋土中において古墳後期の須恵器等が混入することは当然考えられるのであり、既に報告した古墳時代の遺構の中に、奈良時代以後に属するものが少なからず存在する可能性は極めて高いといえる。ただこれまでに述べてきた出土遺物の中に、あるいはのちにふれる包含層出土遺物中において、奈良時代以降の遺物が極めて少ないことは、該期の遺構が上述のもの以外に存在したとしても、さほど顕著なものではなかったことを示すものといえる。 (服部)

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡5 (C地区、P-56・57区) 桁行2間(4.6m)、梁行2間(3.9m)の規模をもつ。

建物の主軸方向は、N-6.5°-Wで、ほぼ南北方向に建てられている。柱間寸法は、桁行で2.2~2.3m、梁間で1.95mである。柱穴はほぼ正円形を呈し、東柱と考えられる中心の柱穴が径15cm、深さ2cmを測る他は、径25~40cm、深さ15~30cmである。

出土遺物には、須恵器、土師器、黒色土器がみられる。しかし、このうち図示したのは一点(第91図35)にすぎない。長胴甕の破片で、「く」字状に外反する口縁をもち、屈曲

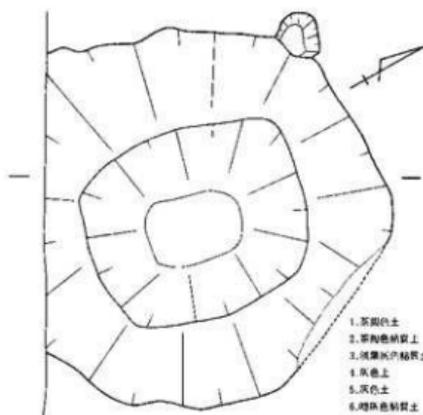


第60図 掘立柱建物跡5 平面・断面図(1:60)

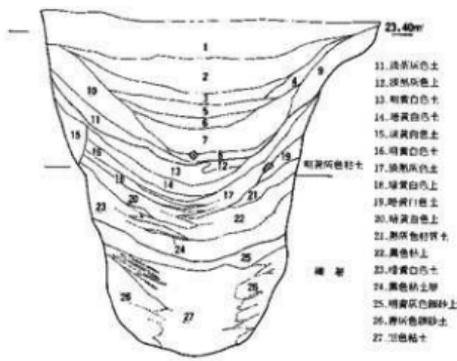
部は肥厚している。外面は粗いハケ調整を施している。他には皿と思われる黒色土器A類の細片が出土している。以上の遺物から、掘立柱建物は、奈良時代後半以降のものといえるが、下限を示す資料がないため、詳細な時期決定はできない。

(3) 井戸

井戸3 (D地区、P-58区) ほぼ円形の掘りかたを有する井戸である。一部調査区外に広がっているが、径2.7~2.8m、深さ2.4mを測る。掘りかた途中の-1.2m~-1.5mに傾斜変換点をもち、それより下部はほぼ方形を呈する。埋土は、上から茶褐色系埋土、地山を多く含んだ埋め灰し土、青灰色系自然堆積土に3大別され、それぞれ、1~11層、12~24層、25~27層が該当する。



1. 茶褐色土
2. 茶褐色粘質土
3. 埋め灰し粘質土
4. 灰土
5. 灰土
6. 埋め灰し粘質土
7. 埋め灰し粘質土
8. 埋め灰し粘質土
9. 埋め灰し土
10. 埋め灰し土



11. 埋め灰し土
12. 埋め灰し土
13. 埋め灰し土
14. 埋め灰し土
15. 埋め灰し土
16. 埋め灰し土
17. 埋め灰し土
18. 埋め灰し土
19. 埋め灰し土
20. 埋め灰し土
21. 埋め灰し土
22. 埋め灰し土
23. 埋め灰し土
24. 埋め灰し土
25. 埋め灰し土
26. 埋め灰し土
27. 埋め灰し土

第61図 井戸3 平面・断面図 (1:40)

青灰色系自然堆積土の中心部には、約50cmの幅の黒色粘土層がみられた。曲物、その他の使用の可能性もあるが、木質は全く検出されず、素掘りの井戸と考えたい。

出土遺物(第92図1~7)には、須恵器、土師器、瓦がみられる。これらは、茶褐色系埋土から比較的多く出土し、青灰色系自然堆積土からは少なかった。1、2は土師器の杯であるが、形状が若干異なる。1は底部からなだらかに立ち上がり、腹部に弱い指頭汗痕がみられる。口縁端部は丸く仕上げられている。2は、底部から弯曲しながら立ち上がり、口縁部で少し外反する。口縁端部の形状は、磨滅のため知ることができない。1、2とも恐らく在地産の土師器と考えられる。1は第17層から、2は第21層から検出している。3は長頸壺の頸部で、第25層から検出している。4は高杯の脚部で無孔である。第26層から検出した。5、6は把手で、5は大きく屈曲して立ち上がる。5は第1層、6は第3層から検出している。7は平瓦で須恵質である。

内面には布目、外面にはタタキメを有する。

近世・近代を除くと奈良時代以降の遺構は、C・D地区では掘立柱建物跡5のピットから黒色土器A類を検出している他は顕著でない。このことから恐らく井戸3も、奈良時代後半から平安時代にかけてのものと思われる。

(4) 土坑

土坑51 (C地区、P-53区) 長径4.8m、短径

2.2m、最深部32cmで、比較的大型の土坑である。平面形は、ややびつながら、長方形を呈する。土坑内堆積土は数層に分かれるが、いずれもブロック状を呈し、掘削後ほどなく、人為的に埋め戻されたものと思われる。

出土遺物(第84図)には、須恵器、土師器の細片が多くみられる。このうち図示したものは、杯蓋(7)と杯身(8)である。このうち杯蓋は、床面直上から検出し、この土坑の埋没年代を示す資料である。中央部がやや隆起した扁平な宝珠つまみを有するが、口縁端部を欠いているため正確な年代決定はできない。しかし他の遺構に奈良時代後半以降のものがみられることから、該期のものとして大過ないものと思われる。また、杯身(8)は最上層から検出されており、遺構の掘削時期とは直接関係しない資料である。

土坑52 (C地区、P-53区) 長径2.6m、短径2.0m、最深部15cmで、浅い落ち込み状を呈する。

土坑内堆積土は、上下2層に分かれ、隣接する土坑51を切っていることが、断面観察から窺える。

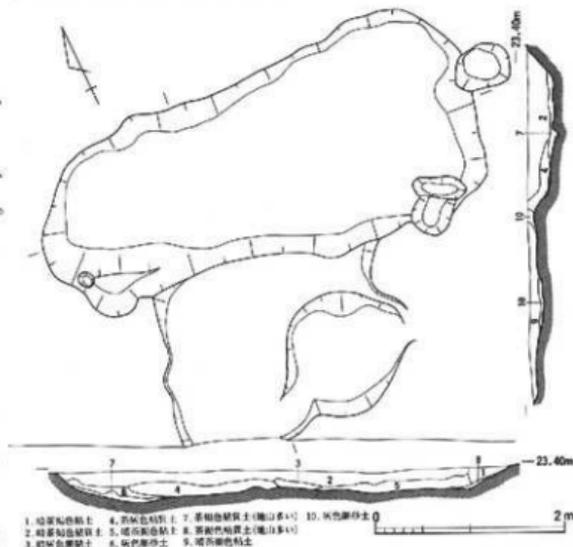
出土遺物には、須恵器、土師器の細片が見られる。重複関係および埋土の類似性から土坑51と同様、恐らく奈良時代、平安時代に属するものと思われる。(岡村)

(5) 土壌墓

土坑13 (A地区、P-10・11区) 長径1.83m、短径0.74m、残存深度6.5cmを測り、平面形は長楕



第62図 井戸3 遺物出土状況



第63図 土坑51、52 平面・断面図 (1:60)



第64図 土坑51 遺物出土状況

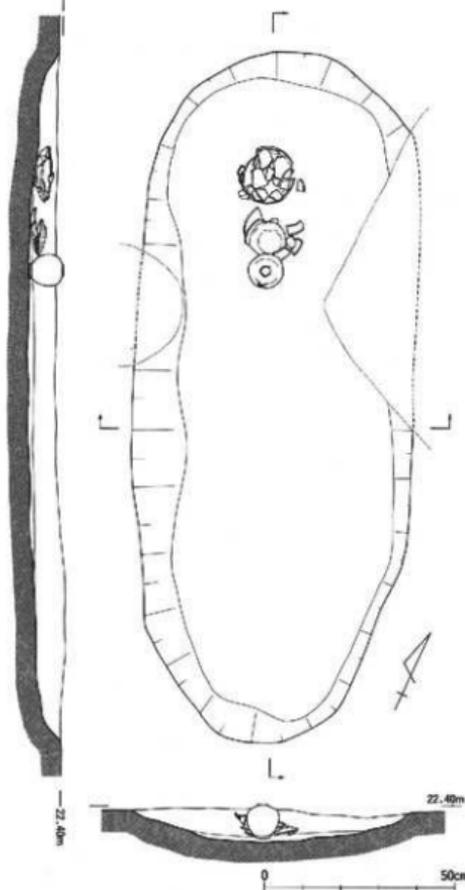
円形を呈する。埋土は赤褐色の鉄分を含んだ暗赤褐色粘質土である。

土坑北側に偏して、灰釉陶器の壺、黒色土器、土師器杯が一括して出土している(第93図1~5)。出土状況は、最も南側に灰釉陶器の壺が正立の状態、その北側に土師器の杯を上(5)、下(4)に、互いに口縁部を合わせるように出土した。また最も北側には、黒

色土器(2)を下に、土師器の杯(3)を上、やはり口縁部を合わせて置かれていた。

以上、土坑の規模、遺物の出土状況からみる限り、当遺構の性格は土城墓の可能性が最も高いと考えられる。なお遺構の主軸方位は $N-9^{\circ}-W$ で、墓とすれば北枕に埋葬されたものと思われる。

出土遺物についてみると、1は東濃産の灰釉陶器で、口縁部は削平により欠失したものとみられる。軸は肩部付近にのみ施される。2はA類の黒色土器で、外面の一部を除いてほぼ全面に炭素の吸着がみられる。外面の一部および内面にやや粗いヘラミガキを施す。3、5はともに「て」字状口縁を有する土師器の杯である。3、5がやや赤色系統の胎土を有するのに対し、4は白色系の胎土を有する。



第65図 土坑13 平面・断面図(1:15)

第5節 その他の遺構、遺物

(1) SX01、SX02

SX01 (B地区、P-28区) 調査区を地形的に大きく二分する谷状地形の西端部直下にて検出した、長径約6m、短径2.7m、深さ約2.6mの大形土坑である。平面形は南北に長い楕円形を呈し、断面形態は深いU字状を呈する。この土坑は黄白色砂質粘土(上部)と礫層(下部)からなる地山を急角度で掘り込んだもので、一部湧水層に達している。

埋土は大きく二分される。すなわち下層には約1.4mの厚さで青灰色粘土が堆積し、その埋土の性質から、長期間一定の滞水状態にあったことが知られる。一方上層には黄褐色粘質土、灰褐色粘質土、地山の黄色粘土を含む淡茶褐色土が互層状に堆積し、土坑の大半が自然埋没したのち人為的に埋め戻されたと推定される。

遺物は上、下層のいずれからも出土しているが、概して上層に集中する。種類としては古墳時代後期の須恵器が最も多く、ついで弥生土器、土師器があり、この他中世以降の遺物を数片含む(第94図2、4、6、7)。須恵器では甕口縁部(2)、高杯蓋(4)の他、杯蓋、杯身、甕体部破片等がかなりあり、他の遺構、包含層の遺物とも期的には大差ない。他の遺物とともに、埋め戻し土にもともと混入していたものとみられる。その他、土師器の把手(6)、須恵質平瓦片(7)などがある。当遺構の埋没時期を示す資料は乏しいが、SX02との重複関係から近世以降に掘削されたものと考えられる。

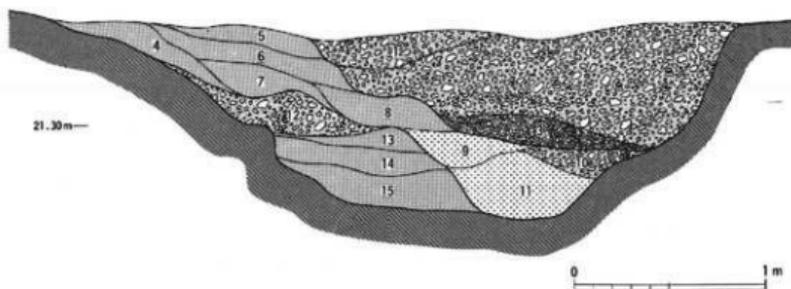
遺構の性格としては、埋土の性質より貯水施設のような機能が考えられるが、目的等については判然としない。

SX02 (B地区、P-29、30区) SX01の東側に接して南北にのびる不定形な溝状遺構である。最大幅3.3m、最大深度約1mを測り、南側に向かって大きく幅を減じ、南側調査区外にて途切れるものとみられる。埋土には礫層、砂礫層、粘性を帯びた砂質土層がみられ、第9、10、12層の上下において大きく二度の埋没過程が窺われる。各段階とも茶灰色系の粘質土が、東側肩部に流れ込んだのち、地山から遊離した大量の礫石によって埋没したものとみられる。

遺物は、主として礫層から出土した。種類として須恵器が最も多く、少量の弥生土器、土師器、埴輪片の他、中、近世に属する瓦、瓦器、摺鉢、白磁片等がある(第95図)。須恵器には甕口縁部(1~5)、壺口縁部(6)、杯蓋(7)、高杯(8)等があり、



第66図 SX01 土層断面

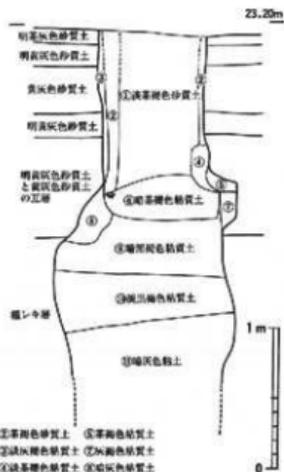
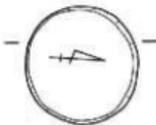


1. 礫層(径10cm前後、赤灰色粘質砂土を含む)
2. 礫層(径5~10cm前後、濃茶灰色雜粒で粘質砂土を含む)
3. 礫層(径より微い灰色)
4. 赤灰色粘質砂土(径より微い砂質)
5. 赤灰色粘質砂土(褐色斑点有り)
6. 濃茶灰色粘質砂土(褐色斑点有り)
7. 濃茶灰色粘質砂土(褐色斑点有り)

8. 赤灰色粘質土(褐色斑点有り)
9. 灰色砂礫土層(径1cm前後)
10. 礫層(径10cm前後、淡茶灰色粘質砂土を含む)
11. 礫層(径5~10cm前後)
12. 礫層(径10cm前後、濃茶灰色粘質砂土を含む、褐色斑点有り)
13. 赤褐色砂礫土層(径1cm前後、灰色斑点有り)
14. 濃灰色砂礫混粘質土(径1cm前後)
15. 灰色粘質礫混土層(径10cm前後)

第67図 SX02土層断面図(1:30)

他の遺構出土のものと同様、大半が古墳時代後期に属するものである。ただし5の甕口縁部破片は、端部直下に断面三角形の突帯を有する等の特徴からみて、初期須恵器の範疇に属するものとみてよからう。その他、やや時期の遡るものとして土師器高杯(9)、円筒埴輪片(17)がある。



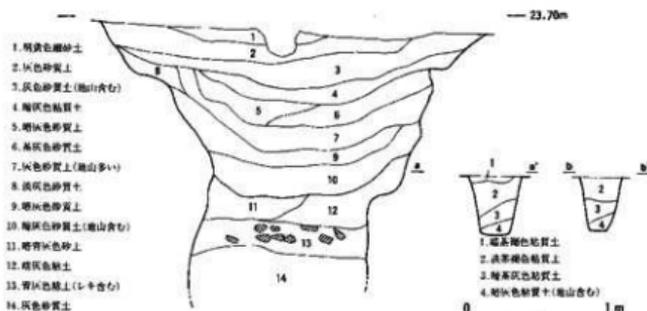
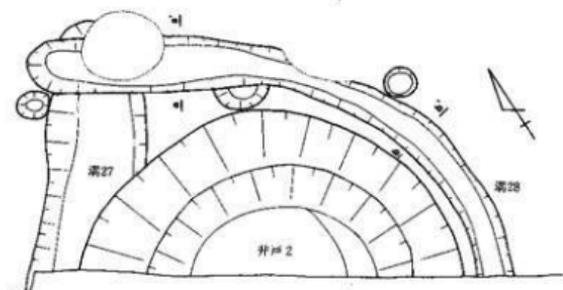
第68図 井戸1 平面・断面図(1:40)

上記遺物は、その大半が当遺構の時期よりも明らかに先行するもので、周囲の包含層から後世に流れ込んだとみられる。とくに須恵器の多くに破断面が著しく磨滅しているものがみられることが、このことを裏付けている。

中、近世に属するものとして、瓦質の花瓶(10)、瓦器坑底部(11、12)、丸瓦(14)、陶器の大甕底部(13)、摺鉢(15、16)がある。瓦器坑など13世紀代に遡るものもみられるが、10の印花文を有する花瓶や、16の備前焼摺鉢などは近世に下るものとみられ、当遺構の埋没時期もほぼこの頃と考えられる。なおSX01との重複関係からすれば、SX02の埋没後、SX01が掘削されたと推定される。(服部)

(2) 井戸

井戸1 (C地区、P-43区) 直径80cmの円形の掘りかたを有する素掘り井戸である。地山上部の粘土層、下部の粗砂礫層(湧水層)を2.5m以上の深さで掘り抜いており、-1.0m付近より以下の径を拡張している。埋土は、大きく人為的な埋戻し土と、自然堆積土に分かれる。



第69図 井戸2、溝27、溝28 平面・断面図(1:40)

後者では下層ほど粘性の強い泥状を呈していた。

出土遺物の多くは自然堆積土中より出土した(第96図)。そのほとんどが古墳時代後期に属する須恵器で占められ、甕口縁部(1、2)、広口壺(3)、杯身(4)、無蓋高杯(5)、提瓶の口縁部とみられるもの(6)等がある。いずれも6世紀前半代の特徴を有し、周囲の包含層中より流れ込んだものとみられる。当遺構の時期を推定させる資料として、伊万里系磁器碗の破片(7)がある。高台部に呉須による1条の圈線を巡らしており、17世紀以降に属するものとみられる。また産地は分からないが、摺鉢の口縁部破片(8)がある。

井戸2(C地区、P-54、55区)復元径2.8mを測る素掘りの井戸であり、南西の約半分が調査区外にのびる。断面の形状は、上部がすり鉢状、下部が円筒状を呈する。埋土は1~10が埋め灰し土、11以下は自然堆積によるものである。

出土遺物として、須恵器、土師器、陶器、磁器、瓦等があり、井戸2と同様、近世以降に営まれたものとみられる。(岡村)

(3) 包含層出土遺物

前章ですでに述べたように、今回の調査区域における遺物包含層は、後世の攪乱により遺存範囲が限られ、層厚も5~15cm程度の希薄なものであった。出土遺物としては須恵器が最も多

く、弥生土器、土師器の他、少量の縄文土器や石器類があげられ、全国的にも稀な鉄斧形土製品なども含まれる。個々の特徴については観察表にゆずり、種別ごとに大要のみ記すこととしたい。

縄文土器 (第98図49) 深鉢の口縁部付近の破片とみられる。刻目を施した突帯を巡らし、晩期後半に比定される。生駒西麓窯の胎土を有する。

弥生土器 (第98図1~48) 壺、甕、高杯、器台等の破片がある。遺構出土の遺物とも大差はみられず、中期後半(第Ⅲ・Ⅳ様式後半)から後期(第Ⅴ様式)に属する。このうち3の粗い波状文で加飾された二重口縁の壺破片は、後期終末(庄内式)に下る可能性がある。

須恵器 (第99、100図) 蓋杯、杯蓋、右蓋高杯、無蓋高杯、甕、匙、短頸壺、広口壺、甕、器台等の破片がある。杯身、杯蓋の編年観よりすれば、桜井谷編年¹⁾のⅠ型式4段階からⅡ型式3段階に対応するものと考えられ、他の器種もこれに矛盾するものではない。第100図6、7は小形の壺で、装飾付須恵器の一部とも考えられる。また21は高台の付く形式であり、奈良時代のもと思われる。

土師器 (第101図) 甕、直口壺、高杯の他、甕もしくは甕の把手とみられるものがある。甕破片(1)が奈良時代以後の特徴を示す他は、いずれも古墳時代に属すると思われる。とくに小形の甕破片(2)は外面のハケメおよび内面のヘラケズリの特徴から庄内式の終わりから布留式の初め頃、高杯(3~9)はいずれも布留式の範疇に属するものと考えられる。

埴輪 (第101図12) 朝顔形埴輪の口縁部破片とみられる。突帯の幅がやや狭く、突出度が高い点に古式の様相が認められる。第4次調査地点でも円筒埴輪片が出土しており、豊中グラウンド造成の際に出土した碧玉製鉄形石とともに古墳の存在を推定させる資料である。

瓦器 (第100図20) 断面方形の安定した高台がとり付く。竪穴式住居跡7の炉直上から出土した破片と同じく、12世紀代に比定される。

紡錘車 (第103図2) 須恵質のもので、径4.4cm、高さ1.9cmを計り、中心に径0.7cmの孔が貫通する。外面は丁寧なナデにより調整される。

鉄器 (第103図11、12) 11は長さ4.6cm、幅1.4cmで断面は不整な方形を呈する。鈍か刀子とみられる。12は長さ3.7cm、最大幅1.6cmで先端部を切損する。下辺が鈍角をなし、鈍いながらも刃部を形成する点から刀子とみられる。(服部)

鉄斧形土製品 (第103図1) 全長6.0cm、刃幅3.4cmを計り、刃部両端はやや欠損しているが弧状を呈する。袋部長は3.1cm、上部内径2.3cm、奥部内径0.8cmのほぼ断面円形を呈する。また袋部の接合部は上方で幅0.25cm、下方で0.4cm程の溝状を呈しているが、内面にまで貫通しておらず、溝の深さは0.1~0.2cmを計る。

刃部は両面から刃をつけていると考えられる。側面は左右より指で強くおさえて凹ませ、刃部と装着部を画している。全体の調整は、基部から刃部方向への指ナデを施し、内面は未調整に近いナデである。暗茶褐色を呈し、胎土には微細なチャート、クサリレキを若干含む。在地

の弥生土器の胎土とも大差ないものである。

(祭本)

石器類 (第103図3、7、9) 3は石匙と呼ばれる打製石器である。一般に「横型石匙」といわれる型式⁽¹⁾で、半月形の身部の片寄った位置に円形をつまみがつく。つまみ及び肩の部分は両面とも調整剥離がなされているが、刃部の調整剥離は片面のみである。したがって刃部は片刃で、刃角は45°～60°と鈍い。つまみの一部に胎色の物質が小さく付着しているが、膠着剤かどうかは不明である。重量は7.2g。肉眼観察によれば石材はサヌカイトと思われる。この種の石器は一般的に縄文時代の遺物であると捉えられているが、西日本では弥生時代にも残存することが指摘されており、今回出土の資料についても、その所属時期を明確にすることはできない。

7は有茎式の打製石鎌である。先端をわずかに欠損する。全長に対して基部が比較的長いのが特徴であるが、基部の作り出しはさほど明瞭でない。薄い剥片の縁辺部だけに細かい調整剥離を加えて整形しているため、両面に大剥離面が大きく残り、全体に扁平な作りである。重量1.2g。肉眼観察によれば石材はサヌカイトと思われる。

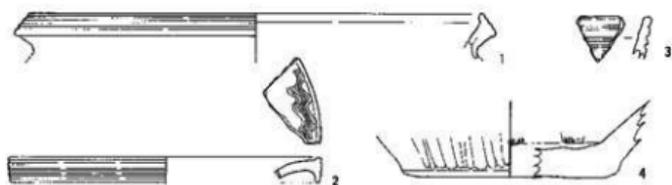
9は凹基式の打製石鎌である。先端と基辺の一部をわずかに欠損する。基辺の挟りは浅く、形態的には平基式に近い。両面に大剥離面をわずかに残す。重量0.9g。肉眼観察によれば石材はサヌカイトと思われる。

(松木)

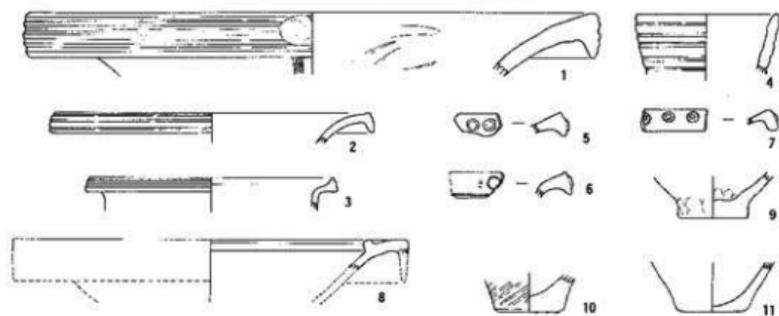
註(1) 木下亘「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷窯跡群2—17窯』少路窯跡遺跡調査団 1982

(2) 五味一郎「石匙」『縄文文化の研究』第9巻 1983

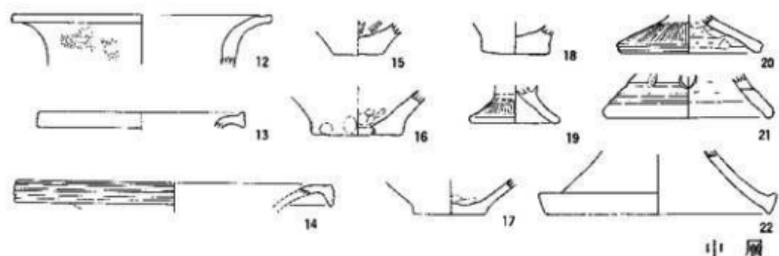
(3) 小林行雄、佐原真『築雲出』1964



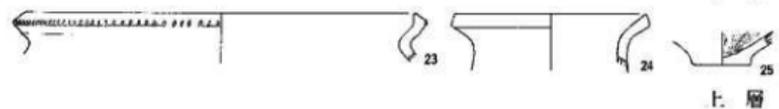
第70図 竪穴式住居跡1出土遺物



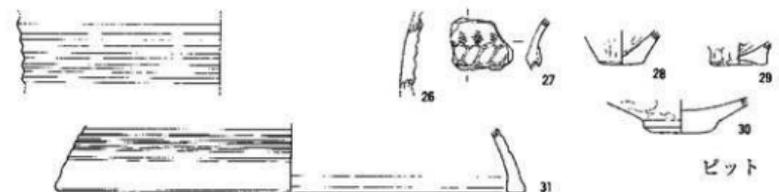
床面直上・下層



中層



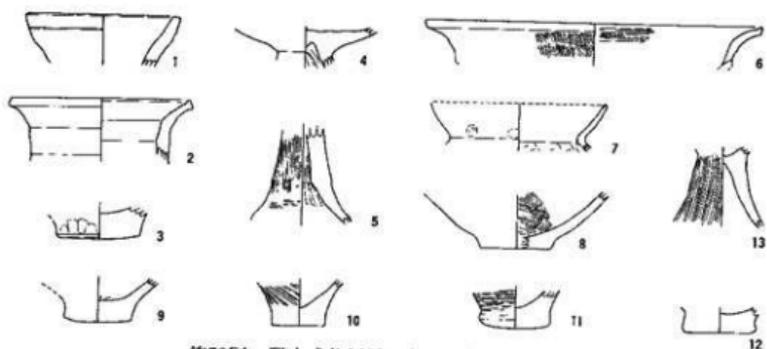
上層



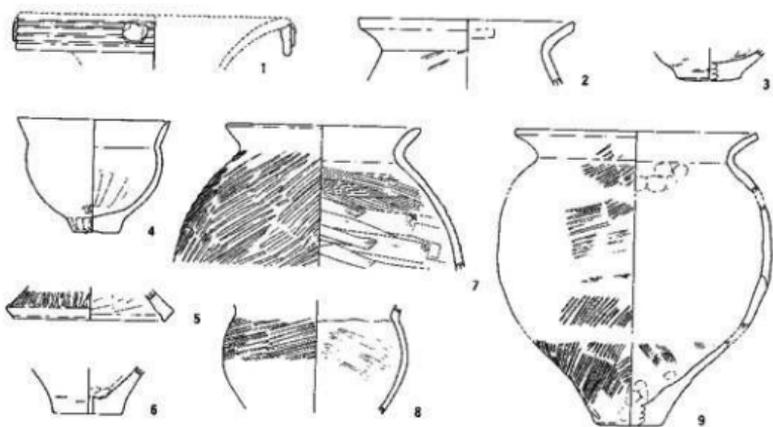
ピット

第71図 竪穴式住居跡2出土遺物

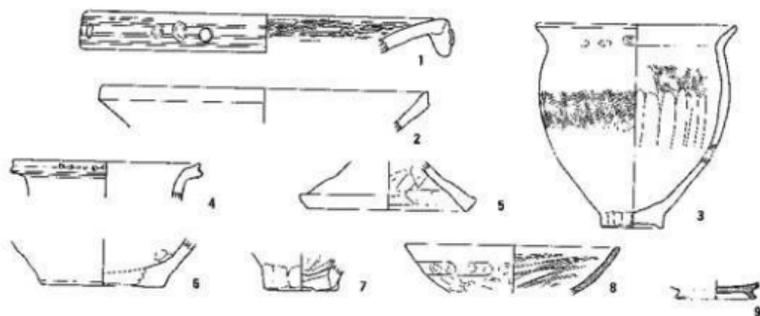




第72圖 豎穴式住居跡2 炉、土坑4 出土遺物

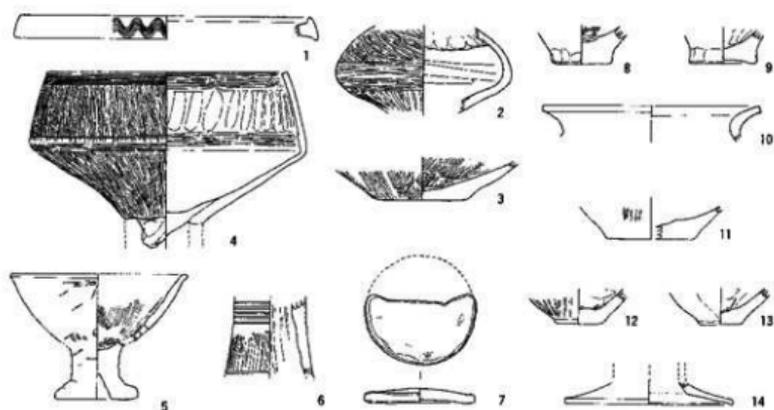


第73圖 豎穴式住居跡3、4 出土遺物

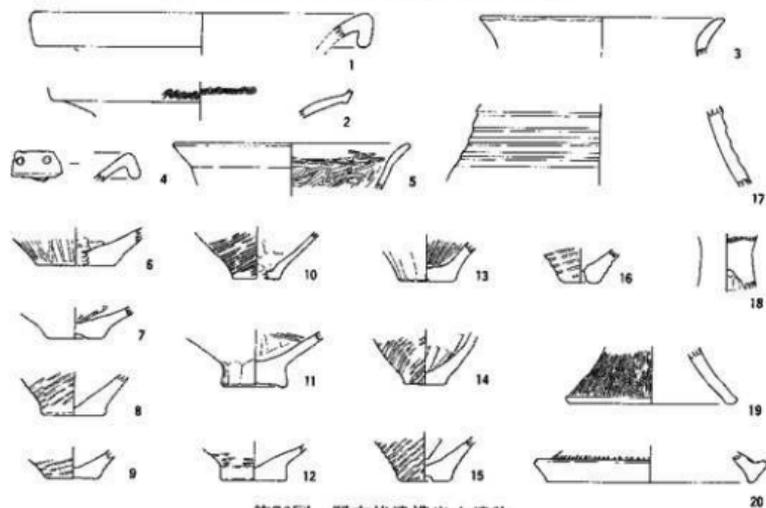


第74圖 豎穴式住居跡6 出土遺物

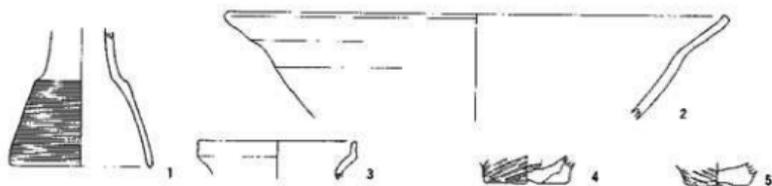




第75圖 竪穴式住居跡8、9、10出土遺物

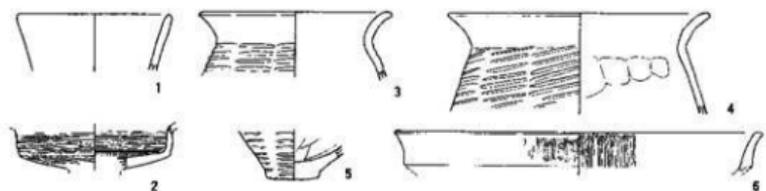


第76圖 竪穴狀遺構出土遺物

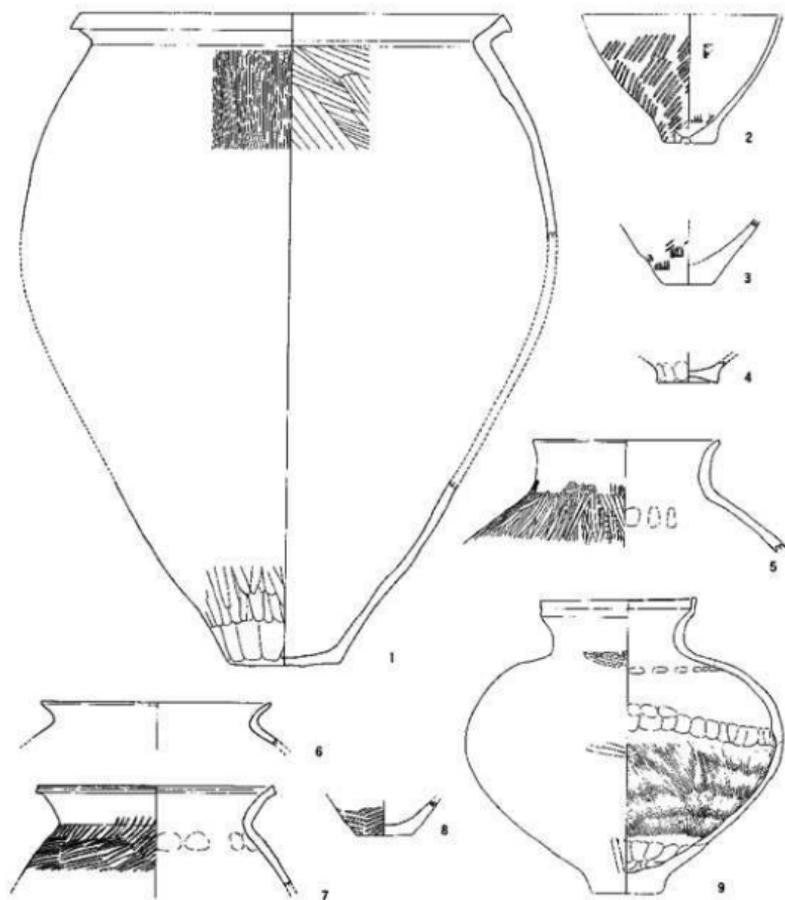


第77圖 土坑18、23出土遺物



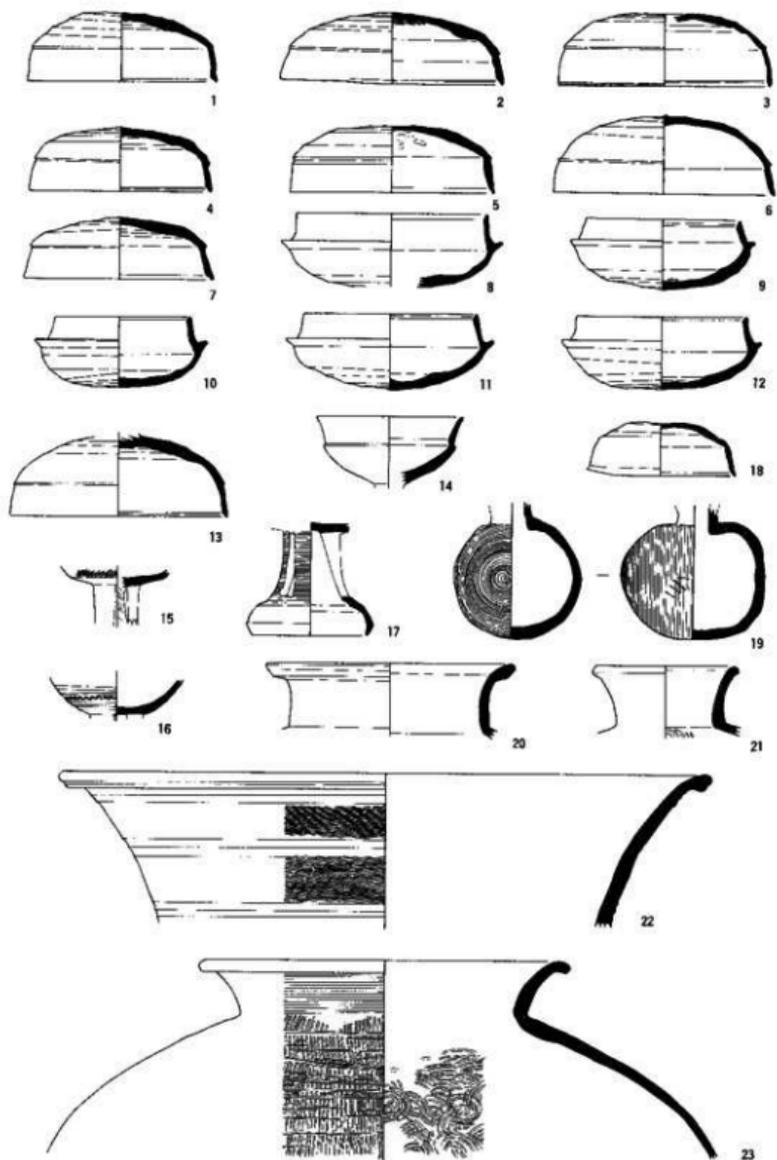


第78图 土坑10、34、35出土遗物



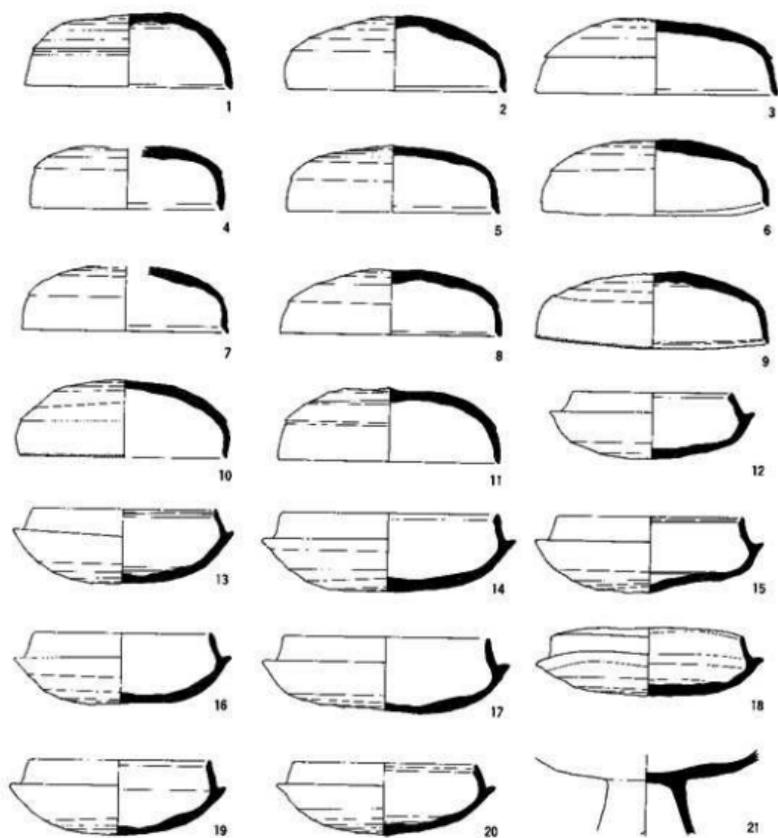
第79图 土坑40、42、46出土遗物



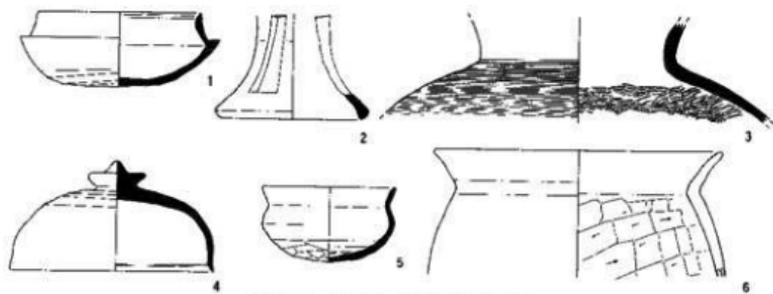


第80图 土坑3出土遗物

0 20cm

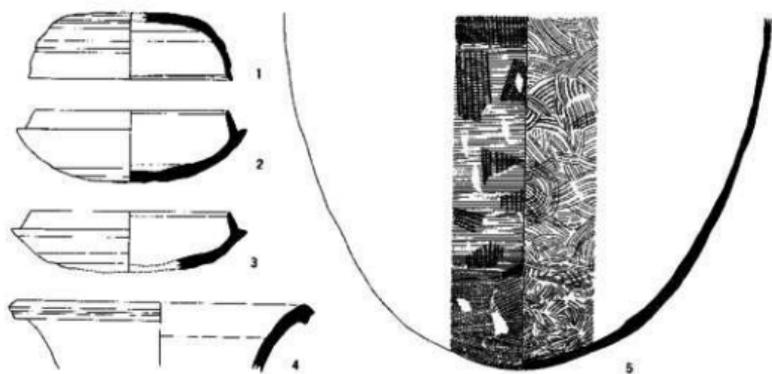


第81圖 土坑22出土遺物

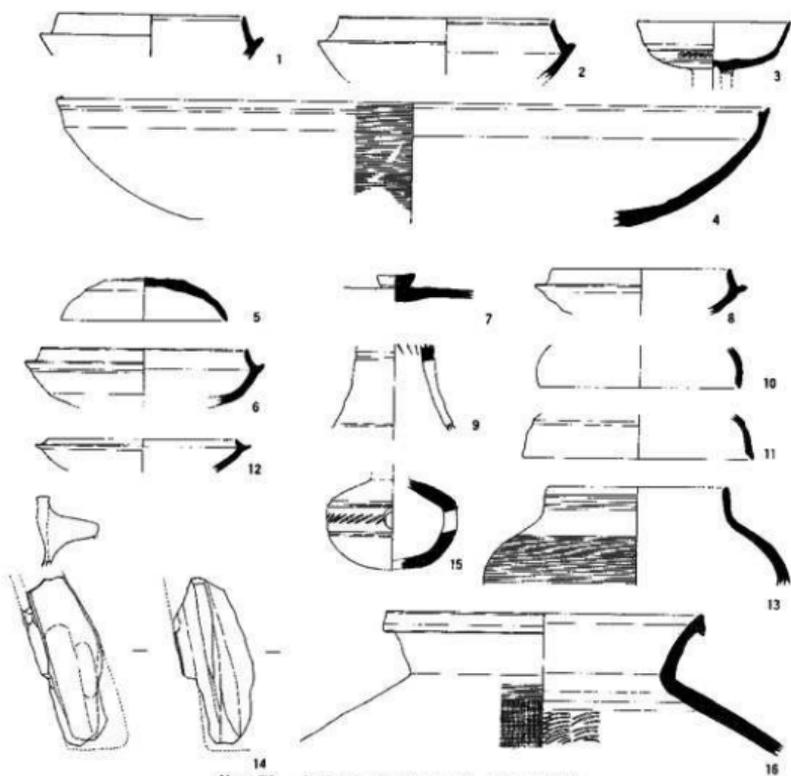


第82圖 土坑5、12、33出土遺物





第83圖 土坑41出土遺物

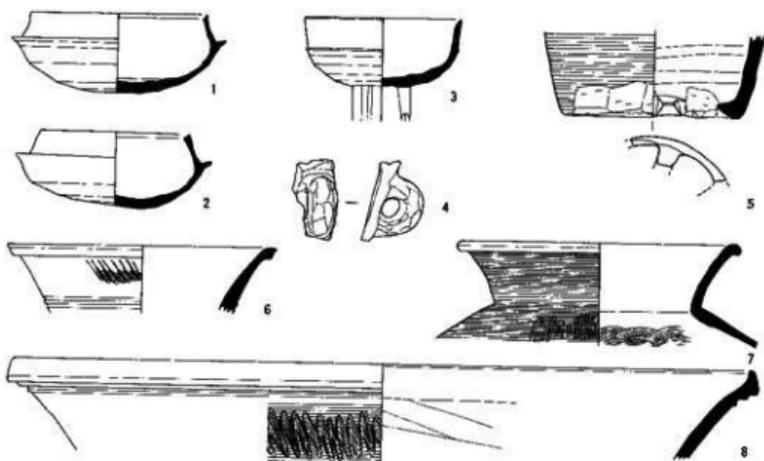


第84圖 土坑43、44、49、51、54、55出土遺物

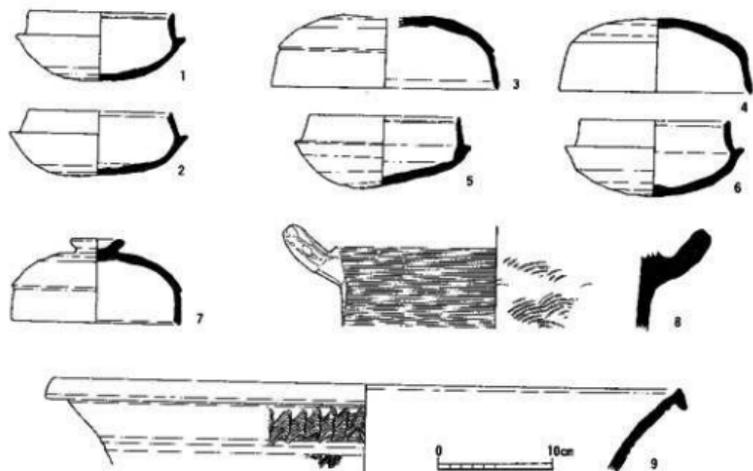
0 20cm



第85圖 溝2、3出土遺物

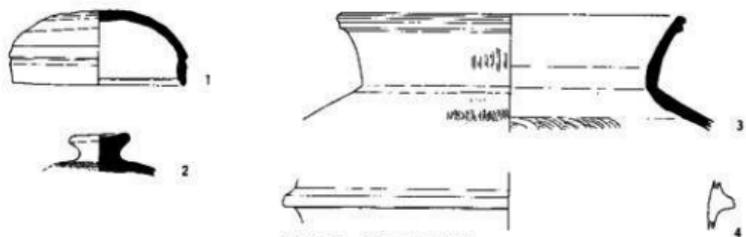


第86圖 溝11出土遺物

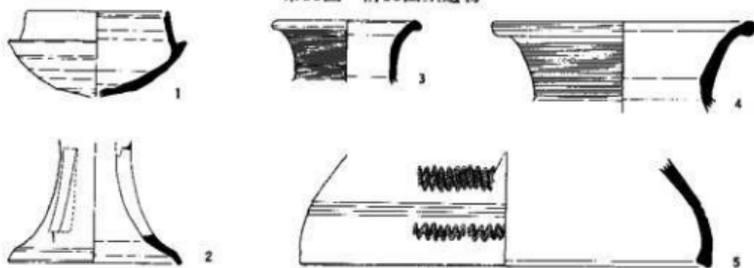


第87圖 溝12、14出土遺物

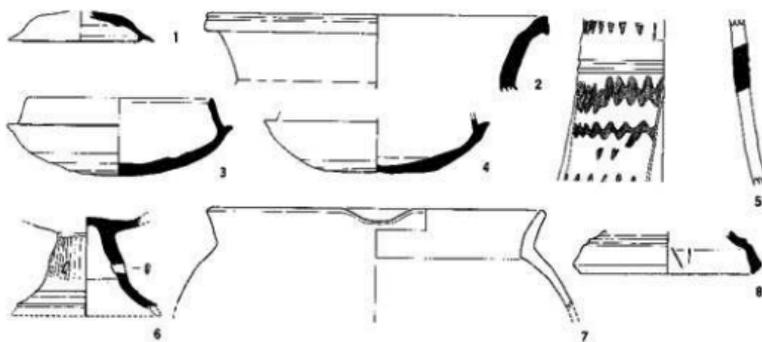




第88圖 溝16出土遺物

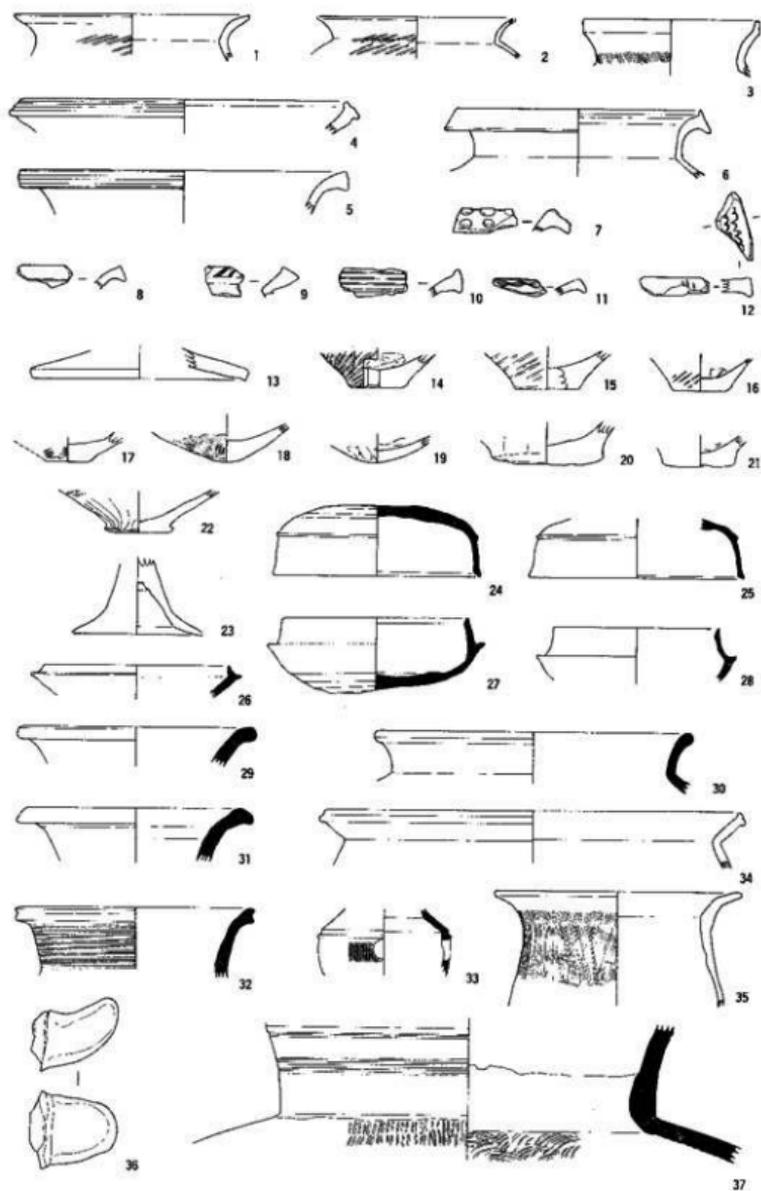


第89圖 溝17出土遺物



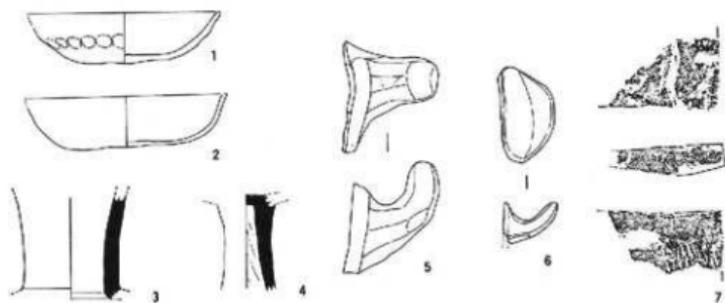
第90圖 溝19、21、22、25出土遺物



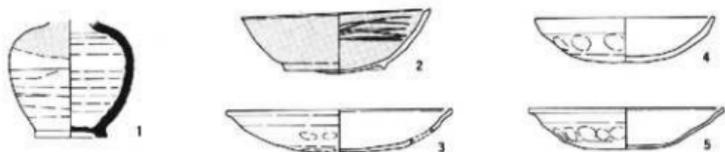


第91図 各ピット出土遺物

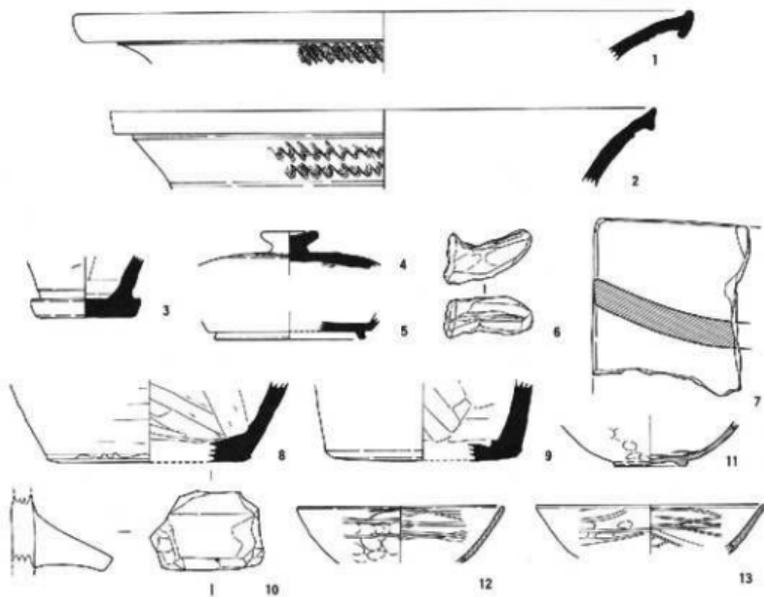




第92図 井戸3 出土遺物

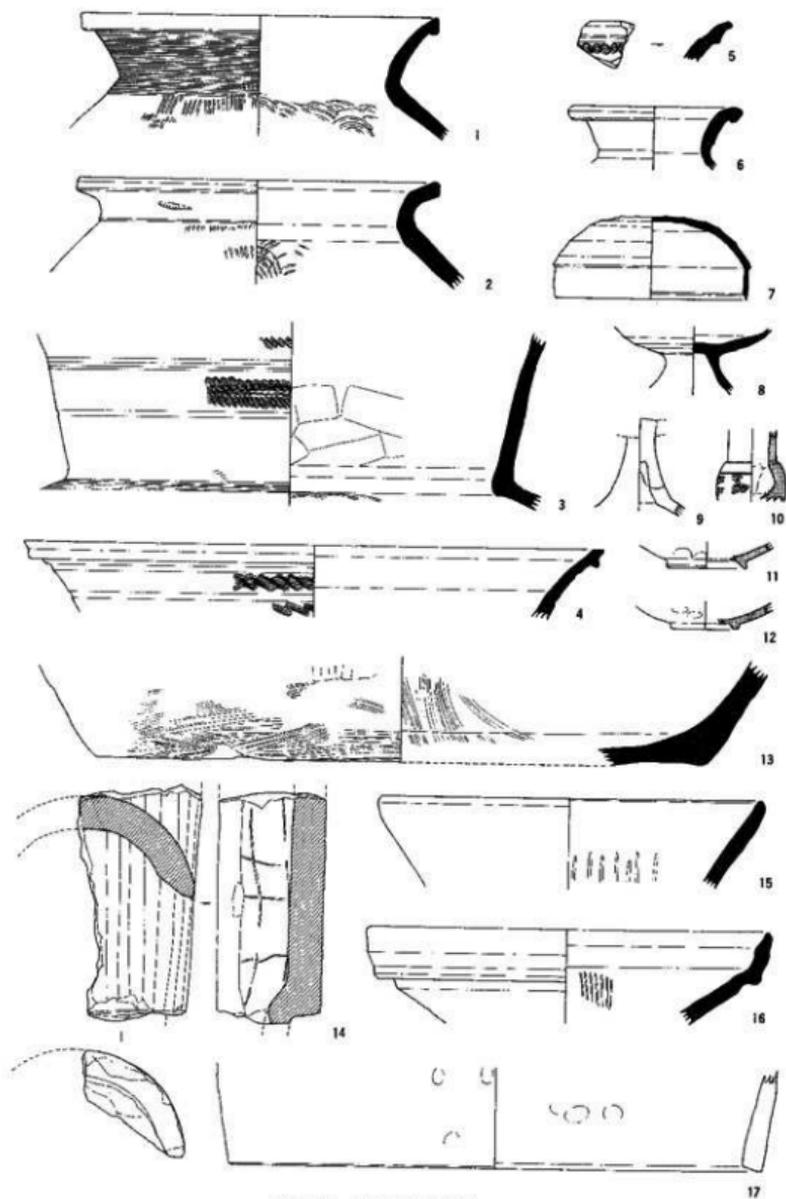


第93図 土坑13(上墳墓)出土遺物



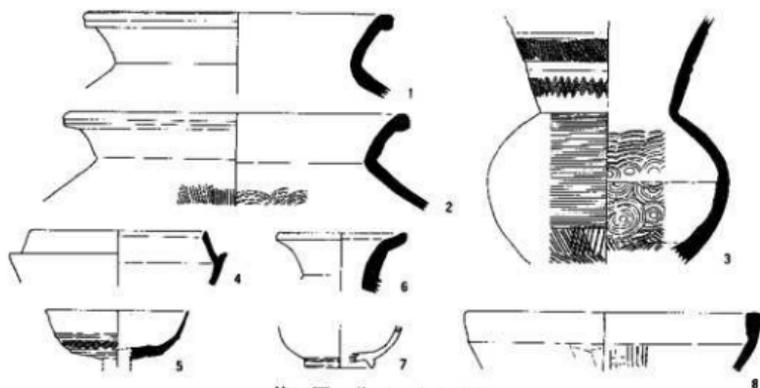
第94図 SX 01 他出土遺物



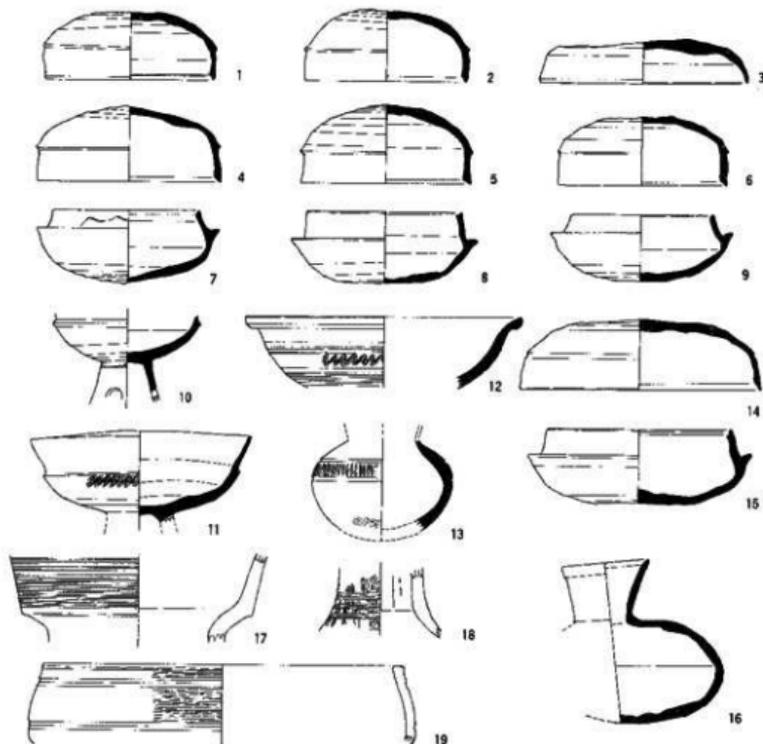


第95圖 SX02出土遺物

0 20cm

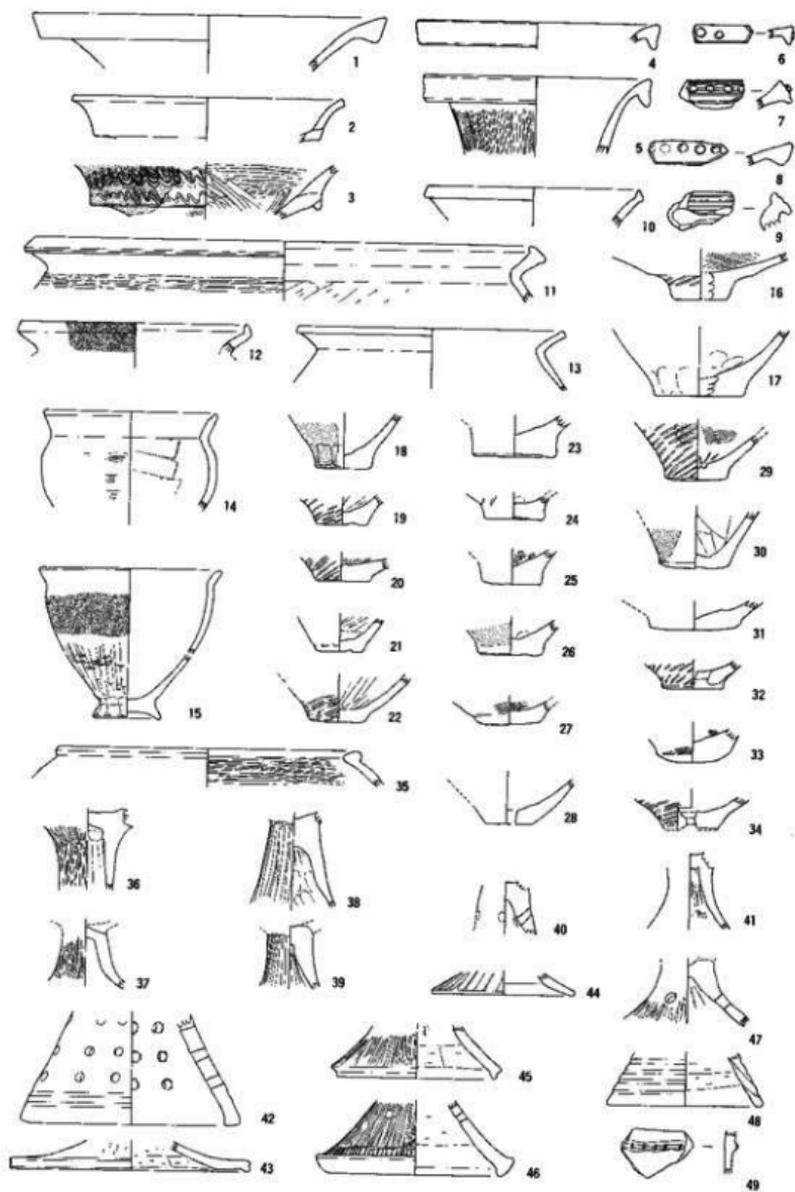


第96图 井戸1出土遺物



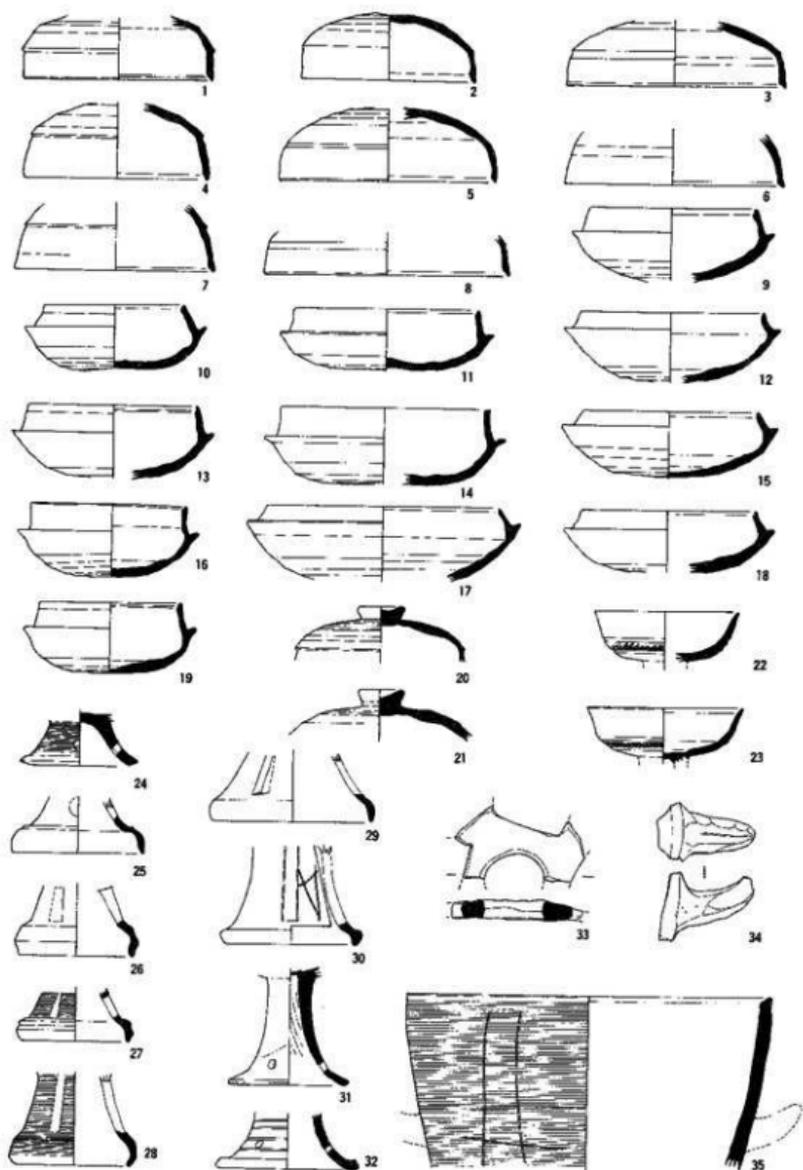
第97图 竖穴式住居跡2上層・6上層出土遺物

0 20cm



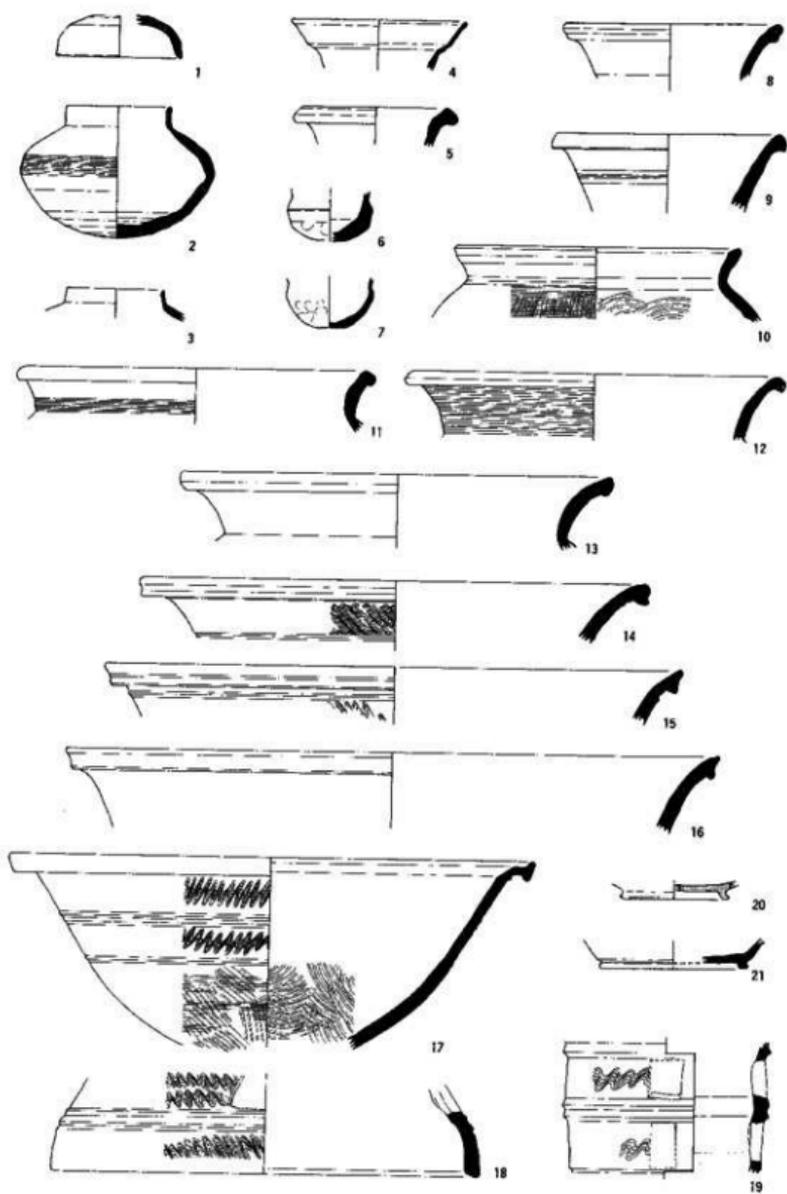
第98圖 包含層出土遺物(1)





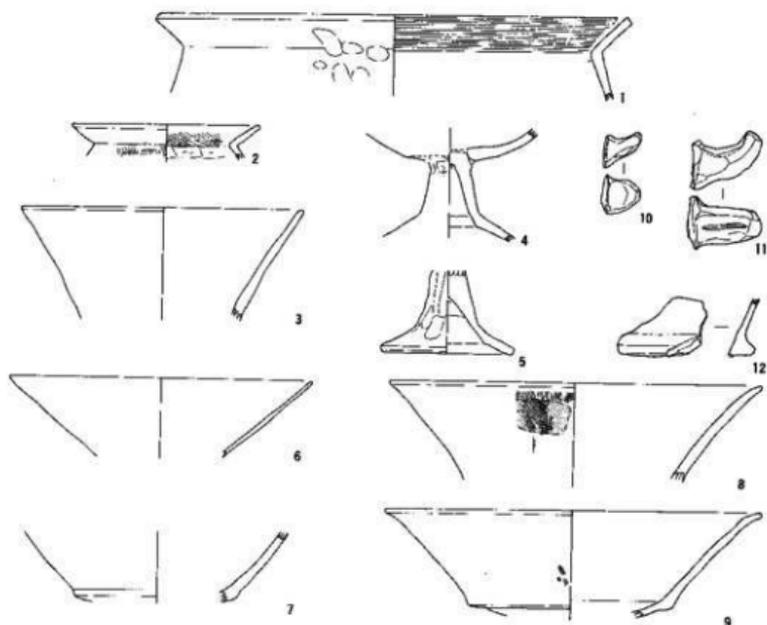
第99图 包含层出土遗物(2)



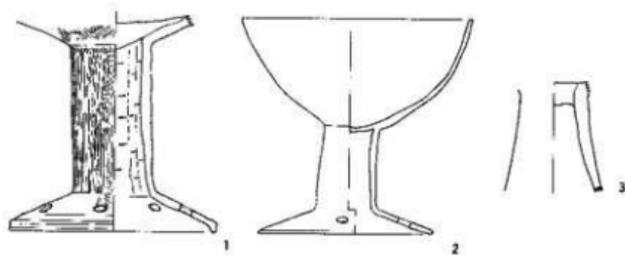


第100图 包含層出土遺物(3)

0 20cm

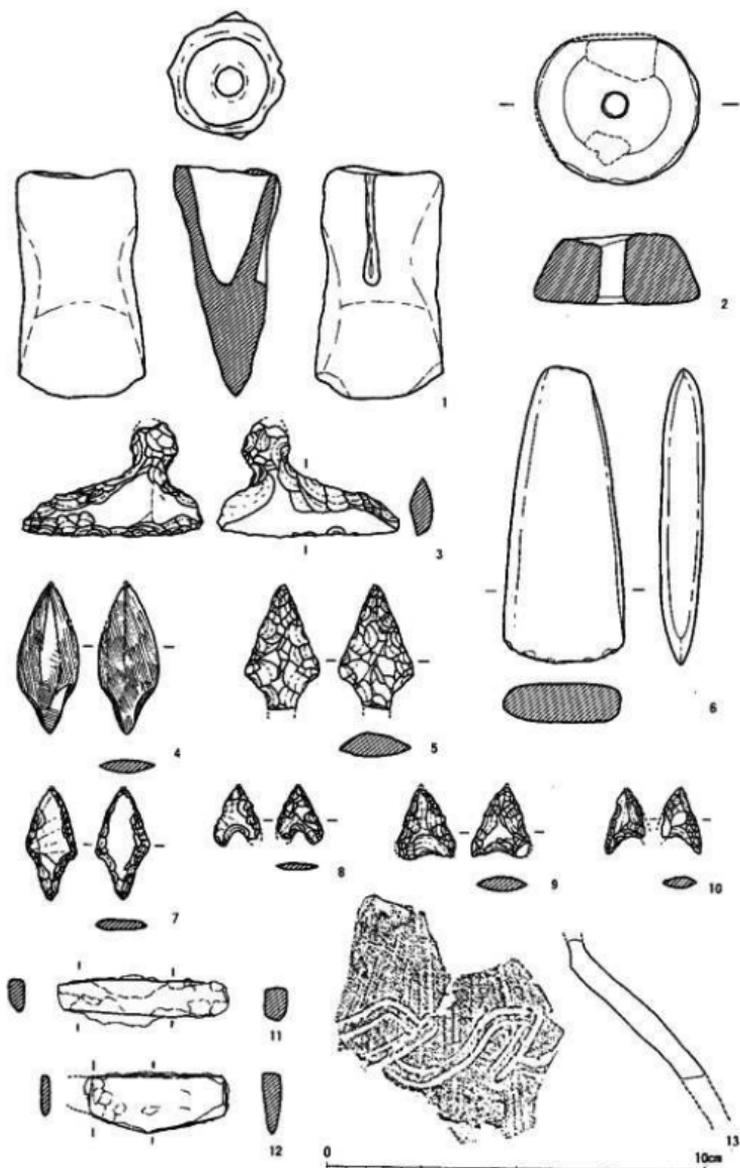


第101图 包含層出土遺物(4)



第102图 SP835出土遺物





第103图 土製品、石器他

第3章 総括と課題

第1節 第11次調査のまとめ

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構として、竪穴式住居跡、土坑、溝、ピット多数を検出した。とくに今回検出した竪穴式住居跡群が、当遺跡の弥生集落としての性格を初めて明確にし得た点は重要であろう。

竪穴式住居跡は、平面プランから円形と方形のものに分類される。竪穴式住居跡8などを除くと、いずれも良好な資料に乏しく、厳密な時期については不明確なものが少なくない。しかし竪穴式住居跡2が、炉周囲の床面直上から出土した竪口縁部の特徴から中期後半、竪穴式住居跡6もが内堀土出土の竪口縁部より中期末葉に比定され、竪穴式住居跡8も高杯、臺の特徴からはほぼ同時期とみて差し支えなからう。つまり、円形プランを呈する住居跡の存続時期は概ね中期を中心としたものであったと推定される。

一方、竪穴式住居跡4は炉出土の壺が後期中葉以降に比定され、竪穴式住居跡9、10でも後期中葉から終末の特徴を示す遺物が出土している事実からすると、方形プランを呈する住居跡については、主として後期以降にその存続時期をおさえることができる。後期前半の資料が明確でなく、厳密な移行期についてはなお判然としないが、後期前葉～中頃のある段階で円形から方形へと住居平面プランが変化しているものと推察される。

これら竪穴式住居跡の規模を床面積によって比較してみると、まず円形プランのものでは竪穴式住居跡2が最大で60.1 m^2 、ついで竪穴式住居跡6、5、1、8がそれぞれ43 m^2 、33.2 m^2 、28.3 m^2 、24.6 m^2 とつづき、このうち竪穴式住居跡2は該期の住居跡としても比較的大形のものである。一方、方形プランのものでは竪穴式住居跡9が27 m^2 で、円形プランの小形のものに近い規模を有するが、竪穴式住居跡3、10はそれぞれ15.3 m^2 、13.7 m^2 を測るにすぎず、概して方形住居は円形住居に比して床面積が小さいという傾向が看取される。このことは時期が新しくなるにつれ住居規模が縮小化しつつあった事実を意味し、古墳時代の住居跡が弥生後期のそれより極端に小規模化する事実の過渡的現象とみる解釈とも符号するものである。

ところで以上のような変化は、単に平面プランや床面積の変化にとどまらず、炉の構造についても認められる。すなわち竪穴式住居跡2、6など円形住居の炉跡が、直径60～80cm、深さ60cm前後を測り、炉壁に熱を受けた痕跡の認められない、いわゆる灰穴³⁾の形態をとっているのに対し、方形プランの竪穴式住居跡3、4、10などの炉跡は、直径20～30cm、深さ10cm未満の極めて浅いもので、周囲が熱のため赤変した、いわゆる地床炉²⁾であることと好対照をなすものである。また方形プランの住居跡に、屋内高床部を伴うものの多い点も看過できない事実と

してあげることができよう。

以上のような後期前半～中葉における住居構造の種々の変化は、端的には生活様式そのものの変化に対応するものと理解されるが、その背景として、地域間交流と人的移動に伴う住居型の交錯、集落社会内部の階層構造の変化等の要因を考えることも可能である。また後期中葉における土器の様式変化、大量生産化の現象を、主要石器の消滅・高地性集落の消長とも関連した社会構造の急速な変化に対応するものと解釈し、住居プランの変遷を同一の次元において捉えられる森岡秀人氏の見解にも学ぶところが多いといえるだろう。

いずれにせよ今後畿中市域においては、細分化された各期における個別住居経営のあり方から、各集落社会の構造・変遷を明らかにし、弥生時代地域社会の解明へと向う、研究上いわずに当然のプロセスが控えており、この意味でも集落規模、住居検出数で他を凌駕する新免遺跡は、とくに重要な位置を占めているといえよう。そのためには何よりもまず、新免遺跡をはじめ穂積、利倉西など代表的な後期集落の豊富な出土資料を網羅的かつ厳密に分析を加え、時間軸としての土器編年を確立することが急務といえるのである。

ところで、以上の竪穴式住居跡群に混在して、1基の竪穴状遺構ともいべきものを検出した。規模的には通常の住居跡とも大差はないが、平面形態は楕円形を呈し、壁溝も認められないことから通例の住居跡とみなすことには問題がある。ただし床面中央に大形ピットが存在し、その周囲に10数個の小ピットを検出していることなどから、簡素な上層構造を想定することも可能である。

この遺構で特筆すべきこととして、埋土下層より他の多くの土器片に混じり1点の人面付土製品が出土したことがあげられる。頸部の竹箬文、顔面や耳部の表現から、吉備地方を中心に分布する分銅形土製品との強い類似性が窺われる。正確な出土位置や遺構との関係は判然としないが、両者の特異性から何らかの祭祀・儀礼等に関わる遺構、遺物の可能性も考えられよう。

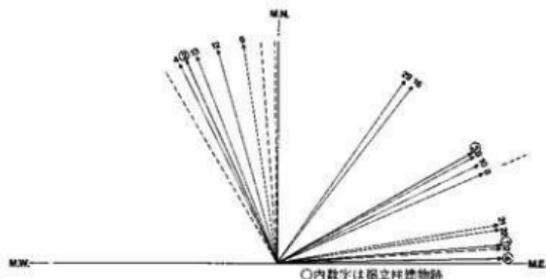
以上の他、土坑では土坑18、34、40、42、46などが、比較的まとまった遺物が出土したものとあげられ、竪穴式住居跡群同様、中期後半～後期に帰属されるが、いずれもその具体的な性格については判然としないものである。

なお調査区中央部で検出した谷状（凹地状）の地形は、住居跡など主要な遺構の分布から弥生集落の範囲を画する自然要因ともなっていたことが推測され、今後環濠の有無の問題等をも含めて、周辺部の調査に期待がもたれよう。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構として、4棟の掘立柱建物跡の他、多数の土坑、溝、ピットを検出した。大半は後期に属するとみられるが、包含層や一部の遺構から古式土師器、初期須恵器が出土しており、わずかながらも該期の遺構が営まれていた可能性が考えられる。

建物跡は、2間×3間のもの3棟と、1間×2間以上のもの1棟があり、古墳時代後期の掘立柱建物としてはごく一般的な規模を有するものである。これら4棟のうち2棟は明らかに重



第104図 掘立柱建物と溝の方位

複関係にあり、すべてが同時に存在していたとは考え難い。柱穴内出土の須恵器はいずれも桜井谷窯跡群の編年⁽⁴⁾による2型式1～2段階に比定され、概ね6世紀前半代を中心に相ついで営まれたと推定される。ただ竪穴式住

居跡2上層から出土した一群の須恵器の中には、1型式4段階(陶邑編年1型式5段階⁽⁵⁾)に遡るものが散見できることから、集落としての存続期間は5世紀末葉から6世紀中葉に求めるのが妥当のようである。

ここで建物主軸の方位について若干の検討を試みておく。掘立柱建物跡1、4の主軸方位は、東西より北へわずかに6度ないし1度ふるが、これに対して掘立柱建物跡2は南北より西へ24度、建物跡3は東西より北へ約30度ふっている。検出数が少なく詳細については今後の調査に委ねられようが、概ね建物跡1、4と2、3の方位が、各々東西、南北からの振幅差を近似させ、該期の建物は基本的にはこの2つの方位にもとづいて営まれた可能性も考えられる。

この遺構の方位性について今ひとつ検討を加えなければならないものに溝がある。検出した溝は総数23を数え、規模は大半が幅40～90cm、深さ30cm未満におさまり、溝12、16などを除くと極端に狭い、あるいは広いといったものはみられない。遺物の出土状況や数量によって多少様相を異にするが、いずれも具体的な機能、性格については判然としないものである。

建物跡と同様、溝の走向方位についても検討すると、概ね南北の方位をもつ溝は西へ9度～26度、東西方位をもつ溝は北へ4度～29度の振幅差を示し、溝16、29など両者の中間に位置づけられるものも存在する点から、そこに厳密な規則性といったものはみられない。ただ大局的にみると、溝の方位は東西、南北とも約30度の振幅差の中に集中し、建物跡の主軸方位とも類似した傾向を示すことから、両者の指向する方位には一定の相関性を有したとみることも可能である(第104図)。そうした場合、溝の具体的な性格として、集落内部の排水、排湿といった本来の機能に加えて、集落構成員の占有する敷地範囲の明示といった性格をも考慮に入れておく必要があるだろう。

いずれにせよ、今回はじめて掘立柱建物跡という、古墳後期集落の存在を具体的に裏付ける遺構を検出できたとはいえ、なお柵列や井戸など集落を構成する重要な要素のいくつかを欠落させており、集落構造の解明には今後に期されるところが大きいといえるのである。

なお、ピットについて数多く検出したものに土坑がある。規模、形態とも一様でなく、具体的な性格については判然としないものが多い。ただ土坑3、22のように、多量の須恵器が一括

して出上している場合もあり、このうち土坑3は完形品が少なく多器種に及ぶことから廃棄坑としての性格が考えられる。一方、土坑22はほとんどが杯身、杯蓋で占められており、同一平面上に整然と並べられている点から、何らかの行為ののち廃棄、もしくは放棄されたものとみられる。

遺構のみならず包含層から出土した須恵器の数量はぼう大であり、この点従来より指摘されてきた当遺跡と桜井谷古窯跡群との密接な関係を窺わせるものである。5世紀末葉から6世紀中葉という当集落の存続期間は、まさに桜井谷古窯跡群での須恵器生産のピークともいえる段階にあたり、両者の消長には不可分な関係があったとみなされよう。ただ6世紀後半段階に至っても、桜井谷では依然須恵器の生産が続けられており、この時期の集落の規模や所在については現在のところさほど明確ではない。今後、隣接する本町遺跡や山ノ上遺跡など、同じ占墳後期集落の動向も含めて検討していく必要がある。

(3) 奈良、平安時代

奈良時代以後の遺構として掘立柱建物跡1、井戸1、土坑2、土壇墓1があげられる。土壇墓1基を除くと、いずれも調査区東南部に集中し、従前の調査結果等を合わせ考えるならば、これより以北に該期の集落が展開していたと推定される。とくに掘立柱建物跡と井戸が至近の距離に営まれている点は注目されよう。

土壇墓(土坑13)は、市城南部に所在する上津島南遺跡例などと共に、古代～中世における葬制の沿革を考える上に貴重な資料を提供した。また近年活発に議論されている古代末～中世の土器編年に対し、10世紀中頃の良好な一括資料を加えることができたことも大きな成果といえよう。³⁰⁾

註1) 寺沢薫「第6章 六条山遺跡総論」『六条山遺跡』(『奈良県文化財調査報告書』第34集 1980)

2) 都出比呂志「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部 1985

3) 森岡秀人「畿内第V様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」『大師山』(『関西大学文学部考古学研究』第5号 1977)

4) 木下亘「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷窯跡群2—17窯』少路窯跡遺跡調査団 1982

5) 中村浩「陶色」I(『大阪府文化財調査報告書』第28編 1976)

6) 橋本久和「畿内の黒色土器I」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1986

第2節 弥生集落としての新免遺跡

新免遺跡の所在する住宅地の一面から、数点の弥生土器片が採集されたのは昭和10年代に遡る。以来、50年余りの歳月を経て、今回ようやく壱穴式住居跡という具体的な生活遺構を検出したことにより、当遺跡の弥生集落としての性格があらためて裏付けられたといえる。

今回の第11次調査を契機とするかのように、つづく第12、13、14次調査では方形周溝墓とみられる遺構が計6基検出され、さらに第16、17、18次調査でも弥生時代中・後期の壱穴式住居跡数棟が相ついで確認されるなど、集落としての様相が次第に鮮明さを増しつつある。

以下では、現時点において考えられる新免弥生集落の様相について簡単にまとめておきたい。

集落の範囲

これまでの当遺跡に関する調査は、個人住宅の建て替え等に先立つ事前調査として実施されたものが多く、対象面積はいずれも小規模なものであり、遺跡の正確な範囲を認識することはなお容易なことではない。しかしこれまでの限られた知見によれば、当遺跡における弥生集落の範囲は、周知の遺跡範囲内でもその北部に限定すべきものと思われる。第105図は各調査地点の位置と、遺構・遺物から推定される遺跡の範囲について図示したものであるが、これによると集落の西縁は第1次調査地点付近、すなわち豊中台地縁辺の段丘崖



- 弥生時代の壱穴式住居跡 検出地点
- ★ 方形周溝墓検出地点
- 弥生～古墳時代の遺構 検出地点
- 古墳時代以降の遺構 検出地点
- 弥生時代の集落推定範囲 (古墳時代以降も含む)
- 古墳時代以降の遺跡 推定範囲

第105図 各調査地点と遺跡の範囲

に及び、地形の制約上それより西方には広がらない。また東縁は、段丘端部の浸食による小規模な谷地形の存在から、今回の第11次調査地点付近を一応の日安とすることができ、東西（厳密には南西—北東）の距離はおおよそ560mに及ぶものである。一方、北縁については西縁と同様、台地縁辺の急斜面に制限を受けるのに対し、南縁については第14次調査地点付近で墓域の存在が想定されるものの、第7、8次調査地点では該期の遺構、遺物は確認されておらず、集落は両地点間に終息するものと考えられる。したがって墓域を集落に含めて考えた場合、南北（北西—南東）についてはおおよそ300mの範囲を想定することができる。

以上の推定範囲は、一集落の占有面積としては他遺跡と比べてもかなり大規模なものといえる。この点過去10次に亘り実施した調査は、遺跡全体からすれば点的なものにすぎず、第11次調査地点などにみられる遺構の密集度がそのまま集落の全域に及ぶかどうかについてもなお明確ではない。集落範囲の時期的な推移等を含めて、今後の調査に期されるところが多いというのが現状である。

環濠の有無について 弥生集落の範囲、とくに居住域の範囲を明示するものとして環濠の存在をあげることができる。福岡県比恵遺跡ではじめて環濠集落の実態が明確にされて以来、北九州から中部、関東地方に至るほとんどの地域において、環濠をもつ集落遺跡の調査例が報じられている。今日までの大方の見解に従うならば、環濠は我国における初期農耕文化の形成と同時にもたらされた、集落の基本的属性の一つとみなされる。

では当遺跡における環濠の有無についてはどうであろうか。現状からいえば各調査地点とも環濠に相当するような溝の存在は確認されていない。集落推定範囲の東縁を貫通するように設けられた第11次調査地点でも、環濠に相当する溝を検出することはできず、わずかに調査地点中央部の浅い谷状（凹地状）の地形が、集落を画する自然的な要因となっていたと考えられたにすぎない。

ここで再び当集落の立地する地形環境に目を転じてみる。すでにふれたように、集落の北縁と西縁は台地端部の急崖が発達し、東縁には段丘端部の小規模な谷地形が存在するなど、集落を外界から隔絶する自然的な条件が北、西、東部をとりまいている。ただしこの点については京都府扇谷遺跡や大阪府観音寺山遺跡のように、山塊もしくは丘陵上に営まれた集落であっても、集落をとりまく急斜面に環濠を巡らせる例も散見され、当遺跡についても今後段丘端部の斜面部にも十分注意を払う必要がある。一方、地形にさほど変化の認められない集落東南縁については、さきの第11次調査地点で検出した谷状地形が問題となろうが、そのつづきを示す地形の存在は現在までのところ明らかでなく、環濠の有無についても今後の調査に委ねる他はないというのが現状である。

居住域と墓域 神奈川県大塚・歳勝土遺跡や愛知県朝日遺跡などは、弥生時代の環濠集落として著名なばかりでなく、集落における居住域と墓域の関係を具体的に示した好例といえるものである。近隣でも高槻市安海遺跡や茨木市東奈良遺跡などがよく知られ、こ

れらに共通していえることは、居住域は一重もしくは二重の環濠によってとり囲まれ、墓域は環濠の外側に集中して営まれているということであろう。

ところで新発見遺跡では、これまでに20棟を数える竪穴式住居跡が検出されているが、うち間仕切りを伴う古墳時代の方形住居1棟を除くと、他はすべて弥生時代中～後期に属する。集落の推定範囲に対する既調査地点の面積比からすれば、当集落に営まれた実際の住居数は数百棟に達するとみることもあながち不可能なことではなかろう。

これまでに検出された住居跡の分布をみると（第105図）、調査地点になお偏りがみられるとはいえ、遺跡西縁付近に位置する第16、17、18次調査地点や、東縁に位置する第11次調査地点北西部に集中し、さきの集落推定範囲内でも北西および北東の台地縁辺付近にまとまりをみせるようである。

一方、墓域についてみると、集落南部の比較的近接した位置にある第12、13、14次調査地点付近より、方形周溝墓とみられる遺構を計6基検出しており、この3地点を中心に一定の墓域の広がりを想定させるものである。したがって先の住居跡の分布と合わせ考えるならば、台地北西の縁辺部に居住域、台地内部のやや奥まった位置に墓域という図式を想定することも可能とみられよう。

ところが集落北西部に位置する第18次調査地点では、中期の円形住居に重複して方形周溝墓1基（中期後半）が営まれ、さらにそれに重複するように後期以降の方形住居4棟が営まれるなど、居住域と墓域という占地上の区分をやや不鮮明なものにしている点も否めない。この点については、先の集落範囲の中で、居住域と墓域が各々時間の推移とともに占地を異にしていた可能性も考えておく必要がある。

集落の動向 従前の極めて限られた資料から、当集落の動向を把握することは必ずしも容易なことではないが、現在までに判明している事実から古墳時代以降の様相を混じえ、若干の見通しを述べておきたい。

これまでに検出された遺構の中で、最も時期の遡るものとして第14次調査地点の方形周溝墓（SX-1）があげられる。周溝内から出土した土器群は第Ⅱ様式の特徴を有し、墓域の形成は遅くとも中期初頭に遡ることを示している。また第2次調査地点でも、包含層中より第Ⅱ様式に比定される、口縁端部に刻目を施した甕破片が出土しており、墓域に先がけて集落の形成が開始されたことは疑いのないところであろう。

一方、住居跡についてみると、時期の明らかなものはいずれも第Ⅲ・Ⅳ様式～庄内式の土器を伴い、このうち中期については第11、16次調査で検出した円形住居が円線文出現以降の比較的新しい段階に属するものである。包含層や他の遺構から出土した遺物をみても、第Ⅲ・Ⅳ様式の古相を示す資料は全体として少なく、集落としての規模、内容が最も充実するのは、中期後半から末葉にかけての時期であったと推察される。

後期以降、住居平面プランの円から方へ、炉跡の灰穴炉から地床炉へといった生活様式にお

ける種々の変化が認められるものの、これまでの資料により窺われる集落としての占地や規模については、中期後半の様相がそのまま引きつがれたものとみられる。第11次調査地点の方形住居跡、上坑34、42、46、SP214、第15次調査地点のSD-1、5、第18次調査地点のSK-1など、後期の主だった遺構はいずれも後期中葉～後半に比定されるものであり、この期に至ってもなお一定の集落規模を存続させている。ただし、従前の編年観による後期前半の資料がさほど明確でなく、前後の時期に比して占める割合が著しく小さいことは、七器の細分様式の存続期間や地域差について検討を促すものといえるかも知れない。

庄内式段階の遺構としては、第11次調査の上坑10や、可能性の高いものとして竪穴式住居跡10などをあげるにすぎず、包含層出土遺物の中にも該期のものが稀小である点から考えると、概ね後期終末を境に当集落は解体の方向へと進んだものとみられる。

その後、古墳時代前期になると、集落の存続を示す資料はほとんど皆無に等しいという状況がみられる。かつて豊中グラウンド造成の際に出上したとされる鍔形石や、第4、11次調査地点出土の埴輪片を積極的に評価するならば、居住空間から墓域への変貌を想定することも可能である。古墳時代中期になると、第6、11、16、17次調査地点で検出した竪穴式住居跡を含む各種遺構、遺物が、再び当遺跡における集落の出現を物語るものといえるが、弥生時代や古墳時代後期に比べるとその規模ははるかに小さい。これまでの調査成果からすれば、該期の集落の中心はむしろ南方に隣接する山ノ上遺跡に移っていた可能性が高いと考えられる。ただ新免遺跡における古墳時代中期の集落は、上器様式からいえば布留式新相に相当し、桜井谷古窯跡群における須恵器生産開始期とも重複する可能性をもつ点から、その後の古墳後期集落が須恵器生産を背景として展開していく端緒として営まれたとも考えられよう。

新免弥生集落と周辺の遺跡 弥生集落としての新免遺跡が成立する要因としては、その右利な立地条件によるところが大きいことは述べるまでもないが、それにもまして考慮に入れなければならないことは、新免弥生集落成立前夜における地域の動向についてであろう。冒頭の歴史的環境の項目でふれたように、新免遺跡は千里川水系に包括されるべき存在であり、その成立にあたっては弥生前期に始まる勝部集落との関係を無視することはできないと思われる。

勝部遺跡は昭和42年、大阪国際空港拡張工事に伴い調査が実施され、弥生前期から平安時代に亘る各種遺構、遺物が多数検出された。豊中市域における初めての本格的調査として注目されたばかりでなく、一度に14基もの木棺墓および土壇墓が検出されるなど、弥生時代の墓制や社会構造に関する研究に大きく寄与するところとなっている。遺跡は調査地点の制約上、種々考慮すべきところもあるが、検出遺構のあり方から墓域としての性格が強く窺われる。しかし住居跡とみられる遺構も存在することや墓域のみが単独で営まれたとは考え難いこと、出土遺物が豊富で長期に亘るものであること等から、周辺部にはなお集落の広がりが想定される。集落の形成は豊中市域としては最も古く、前期中頃（第Ⅰ様式中段階）には開始され、その後中

期全般に亘り存続したものとみなされる。ただ現在までのところ、後期集落の存続を示す確実な資料は確認されていない。

以上のように、勝部遺跡は前期に始まる集落遺跡であり、中期初頭には始まると推定される新免弥生集落の形成にも、何らかの関与があったことは当然認めざるを得ないであろう。ただ両遺跡ともに、中期段階には相当の集落規模を維持していたものとみられ、千里川水系を紐帯とする遺跡群の中で、いずれが中心的かつ主導的な役割を果たしたのかが問題となるところである。勝部遺跡に関する知見が乏しいため、この点について詳細に分析を加えることは難しいが、少なくとも後期段階には、新免集落が勝部集落を圧倒的に凌駕していたことは推測に難くない。

以上より、新免集落は当初、勝部集落からの分村を契機として始まり、以後両集落とも一定の規模を維持しつつ存続し、後期における遺跡群再編ともいえる動きの中で、勝部集落は解体し、新免集落が千里川水系の中核として存続するに至ったものと考えられる。柴原遺跡、本町遺跡、山ノ上遺跡、南刀根山遺跡など、新免遺跡をとりまくように分布する後期の遺跡は、いずれも新免集落を核として成立した遺跡群として把握されよう。

なお、中期前半（第Ⅲ様式）の竪穴式住居跡と掘立柱建物跡が検出された箕輪遺跡や、環濠ともみられる大溝が確認された螢池西遺跡など特筆すべき遺跡もあるが、いずれも調査面積が限られ、集落規模、存続期間など不明な点が多い。今後これらのより詳細な調査を待って、遺跡群の動態についても後考を期したいと思う。

参考文献

- 豊中市教育委員会『勝部遺跡』 豊中市文化財調査報告第1集 1972
- 同『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1982年度』 豊中市文化財調査報告第9集 1983
- 同『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1983年度』 豊中市文化財調査報告第12集 1984
- 同『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1984年度』 豊中市文化財調査報告第14集 1985
- 同『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1985年度』 豊中市文化財調査報告第15集 1986
- 同『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1986年度』 豊中市文化財調査報告第19集 1987

土器觀察表

図 向 図版番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 彩 調 色	出 土 地 所	備 考
70-1	壺	復元口径31.4 残存高3.0	外反する口縁部。端部は上方に拡張し、端部には3条の凹線を施す。	内外面とも横ナズ。	茶褐色	整六柱形1 SP31-33	
36							
70-2	壺	復元口径21.5 残存高2.0	外反して大きくひらく口縁部。端部は上方につまみ上げ、下方に拡張する。端部には4条の凹線を、内面には波状文を施す。	内外面とも横ナズ。	明赤褐色	整六柱形1	
36							
70-3	壺	残存高3.2	わずかに外反してのびる口縁部。端部は丸くおさめらる。数条の凹線を施す。	内外面とも横ナズ。	明赤褐色	整六柱形1	
36							
70-4	壺	復元口径15.1 残存高5.5	大きな平葎から、上外方にのびる。	外面は細いウミガキ、内面は縦かいハケ、底面はヘアミガキもしくはナズ。	明赤褐色	整六柱形1	内外面とも平葎が著しい。
71-1	壺	復元口径29.6 残存高4.5	外反して大きくひらく口縁部。端部は下方に細くひろく拡張する。端部には4条の凹線と凹影状文を施す。	口縁部外面は横ナズ、内面はナズ。頸部外面にはハケ目を認める。	明赤褐色	整六柱形2 床面直上	端部に平葎。
36							
71-2	壺	復元口径22.0 残存高2.2	外方にひらく口縁部。端部は下方に拡張する。端部に凹線を3条施す。	内外面とも横ナズ。	明赤褐色	整六柱形2 下層	
71-3	壺	復元口径16.0 残存高2.4	頸部から起出して立ち上る口縁部で、端部は上方にややつまみ上げる。端部に凹線を2条施す。	内外面とも横ナズ。	暗褐色	整六柱形2 下層	
71-4	壺	復元口径9.8 残存高4.3	外傾しながらひらく口縁部で、端部は丸くおさめらる。頸部に凹線を施す。	内外面とも横ナズ。	淡黄褐色	整六柱形2 下層	
36							
71-5	壺	残存高1.6	やや外方にひらく口縁部。端部は下方に拡張し、端部には凹影状文を施す。	内外面ともナズ。	明淡赤褐色	整六柱形2 下層	
71-6	壺	残存高1.8	外方にひろがる口縁部で、端部は上方につまみ上げ、下方に拡張する。端部には凹影状文・波状文を施す。	内外面ともナズ。	明赤褐色	整六柱形2 下層	
36							

図面 図版番号	器種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出土地	備 考
71-7	壺	底径高1.5 残存高2.8	外方に大きくひろがる口縁部。肩部は下外方に起隆する。腹面には4条の沈線を送らし、円形浮文・行管文で飾る。	内外面ともナデ。	茶褐色	壱六仕居2 下層	黒底
71-8	高杯	復元口径27.3 残存高2.0	水平に広く盛り出す口縁部に垂下する肩部をもつ。内面の突帯は上面が内傾する。		暗褐色	壱六仕居2 下層	生駒西墓の粘土 摩滅。
71-9	壺	底径4.7 残存高2.8	突出する平底で、体部は上外方にのびる。	内外面ともナデ。内外面に指頭汗痕を残す。	褐色	壱六仕居2 下層	
71-10	鉢	底径4.8 残存高2.4	平底で、体部は上外方にのびる。	外面は右よりの平行タタキ、底面はナデ。	赤褐色	壱六仕居2 下層	
71-11	鉢	底径4.8 残存高3.2	平底から上外方にのびる。	内外面ともナデ。	明淡茶褐色 内面黒色	壱六仕居2 下層	
71-12	壺	復元口径18.0 残存高3.6	直立する頸部から短くひろく口縁部。肩部は面をなす。	口縁部は横ナデ、外面はハウ後ナデ。	明赤褐色	壱六仕居2 中層	
71-13	壺	復元口径14.0 残存高1.2	頸部から短くひろく口縁部。肩部は上方につまみ上げ、下方に肥厚する。	内外面とも横ナデ。	明赤褐色	壱六仕居2 中層	
71-14	壺	復元口径21.9 残存高1.6	外反してひろく口縁部。肩部は下方に拡張し、頸面には3条の凹線を送らす。	内外面とも横ナデ。	茶褐色	壱六仕居2 中層	
71-15	壺	底径3.5 残存高2.2	平底から上外方にのびる。	外面はナデ、内面はハケ。	明赤褐色	壱六仕居2 中層	
71-16	壺	底径6.5 残存高3.2	突出した平底で、上外方にのびる。	内外面ともナデ。	暗褐色	壱六仕居2 中層	

図面 図番	器種	法量 (cm)	形態及び彫文の特徴	技法の特徴	色調	出し地	備考
71-17	甕	底径4.8 残存高2.7	やや突出した平底から上外方にのびる。	内外面ともナズ。	淡褐色	甕穴仕居 2 中層	外面に黒斑。
71-18	甕	底径4.8 残存高2.0	突出した平底の底部。	外面はナズ、内面は横ナズ。	茶褐色	甕穴仕居 2 中層	
71-19	台付鉢	復元底径6.0 残存高2.7	外反斜縁にひろがる脚部で、端部は弱い面をなしておわる。	内面はナズ、外面はヘラミガキ。上部にヘラの片断を残す。	淡黄褐色	甕穴仕居 2 中層	
71-20	高杯	底径9.6 残存高2.6	脚部は脚柱部より下外方に斜縁的にひろがる。端部はやや肥厚し、端部には凹縁を巡らす。	端部は横ナズ、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ。	淡明茶褐色	甕穴仕居 2 中層	
71-21	器台	復元底径11.3 残存高3.0	脚部は下外方に斜縁的にひろがり、端部は丸くおさめる。外面に凹縁を巡らし、口孔を穿つ。	脚部部・外面はナズ、内面はヘラケズリ。	明黄褐色	甕穴仕居 2 中層	
71-22	高杯	復元底径15.6	脚部は外反斜縁にひろがり、端部は上下に拡張する。	外面はヘラミガキ、脚部部・内面はナズ。	明赤褐色	甕穴仕居 2 中層	端部に黒斑。
71-23	甕	復元口径27.2 残存高3.4	短く外反する口縁部で、端部は上内方に拡張する。口縁下端部に割れ目を施す。	内外面とも横ナズ。	淡明茶褐色	甕穴仕居 2 上層	
71-24	壺	復元口径13.2 残存高4.2	直ぐ下する頸部に、短く外反する1條部をもたらし、端部は面をなす。	内外面ともナズ。	淡明茶褐色	甕穴仕居 2 上層	
71-25	甕	底径4.1 残存高2.4	やや突出する平底で、大きくひろがる。	外面はナズ、内面はハツ。	淡褐色	甕穴仕居 2 上層	
71-26	甕	残存高4.7	やや外傾する頸部。凹縁を巡らす。	内外面ともナズ。	淡明茶褐色	甕穴仕居 2 ピット埋土	内外面とも黒斑著しい。

図面 図版番号	器種	法量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
71-27	壺		胴部の破片である。幅広い肩周は横文突起帯を施し、突帯上とその上部に磨擦流状文を施す。	外面はヘラミガキ。	淡明茶褐色	壺六仕磨2 ピット埋土	
36							
71-28	甕	底径3.2 残存高2.4	小さな平底から、上外方にのびる。	外面はナデ、内面はヘラで掻く。	淡明茶褐色	壺六仕磨2 ピット埋土	
71-29	甕	底径4.0 残存高1.6	突出する底部で、底面中央が凹む。	外面はナデ、内面は板ナデ。	明茶褐色	壺六仕磨2 溝埋土	
71-30	壺	底径5.0 残存高2.3	やや突出する平底から、大きくひろく。	外面はナデ。	淡貯褐色	壺六仕磨2 ピット埋土	
71-31	(脚部)	復元底径32.8 残存高4.6	やや内寄気味に上内方に立ち上がる。脚部は面をなし、内方にやや肥字する。外面に回縁を施す。	外面はナデ。	淡明黄褐色	壺六仕磨2 溝埋土	磨滅著しい。
72-1	壺	復元口径10.1 残存高4.6	内寄気味に上外方にのびる口縁部。脚部はやや面をなす。	内外面ともナデ、脚部付近は強くナデ。	淡黄褐色	壺六仕磨2 如	
37-a							
72-2	壺	復元口径12.3 残存高4.4	直立する脚部から照く外反する口縁部で、脚部は上外方につまみ上げる。	内外面ともナデ。	明茶褐色	壺六仕磨2 如	
37-a							
72-3	壺	底径5.8 残存高1.8	突出する平底の底部。	外面はナデ。	淡明黄褐色	壺六仕磨2 如	
72-4	高杯	残存高3.0	中空の脚注部。	脚注部外面はヘラミガキ、内面にシボリ痕を施す。	明茶褐色	壺六仕磨2 如	
37-a							
72-5	高杯	残存高7.0	斜めにのびる脚注部から外方にひろがる。	外面はハケ、下方はタタキ、内面にシボリ痕を施す。	淡明黄褐色	壺六仕磨2 如	
37-a							

図版番号	器種	法 尺 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出土地	備 考
72-6	高杯	復元口径23.5 残存高2.8	口縁部、端部は面をなし、上方にやや立ち上がる。	外面は細かいハラムリガキ、端面はナデ。	淡明褐色	盛六庄戸2 土坑4	盛六庄戸2 盛六庄戸2
37-a	甕	残存高2.8	内湾しながら上外方にのびる口縁部。端部は丸くおさまる。	口縁部外面とも横ナデ。頸部付近に指頸。肩部内面はヘラケズリ。	淡黄褐色	盛六庄戸2 土坑4	
72-8	壺	復元口径5.1 残存高3.8	突出する平底から、内湾気味にのびる。	外面は丁寧なナデ、内面はハケ。	明赤褐色	盛六庄戸2 土坑4	
72-9	甕	口径4.7 残存高3.2	突出する平底から、上外方にのびる。	内外面ともナデ。内面に工具痕。	明赤褐色	盛六庄戸2 土坑4	
72-10	甕	口径3.7 残存高3.5	平底から、外上方にのびる。	外面は平行タタキ、内面はナデ。端面はナデ。	暗茶褐色	盛六庄戸2 土坑4	
72-11	甕	口径4.9 残存高2.7	やや丸い突出する平底から、上外方にのびる。	外面上半は平行タタキ、下半はナデ。内面はナデ。	黒褐色	盛六庄戸2 土坑4	
72-12	甕	口径6.1 残存高1.9	突出する平底の底部。	内外面ともナデ。	淡明茶褐色	盛六庄戸2 土坑4	
72-13	高杯	残存高5.7	ゆるやかにひろく脚部。	脚部外面は粗いハタテ、内面は横ナデ。杯部内面は板ナデ。	淡明赤褐色	盛六庄戸2 土坑4	
37-a	甕	残存高2.2	端部を下方に拡張する壺(縁部の垂下部。凹縁と凹縁浮文で飾る。	内外面ともナデ。	明黄褐色	盛六庄戸3	
73-1	甕	復元口径15.0 残存高3.6	丸みをもつ杯部からくの字状に外区する口縁部。端部は面をなす。	口縁部は横ナデ、肩部外面は平行タタキ、内面はナデ。	淡黄褐色	盛六庄戸3	

図面 図号	器 種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
73-3	甕	底径4.4 残存高2.0	やや突出する平底の底部。	外面はナデ、平行タタキの底跡。内面は板ナデ。作業者はユビオオサネ。	明赤褐色	壱六住居3	
73-4	鉢	口径10.5 体部径9.4 器高8.0	突出する平底の底部から内時玄味に立ち上がり、最大径は体部上半にある。口縁部は外傾し、端部は突い。	体部外面下半にハク、内面は板ナデ。底部外面はナデ、ヘラオオサネ。口縁部は内外面ともナデ。	明赤褐色	壱六住居4	
73-5	(脚部)	径元底径10.6 残存高2.2	脚端部には外傾する面をなし、内面で曲捷する。	外面はヘラミダキ、内面はヘラケズリ、端部に横ナデ。	淡明茶褐色	壱六住居4	
73-6	鉢	径元底径4.8 残存高3.3	平底から上外方にのびる。	外面タタキ後ナデ。内面・底面はナデ。	淡褐色	壱六住居4	底部に焼成前穿孔。
73-7	鉢	口径13.8 残存高10.0	球形の体部上半から短くくの字形に外反する口縁部を有する。端部に丸くおさめる。	口縁部は横ナデ、体部外面は粗い平行タタキ、肩部内面は粗いハク、体部内面中位は板ナデもしくはハク。	淡明茶褐色	壱六住居4	
73-8	甕	体部最大径13.0 残存高7.5	体部は最大径をやや上位にもつ。	体部外面上半は平行タタキ、下半はナデ。内面はナデ。	明褐色	壱六住居4	頸部に接合痕。
73-9	鉢	径元口径16.7 体部最大径19.2 底径11.8 指定器高21.0	最大径をやや上位にもつ体部を有し、口縁部は短く外反し、端部は面をなす。底部はやや突出する平底である。	口縁部は「叩き出し技法」によって成形し内外面とも横ナデ。体部外面は平行タタキで、中位の接合部分をナデする。内面は上端ナデ、下半ハク、底部付近ナデ。底部外面ナデ。	明茶褐色	壱六住居4	外面中位に煤。下半に黒痕。
74-1	甕	径元口径24.8 残存高2.7	外反して大きくひらく口縁部。端部は斜上を継ぎ足して下方に幅広く拡張し、端部は3-4条の厚線・出彫浮文で飾る。	口縁端部は内外面とも横ナデ、口縁部外面はナデ、内面はヘラミダキ。	明茶褐色	壱六住居6 炉	半駒両面塗の胎土。
74-2	甕	径元口径21.4 残存高2.3	大きくひらく口縁部。端部に直立し、面をなす。	内外面ともナデ。	灰白色	壱六住居6	

図面 図版番号	器種	法量 (cm)	形態及び銘文の特徴	技法の特長	色調	出土地	備考
74-3	壺	口径13.8 体部最大径13.4 体部高さ14.4 復元口径12.9 残存高2.7	最大径をやや上半にもつ体部を有し、口縁部は短く外反し、肩部は丸い。底部は突出する平底で、中央部が凹む。 頸部はほぼ直立し、口縁部は広くひらく。肩部に凹形の刺突文を施す。	口縁部は楕円ナデ。体部外面の中心はハケ、他はナデ。体部内面上半はハケ及びナデ、中心はナデ、底部外面はナデ。 内外面とも楕円ナデ。肩部は強いナデ。	明茶褐色	壺穴仕居6	体部外面上下に 傷。
38-a	高杯	復元口径11.0 残存高3.3	脚部は下外方に大きくひらき、肩部はやや肥厚し、面をなす。内面で捺地する。	外面は楕円ナデ、内面はヘラケズリ。	淡明褐色	壺穴仕居6	
74-6	壺	復元口径8.3 残存高3.4	大きな平底の底部。	内外面ともナデ。内面に指頭任脈を残す。	淡明茶褐色	壺穴仕居6	
38-a	壺	復元口径4.9 残存高2.6	突出する平底で、中央が凹む。	外面はナデ、内面はナデ及びハケ。底部外面に指頭任脈。	淡明茶褐色	壺穴仕居6	
74-8	瓦器 甗	復元口径14.8 残存高3.4	内面が味々にひらく風形を呈する。底部は面をもつ。	口縁部は楕円ナデ、外面はナデ、内面はヘラミガキ。時文は松葉文か。	黒色	壺穴仕居6	
74-9	瓦器 甗	復元口径5.1 残存高1.2	断面台形の高台を有する。	外面はナデ、内面はナデ後ヘラミガキ。見込み部分の時文はシダヤブ文か。高台はハリツケ。	灰色	壺穴仕居6	
75-1	壺	復元口径20.0 残存高1.7	口縁端部は上下に肥厚し、肩部に波状文を施す。	内外面とも楕円ナデ。	淡明茶褐色	壺穴仕居8	
38-b	壺	復元口径 最大径12.2	最大径をほぼ中心にもつ扁平な算盤玉形の体部を有する。	体部外面はヘラミガキ、内面はナデ。口縁部との接合部を顕著に残す。	淡明茶褐色	壺穴仕居8	
38-b	壺	口径6.7 残存高2.9	平底から大きく上外方にのびる。	外面は縦方向ハケ後ナデ、底面はナデ。内面は斜め方向のハケ、中央部はクモの葉状にハケ目を施す。	明淡褐色	壺穴仕居8	外面に黒斑。

図 面 図版番号	器 種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
75-4	高杯	復元口径16.6 体部最大径19.2 残存高12.6	体部は尖底状の底部から上外方に大きくひらがるが、口縁部は逆くの字形に際曲して内傾し、口縁部は逆くの字形に際曲して内傾する。口縁部は逆くの字形に際曲して内傾する。口縁部は逆くの字形に際曲して内傾する。	外面は細かいヘラミガキ、屈曲部に2本の沈線を通らす。口縁部内面は顕著な指頭状の痕を残し、上下端に剛性のヘラミガキを施す。体部内面はヘラミガキ。胴台部との接合は充塞法による。	淡褐色	幣穴住居8	胎土にくまりの塵を含まず、他地城所の可能性がある。
75-5	小型高杯	復元口径12.4 底径5.8 推定器高8.9	体部は内唇部味にひらき、肩部は丸くおさまる。胴部はほぼ垂直に短く下り、外方に屈曲しておわる。肩部は厚く、面をなす。	杯部外面はナデ、口縁部付近に一部ハケを施す。口縁部一内面上半はナデ、下半はハケ。肩部は内外面ともナデ。	淡明茶褐色	幣穴住居8	杯部に焼成前に凹孔を穿つ。
75-6	高杯	残存高5.5	胴部はわずかにひらき、肩部は厚く、面をなす。口縁部は逆くの字形に際曲して内傾する。口縁部は逆くの字形に際曲して内傾する。	外面はヘラミガキ、内面にはシボリ痕を残す。	褐色	幣穴住居8	
38-5							
75-7	蓋	径7.6	円盤状をなし、中央部がやや膨らむ。肩部は面をなす。	内外面ともナデ。	淡明茶褐色	幣穴住居8	
38-6							
75-8	蓋	底径4.2 残存高2.6	やや突出する平底の底部。	外面はナデ、内面はナデ、一部ハケ。	暗褐色	幣穴住居9	
39-4							
75-9	蓋	底径4.7 残存高2.3	突出する平底を呈し、中央が凹む。	内外面ともナデ、外面に指頭正痕。	淡明茶褐色	幣穴住居9	
39-5							
75-10	蓋	復元口径15.2 残存高2.6	短く外区する口縁部。肩部は面をなす。	内外面とも槽ナデ。	淡明茶褐色	幣穴住居10	
75-11	蓋	復元底径15.2 残存高2.6	平底の底部。		明淡茶褐色	幣穴住居10	彫成者しい。
75-12	蓋	底径3.15 残存高2.3	小さな平底から、内唇部味にのびる。	外面はナデ、内面は板ナデ。	淡茶褐色	幣穴住居10	外面に彫成者しい。

図 面 版 番 号	器 種	法 量 (cm)	形 態 及 び 施 文 の 特 徴	注 法 の 特 徴	色 調	出 上 地	備 考
75-13	壺	復元口径23.2 残存高2.4	大きくひらく口縁部、肩部は下内方に拡張する。	内外重とも横ナデ。	明淡黄褐色	整穴状遺構	内面に黒斑。
39-a							
75-14	高杯	復元口径11.8 残存高1.5	脚柱部から唇曲してひらく唇部。肩部は下方に肥厚する。	外面はヘラミガキ。	外面赤褐色 内面黒色	整穴状遺構	摩滅著しい。
76-1	壺	復元口径23.2 残存高2.4	大きくひらく口縁部、肩部は下内方に拡張する。	内外重とも横ナデ。	明淡黄褐色	整穴状遺構	内面に黒斑。
76-2	壺	残存高2.1	外反して大きくひらく、唇曲して立ち上がる口縁部。器内外面に点状文を施す。	内外面とも横ナデ。	淡明茶褐色	整穴状遺構	
39-c							
76-3	甕	復元口径16.9 残存高2.7	外反する口縁部で、肩部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ、肩部付近は強いナデ。	淡明赤褐色	整穴状遺構	
76-4	壺		大きくひらく口縁部、肩部は下外方に幅広く拡張する。器面に凹形浮文を施す。		明茶褐色	整穴状遺構	摩滅著しい。
39-c							
76-5	鉢	復元口径16.3	内彎して立ち上がる体部から外反してのびる口縁部、肩部は丸くおさめる。	口縁部は内外面とも横ナデ。外面はナデ、内面は不定方向のヘラミガキ。	明茶褐色	整穴状遺構	
76-6	鉢	口径5.0 残存高3.7	平底の底部から、上外方にのびる。	外面はヘラミガキ、内面及び底部はナデ。	淡黄褐色	整穴状遺構	
76-7	壺	復元口径3.8 残存高2.3	やや突出する平底で、中央が凹む。	外面はナデ、内面はハケ。	淡明褐色	整穴状遺構	
76-8	甕	復元口径4.3 残存高2.8	突出する平底から、内彎気味にのびる。	外面は右よりの平行タタキ、内面及び底部はナデ。	淡明赤褐色	整穴状遺構	

図面 図形番号	器種	法 属 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
76-9	甕	底径3.8 残存高2.0	平底の底部で、中央がやや凹む。	外面は平行タタキ、底面はナデ。	明茶褐色	甕穴状遺構 ピット埋土	
39-c							
76-10	甕	復元底径3.3 残存高3.4	突出する平底から、内唇外縁にのびる。	外面は平行タタキ、内面はナデで、板ナデの痕跡を残す。底面はナデ。	明褐色	甕穴状遺構	
76-11	甕	底径4.6 残存高3.9	高く突出し、中央のやや凹む平底から、上方にのびる。	外面はナデ、底部外面は強いユビオキユ。内面はナデ、一部ヘラミガキ。	淡茶褐色	甕穴状遺構	
39-e							
76-12	甕	復元底径4.6 残存高2.6	強く突出する平底で、中央がやや膨らむ。	外面は平行タタキ。	淡明黄褐色	甕穴状遺構	
76-13	甕	底径4.0 残存高2.2	突出する平底から、上方にのびる。	外面は平行タタキ、内面は板ナデ、底面はナデ。	茶褐色	甕穴状遺構	
76-14	甕	底径2.9 残存高3.7	中央がやや膨らむ平底から、やや内唇外縁に上方にのびる。	外面は平行タタキ、内面は板ナデ、底面はナデ。	淡茶褐色	甕穴状遺構	外面に黒煙。
39-f							
76-15	甕	復元底径3.8 残存高3.0	底面中央がやや凹む平底から、上方にのびる。	外面は右よりの粗いタタキ、内面板ナデ。	淡茶褐色	甕穴状遺構	
76-16	有孔鉢	復元底径2.9 残存高2.4	厚い平底の底部。	外面は粗い平打タタキ、内面はナデ。	茶褐色	甕穴状遺構	底部中央に鑿成前に円孔を穿つ。
76-17	器台	残存高5.7	脚部は外唇外縁にひろき、外面に太い凹脈を廻らす。	脚部外面は横ナデ、内面はナデ。	明淡褐色	甕穴状遺構	
39-g							
76-18	高杯	残存高3.6	脚柱部はやや外区外縁にひろく。	脚部内面はヘラミガキ。脚柱部外面はナデか。内面に指通土痕を残す。	明茶褐色	甕穴状遺構	

図面 図番	器種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出土地	備 考
76-19	高杯	復元口径12.0 残存高4.0	やや外弯気味にひらく輪部。肩部は面をなす。	脚部外面は細かいヘラミガキ、内面及び端面はナデ。	明淡黄褐色	乾六状遺構	
39-e							
76-20	高杯	復元口径14.5 残存高2.2	内弯気味に下る輪部。肩部は上下に拡張する。外面に刺文文帯を施す。	外面及び端面は横ナデ、内面はナデ。	明淡黄褐色	乾六状遺構	
39-c							
77-1	(脚付)	復元口径9.8 残存高9.7	残存部は外傾して下った後、屈曲してひらき、やや内弯気味にのびる。肩部は丸くおとめる。屈曲部以下の外面にヘラ状工具による浅い沈線を通らす。	外面屈曲部以上はヘラミガキ、それ以下は不明。内面はナデ。	明赤褐色	乾六状遺構	
40							
77-2	鉢	復元口径34.6 残存高7.4	内弯気味にひらく体部から、わずかにくびれて上外方にひろがる口縁部。	外面は体部以下ナデ、他は横ナデで、くびれ部分は強いナデ。口縁部は折り返し。	赤褐色	土坑23	
77-3	盤	復元口径11.0 残存高2.5	外反してひらいた後、屈曲して直立する口縁部。肩部は丸くおとめる。	内外面とも横ナデ。	明赤褐色	土坑23	
77-4	盤	復元口径6.0 残存高2.0	大きな平底。内面中央に工具痕あり。	外面は平行タタキ、内面は横ナデ、底面はナデ。	明赤褐色	土坑23	
77-5	盤	復元口径4.5 残存高1.6	平底で、中央が凹形。	外面は左上りの平行タタキ、内面及び底面はナデ。	明赤褐色	土坑18	
78-1	蓋	復元口径10.8 残存高4.0	上外方に折曲的にのびる口縁部。肩部は丸くおとめる。	内外面とも調整不明。	淡黄褐色	土坑10	
78-2	高杯	残存高3.1	内弯しながら外方にひろがった後、屈曲して上方にのび、さらに屈曲する。	内外面とも主に横方向のヘラミガキ、内面杯部底は放射状のヘラミガキ。	明淡褐色	土坑10	
40							

区 図 版 番 号	前 面 番 号	品 種	法 量 (cm)	形態及び瓶文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
78-3	40	雙	復元口径13.4 残存高4.7	丸みをもつ体部から外反する口縁部。頸部は丸くおさめらる。	外面は平行タタキ、1縁部及び内面はヨコナデ。	淡明茶褐色	土坑34	
78-4	40	雙	復元口径18.4 残存高6.8	内筒してのびる体部から外反する1縁部。端部は丸くおさめらる。	体部外面は粗い平行タタキ、内面はナデ。1縁部及び内面はヨコナデ、外面は調整不明。	淡褐色	1坑34	体部外面に黒斑を有す。
78-5	40	雙	底径3.7 残存高3.5	小さな平底から、内筒しながらのびる。	外面は平行タタキで腰部付近に及ぶ。内面は横ナデ、底面はナデ。	淡明茶褐色	土坑34	外面に黒斑。
78-6	40	高杯	復元口径25.7 残存高2.7	大きくひろがる杯部から、屈曲して上方に外反しながらのびると思われ口縁部。端部は平坦面をもつ。	外面は細かいハケ、上端面は横ナデ、内面はヘラミガキ。	明赤褐色	1坑35	
79-1	41-a	雙	復元口径29.3 底径7.8 無足部高45.8	丸みをもつた高さの体部から、斜めに屈曲する口縁部。端部は下方に肥厚する。底部は中央が、やや膨らむ平底を呈する。	1縁部は内外面とも横ナデ。体部上平外面はハケ、内面は横ナデ、下平外面はヘラケズリが見られる。内面は一部板ハケが認められ、底付近に指節印痕がある。底部はナデ。	明茶褐色	1坑40	
79-2	40	布有鉢	口径14.1 底径7.8 器高9.1	体部は内筒しながら、上外方にのび、端部は丸くおさめらる。やや突出する半底の中央には、径8mmの焼成副穿孔がある。	外面は右しがりの平行タタキ、内面は横ナデ。	明赤茶褐色	土坑42	ほぼ球形。外面に黒斑。
79-3	40	雙	底径3.5 残存高4.3	平底から、内筒気味に上外方にのびる。	外面はタタキ及びハケ。	淡灰褐色	1坑42	
79-4	40	雙	底径4.4 残存高1.6	上げ底から、上外方にのびる。	内外面ともナデ。	明赤褐色	土坑42	
79-5	40	蓋	口径13.0 残存高7.5	丸みをもつ体部から、短く外反する1縁部をもつ。端部は丸くおさめらる。	口縁部外面は横ナデ、頸部外面はハケ、肩部外面はタタキ後、ヘラミガキ。	淡明茶褐色	土坑42	

図面 図解番号	器種	法量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
79-6	壺	復元口径16.1 残存高2.3	丸みをもつ体部から、短くくの字状に外反する口縁部をもつ。底部は丸くおさまる。	内外面ともナデ。	明淡茶褐色	土坑46	
79-7	壺	復元口径16.4 残存高7.1	丸みをもつ体部から、くの字状に外反する口縁部をもつ。底部は凹面をなす。	口縁部内外面とも横ナデ。肩部外面は右上下りのタタキ、内面はナデ。	明赤褐色	土坑46	
41-a	壺	底径4.0 残存高2.4	平底から、上外方にのびる。	外面は平行タタキ、底面はナデ。	淡暗褐色	土坑46	
79-9	瓮	口径10.9 体部最大径22.1 底径5.2 器高20.9	中位やや上方に最大径を有し、やや厚の張った扁平な体部。頸部は直立気味に立ち上がり、やや外反した後、短く直立しておわる。肩部は水平な面をもつ。底部は突出した平底。	11線部は外外面とも横ナデ。体部外面はヘラミガキ、肩部にタタキ目を残す。底部外面はナデ。体部内面はハケ。体部内面中位に指頭生肌。底部内面は強いナデ。	明淡黄褐色	土坑40	
80-1	杯蓋	復元口径13.2 器高4.9	天井部は高く、丸い。縁は鋭い。口縁部はわずかにひらき気味に下り、端部はやや内傾する凹面をなす。	天井部外面の約名は凹転ヘラケズリ、他の部分は凹転ナデ。	灰色	土坑3	
80-2	杯蓋	復元口径15.4 器高5.1	天井部は丸い。縁は鋭い。口縁部は短く、ややひらき気味に下り、端部内面は凹縁を巡らす。底部は丸くおさまる。	天井部外面の約名は凹転ヘラケズリ、他の部分は凹転ナデ。天井部内面中央部に同心凹文を残す。	灰白色	土坑3	焼成不良。
80-3	杯蓋	復元口径14.9 残存高5.1	天井部は高く、やや平ら。11線部は内凹気味に下り、端部にやや内傾する凹面を有する。端部外面に斜めに筋目を施す。	天井部外面の約名は凹転ヘラケズリ、他の部分は凹転ナデ。	灰色	土坑3	ヘラ配分着り。
80-4	杯蓋	復元口径12.7 器高4.6	天井部は丸い。縁はほとんど突出せず。鈍い。口縁部はややひらき気味に下り、端部に内傾する凹面をなす。底部は丸い。	天井部外面の約名は凹転ヘラケズリ、他の部分は凹転ナデ。	灰色	土坑3	
80-5	杯蓋	復元口径14.3 器高4.8	天井部は平ら。縁はほとんど突出せず。鈍い。口縁部はややひらき気味に下り、端部内面に凹縁を有する。底部は丸い。	天井部外面の約名は凹転ヘラケズリ、他の部分は凹転ナデ。内面に指頭生肌が見られる。	灰色	土坑3	

図面 図版番号	器種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の詳説	色 調	出土地	備 考
80-6	杯蓋	口径15.6 胎高5.6	大井部は高く、丸い。縁は鈍い。口縁部はややひらき意味に下り、肩部にやや内傾する凹面をなす。肩部は丸い。	大井部外面の約1/3は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナズ。	淡黄灰色	上坑3	
42	杯蓋	口径14.2 胎高4.4	大井部は丸い。縁は鈍い。口縁部はひらき意味に下り、肩部にやや内傾する凹面を有し、肩部は丸い。	大井部外面の約1/3は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナズ。	灰色	土坑3	自然釉。
80-8	杯身	復元口径13.4 支脚径15.6 残存高5.2	たちあがりは高く、ほぼ直立する。底部に内傾する凹面をなす。支脚は薄く、やや上外方にのびる。底部は深く、平ら。	底部外面の約1/3は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナズ。	灰色	上坑3	黒色付着物。
80-9	杯身	口径10.8 交部径13.0 胎高4.9	たちあがりは短く、内傾し、短部に内傾する凹面をなす。支脚は短くやや上外方にのび、肩部は鈍い。底部は深く、丸い。	底部外面の約1/3は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナズ。支脚部内面中央部に同心円文を焼す。	暗灰色	土坑3	
80-10	杯身	口径11.6 胎高4.95	たちあがりは高く、内傾する。底部は深く、丸い。肩部は鈍い。底部は深く、丸い。	底部外面の約1/3は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナズ。	淡灰色	土坑3	
42	杯身	口径12.0 交部径14.4 胎高5.4	たちあがりはやや内傾し、肩部は内傾する凹面をなす。支脚は薄く、上外方にのび、肩部は深く、丸い。	底部外面の約1/3は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナズ。	暗青灰色	上坑3	自然釉。
80-12	杯身	口径11.9 交部径14.0 胎高5.1	たちあがりはやや内傾し、肩部は内傾する凹面をなす。支脚は短く上外方にのびる。底部内面に凹面を遺らす。支脚部中央につまみを付すが、形状等は不明。	底部外面は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナズ。内面中央部は回転ナズ後、一定方向のナズ。	淡灰褐色	上坑3	
80-13	高杯蓋	口径15.2 残存高5.8	大井部は高く、丸い。縁はほとんど突出しない。口縁部はややひらき意味に下り、肩部内面に凹面を遺らす。大井部中央につまみを付すが、形状等は不明。	大井部外面の約1/3は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナズ。つまみはハリツケ。	淡灰色	土坑3	
80-14	無蓋高杯	復元口径10.2 残存高4.9	杯部は上外方に大きくひろがった後、屈曲してやや直立意味に外反し、肩部は丸くおさめる。肩部外面には鋭い縁を有する。	杯部底部はヘラケズリ後、ナズ。その他の残存部分は回転ナズ。	暗灰色	土坑3	

図版番号	器種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色 調	出土地	備 考
80-15	高杯	残存高3.8	杯部外面に1条以上の彫刻状文を施す。脚部には長方形透しを穿つ。透しの数は不明。	内外面とも回転ナデ。脚部内面にはシボリ痕を顕著に残す。	暗灰色	土坑3	
80-16	高杯	残存高2.9	杯部外面に1条ないし2条の低い実帯を巡らし、その間を1条の彫刻状文で飾る。脚部には透しを二方に穿つ。	残存部の杯部底部外面は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	黒灰色	土坑3	
80-17	高杯	底径8.0 残存高8.0	脚部はゆるやかにひろがり、二度屈曲してやや内傾気味に下っておわる。脚部は丸くおさめらる。脚部には、長方形透しを三方に穿つ。	脚部を除く脚部外面はカキ目、他の脚部内外面は回転ナデ。	淡灰色	土坑3	
80-18	短頸壺	口径10.5 器高3.8	天井部は高く、丸い。口縁部は外下方に下り、肩部付近でやや外反する。	天井部外面全体に回転ヘラケズリ、他の分は回転ナデ。	灰色	土坑3	一部に自然焼、焼け進む。
80-19	小型樽瓶	体部長径10.0 体部径8.8 残存高9.7	体部は丸みを著びた輪郭をなす。口頸部下半はほぼ直立するが、上半を欠失する。	1) 頸部は回転ナデ。体部は、肩部・肩外面をナデするほか、全体にカキ目を施す。	灰色	土坑3	
80-20	壺	腹元口径17.4 残存高5.3	口頸部は直立し、肩部付近で強く外反しておわる。肩部は下外方に肥厚する。	1) 頸部は内外面とも回転ナデ。	淡灰色	土坑3	
80-21	罍	口径9.8 残存高5.0	口頸部はやや外反気味にたちあがり、肩部は丸く肥厚する。	体部内面に同心円文を残す。残存する体部外面・口頸部内外面とも回転ナデ。	暗灰色	土坑3	
80-22	罍	腹元口径44.8 残存高10.8	口頸部はゆるやかに外反し、肩部付近で強く外反する。肩部外面には強い面を有し、ヘラ彫刻状文を施らす。外面には2条、対称の弱い沈線と3本以上施らし、その間を横指状文で飾る。	1) 頸部内外面とも回転ナデ。	黒灰色	土坑3	

図面 図番	器種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
80-23	鉢	復元口径26.0 残存高14.7	口縁部は、半球形の体部上平から外反気味にたらしめ、肩部付近でさらに広く外反する。	口縁部及び腹部内面は回転ナデ、頸部外面はカキ目。残存する体部上半外面には細かい平行タタキを施し、細いカキ目を通す。内面は同心円文を残し、部を押し出す。	灰色	土坑3	
81-1	杯蓋	口径14.4 残存高5.2	天井部は高く、平ら。縁は短く突出し、鋭い。縁の下方には波線を施す。口縁部は下方外方に下り、端部内面に凹線を有し、丸くおさめる。	天井部外面の約分は回転ヘラケズリを行うが、中央部付近は未調整。他の部分は回転ナデ。	灰色	土坑22	
81-2	杯蓋	口径15.2 器高5.3	天井部は丸い。縁はほとんど突出しない。口縁部はややひらき気味に下り、端部に内傾する面をなす。	天井部外面の約分は回転ヘラケズリ、内面中央部は一定方向のナデ、他の部分は一定方向のナデ。	黒灰色	土坑22	ヘラ記号。自然焼。
81-3	杯蓋	口径16.8 器高5.4	天井部は丸い。縁は短く、鋭く突出する。口縁部は下方外方にひらき、端部に内傾する面をなす。端部は丸い。	天井部外面の約分は回転ヘラケズリ、内面中央部は一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	黒灰色	土坑22	ヘラ記号。
81-4	杯蓋	復元口径13.2 残存高4.4	天井部は平坦。縁は断面二角形を呈し、鋭い。口縁部は垂直に下り、端部内面に内傾する凹線を有する。	天井部外面の約分は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。天井部内面中央に同心円文を残す。	灰色	土坑22	
81-5	杯蓋	復元口径14.1 器高4.7	天井部は丸い。縁はなく、凹線が通る。口縁部はやや下外方にひらき、端部に内傾する面をなす。	天井部外面の約分は回転ヘラケズリ、内面中央部は一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	灰色	土坑22	
81-6	杯蓋	口径15.8 器高5.3	天井部は丸い。縁はほとんど突出しない。口縁部内面に鋭い凹線を施す。端部外面には斜めに帯目を施す。	天井部外面の約分は回転ヘラケズリ、内面中央部は一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	黒灰色	土坑22	ヘラ記号。自然焼。焼け進む。
81-7	杯蓋	復元口径14.2 残存高4.6	天井部は丸い。縁はなく、凹線が通る。口縁部はほぼ垂直に下り、端部に内傾する面をなす。	天井部外面の約分は回転ヘラケズリ、内面中央部は一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	黒灰色	土坑22	

陶面 図版番号	器種	法量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
81-8	杯蓋	口径14.6 器高4.5	天井部は丸い。縁はほとんど突出しない。口縁部はやや下外方に下り、肩部内面に凹線を有する。	天井部外面の約半に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	灰色	土坑22	自然釉。
43	杯蓋	口径16.6 器高5.4	天井部は丸い。縁はわずかに突出し鋭い。口縁部はやや内厚しながら下り、肩部内面に凹線を有する。	天井部外面の約半に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	黒灰色	土坑22	ヘラ記号。自然釉。縁け含む。
81-10	杯蓋	口径14.4 器高5.5	天井部は高く、丸い。縁はわずかに突出し鋭い。口縁部はやや内厚しながら下り、肩部は丸くおさめられる。肩部外面には斜めに輪目を施す。	天井部外面の約半に回転ヘラケズリ、内面中央部に一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	灰色	土坑22	ヘラ記号。自然釉。
81-11	杯蓋	口径15.5 器高5.2	天井部は高く、平ら。縁は鋭く、わずかに突出する。口縁部はややひらき鋭味に下り、肩部は丸くおさめられる。	天井部外面の約半に回転ヘラケズリ、内面中央部に一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	淡灰色	土坑22	
81-12	杯身	復元口径11.0 交部径14.4 器高4.7	たちあがりは内傾し、肩部内面に凹線を有し、丸くおさめられる。受部は上外方へのび、肩部は鋭い。底部は丸い。	天井部外面の約半に回転ヘラケズリ、内面中央部に一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	淡灰色	土坑22	
81-13	杯身	口径13.8 受部径15.8 器高5.4	たちあがりは短く内傾し、肩部内面に凹線を有する。肩部は丸い。受部は短く上外方へのび、鋭い。底部は丸い。	天井部外面の約半に回転ヘラケズリ、内面中央部に一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	灰白色	土坑22	ヘラ記号。自然釉。
43	杯身	口径15.0 受部径17.7 器高5.6	たちあがりはやや内傾しながらのび、肩部に内傾する面をなす。肩部は丸い。受部は断面三角形を呈し、やや上外方へのびる。肩部は丸い。底部はやや平ら。	底部外面の約半に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	灰色	土坑22	
81-15	杯身	口径13.0 受部径15.9 器高5.0	たちあがりは内傾しながらのび、肩部内面に凹線を施し、肩部は鋭い。受部は短く上外方へのび、肩部は鋭い。底部は平ら。	底部外面の約半に回転ヘラケズリ、内面中央部に一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	灰色	土坑22	杯蓋の一部が交部に付着。

図版番号	器種	法 尺 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色 調	出土地	備 考
81-16 43	杯身	口径12.2 受部径13.3 器高5.0	たちあがりは内傾しながらのび、肩部内面に凹い凹面をなす。肩部は丸い。受部は外方にのび、たちあがりとの境に凹線を有する。底部は平ら。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、内面中央部に一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	灰色	土坑22	ヘラ記号。
81-17 43	杯身	口径14.4 受部径17.4 器高5.3	たちあがりは内傾しながらのび、肩部は丸くおさめる。受部は厚く、たちあがりとの境に凹線を有する。底部は平ら。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、内面中央部に一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	灰色	土坑22	
81-18 43	杯身	口径13.1 受部径15.4 器高4.8	たちあがりは内傾しながらのび、肩部は丸くおさめる。受部は厚く、たちあがりとの境に凹線を有する。底部は平ら。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、内面中央部に一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	淡灰色	土坑22	一部に自然釉。 焼け進む。
81-19 43	杯身	口径12.6 受部径15.1 器高5.3	たちあがりは内傾しながらのび、肩部は内傾する面をなす。肩部は丸い。受部は断面で角形を呈し、やや上外方にのび、肩部は丸い。底部は窪く、丸い。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	灰色	土坑22	底部に自然釉。
81-20	杯身	口径12.9 受部径15.3 器高5.1	たちあがりは内傾しながらのび、肩部内面に沈線を施らす。肩部は丸い。受部はやや上外方にのび、たちあがりとの境に凹線を有する。肩部は丸い。底部は丸い。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、内面中央部に一定方向のナデ、他の部分は回転ナデ。	暗灰色	土坑22	ヘラ記号。一部に自然釉。
81-21	高杯	残存高5.9	杯部底部はやや平ら。肩部は太い基部からゆるやかにひろがる。肩部に凹孔を穿つ。凹孔の数は不明。	残存部全体に回転ナデ。	青灰色	土坑22	外面に自然釉。
82-1 44-a	杯身	口径11.3 受部径13.8 器高5.3	たちあがりは内傾しながらのび、肩部付近でわずかに外反する。肩部内面には凹線を施らし、丸くおさめる。受部は厚く、断面	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	淡灰色	土坑5	

図 面 区 分	器 種	法 量 (cm)	形 態 及 筋 文 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
82-1			三角彩を呈し、やや上外方にのびる。肩部は鋭い。底部は深く、丸い。				
82-2	高杯	底径9.6 残存高7.3	肩部はハの字形にひらき、肩部付近で屈曲し、垂直に下っておわる。肩部は内面で接し、肩部には長方形の透しを穿つ。透しの数は不明。	脚部は全体に回転ナズ。	灰色	土坑5	
82-3	甕	残存高7.4	口頸部は、半球形の体部上平から立ち上がり、ゆるやかに外反する。	残存する口頸部は内外面とも回転ナズ、肩部外面は平付タキ後、カキ目を残す。肩部内面は同心凹文を残す。	灰白色	土坑5	内面に白然軸。
82-4	甕	口径14.2 器高7.8 つまみ高4.0	天井部は高く、丸い。口縁高部内面に明瞭な凹輪を巡らす。肩部は鋭い。天井部中央に隆平珠縁のつまみを付す。	天井部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナズ。	淡灰褐色	土坑12	外面の一部に白然軸。
44-a		口径9.4	扁平な体部から、短くひろく広口の口縁部を有する。	底部外面を手持ちヘラケズリする。他の部分は回転ナズ。	暗灰色	七坑33	
82-5	埴	胴部最大径9.3 器高5.3		外面から口縁部内面は横ナズ、体部内面はヘラケズリ。肩部外面は斜に強いナズ。	明茶褐色	七坑33	
44-a	土師器	復元口径20.1	おそらく長製の体部から、外反する広口の口縁部を有する。				
82-6	甕	復元口径14.2 残存高4.7	天井部は高く、平ら。腰はなく、凹輪を巡らす。口縁部はひらき鋭味に下り、肩部付近で強く外反する。肩部内面に凹輪を有する。	天井部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、内面中央部に一定方向のナズ、他の部分は回転ナズ。	灰色	土坑41	
44-a	杯	復元口径13.4 受部径16.1 器高5.1	たちあがりは内傾しながらのび、肩部は丸く、内面に強い凹輪が巡る。空部は上外方にのび、肩部はやや鋭い。底部は丸い。	天井部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、内面中央部に不定方向のナズ、他の部分は回転ナズ。	灰色	土坑41	一部に白然軸。
83-1	杯	復元口径13.9 受部径16.5 残存高4.1	たちあがりは短く内傾する。肩部は丸く、内面に強い凹輪を有する。空部は外方にのび、肩部はやや鋭い。底部は深く、やや平ら。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナズ。	灰色	土坑41	

図面 図版番号	器 種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色 調	出 土 地	備 考
83-4	甕	復元口径20.0 残存高4.9	口縁部は外反する。肩部は外方に肥厚し、 下外方に凹面をなす。	口縁部全体に回転ナズ。	灰色	土坑41	
83-5	甕	残存最大径34.1 残存高25.0	肩部はおそらくやや凸削で、底面は丸い。	体部下半外面は、指子タタキ痕、カキ目を 残す。内面は同心円文を顕著に残す。	灰赤色	土坑41	一部自然種。
84-1	杯身	復元口径12.8 受部径15.6 残存高3.0	たちあがりは内傾しながらのび、肩部はや や外反く、内面に凹縁を有する。受部は上外 方にのび、肩部はや鋭い。	残存部は内外面とも回転ナズ。	灰色	土坑43	
84-2	杯身	復元口径15.0 受部径18.0 残存高4.3	たちあがりは内傾しながらのび、肩部はや や外反し、内面に強い凹縁を有する。受部 は上外方にのび、肩部はや鋭い。	残存部は内外面とも回転ナズ。	灰白色	土坑43	焼成不良。
84-3	無蓋高杯	復元口径10.7 残存高3.7	杯部はやや深く、口縁部はまっすぐくや上 外方に立ち上がる。肩部は丸い。外面には 2本の流線を通らし、その間を主要の彫掘 波状文で飾る。脚部には、透しを二方に穿 つ。	残存部は内外面とも回転ナズ。	灰色	土坑45	内外面の一部に 濃緑色の自然種。
84-4	鉢	復元口径48.8 残存高8.5	杯部は浅く、肩部にわずかに内傾する凹面 をなす。	杯部内面下部は不定方向のナズ、他の部分 は回転ナズ。	濃灰色	土坑49	
84-5	杯盤	復元口径11.6 器高3.1	全体に扁平半球形を呈する。肩部は丸く おさめらる。	下半外面の約半は未調整、内面中央部は 一定方向のナズ、他の部分は回転ナズ。	灰色	土坑49	
84-6	杯身	復元口径14.2 受部径16.6 残存高4.0	たちあがりは内傾し、肩部はやや丸い。受 部は上外方にのび、肩部はやや鋭い。	底部外面の約半に回転ヘラケズリ、他の部 分は回転ナズ。	淡灰色	土坑49	
84-7	杯盤	残存高11.9 つまみ径1.9	天井部は平坦である。つまみは小さく、断 面逆台形を呈する。	天井部内面の中央部は不定方向のナズ、他 の部分は回転ナズ。	淡灰色	土坑51	天井部に緑色の 自然種。
44-b							

図面 図番	形種	法量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
84-8	杯身	復元口径12.6 受部径14.8 残存高3.3	たちあがりはやや内傾し、丸くおさまる。受部は長く、やや「外方」のび、端部は丸い。	残存部は内外面とも回転ナデ。	灰色	土庫51	
84-9	高杯	残存高5.8	脚部は長脚で長方形の通しを二方一段に穿つ。下段の通しの上下に浅い文線を巡らせる。	脚部外面はカキ目、内面は回転ナデ。内面には、シボリ線を残す。	淡灰色	土庫54	
44-b							
84-10	蓋	復元口径14.0 残存高3.0	口縁部は内湾気味に下り、端部は丸くおさまる。	残存部は内外面とも回転ナデ。	淡灰色	土庫54	
84-11	杯蓋	復元口径16.0 残存高3.2	縁はほとんど突出しない。口縁部は下外方に下り、端部に内傾する狭い凹面をなす。	残存部は内外面とも回転ナデ。	灰白色	土庫54	
84-12	杯身	復元口径13.0 受部径15.0 残存高2.3	たちあがりは短く内傾し、端部は鋭い。受部は薄く、やや「外方」のび、端部はやや鋭い。	残存部は内外面とも回転ナデ。	灰色	土庫54	
84-13	初新蓋	復元口径12.4 残存高7.2	やや肩の張った体部から、ほぼ直立する口縁部を有する。口縁部ははやや肥厚し、丸くおさまる。	体部上縁外面はカキ目、口縁部外面は回転ナデ後、粗いカキ目。内面は回転ナデ。	灰色	土庫54	
84-14	土師器 甕	残存高11.6	甕の突口部右側の頸部である。	残存部内外面ともナデ。	淡明茶褐色	土庫54	
44-b							
84-15	甕	体部径9.0 残存高6.3	体部はやや扁平で肩は強くない。外面に2条の沈線を巡らし、その間を垂線列点で飾る。体部は正中中央にやや上外方から円孔を穿つ。	体部は内外面とも回転ナデ。	灰色	土庫55	
45-a							
84-16	甕	復元口径22.0 残存高9.3	口縁部は外反し、端部下方に突帯を有し、やや直立する面をなす。	口縁部内外面ともに回転ナデ。肩部外面は平行タタキ後、カキ目。内面は同心円文を	灰色	土庫55	口縁部内面及び外面全体に緑色の自然釉。
45-a							

図面番号	器種	法量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
85-1	把手付鍋	復元口径8.2 器高3.2	体部は深い半球形で、口縁部は外寄しつつおすかかに内傾気味に立ち上がる。半角形の大さな把手を1個付す。体部外面中に2条の沈線を通らす。	体部外面下部に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナゲ。底部は再調整で凹凸がばげしい。把手はハリツケ。	灰白色	溝2	焼成やや甘い。
45-b							
85-2	無蓋高杯	残存高4.2	杯部底部は丸い。外面に2条一対の沈線1条の沈線を通らし、その間を摺接列点で繋る。脚部には長方形の透しを三方に穿つ。	残存部内外面とも回転ナゲ。	黒灰色	溝3	
85-3	土師器 壺	復元口径20.8 残存高6.9	おそろくやや長調の体部から外反する口縁部を有する。口縁端部外面には強い面をなす。	口縁部外面は軽い横ナゲ、内面は軽い横ヘケ。肩部外面はナゲ及び斜め方向のハケ、内面はナゲ。	淡黄褐色	溝3	
86-1	杯身	復元口径12.1 受部径15.0 残存高5.6	たちあがりは長く内傾し、端部に内傾する凹面をなす。受部は薄く、上外方にのび、端部は丸い。底部は丸い。	底部外面の約3/4に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナゲ。	灰色	溝11	底部外面に自然釉。
45-b							
86-2	杯身	口径10.2 残存高5.6	たちあがりは長く内傾し、端部内面に凹線を通らす。端部はやや鋭い。受部は薄く、上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸い。	底部外面の約3/4に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナゲ。	淡灰色	溝11	
86-3	無蓋高杯	復元口径10.8 残存高7.2	杯部底部は深く丸い。口縁部はややひらき気味に立ち上がり、端部は丸くおさめらる。口縁部と底部の境に強い線を通らす。脚部には長方形の透しを二方に穿つ。	底部外面全体に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナゲ。	灰色	溝11	内外面に一部自然釉。
45-b							
86-4	(把手)		両端が曲がり、器体に嵌合する把手であるが、上部に葉形のものが見られ器種は不明である。	把手はナゲ。内面上半はナゲ、下半は同心凹文を施す。外面は回転ナゲ。	灰色	溝11	
45-b							
86-5	甗	復元口径12.3 残存高5.8	体部は上外方にのびる。平底多孔式と思われる。	残存部の底部外面はカキ目、内面は回転ナゲ。底部付近は内外面とも半輪ちへラケズリ。	灰白色	溝11	やや瓦質。
45-b							

図面 図番	品 種	法 量 (cm)	形 態 及 び 施 文 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
86-6	壺	根元口径17.4 残存高4.7	口頸部は上外方にのび、肩部付近で外方に 膨厚し、肩部外面に1条の凹線を巡らし、 口頸部外面に2条の沈線を巡らし、縞線波 状文を施す。	残存部全体に回転ナデ。	灰口色	溝11	
86-7	壺	根元口径16.1 残存高7.0	口頸部は上外方にのび、口縁端部付近で外 方に、肩部を丸くつくる。	頸部外面はカキ目、内面は回転ナデ。肩部 外面はカキ目後平打タタキ、内面は同心門 文。	灰口色	溝11	
86-8	壺	根元口径51.4 残存高6.4	口縁端部外面にや広い凸面を有する。口 縁部外面に2条の突帯を巡らし、頸部外面 にカキ目後、1条の縞線波状文を施す。	口縁部は内外面とも回転ナデ。頸部外面は カキ目、内面はナデ。	灰色	溝11	全体に自然釉。
87-1	杯身	口径9.8 受部径11.8 残存高4.8	たちあがりはほぼ直立し、肩部内面に明瞭 な凹線を有する。受部は上外方にのび、端 部は丸い。底部は深く、やや平ら。	底部外面の約3/4に回転ヘラケズリ、他の部 分は回転ナデ。	灰色	溝12	
87-2	杯身	口径10.0 受部径12.4 残存高4.5	たちあがりは内傾し、肩部外面に凹線を有 する。受部はやや外方にのび、端部は丸 い。底部は深く、やや平ら。	底部外面の約3/4に回転ヘラケズリ、他の部 分は回転ナデ。	淡青灰色	溝12	外面に自然釉。
87-3	杯蓋	根元口径15.8 残存高5.1	天井部は平ら。縁はほとんど突出しない。 口縁部はややひらき気味に下り、端部は丸 く、内面に強い凹線を有する。	天井部外面の約3/4に回転ヘラケズリ、他の 部分は回転ナデ。	淡灰褐色	溝14	縁部不良。
87-4	杯蓋	口径13.2 残存高5.2	天井部は丸く、縁はない。口縁部はややひ らき気味に下り、端部は丸くおさまる。	天井部外面の約3/4に回転ヘラケズリ、他の 部分は回転ナデ。	灰色	溝14	ヘラ記号。
87-5	杯身	口径10.4 受部径12.4 残存高5.1	たちあがりはやや内傾し、端部は丸く、内 面に強い凹線を有する。受部は断面三角形 を呈し、外方に短くのびる。端部は丸い。	底部外面の約3/4に回転ヘラケズリ、他の部 分は回転ナデ。	淡灰色	溝14	ヘラ記号。
87-6	杯身	口径10.2 受部径12.5 残存高5.4	たちあがりはやや直立し、端部はやや内傾 する凹面をなし、鋭い。受部はやや上外方 にのび、端部は丸い。底部は深く、丸い。	底部外面の約3/4に回転ヘラケズリ、他の部 分は回転ナデ。	灰色	溝14	

図版番号	面	名稱	法量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
87-7		高杯蓋	復元口径11.8 底径5.9 つまみ径2.8	天井部は高く、やや平ら。縁は断面三角形を呈し、鋭い。口縁部は適度に下り、肩部に内傾する面を有する。天井部中央に中凹みのつまみを付す。	天井部外面の約半に回転へラケズリ、内面中央部に一定方向のナデ。その他の部分は回転ナデ。つまみはハリツケ。	淡灰色	溝14	
87-8		甌	残存最大径20.0 残存高7.1	おそらくやや外方にひろく凹筒形の体部に、上角形の把手を付す。	体部外面はカキ目、内面は同心凹文を一部ナデ消す。把手はナデ、ハリツケ。	灰色	溝14	
87-9		甌	復元口径5.4 残存高7.4	口縁部は外反し、口縁肩部は断面三角形を呈し、外方に面をなす。口縁肩部直下及び頸部外面に1条及び2条の注線を通らし、その間及び下方におのおの1条の幅広い楕円波状文を施す。	頸部外面の一部にカキ目、他の部分は回転ナデ。	黒灰色	溝14	
88-1		杯蓋	復元口径11.8 残存高5.4	天井部は高く、丸い。縁は外下方に鋭く突出する。口縁部は内巻意味に下方に下り、肩部は内傾する弱い凹面をなす。	天井部外面の約半に回転へラケズリ、他の部分は回転ナデ。	灰色	溝16	
88-2		高杯蓋	残存高2.9 つまみ径2.8	おそらく丸い天井部中央にやや高い中凹みのつまみを付す。	残存する天井部外面は平行タタキ後、カキ目。他の部分は回転ナデ。	淡灰色	溝16	
46								
88-3		甌	復元口径23.5 残存高8.1	口縁部はやや外反し、頸部外面に断面三角形の安泰を通らす。肩部はやや外傾する面をなす。	底部外面は平行タタキ後、ナデ。内面は同心凹文を残す。口縁部は内外面とも回転ナデ。	黒灰色	溝16	自然物。
88-4		凹筒型輪	残存部径29.6 残存高3.6	タガは断面台形を呈し、外方に突出する。突出度はやや高い。	外面は横ナデ。	暗褐色	溝16	
89-1		杯身	復元口径9.9 受部径12.5 頸高6.1	たちあがりは広く内傾し、頸部は丸く、内面に凹面を有する。受部は上外方にのび、頸部は丸い。受部とたちあがりの境には沈	底部外面の約半に回転へラケズリ、他の部分は回転ナデ。	灰色	溝17	

図面 図版番号	器 種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出土地	備 考
89-1			輪を添らす。底節は深く、丸い。				
89-2	高杯	復元底径12.1 残存高8.7	脚部はへの字形にひらき、端部付近でやや内折し、頸部は丸くおさめらる。脚部には長方形造しを二方に穿つ。	頸部は内外面とも回転ナデ。	黒灰色	溝17	自然釉。
89-3	罍	口径9.5 残存高4.5	口頸部はゆるやかに立ち上がり、端部付近で外反し丸くおさめらる。	頸部外面は細かいカキ目、他の部分は回転ナデ。	黒灰色	溝17	外面に自然釉。
46							
89-4	壺	復元口径17.5 残存高6.4	口頸部は外反気味にたるみあり、端部付近で、さらに外反する。頸部は弱い圓を形成する。	頸部外面は細かいカキ目、他の部分は回転ナデ。	灰色	溝17	
89-5	胎台	復元底径28.8 残存高6.7	脚部下半は内寄気味に下り、端部付近では垂直面によっておわる。脚部側はやや内傾する面をなし、外面で接地する。外面に2条桑・村の沈線を通らし、帯線状文を2条以上施す。三角形をいし台形の通しを穿つが、数・段数は不明。	残存部内外とも不明。	黒灰色	溝17	
46							
90-1	杯蓋	復元口径10.2 残存高2.1	天井部は低く、平ら。口縁部は丸い。内傾するかえりを有し、頸部は鋭い。	内外面とも回転ナデ。	青灰色	溝19	一部に自然釉。
46							
90-2	罍	復元口径24.0 残存高5.3	口頸部は外反気味に立ち上がり、端部外面に断面三角形の交帯を通らし、面をなす。	口頸部は内外面とも回転ナデ。	青灰色	溝21	内外面に緑色の自然釉。
90-3	杯身	復元口径12.8 文部径15.8 残存高5.5	たちあがりは内傾し、端部に内傾する凹面をなす。文部はやや上外方にのび、頸部は丸い。たちあがりと受部の境には、沈線を通らす。底節は丸い。	底部外面の約体に回転ヘラケズリ、その他の部分は回転ナデ。	青灰色	溝21	

図 前 号版 番号	器 種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
90-4	杯身	復元口径15.9 残存高3.8	受部は上外方にのび、端部はやや鋭い。た らあがりと受部の境には沈線を通らす。底 部はやや平ら。	底面外面の約1/2に回転ヘラケズリ、その他 の部分は回転ナデ。	灰白色	溝21	
90-5	器台	残存高11.5	残存する脚部は、ゆるやかにひろがる。2 条一対の相対的な突筋を一枚以上通らし、 その間を3条以上の横線状文で飾る。文 样帯には三角形の透し孔を、おそらく四方 に、一段以上穿つ。	脚部は内外面とも回転ナデ。	濃灰色	溝21	
90-6	高杯	基部径3.9 残存高6.4	脚部は比較的大い基部からハの字形にひろ がり、端部付近でいったん鋭い段をなして 終わるものと思われる。脚柱状部と端部の 境には、小さく鋭い突筋を通らす。刀子状 工具の割突による孔を一方に穿つ。面取り 調整はない。	脚部外面は回転ナデ。脚柱状部は回転ナデ 後、縦位のヘラミガキを施す。基部付近は さらに磨ナデ。脚柱状部内面は粗いナデ、 端部は回転ナデ。脚部を杯部に貼り付けた 後、基部に粘土を補充している。	黒灰色	溝22	
47-a							
90-7	土師器 壺	復元口径23.0 残存高6.8	半球形の脚部ト平から、やや上外方に立ち 上がる口縁部を有する。口縁端部は外傾す る面をなし、片口を有する。	内外面ともに割障が、はげしいため調整不 明。	暗茶褐色	溝25	
46							
90-8	高杯	復元口径12.0 残存高3.1	脚部はおそらくゆるやかにひろがり、端部 付近で断面し下方にトって終わる。端部は ややひろい外傾する面をなし、内面で縁直 する。脚部には長方形もしくは三角形の透 しを穿つが、数は不明。	残存部は内外面とも回転ナデ。	灰色	溝25	
91-1	壺	復元口径16.4 残存高3.4	あまり狭くない体部から、外反する口縁部 端部は大きくおさめる。おそらく長銅の鑿で あろう。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は 粗い平行タキで頸部に及ぶ。内内面はナ デ。	淡赤褐色	S P 661	
91-2	壺	復元口径14.0 残存高2.8	丸みをもつ体部から外反する口縁部。端部 は丸い。	口縁部外面はヨコナデ、体部外面は平行タ キで頸部にまで及ぶ。内面はナナ調整。	赤褐色	S P 664	

図面 図版番号	器 種	法 量 (mm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 上 地	備 考
91-3	壺	復元口径12.2 残存高3.4	頸部は外反斜縁にのび、口縁部付近直立し 肩部は丸くおさめる。	残存部外面下部に細かいハケを施し、その 他は、ヨコナデを行う。	赤褐色	SP655	
91-4	甕	復元口径22.4 残存高2.4	口縁部で上下に肥厚し、肩部には2条の 凹縁が深る。	残存部全体にナデを施す。	淡赤褐色	SP812	
91-5	壺	復元口径23.0 残存高3.2	外側に開く肩部から、頸部は下方に肥厚 する。端面に2条の凹縁がむぐる。	残存部全体にナデを施す。	淡褐色	SP98	
91-6	壺	復元口径17.0 残存高4.5	外方に開く肩部から、頸部はほぼ直立し端 部付近で上下に肥厚し内傾する面をなす。	残存部全体にナデを施す。	淡褐色	SP220	
91-7	壺		口縁部で外方に肥厚し端面をなす。その 上に円形浮文を2列施す。	残存部は全体にナデを施す。	黒色	SP244	
91-8	壺		口縁部で上外方に肥厚し端面をなす。	残存部は全体にナデを施す。	明褐色	SP239	
91-9	甕		頸部から厚みを増しながら口縁部に至る。 口縁部で上外方に肥厚し端面をなす。面上 にはヘラ状工具による刺突文が施される。	残存部は全体にナデを施す。	棕色	SP456	
91-10	壺		口頸部は外反してひろがると思われる。口 縁部で上外方に肥厚し端面をなす。面上に 凹縁を2条施す。	残存部は全体にナデを施す。	灰黄色	SP339	
91-11	壺		口頸部は外反してひろがると思われる。口 縁部で外方に肥厚し端面をなす。口縁部 内面に1条の輪郭波状文を施す。	残存部は全体にナデを施す。	黄褐色	SP109	
91-12	壺		口頸部は外反してひろがると思われる。口 縁部で外方に肥厚し端面をなす。口縁部 内面に2条の波状文を施す。	残存部は全体にナデを施す。	褐色	SP639	

図 前 図 番号	器 種	法 様 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 上 地	備 考
91-13	高杯	復元口径14.8 残存高4.4	脚部部は大きくひろがり、端部に面をなしておわる。	残存部は全体にナズまたはミダナ。	漆褐色	SP387	
91-14	有孔鉢	復元口径3.8 残存高2.2	底部はやや突出した平底である。底部中央に径0.8cmの孔を穿つ。	底部外面は斜位の平行タタキ、底部内面および底面はナズ。	黄褐色	SP625	底部外面に黒斑有り。
91-15	鉢	復元口径4.4 残存高2.7	底部はやや突出した平底である。	外面は斜位の平行タタキ、内面はナズ、底面はナズ。	黄褐色	SP790	底部内面に黒斑有り。
91-16	鉢	復元口径3.8 残存高2.2	底部は平底である。	外面は斜位の平行タタキ、内面は板ナズ、底面はナズ。	淡赤灰色	SP725	
91-17	鉢	復元口径3.0 残存高2.1	底部は平底である。	外面は斜位の平行タタキ。	暗赤灰色	SP725	
91-18	鉢	残存高2.7	底部はやや突起気味の丸底である。	外面はタタキ後、ナズ。	黄褐色	SP523	底面に黒斑。
91-19	鉢	残存高1.9	やや厚い丸底を呈する。	全体にナズを施す。内面に指頭圧痕が見られる。	明赤茶褐色	SP173	
91-20	鉢	底部径7.8 残存高3.2	平底で中央部が、ややふくらむ。	外面はハラミガキで、ハケの痕跡も認められる。	明赤褐色	SP826	底部に黒斑。
91-21	鉢	底部径5.0 残存高2.2	やや平底を呈する。	内外面ともナズ調整。	褐色	SP487	内面に黒斑。
91-22	鉢	底部径4.9 残存高3.0	突出する平底から、斜外方にのびる。	底部はしばり込んで成形する。内外面とも厚縁が著しいが、外面にはタタキが認められる。底部付近には指頭圧痕も見られる。	黒褐色	SP925	外面は黒斑。

図面 図番	器種	法域 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
91-23	高杯	復元口径9.3 残存高5.3	頸部は外傾してのびた後、腰部でさらに剛 き絞地する。	内外面とも磨滅するが、外面はヘラミガキ 内面はヘラケズリと思われる。	淡明褐色	SP795	
91-24	杯蓋	復元口径14.4 残存高5.0	天井部は高く平らで、縁は強く突出する。 口縁部は内凹気味に下方へ下り、端部で外 反する。底部は丸く、内面に凹縁が通る。	天井部名に回転ヘラケズリ、その他は回転 ナデを行う。	暗灰色	SP934	
91-25	杯蓋	復元口径15.0 残存高4.2	天井部はおそらく平らで、縁は強くわずか に突出する。口縁部はやや内凹気味に下方 へ下り、端部で外反する。端部に丸く弱い 凹縁が通る。	残存部全体に回転ナデを施す。	暗灰色	SP934	
91-26	杯身	復元口径4.3 受部径14.8 残存高2.2	たちあがりは短く内傾し、受部は外方にの びる。	残存部全体に回転ナデを施す。	灰色	SP923	
91-27	杯身	復元口径12.9 受部径15.3 器高5.4	たちあがりは内傾し、口縁部はやや丸く 内面により強い凹縁が通る。口縁部と受部の 間には沈線が通り、受部は外方にのびる。 底部は深く平らである。	底部の名に回転ヘラケズリ、その他は回転 ナデを行う。底部内面に小定方向のナデを 施す。	灰白色	SP183	底部外面に他の 器体の一部が、 付着する。
91-28	杯身	口径11.4 受部径14.1 残存高3.6	たちあがりは外反気味に内傾し、口縁部 は丸く弱い凹縁が通る。受部は上方にの びる。	残存部全体に回転ナデを施す。	灰色	SP725	たちあがりを受 部の面に、重ね 焼きの跡が見ら れる。
91-29	壺	復元口径15.5 残存高2.3	頸部は外反し口縁部で外方に肥厚する。溝 部は丸くおさめる。	残存部全体に回転ナデを施す。	灰色	SP928	

図 面 図 解 番 号	器 種	法 量 (cm)	形態及び飾文の特徴	装 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
91-30	雙	復元口径22.0 残存高4.3	頸部は肩節から短く直立気味にのびた後、外反する。口縁部で外方に肥厚し、肩部は丸い。	残存部全体に回転ナデを施す。	灰白色	SP928	徳成やや不良。
91-31	雙	復元口径14.6 残存高3.7	頸部は外傾した後、さらに帯出して口縁部に至る。口縁部で外方に肥厚し、肩部は丸い。	残存部全体に回転ナデを施す。	淡灰色	SP167	残存部全体に緑色自然釉が、かかる。
91-32	雙	復元口径16.1 残存高4.9	頸部は外傾する。口縁部は丸く、皮下に断面二角形の突縁が通る。	頸部外側にカキ目を施す。内面及び口縁部はナデ。	灰色	SP636	
91-33	雙	胴部径9.4 残存高4.1	肩部は外方に下り、胴部は下方に下る。胴部と頸部の境に、1条の凹縁が通り、その下に隆起列点文を施す。	残存部全体に回転ナデを施す。	灰色	SP120	
91-34	土師器 雙	復元口径29.0 残存高3.9	外下方に下る肩節から、口縁部はくの字状に外反する。口縁部は上方に肥厚し凹面をなす。	口縁部は内外面ともヨコナデ、肩部は厚減のため不明である。	赤褐色	SP836	
91-35	土師器 雙	復元口径17.2 残存高8.0	おそらく長頸をなす体部より、口縁部は外反する。肩部は丸い。	体部外面は粗いハケ目、口縁部外面はナデを施す。内面は初磨のため調整不明。	赤褐色	SP1033	
91-36	土師器 (把手)		基部は太く、上面は中程で帯出し、上方にのびる。	残存部全体にナデ。	赤褐色	SP947	
91-37	雙	残存高8.8	肩部は外方に下る。頸部はほぼ直立した後やや外反する。頸部上部に凹縁が通るが、基部は不明である。	頸部は内外面ともナデで、外面に一部カキ目を施す。肩部外面は平行タタキ、内面は同心円文が見られる。	淡青灰色	SP826	口縁部は緑灰色。
92-1 47-b	土師器 杯	口径13.3 器高3.6	小型で浅い。	内外面ともナデ。外面に指節は区を残す。	淡紫灰色	井戸3	
92-2 47-b	土師器 杯	残存高3.7	小型でやや深い。	口縁部内面はナデ。	淡乳灰色	井戸3	器面の磨耗はげしい。

図版番号	器種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出土地	備 考
92-3	長頸甕	残存高7.2	口縁部はわずかに外反気味に立ち上がる。	頸部は内外面とも回転ナデ。	灰色	井戸3	
92-4	高杯	残存高6.8	脚部上半はほぼ垂直に下る。	残存する脚部外面は回転ナデ、内面にシボリ痕を残す。	暗灰色	井戸3	
92-5	土師器 (肥手)		千舟状の肥手である。肥手を接着した部分の器体内面には摺鉢状の凹みを有する。	残存部はナデ。	灰黄褐色	井戸3	
92-6	土師器 (肥子)		舌状の肥子である。	残存部はナデ。肥子はハリツケ。	灰色	井戸3	
92-7	瓦		平瓦の破片である。	上面には粗い糸目を残し、部分的に面取りする。下面は平行タタキ痕を残し、脚部はナデる。	灰色	井戸3	前後の方向に横糸痕を認める。
93-1	灰輪器 長頸甕	胴部最大径8.6 残存高8.2 高台径5.0	胴の張る体形を有し、平底に高むを付す。体部上半に軸状色の輪をかける。	体部外面の初段は回転ヘラケズリ、外面上半部はその後、回転ナデ。体部内面・底縁・高台は回転ナデ。高台はハリツケ。	灰白色	土坑13 (土壌層)	底部内面にも輪がかかる。
47-c	黒色土師 杯	口径13.2 器高4.3 高台径7.0	やや深い半球形をなし、口縁端部内面に凹輪を施らす。高台は断面三角形をなし、底部は高台よりも突出する。	外面はナデ。内面上半部は粗いヘラミガキを行い、やや暗文庫。内面下半部はナデ。高台はハリツケ。重割に黒色処理を施す。	黒色	土坑13 (土壌層)	器前は凹凸が多い。
93-3	土師器 皿	口径15.7 器高3.1	やや大形で、浅い。口縁端部は上方につまみ上げる。	口縁部は横ナデ、外面は粗いナデ、内面は丁寧なナデ。	黄褐色	土坑13 (土壌層)	器面は凹凸が多い。
47-c	土師器 皿	口径12.6 器高3.2	小型で浅く、口縁端部は丸くおさめる。	口縁部は横ナデ、外面はナデ。外面には指頭上痕を残す。	黄白色	土坑13 (土壌層)	器面は凹凸が多い。
93-5	土師器 杯	口径13.8 器高2.9	やや小型で、深く、口縁端部は上方につまみ上げる。	口縁部は横ナデ、外面は粗いナデ、内面はナデ。外面に指頭上痕。	淡赤褐色	土坑13 (土壌層)	器面は凹凸が多い。
47-c							

図面 図版番号	器種	法量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
94-1	罍	復元口径43.6 残存高3.6	口頸部は入きくひろがり、頸部は上下にのびてほぼ垂直な面をなす。口縁部外面に2条一対の凹線を通らし、その下方を帯状波状文で飾る。	残存する口頸部は内外面とも回転ナデ。	淡灰色	谷状地形最下層	自然種。
94-2	罍	復元口径38.4 残存高5.4	口頸部は上外方にのび、端部外面に突帯を通らし、ほぼ垂直な凹線をなす。口縁部外面に2条の突帯を通らし、その間を2条の帯状波状文で飾る。	残存する口頸部は内外面とも回転ナデ。	紺灰色	SX01	
94-3	こね鉢	底径7.8 残存高4.3	円盤状の底部からややひろき頸部に立ち上がる。	残存部内外面とも回転ナデ。底面はへうまコシ、未調整。	灰色	谷状地形最下層	内外面にへうまよる刻み目。
94-4	高杯置	残存高2.6 つまみ径4.0	やや平らな文様部の中央に中間みのつまみを1個付す。つまみの周囲を帯状列点文で飾る。	大井部外面の約3/4に回転へうラケズリ、内面中央部に同心円文、他の部分は回転ナデ。つまみはハリツク。	灰色	SX01	
94-5	杯身	残存高1.3 復元高台径10.6	やや大きな平底に高台を付す。	残存部内外面とも回転ナデ。底面内面は一部ナデ。	灰色	谷状地形最下層	
94-6	土師器 (把手)		牛角状の把手で、上面に切り込みを行う。	把手全体をナデによって成形する。	淡赤褐色	SX01	
94-7	瓦		平底の破片である。	上面はナデ。下面はナデを行うが、部分的にハケ目様の痕跡を残す。側面はナデ。	灰色	SX01	
94-8	鉢	残存高5.6 底径14.2	大きな平底から、上外方に立ち上がる。	外面は回転ナデ、内面は板ナデ、底面はへうまコシ。	灰色	谷状地形最下層	自然種。

図面 図番番号	器種	法量 (cm)	形態及び銘文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
94-9	鉢	残存高5.6 底径14.0	大きな平底から、ほぼ直立気味に立ち上がる。	外面は回転ナデ、内面は板ナデ、底面はヘラオコシ。	灰色	谷状地形最下層	
94-10	瓦質羽釜		ほぼ直立する器体から、やや下外方に長く突出する駒を有する。	外面はナデ、内面はナデ、ヘラミガキを噴文風に施す。	外面淡褐色 内面黒色	谷状地形最下層	須恵質
94-11	瓦器碗	残存高2.9 高台径5.0	半球形を呈し、小さな低い高台を付す。	外面はナデ、内面はナデ、ヘラミガキを噴文風に施す。	外面灰白色 内面黒色	谷状地形最下層	
94-12	瓦器碗	復元口径14.5 残存高3.9	1縁部は内凹気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。	1縁部は板ナデ。内外面ともナデ、ヘラミガキを噴文風に施す。	外面灰白色 内面黒色	谷状地形最下層	
94-13	瓦器碗	復元口径16.0 残存高3.5	1縁部は内凹気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。	1縁部は板ナデ。内外面ともナデ、ヘラミガキを噴文風に施す。	外面灰白色 内面黒色	谷状地形最下層	
95-1	甕	復元口径25.0 残存高8.6	口頸部は体部からくの字形に外反する。口縁部は下方に肥厚し、外面にはぼ厚紙な面をなす。頸部は板い。	頸部外面はカキ目、内面は回転ナデ。肩部は縦位の平行タタキ後、頸部との境に6条の波線を施す。内面は同心円文を残す。	灰白色	S X 02	
95-2	甕	復元口径24.8 残存高7.5	口頸部は上方にのび、端部はほぼ垂直な面をなす。口縁部はほぼ垂直な面をなす。	口頸部内外面とも回転ナデ。肩部外面は平行タタキ後、回転ナデ。内面は同心円文。	灰色	S X 02	肩部外面に輪状工具による刺突。
95-3	甕	残存高17.5	頸部はややひろき気味に立ち上がる。頸部外面に上から楷線源状文、2条の回線、櫛指源状文、1条の凹線を施す。	頸部外面は回転ナデ、内面は板ナデ。体部上平外面は平行タタキ後、カキ目、内面は同心円文を残す。	灰色	S X 02	
95-4 48	甕	復元口径40.6 残存高15.1	口頸部は上方にのび、端部にはほぼ水平な面をなしておわる。1縁部頸部外面には断面内形の突帯を施す。頸部外面には2条の凹線を施す、その間を1条の楷線波状文で隔る。	頸部は内外面とも回転ナデ。	灰色	S X 02	

図 版 番 号	高 種	法 藏 (cm)	形 態 及 び 施 文 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
95-5	甕		口頸部は上外方にのび、頸部はやや外傾する弱い面をなす。頸部外面に断面三角形の突起を運らし、その下方を縞並流状とする。	残存部は内外面とも回転ナズ。	暗灰色	SX02	
48							
95-6	甕	復元口径10.8 残存高4.4	薄くくびれた頸部から外反する1頸部を有する。頸部は玉縁状に肥厚する。	口頸部は内外面とも回転ナズ、体部外面は回転ナズ、内面は平行タキキ縁を残す。	灰色	SX02	自然焼。
95-7	杯蓋	復元口径13.4 残存高5.8	天井部は高く、丸い。縁は短く突出し、鈍い。口縁部はほぼ垂直に下り、頸部内面に深い凹縁を運らし、段をなす。	天井部外面の稍分は回転ヘラケズリ、内面中央部には指頭牙痕を残す。他の部分は回転ナズ。	灰色	SX02	
95-8	高杯	残存高4.8	杯部底部はやや平ら。脚部はハの字形にひらく。	杯部外面は回転ヘラケズリ、内面中央部はナズ、他は回転ナズ。脚部は内外面とも回転ナズ。	淡灰色	SX02	
95-9	高杯	残存高6.8	脚部は細い、基部からラッパ状にひらく。		淡赤褐色	SX02	
95-10	瓦質 仏花瓶	残存高5.0	おそろくはほぼ球形の体部から、直立する頸部を有する。体部外面に草花文をスタンプする。	残存する頸部外面はナズ、内面はヘラケズリ後、ナズ。体部は内外面ともにナズ。	外面黒色 内面暗灰色	SX02	
48							
95-11	瓦器側	残存高2.0 復元高口径5.6	断面三角形の高台を付す。	残存部外面はナズ。	外面灰白色 内面黒色	SX02	
48							
95-12	瓦器側	残存高2.0 復元高口径4.8	断面台形の高台を付す。	残存部外面はナズ。	外面灰白色 内面黒色	SX02	
48							
95-13	陶器 大甕	復元口径42.3 残存高7.5	大きな平底から上外方に立ち上がる。	底面および底部外面はハケ状調整様ナズ。底部外面の一部にヘラケズリ、内面はハケ状調整およびナズ。	淡青灰色	SX02	
95-14	瓦	残存長16.2	瓦瓦の破片である。	外面は底ナズ。内面は粗い布目とともに格子状に細い瓦筋が残る。	暗灰色	SX02	
48							

図面 図記番号	名 種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出土地	備 考
95-15	陶器 摺鉢	復元口径26.6 残存高6.3	口縁部は上外方にひらき、踵部は丸くおさめらる。内面に浅い凹目を入れる。	残存部は内外面とも回転ナデ。	暗褐色	S X 02	
48							
95-16	陶器 把鉢	復元口径27.7 残存高6.7	口縁部は上外方にのび、踵部はほぼ直立する。底部外面に断面台形の突帯を巡らし、凹内のある面をなす。内面にやや細かい凹目を入れる。	残存部は内外面とも回転ナデ。	明赤褐色	S X 02	
95-17	磨梅	復元底部径35.4 残存高7.0	口筒直縁または朝顔形直縁の基部である。		茶褐色	S X 02	器面の刻線は詳しい。
96-1	壺	復元口径20.8 残存高6.0	口頸部は底部から短く外反する。肩部は肥厚し、外面に弱い凹面をなす。	残存部は内外面とも回転ナデ。	灰色	井戸1	内外面に自然釉。
96-2	壺	復元口径23.3 残存高6.7	口頸部は底部から短く外反する。肩部は肥厚し、外面に弱い凹面をなす。	口頸部内外面とも回転ナデ。底部上半外面は平行タタキ、内面は同心円文を残す。	淡灰色	井戸1	内外面に自然釉。
96-3	壺	復元最大径10.8 残存高17.4	おすかに肩の張った球形の体部から、上外方にのびる口頸部を有する。肩部外面は鋭い突縁と権線状文を交互に配する。	口頸部は内外面とも回転ナデ。体部は外圍平行タタキ後カキ目、内面は同心円文。	淡灰色	井戸1	体部内面に顯著な嵌合頭線す。
96-4	杯身	復元口径12.4 実部径13.2 残存高3.8	たちあがりは内傾し、肩部内面に弱い凹線を有する。突部は薄く、上外方にのび、端部はやや鋭い。	残存部は内外面とも回転ナデ。	青灰色	井戸1	
96-5	無蓋高杯	復元口径10.6 残存高3.7	杯部の口縁部は長く、ややひらき意味に立ち上がり、踵部は丸くおさめらる。底部はやや平ら。外面に浅い2条の凹線を巡らし、その間を1条の権線状文で隔る。脚部には透しを一方に穿つ。	杯部は内外面とも回転ナデ。	黒灰色	井戸1	

区 前 河版番号	器 種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 上 地	備 考
96-6	提瓶	腹元口径9.0 残存高4.2	口頸部はひらき気味に立ち上がり、さらに外反しておわる。肩部は丸くおさめる。	口頸部は内外面とも回転ナデ。	灰色	井戸1	頸部内面に自然釉。
96-7	磁器 茶碗	残存高3.0 高台径4.4	断面形状の高凸を付す。		白色	川戸1	高台に染付け。
96-8	陶器 酒鉢	腹元口径20.4 残存高4.2	口縁部はゆるやかにひろがり、肩部付近で直立しておわる。肩部は水平な面をなす。内面にやや鋭な樋口を入れる。	残存部は内外面とも回転ナデ。	淡灰色	井戸1	
97-1	杯蓋	口径11.9 器高4.8	天井部はやや平ら。縁はほとんど突出しなす。口縁部はほぼ垂直に下り、肩部に内傾する面をもつ。	天井部外面の約2/3に回転ヘラケズリ、内面中央部にナデ、他の部分は回転ナデ。	淡灰色	竪穴住居2 上層	ヘラ起身有り。
97-2	杯蓋	口径11.2 器高5.1	天井部は高く、丸い。縁は断面三角形を呈し、やや鋭い。口縁部はほぼ垂直に下り、肩部内面に凹縁をなし、段をなす。	天井部外面の約2/3に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	暗青灰色	竪穴住居2 上層	
97-3	杯蓋	口径14.4 器高3.1	天井部は低く、平坦。縁はない。口縁部は下外方に下り、肩部は丸くおさめる。	天井部外面の約2/3に回転ヘラケズリ、内面中央部に不足方向のナデおよび指オサズ、他の部分は回転ナデ。	淡灰色	竪穴住居2 上層	
97-4	杯蓋	口径12.9 器高3.3	天井部はやや平ら。縁は断面三角形で、やや鋭い。口縁部はわずかにひらき気味に下り、肩部に内傾する明確な面をなす。肩部は鋭い。	天井部外面の約2/3に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	黒紫色	竪穴住居2 上層	
97-5	杯蓋	口径11.7 器高5.5	天井部は高く、丸い。縁は短く突出し、やや鋭い。口縁部はほぼ垂直に下り、肩部に内傾する明確な面をなす。	天井部外面の約2/3に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	淡灰色	竪穴住居2 上層	
97-6	杯蓋	口径11.8 器高4.8	天井部は高く、平ら。縁ははや下外方に突出し、鋭い。口縁部はほぼ垂直に下り、肩部内面に明確な凹縁を呈らす。	天井部外面の約2/3に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	暗灰色	竪穴住居2 上層	

図 版 番 号	器 種	法 量 (cm)	形態及び彫文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
98-2	壺	復元口径18.6 残存高3.0	頸部から肩出し立ち上がり、外反してひらく二重口縁。端部は直をなす。		明淡茶褐色	包含層	
98-3	壺	残存高3.8	一重口縁で、加曲部下方に突帯を有する。外面を2本の粗い波状文で飾る。	頸部外面はナズ、一部ハテ。口縁部外面はヘラミガキ。内面は丁寧なヘラミガキ。	明淡茶褐色	包含層	黒曜
49							
98-4	壺	復元口径16.7 残存高1.7	大きくひろがる口縁部。端部は上下方に拡張する。	内外面ともナズ。	明淡茶褐色	包含層	
98-5	壺	復元口径16.1 残存高5.4	やや外反して上外方にのび、なめらかにひろがる。口縁端部は下方に拡張する。	頸部外面はハテ。口縁部外面及び内面はナズ。	明赤褐色	包含層	
49							
98-6	壺		大きくひろがる口縁部。端部は下方に拡張する。肩面に円形浮文を付す。	内外面とも横ナズ。	淡黄褐色	包含層	
49							
98-7	壺		大きくひろがる口縁部。端部は上下に肥厚し、端部は凹縁と円形浮文で飾る。	外面はヘラミガキ。端部は横ナズ。	明淡茶褐色	包含層	
49							
98-8	壺		大きくひろがる口縁部。端部は上下に肥厚し、端部は竹管文で飾る。	内外面ともナズ。	明赤褐色	包含層	
49							
98-9	罎		短く外反する口縁部。端部は上下に肥厚し、端部は沈線で飾る。	内外面ともナズ。	明淡赤褐色	包含層	
98-10	罎	復元口径14.8 残存高2.6	外傾して立ち上がる口縁部。端部は上方につまみ上げ、下方にやや肥厚する。	内外面とも横ナズ。	明赤褐色	包含層	
98-11	罎	復元口径34.4 残存高4.0	くの字形に外反する口縁部。端部は上下に肥厚する。	口縁部は内外面とも横ナズ。体部外面は平行タタキ、内面はヘラケズリ。	明淡赤褐色	包含層	
49							

図面 区別番号	出 柄	法 算 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出土地	備 考
98-12	菱	復元口径15.6 残存高2.0	短く外反する口縁部。端部は上内方にのびる。	内外面ともナデ。	明赤褐色	包含層	外面に薄く黒が付着。
98-13	菱	復元口径18.5 残存高4.2	くの字形に外反する口縁部。端部はやや肥厚し、面をなす。	口縁部はナデ。	明淡黄褐色	包含層	外面に黒斑。
98-14	鉢	復元口径12.1 残存高6.9	尖みをもつ体部から、外反する口縁部をもつ。端部は丸くおさめらる。	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面は軽い平行タタキ後ナデ、内面は横ナデ。	茶褐色	包含層	
98-15	鉢	復元口径12.6 体部最大径11.8 底径4.7 推定器高10.6	体部は最大径を上端部にもち、口縁部は軽く外反する。口縁端部は丸くおさめらる。底部は突出した上げ底である。	体部外面下半は平行タタキ後横ナデ。他の部分はナデ。底部外面に指頭状痕を残す。	茶褐色	包含層	底付着。
98-16	板	底径3.6 残存高3.4	強く突出する平底から、大きく上外方にのびる。	外面は平行タタキ、内面は軽いハケ。	明淡茶褐色	包含層	
98-17	菱	復元底径6.0 残存高4.6	厚い平底から、上外方にのびる。	内外面ともナデ。	淡褐色	包含層	黒斑
98-18	菱	底径4.0 残存高3.9	やや突出する平底から、内湾状味に上外方にのびる。	外面はナデ、底面はナデ。	明淡赤褐色	包含層	
98-19	菱	底径3.6 残存高2.2	中央部のやや凹む平底から、上外方にのびる。	外面は平行タタキ、内面はハケ後ナデ、底面にもタタキ。	暗茶褐色	包含層	外面に黒斑。
98-20	菱	底径3.9 残存高1.7	平底から、上外方にのびる。	外面は右上下の平行タタキ、内面は軽いハケ。	明淡赤褐色	包含層	外面に黒斑。

頭面 四角番号	器種	法量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
98-21	甕	底径3.2 残存高2.5	平底から、上外方にのびる。底面中央部は小さく凹む。	外面はハケ染ナデ、内面は粗いハケで、接合部を残す。底面はナデ。	淡明茶褐色	包含層	
98-22	甕	底径4.0 残存高3.5	わずかに突出する平底から、内寄気味に上外方にのびる。底面中央部は小さく凹む。	外面は平行タタキ、内面はナデ、底面はナデ。	淡茶褐色	包含層	外面に磨行着。
98-23	甕	底径6.0 残存高3.0	突出する平底から、上外方にのびる。	内外面ともナデ。	暗褐色	包含層	
98-24	甕	底径4.1 残存高1.7	やや中凹みの突出する平底から、上外方にのびる。	内外面ともナデ。	明淡茶褐色	包含層	
98-25	甕	底径4.1 残存高2.5	突出する平底から、上外方にのびる。	外面はナデ、内面は粗いハケ。	明淡茶褐色	包含層	外面に黒斑。
98-26	甕	底径4.6 残存高2.5	やや突出する平底から、上外方にのびる。	内外面ともナデ。	明褐色	包含層	外面に黒斑。
98-27	甕	復元底径4.7 残存高1.8	突出する平底から、上外方にのびる。	外面は平行タタキ、内面は粗いハケ、底面はナデ。	暗褐色	包含層	
98-28	有孔鉢	底径3.2 残存高3.3	平底から、上外方にのびる。底面中央に径8mmの円孔を輪成調に穿つ。	外面はヘラクラズリ、内面は板ナデ、底面はナデ。	明淡茶褐色	包含層	
98-29	甕	底径4.4 残存高4.1	わずかに突出する平底から、上外方にのびる。	外面は右よりの平行タタキ、内面はハケ、底面はナデ。	明淡褐色	包含層	外面に黒斑。
98-30	甕	底径4.9 残存高4.0	平底から、上外方にのびる。	外面はナデ、内面は板ナデ、指印凹痕を残す。	明茶褐色	包含層	外面に黒斑。

四面 図番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 及 び 施 文 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
98-31	壺	底径6.2 残存高2.0	わずかに突出する平底から、上外方にのびる。	内外面ともナデ。内面に一部ハテ。	淡明褐色	包否層	
98-32	壺	腹元口径4.3 残存高2.0	平底から、外反気味にのびる。	外面は右よりの平行タタキ、内面はナデ。	淡暗茶褐色	包否層	
98-33	壺	底径5.1 残存高2.4	丸みをもった平底から、上外方にのびる。	外面は平行タタキ、内面はハケ及びビナデ。	淡黄褐色	包否層	
98-34	有孔鉢	口径4.0 残存高2.0	やや突出する平底から、上外方にのびる。 底部中央に径1cmの円孔を焼成前に穿つ。	外面は平行タタキ、底面はナデ。	淡黄褐色	包否層	外面に黒斑。
98-35	(11線部)	腹元口径20.4 残存高2.5	口縁部は内傾し、端部は丸く肥厚する。	11線部はナデ。外面はナデ、内面は丁寧なヘラミガキ。	淡褐色	包否層	
98-36	高杯	残存高5.9	基部からややすぼまり気味に下る。	杯部内面はナデ。脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ。	淡茶褐色	包否層	
98-37	高杯	残存高4.5	基部からハの字形にひろがる。	杯部内面はナデ。脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ。	明茶褐色	包否層	
98-38	高杯	残存高6.6	基部からややひらき気味に下る。	外面はヘラミガキ、内面はナデ。内面上位にシボリ肌。	明茶褐色	包否層	
98-39	高杯	残存高4.4	基部からわずかにひらき気味に下る。	外面はヘラミガキ、内面はナデ。内面上位にシボリ肌。	明褐色	包否層	
98-40	高杯	残存高3.6	ややひらき気味に下る。2孔一対の円孔を三方に穿つ。	杯部内面はナデ。脚部内面はナデ。	明淡黄褐色	包否層	
49							

図 面 番 号	器 種	法 量 (cm)	形態及び構造の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
98-41	高杯	残存高5.3	基部からハの字形にひろがる。	外面はヘラミガキ、内面はナデ。内面上位にシボリ痕。	明淡茶褐色	包含層	
98-42	台付鉢	復元底径15.4 残存高7.9	下方に円錐的にひろく、端部は平出な面をなす。外面端部付近に2条の凹線を巡らす。多数の円孔を穿つ(現状で13個)。	内面一端部外面はナデ。	明淡茶褐色	包含層	外面下端に黒斑。
98-43	高杯	復元底径16.6 残存高2.0	おおきく外方にひろがっておわる脚部。端部は下方に肥厚し、端部は凹面をなす。	外面はヘラケズリ及びナデ。内面上方はヘラケズリ、下方はナデ。端部はナデ。	淡味褐色	包含層	外面下端に黒斑。
98-44	高杯	復元底径10.1 残存高1.6	大ききひろらいておわる。端部は面をなす。	外面はヘラミガキ、内面はナデ。	明淡赤褐色	包含層	
98-45	高杯	復元底径10.8 残存高3.8	下方に直線的にひろき、端部は下方に肥厚する。端部には凹線様の紋をなす。	外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリで、上半にシボリ痕。端部は強いナデ。	淡赤褐色	包含層	
98-46	高杯	復元底径14.0 残存高5.2	ハの字形にひろがり、端部は上下に肥厚する。基部下端に沈線を巡らし、その下方に縦方向のシャープな刻線を等間隔に施す。円孔を穿つ。	外面はヘラミガキ、端部～内面下半はナデで、内面上半はヘラケズリ。	明赤褐色	包含層	
98-47	高杯	残存高4.6	基部からハの字形にひろく。円孔を二方に穿つ。	外面上半はナデ、下半はヘラミガキ。内面はナデ。	明淡褐色	包含層	
98-48	器台	復元底径9.8 残存高3.8	下方に円錐的に下っておわる。端部は平面を有す。外面に数条の凹線を巡らす。	外面はナデ、内面上半はヘラケズリ、内面ド端はナデ。	淡褐色	包含層	外面に黒斑。
98-49	縄文土器 深鉢	残存高2.8	外面に鋭み目状帯を巡らす。	内外面ともナデ。	暗褐色	包含層	

図 号	前 図 番 号	器 種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出土地	備 考
99-1		杯蓋	復元口径13.2 残存高4.4	縁は断面三角形をなし、鋭い。口縁部は垂直に下り、肩部内面には凹縁を有し、丸くおさめらる。	天井部外面の約半に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	灰色	包含層	
99-2		杯蓋	口径12.2 器高4.7	天井部は高く、丸い。縁はほとんど突出しない。口縁部は垂直に下り、肩部内面に内傾する面をなす。	天井部外面全体に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデを行う。	淡灰色	包含層	自然態がかかる。
99-3		杯蓋	復元口径15.3 残存高4.6	縁はほとんど突出しない。口縁部はややひらき気味に下り、肩部内面に凹縁を有し、肩部は丸くおさめらる。	天井部外面の約半に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	灰白色	包含層	
99-4		杯蓋	復元口径12.8 残存高5.2	天井部は高く、丸い。縁は鈍い。口縁部はややひらき気味に下り、肩部内面に弱い凹縁を有し、肩部は丸くおさめらる。	天井部外面全体に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデを行う。	暗灰色	包含層	外面に自然態がかかる。
99-5		杯蓋	復元口径15.1 残存高5.15	天井部は丸い。天井部と口縁部の境には縁を有しない。口縁部内面に弱い凹縁を有し、丸くおさめらる。	天井部外面の約半に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	外面淡灰色 内面淡灰色	包含層	
99-6		杯蓋	復元口径15.4 残存高3.65	天井部と口縁部の境には縁を有しない。口縁部内面に弱い凹縁を有し、丸くおさめらる。	残存部は回転ナデ。	淡灰色	包含層	
99-7		杯蓋	復元口径13.8 残存高4.6	天井部は高く、丸い。縁は断面三角形を呈し、鋭い。口縁部内面に弱い凹縁を有し、丸くおさめらる。	残存部は回転ナデ。	外面暗灰色 内面灰白色	包含層	器面は凹内がある。
99-8		杯蓋	復元口径17.1 残存高2.9	縁はほとんどない。口縁部内面に弱い凹縁を有し、肩部は小さな面をなす。	残存部は回転ナデ。	暗灰色	包含層	
99-9		杯身	復元口径11.6 受部径14.0 器高5.2	たちあがりはやや内傾し、肩部内面に凹縁を有する。	肩部外面の約半に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	青灰色	包含層	
99-10		杯身	口径9.8 受部径12.6 器高4.6	小型で深い。たちあがりには内傾し、肩部に内傾する面をなす。受部は薄く、上方に鋭くのびる。	肩部外面の約半に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	淡灰色	包含層	内外面に自然態がかかる。

図面 図版番号	器種	法量 (cm)	形態及び施文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
99-11	杯身	口径12.8 受部径13.0 器高4.2	たちあがりはやや内傾し、肩部内面に弱い凹線を有する。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	黒灰色	包含層	
99-12	杯身	復元口径12.7 受部径15.2 残存高5.0	たちあがりは短く内傾し、肩部は丸くおさめめる。底部は深く、丸い。受部はやや上外方にのび、肩部は丸い。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	淡灰色	包含層	
99-13	杯身	復元口径11.6 受部径14.0 残存高5.2	たちあがりはわずかに内傾し、内面に弱い凹線を有する。底部は深く、丸い。受部はやや上外方にのび、丸くおさめめる。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	青灰色	包含層	
99-14	杯身	復元口径14.0 受部径16.8 残存高5.4	たちあがりは長く、直立し、肩部は深く、平坦な面をなす。受部は薄く、やや上外方にのび、肩部は鋭い。底部は深く、平坦。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	灰色	包含層	
99-15	杯身	口径12.1 受部径15.2 器高4.65	たちあがりは内傾し、肩部内面に弱い凹線を有する。受部は断面三角形を呈し、やや上外方にのび、肩部は丸い。底部は丸い。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	黒灰色	包含層	
99-16	杯身	口径10.8 受部径12.6 器高5.2	たちあがりは直立し、肩部に内傾する面をなす。受部は薄く、やや上外方にのび、肩部は丸い。底部は深く、丸い。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	淡灰色	包含層	
99-17	杯身	復元口径16.0 受部径19.2 残存高5.2	たちあがりは短く内傾し、肩部は丸くおさめめる。底部は断面三角形を呈し、やや上外方にのび、肩部は丸い。底部は深く丸い。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	外面灰色 内面淡灰色	包含層	
99-18	杯身	復元口径12.0 受部径14.8 残存高4.4	たちあがりは内傾し、肩部内面に凹線を有する。受部は断面三角形を呈し、やや上外方にのび、肩部は丸い。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	淡灰色	包含層	
99-19	杯身	口径9.6 受部径12.0 器高5.0	たちあがりは長く、わずかに内傾し、肩部内面に強い凹線を有する。受部はやや薄く上外方にのび、丸くおさめめる。底部は深くやや平ら。	底部外面の約1/2に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを行う。	淡灰色	包含層	

図 版 番 号	器 種	法 量 (cm)	形 態 及 び 施 文 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
99-20	高杯蓋	復元高3.9 つまみ径3.2	大井部は高く、丸い。縁は断面三角形を呈し、やや傾い。天井部中央に中凹みのつまみを付す。	天井部全体に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデを行う。つまみはハリツケ。	灰白色	包含層	
99-21	高杯蓋	残存高2.4 つまみ径3.2	天井部は高く、丸い。中央部に比較的高い中くぼみのつまみを付ける。	外面は回転ヘラケズリ、内面に回転ナデ。つまみはハリツケ。	青灰色	包含層	
99-22	無蓋高杯	復元口径10.0 残存高3.7	杯部は比較的高く、口縁部はやや上方にひらく。外面に2条の凹線を巡らし、この間を1条の彫掘状文で飾る。	内外面とも回転ナデ。	外面灰色 内面灰白色	包含層	
99-23	無蓋高杯	復元口径10.8 残存高5.9	杯部は比較的高く、口縁部は上方にひらく。外面に2条の凹線を巡らし、この間を1条の彫掘状文で飾る。	内外面とも回転ナデ。	灰色	包含層	内外面に自然釉がかかると。
99-24	高杯	復元底径8.2 残存高3.6	脚部はハの字形にひらき、端部付近で短く水半に張り出す。端部は内面で築地し、丸い。円孔を斜め上方から穿つ。円孔の数は不明。	脚部外面の約半分にカキ目、その他の部分に回転ナデを行う。	淡灰色	包含層	
99-25	高杯	復元底径9.0 残存高4.0	脚部はハの字形にひらき、いったん屈曲して半分に下り、端部は丸くおさめらる。屈曲部付近にやや鋭い深帯を巡らす。円形の透しを斜め上方から穿つ。	内外面とも回転ナデ。	青灰色	包含層	
99-26	高杯	復元底径7.6 残存高5.0	脚部はややひらき気味に下り、さらに二度屈曲してやや内傾気味に下る。長方形の透しを三方に穿つ。	内外面とも回転ナデ。	青灰色	包含層	
99-27	高杯	復元底径7.4 残存高3.7	脚部はゆるやかな下り、さらに一度屈曲して直立気味におわる。屈曲部付近に断面三角形の突帯を巡らす。長方形の透しを穿つ。透しの数は不明。	脚部を除く脚部外面全体にカキ目、他の部分に回転ナデを行う。	淡青色	包含層	

図 版 番 号	器 種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
99-28	高杯	復元底径7.8 残存高6.5	脚部はゆるやかに下外方に下り、さらに二度屈曲して内傾尖味におわる。長方形の透しを穿つ。透しの数は不明。	脚部を除く脚部外面全体にカキ目、後の部分に回転ナデを行う。	灰色	包含層	一部に自然釉がかかる。
50							
99-29	高杯	復元底径11.0 残存高4.8	脚部はハの字形にひらき、脚部付近で垂直に下っておわる。長方形の透しを穿つ。透しの数は不明。	内外面とも回転ナデ。	暗灰色	包含層	黒色の自然釉がかかる。
99-30	高杯	復元底径8.9 残存高7.0	脚部はゆるやかに下外方に下り、脚部付近で軽く垂直に下っておわる。脚部は丸い。長方形の透しを四方に穿つ。	内外面とも回転ナデ。	青灰色	包含層	自然釉。ヘラ記号。
50							
99-31	高杯	底径8.2 残存高8.3	脚部は細長く、ラッパ味にひらく。脚部は袋い面をなす。脚部下方に上外方から円孔を斜め上方から三方に穿つ。	内外面とも回転ナデを行う。内面にはシボリ痕を顕著に残す。	暗灰色	包含層	外面の約半に自然釉がかかる。
50							
99-32	高杯	復元底径10.0 残存高4.0	脚部はハの字形に大きくひらき、脚部に強い凹面をなしておわる。外面に4条以上の沈輪を運らす。上外方から円孔を二方に穿つ。	内外面とも回転ナデ。	暗灰色	包含層	外面に黒色の自然釉がかかる。
50							
99-33	瓶		1個の円孔を中心に、4個の長方形(楕円形)の孔を配する。	内外面ともナデ。孔は鋭利なヘラによる穿孔。	淡灰色	包含層	
50							
99-34	瓶		把手は牛角状を呈し、上面に浅い切り込み状の凹線を有する。	把手は全体をナデによって仕上げ。器体との接合はハリツケによる。	淡灰色	包含層	
50							
99-35	瓶	復元底径25.6 残存高12.2	ややひらき気味に立ち上がり、1峰部部に内傾する面を有する。	外面はカキ目、内面は回転ナデ。	暗灰色	包含層	ヘラ記号。
50							
100-1	壺	復元口径8.7 残存高2.9	全体に小型である。1峰部は下方に下り、残部は丸くやや外反する。	大井部の外に回転ヘラケズリ、他は回転ナデを行う。	淡紫色	包含層	
100-2	短頸壺	復元口径7.2 器高9.4	頸部は短く直立し、脚部はましく内傾する面をなす。頸部は外下方に下り、脚部から底部まで内傾しながら下る。	脚部・上部にカキ目、下部から底部にかけて回転ヘラケズリ、他は回転ナデを踏す。	青灰色	包含層	

四面 図版番号	器種	法量 (cm)	形態及び銘文の特徴	技法の特徴	色調	出土地	備考
100-3	短頸壺	復元口径6.7 残存高1.7	頸部は短く内傾してのび、肩部は丸い。肩部は外下方にのびる。	残存部全体に回転ナズ。	淡灰色	包含層	
100-4	甗	復元口径12.3 残存高3.4	11縁部は斜上方にのび、端部は丸い。11縁部と頸部の境に1条の凹線が通る。	残存部全体に回転ナズ。	暗灰色	包含層	
100-5	甗	復元口径9.9 残存高2.6	口縁部で外方に肥厚し、外傾する端面をなす。	残存部全体にナズ。	淡褐色	包含層	
100-6	裝飾付須臾器	復元口径5.5 体部径5.8 残存高3.9	裝飾付須臾器の了重と思われる。11頸部は短く斜上方にのび、肩部は丸い。体部はほぼ半球形を呈し、唇縁は厚い。	底部外面はナズ、他は回転ナズ。	淡青灰色	包含層	
100-7	裝飾付須臾器	体部径6.0 残存高3.5	裝飾付須臾器の了重と思われる。11頸部は内傾気味に上方にのびる。体部は丸みをもつて下り、底部に立る。底部は平ら。	底部外面はナズ、他は回転ナズ。	灰色	包含層	内外面に自然釉がかかる。
100-8	甗	復元口径14.7 残存高3.9	口頸部は斜外方にのび、口縁部付近で断面三角形の尖縁が通る。肩部は丸く、外傾する面をもつ。	残存部全体に回転ナズを行う。	淡灰色	包含層	
100-9	甗	復元口径15.2 残存高5.4	口頸部は上外方にのび、口縁部で外下方に肥厚し端面をなす。	11頸部は回転ナズで、一部カキ目が見られる。内面は回転ナズ。	暗灰色	包含層	外面に自然釉がかかる。
100-10	甗	復元口径19.6 残存高5.0	11頸部はくの字形に短く外反し、肩部に内傾する面をなす。	口頸部は回転ナズ。肩部外面は平行タタキの上にカキ目。内面は同心円タタキ。	灰白色	包含層	縁部やや不真。
100-11	甗	復元口径23.4 残存高3.3	口頸部は外反気味に上外方にのび、端部付近で外方に肥厚し端面をなす。	口頸部外重下部にカキ目、他は回転ナズ。	暗灰色	包含層	
100-12	甗	復元口径30.4 残存高4.7	11頸部は外反してのび、口縁部付近で外方に肥厚し端面をなす。	頸部外面はカキ目、他はナズ。	淡灰色	包含層	

図 面 回 数 番 号	器 種	法 量 (cm)	形 態 及 び 條 文 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	出 土 地	備 考
100-13	甕	復元口径30.4 残存高5.2	口頸部は外区してのび、口縁下部で玉縁状に肥厚し端面をなす。	残存部全体に回転ナデを施す。	暗灰色	包含層	
100-14	甕	復元口径35.0 残存高4.2	口頸部は上外方にのび、肩部外面に断面二角形の突帯を巡らす。頸部には2条の凹線を巡らし、その間に36本の流状文を施す。	残存部全体に回転ナデを施す。	暗灰色	包含層	残存部全体に自然釉がかかるとは異なる。
100-15	甕台	復元口径40.5 残存高3.8	口頸部は上外方にのび、肩部外面に断面三角形の突帯を巡らす。頸部には1条の凹線を巡らし、その下に1条の流状文を施す。	残存部全体に回転ナデを施す。	淡灰色	包含層	
100-16	甕	復元口径45.7 残存高5.5	口頸部は外区有味に上外方にのび、肩部外面に断面ほぼ二角形の突帯を巡らす。	残存部全体に回転ナデを施す。	淡灰色	包含層	外面に自然釉がかかるとは異なる。
100-17	甕台	復元口径36.5 残存高13.4	杯部は深く、丸い。口縁部は外方に屈曲し、肩部で上下に肥厚し、端面をなす。外面は流状文と突帯を交互に配して飾る。	杯部下部の外面は、平行タタキの上からナデの後、部分別にカキ目を施す。内面は同心円文が残る。他は回転ナデ。	暗灰色	包含層	
100-18	甕台	復元口径29.4 残存高6.6	内穹有味に外下方に下り、内傾する面をなしておわる。外面は2条、対の突帯と横線波状文を交互に配する。三角形の透しを穿つ。	残存部全体に回転ナデを施す。	淡青灰色	包含層	
100-19	甕台	残存高9.4	外面は2条1段の突帯が、残存部では3段見られ、それに界される2段(各7本)の流状文からなる文輪帯が見られる。また文輪帯上に反方形の透し意が刻まれている。	残存部全体に回転ナデを施す。	灰色	包含層	
100-20	瓦器類	復元高口径7.2 残存高1.3	高台は短く外方に開く。底部は平ら。	残存部内面はナデ、外面はヘラミガキ。	灰色	包含層	
100-21	杯身	復元高口径10.0 残存高2.2	高台は短く外方に開き、その端部は凹面をなす。底部は扁平である。	残存部全体に回転ナデを施す。	灰色	包含層	外部外面に自然釉がかかるとは異なる。

図面 図版番号	器種	法 基 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出土地	備 考
101-1	土師器 甕	復元口径32.8 残存高5.8	おそろく長調の体部からくの字形に屈曲する短い口縁部。肩部は外傾する面をなす。	口縁部内面は強い根ナデ、その他の部分はナデ。	赤褐色	包含層	
101-2	土師器 甕	復元口径13.0 残存高2.5	くの字形に屈曲する口縁部。肩部は丸くさめらる。	口縁部外面はナデ、内面はナデ・ハケ。体部外面は強いハケ、内面はヘラケズリ。	明淡茶褐色	包含層	
51							
101-3	土師器 甕	復元口径19.6 残存高7.9	上外方に直線的にのびる直口縁。肩部は丸くおさめらる。	内外面とも根ナデ。	明茶褐色	包含層	
101-4	土師器 高杯	残存高8.0	肩部は浅い。脚注部はわずかにひらき気味に下り、大きくひらいて肩部にいたる。	内外面ともナデ。	明淡茶褐色	包含層	
101-5	土師器 高杯	底径9.2 残存高5.9	脚注部はわずかにひらき気味に下り、大きくひらいて肩部にいたる。	脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ。	明淡褐色	包含層	
101-6	土師器 高杯	復元口径21.1 残存高5.5	口縁部は上外方に直線的にひらく。肩部は丸くおさめらる。		明茶褐色	包含層	
101-7	土師器 高杯	残存高5.0	大きくひらいた後、屈曲して上外方にたちらあがる。屈曲部外面には浅い縁をなす。		明淡茶褐色	包含層	
101-8	土師器 高杯	復元口径24.0 残存高5.7	外反気味に大きくひらく口縁部。肩部は弱い面をなす。	外面は縦及び斜め方向のハケ。口縁肩部は横ナデ。	淡褐色	包含層	外面に黒斑。
101-9	土師器 高杯	復元口径26.0 残存高7.4	内寄気味に外方にのび、屈曲して大きく外反し、肩部は丸くおさめらる。	外面は一部ハケ。	淡明茶褐色	包含層	
51							
101-10	土師器 (把手)		短く小さな舌状の把手である。	ナデ。	明淡赤褐色	包含層	

区 画 区 画 番 号	品 種	法 量 (cm)	形態及び施文の特徴	技 法 の 特 徴	色 調	出土地	備 考
101-11	土師器 (把手)		牛角状の把手である。上面に深い切り込みを有する。	ナデ。	明淡赭色	包含層	
101-12	朝鮮形 土師	残存高4.2	上外方に直線的にのびる。タガは断面台形を呈し、突出度はやや高い。	タガ部分は楕円ナデ。	赤褐色	包含層	
102-1 41-b	高杯	復元底径14.2 杯部径5.7 残存高14.8	直徑に長く下る脚柱部から屈曲してひらく椀部。脚部は下方に拡張し、椀部に凹縁が通る。椀部には凹形透道を外面から七方に穿つ。杯部は「円盤充填法」による。	杯部内面ヘラミガキ、外面ハケ後斜めヘラミガキ。脚柱部外面は縦ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。椀部は内外面ともナデ、外面はヘラミガキ。椀部ヨコナデ。	明淡赤褐色	SP835	
102-2 41-b	高杯	復元口径16.6 杯部径4.0 復元底径12.6 器高15.2	深い椀形の杯部で、端部は丸くおさめる。脚柱部は直線的に下り、凹面してひらく椀部をもつ。椀部は弱い面を有す。椀部に円形の四方透を穿つ。	杯部はナデで、外面一部にヘラミガキが認められる。椀部内外面ともナデ、脚柱部内面ナデ、外面ヘラミガキ。	明淡赤褐色	SP835	漆痕著しい。
102-3	高杯	杯部径5.0 残存高7.1	なめらかにひろがる脚柱部。		明淡黄褐色	SP835	漆痕著しい。

図 版



航空写真(1)

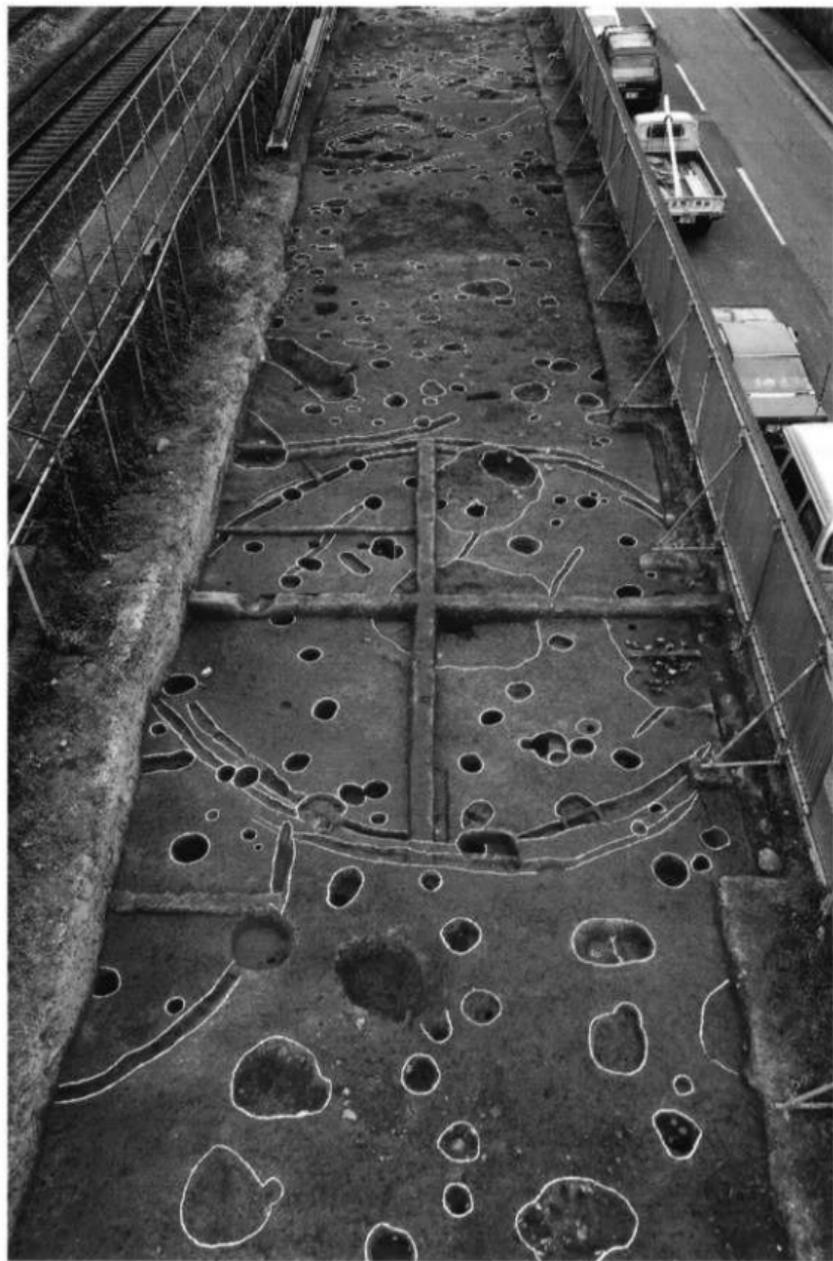
昭和31年撮影



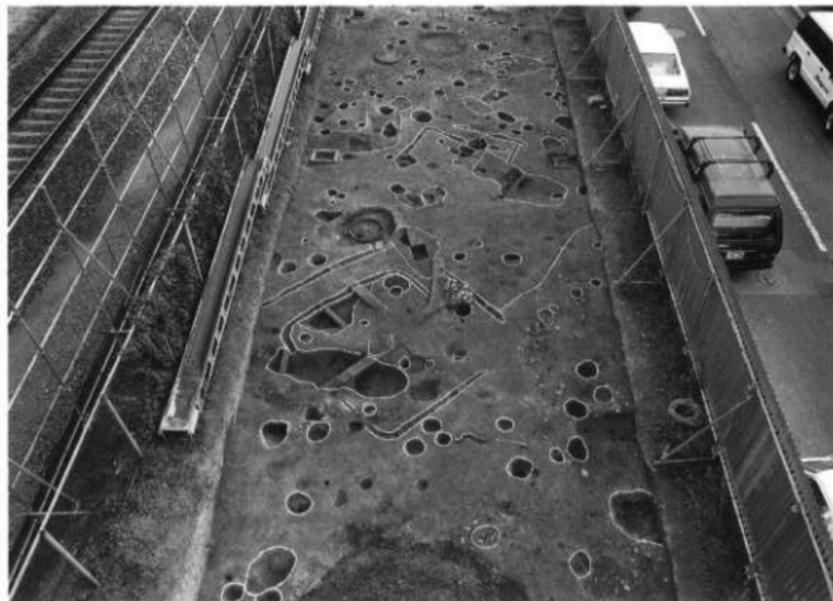
a. 航空写真(2) (東南より)



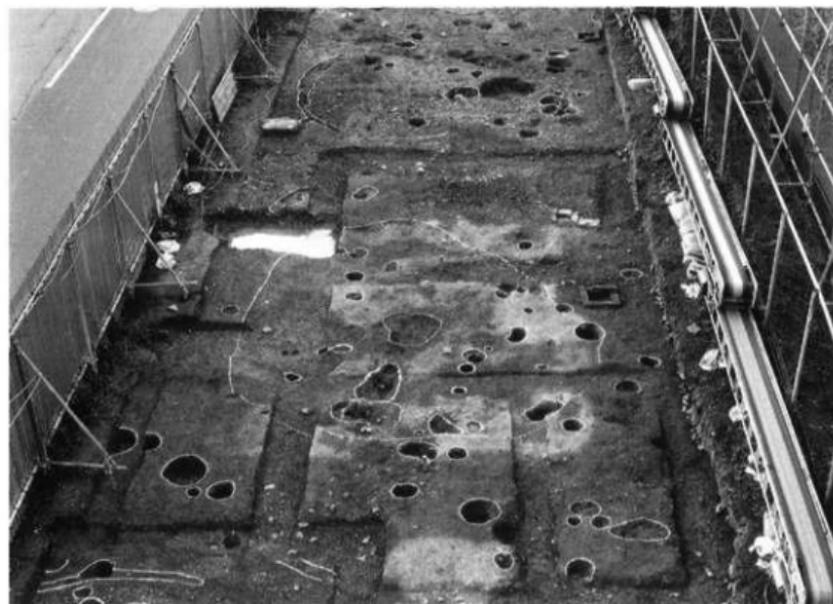
b. 航空写真(3) (南西より)



A地区西側全景（西北より）



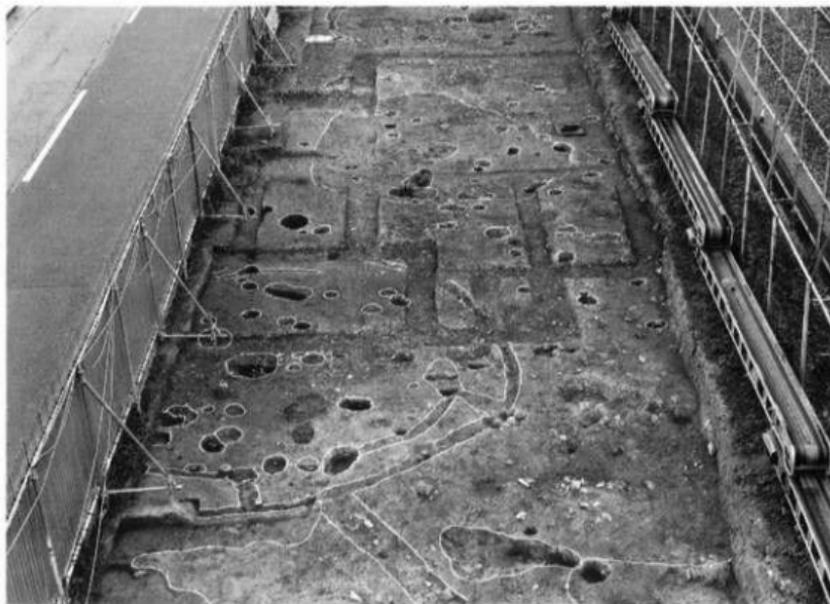
a. 竪穴式住居跡 3, 4 付近 (西北より)



b. 竪穴状遺溝, 竪穴式住居跡 5 付近 (東南より)



a. 竪穴状遺溝, 竪穴式住居跡 6 付近 (西北より)



b. 同 (東南より)



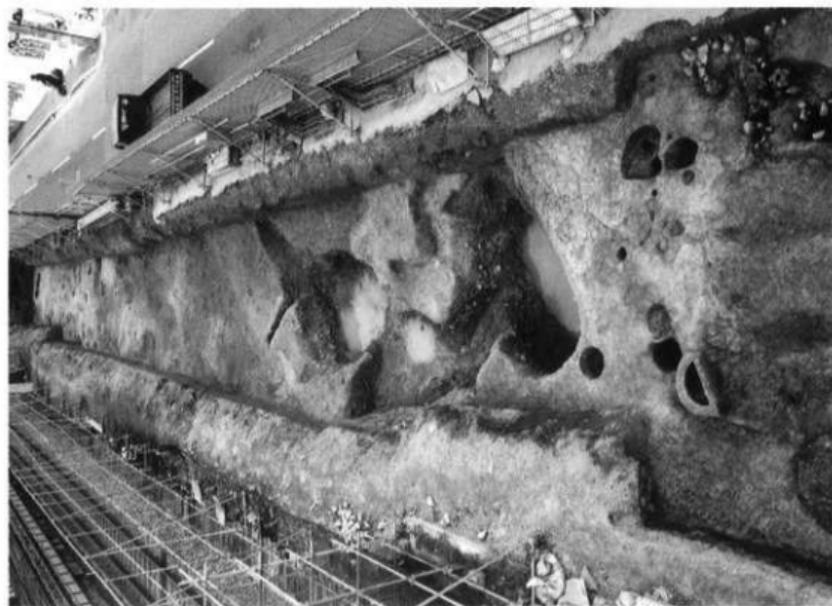
b. B地区東側全景 (P20以東、西北より)



a. B地区西側全景 (P25以西、東南より)



b. 同 (P. 32 以東、西北より)



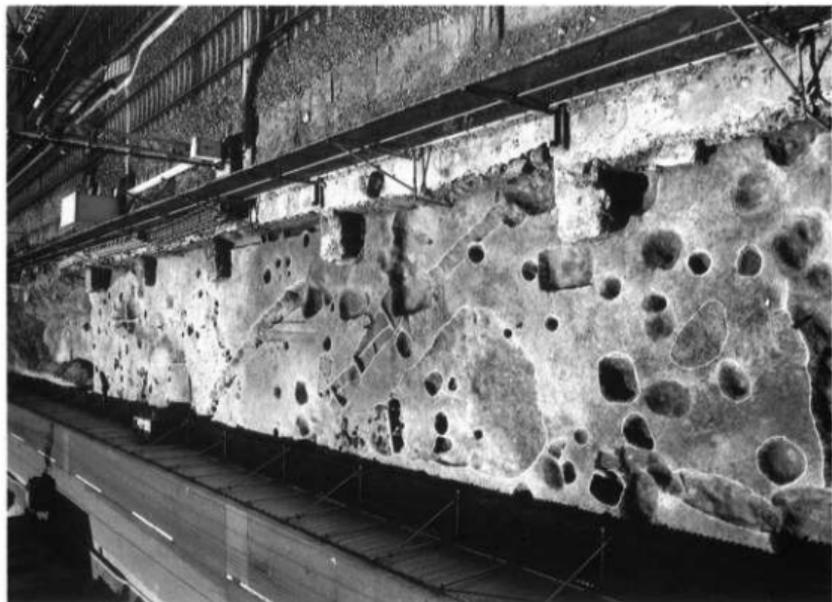
a. B地区東側全景 (P. 27 以東、西北より)



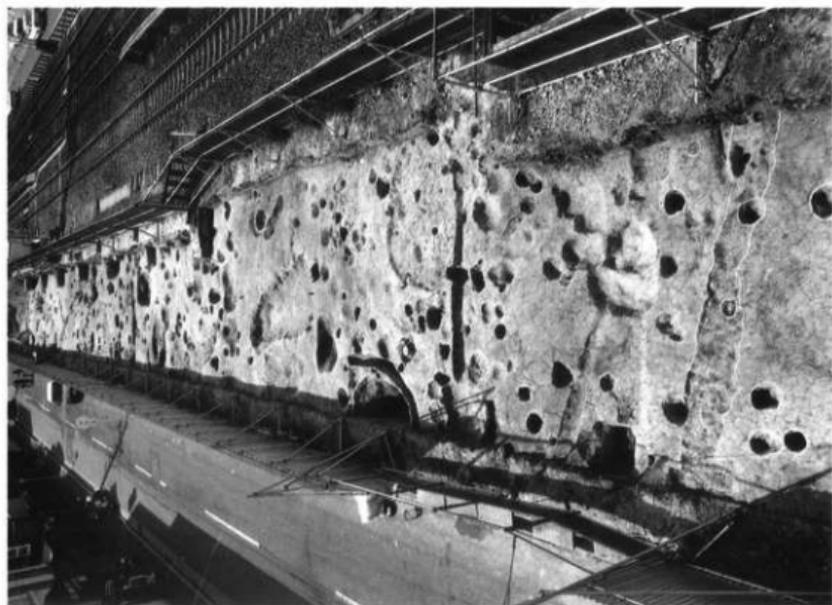
a. 谷状地形層部 (P41付近, 西北より)



b. 同 細部 (北より)



b. C地区西側全景 (P 50以西、東南より)



a. C地区全景 (東南より)